



かのや風土記 〜鹿屋学入門〜



鹿屋市教育委員会

かのや風土記

～鹿屋学入門～

「かのや風土記」の発刊に寄せて



鹿屋市は、「心豊かに学び、地域文化を育むまちづくり」の実現に向けて様々な施策に取り組んでおります。その一つとして、今回「かのや風土記」が完成しました。

この「かのや風土記」は、市民一人一人がまちへの誇りや愛着を持つ人づくりをめざし、歴史・文化に触れ、故郷を知る機会を創出し、広く市民の皆様へ、まちの歴史や文化を学ぶ材料としていただき、知りたくなる・学びたくなるきっかけづくりになればと思っております。

本書には、昨年10月に開催された全国和牛能力共進会にて鹿児島県が日本一を獲得し、「日本一和牛のふる里かのや」から出品した黒牛が素晴らしい成績を収めたことや、鹿児島湾が望める丘に美しいバラが咲き誇る「かのやばら園」などというまでもなく、本市の豊かな自然や個性ある歴史・文化、恵まれた多様な農産物など、全国に誇れる様々な素材が紹介されています。

グローバルな社会の中で、国際人として様々な国の人とのコミュニケーションをとるためには、郷土を誇りに思い語れることが今後益々重要になり、地域の歴史や文化等の役割は益々重みを増し、その振興を図ることは、「まちの品格」を高め、シビックプライド醸成の基盤になるものと考えます。

この「かのや風土記」を、広く市民の皆様へ楽しみながら読んでいただき、私たちのふるさと「かのや」を次世代へ語り継ぐとともに、鹿屋市民が鹿屋の魅力の世界に発信していただければ幸いです。

結びに、「かのや風土記」の編纂に携わっていただきました多くの皆さまのおかげをもちまして刊行することができました。

ご協力くださった全ての方々に感謝申し上げます。

令和5年3月吉日

鹿屋市長 中西 茂

「かのや風土記」期するもの



鹿屋市教育委員会では、令和2年度から令和6年度の5年間で取り組む施策として「鹿屋市第3期教育振興基本計画」を策定し、本計画に則り、シビックプライドの醸成を目的に令和2年度から始めた「かのや風土記」編纂事業を、ここに刊行することができました。

この「かのや風土記」は、大人も楽しめる、中学生・高校生向けの市史の別冊版をイメージし、鹿屋市民として「知っておくべき大事な歴史や文化」、「鹿屋に貢献した忘れてはならない人」を中心に、鹿屋市の歴史、地理、自然、文化、人物など分野毎に編纂されました。

本書は、「この一冊があれば、鹿屋を学べる・語れる」風土記として、悠久の時を経て、郷土の先人が守り続けられてきた伝統芸能や郷土料理、郷土に残された文化財や史跡等の数々の歴史、動植物・災害・現在の鹿屋市の姿等を、図や写真を多用し、またQRコードを用いて電子データとの融合を工夫するなど、分かりやすく読みやすく構成し、市民の皆さんが愛着を持って活用していただける一冊となっております。

また、この「かのや風土記」を広く市民の皆様がお読みいただくことにより、私たちのまち鹿屋のことについて、より詳しく知り、ふるさと鹿屋を再発見するきっかけに繋がることこそが、編纂当初から目指しているシビックプライド醸成の基盤になるものと考えています。

さらに、郷土を学びその魅力を世界に発信し、地球規模で様々な問題を考え、持続可能な社会の発展に向けて、能動的に行動を起こすことが出来る、グローバル人材の育成にもつながると期待しております。

一方、現在市内小学校には、平成14年から副読本として活用している「私たちの鹿屋市」がありますが、その基礎知識を引き継ぎ、広がりを持たせる書籍として、今回刊行した「かのや風土記」は、多くの方々に親しんでいただき、郷土鹿屋についてより詳しく理解を深めていただければ幸いです。

最後に、「かのや風土記」の刊行にご協力・ご尽力くださった、鹿屋市の小・中・高等学校の先生方、関係各機関の職員の方々、鹿屋市にまつわる貴重な写真や図録の提供をくださった全ての関係者の皆様に心から感謝申し上げます。

令和5年3月吉日

鹿屋市教育委員会 教育長 中野 健作

例 言

- 1 本書は、鹿屋市教育委員会が鹿屋市の歴史、地理、自然、文化、人物などを中心として、「この1冊があれば、鹿屋を学べる・語れる」書籍を作成することを目的に刊行した書籍です。
- 2 編纂期間は、令和3年3月25日から令和5年3月31日まで実施しました。
- 3 編纂は、国立大学法人鹿屋体育大学、国立大隅少年自然の家、海上自衛隊鹿屋航空基地、鹿児島県アジア・太平洋農村研修センター、鹿児島県立大隅広域公園、大隅森林管理所、国立療養所星塚敬愛園、鹿児島県立埋蔵文化財センター、鹿児島県立博物館、鹿屋商工会議所、鹿屋市医師会、一般社団法人鹿屋市観光協会、株式会社まちづくり鹿屋、医療法人青溪会寺崎皮膚科、九州電力株式会社、有限会社神川酒造、小鹿酒造株式会社、大海酒造株式会社等の外各専門家等の協力のもと作成しました。
- 4 本書の執筆は、作業部会員（市職員11名、教諭22名、合計33名）のほか、生涯学習課職員を中心に教育委員会職員の協力を得て実施しました。
- 5 本書の編集は、編纂委員会の助言を得て前山と稲村が行いました。
- 6 本書の単位等は、下記（例）のように表すこととします。
（例）センチメートル→cm、メートル→m、ヘクタール→ha、ポイント→pt
カッコは→（）全角等とし、その他の単位も同様に表すこととしました。
- 7 本書は、見開き1項目を基準とし、見開きの両脇にコラムや豆知識等（以下、コラム等欄）を掲載し、中央部に本文を掲載しました。コラム等欄は、文字サイズを10pt、本文は11ptとしました。本文はHG丸ゴシックM-プロで作成しています。ただし、各項目において、文字数がどうしても収まらない場合は、ptを小さくして掲載しています。
文末は、「です・ます調」を用いていますが、「063 鹿屋市の昔話」の項目は、話のつながりを考慮し、「です・ます調」を使用していません。
- 8 本書では、下記（例）のように、俗称は使用せず正式名称を採用しました。また、本文中の人物については、敬称を略しました。
（例）錦江湾（俗称）→鹿児島湾（正式名称）、笠之原（俗称）→笠野原（正式名称）
ただし、薩摩藩と鹿児島藩は何れも正しいので併記しています。
（例）薩摩藩（鹿児島藩）または、鹿児島藩（薩摩藩）
- 9 歴史の分野において、南北朝時代の年号は、南朝方の年号を採用しました。その他の分野において、年号が2つある場合は、西暦表記のみとしました。
- 10 南九州と九州南部は、以下のように区別して、使用しました。
南九州→屋久島・種子島等の離島を含まない鹿児島県・宮崎県
九州南部→屋久島・種子島等の離島を含む鹿児島県・宮崎県
- 11 本書文中に使用している「QRコード」という文言等は、株式会社デンソーウェブの登録商標です。

目次

分野	項目番号	項目名	頁
公民	001	鹿屋市の概要	・鹿屋市の概要・新「鹿屋市」誕生までの歴史 等 1
	002	新しいまちづくり	・基本目標1「やってみたい仕事ができるまち」 等 3
	003	学校教育	・鹿屋市の学校教育・鹿屋市の学校教育の歴史 等 5
	004	社会教育	・鹿屋市の社会教育・生涯学習の推進 等 7
	005	生涯学習	・生涯に渡って学習できる社会の実現 等 9
	006	国立療養所星塚敬愛園	・星塚敬愛園について・主な歴史的建造物 等 11
	007	国立大学法人鹿屋体育大学	・大学の概要・スポーツパフォーマンス研究センター 等 13
	008	海上自衛隊鹿屋航空基地	・沿革・施設概要 等 15
	009	国立大隅少年自然の家・鹿児島県立大隅広域公園	17
	010	鹿屋市の風景	・荒平天神・高隈の棚田 等 19
	011	鹿屋市の銭湯	・市内温泉施設 21
地理	012	鹿屋市の地形・地質 1	・概要・高隈山地の特徴と鉱山 23
	013	鹿屋市の地形・地質 2	・地形・シラス台地 等 25
	014	鹿屋市の気候	・気候の特色と災害 27
	015	鹿屋市と桜島	・大正の大噴火と鹿屋・現在の桜島とのかかわり 29
	016	照葉樹の原生林	・高隈渓谷の照葉樹林・大笹柄岳のブナ林 等 31
	017	鹿屋市の植物	33
	018	鹿屋市の野草	・漢方薬としての野草 35
	019	高隈山の野鳥や動物	37
	020	川や海の生き物	・川の生き物・海の生き物 等 39
	021	鹿屋市の交通の歴史	・藩政時代の交通・4つの海道とは 41
	022	交通と運輸	・東九州自動車道と大隅縦貫道 43
	023	鹿屋市の公園	・霧島ヶ丘公園・鹿屋海浜公園 等 45
	024	鹿屋市の畜産	・肉用牛・養豚 47
	025	鹿屋市の農業	・水田農業・畑作農業 49
	026	鹿屋市の水産業	・カンパチ・養鰻 等 51
	027	鹿屋市の林業	・森林資源の循環利用を目指して 等 53
	028	鹿屋市の工業	・立地企業の変遷・市内の工業団地 55
	029	鹿屋市の商工業	・鹿屋商工会議所・かのや市商工会 57
	030	食のまち鹿屋（グルメ）	・かのや豚ばら丼・カンパチ漬け丼 等 59
歴史	031	旧石器時代	61
	032	縄文時代	63
	033	大きなムラの誕生	65
	034	他地域との交流・鉄使用	67
	035	鹿屋の古墳～岡崎古墳群	69
	036	遺跡から見つかった物	71
	037	古墳から見つかった物	・岡崎古墳群から見つかった物 等 73
	038	中央と鹿屋市	・中央とは・大隅とは 等 75
	039	肝付氏について	77
	040	荘園、鹿屋の統治	79
	041	肝付氏の支配から島津氏へ	81
	042	島津氏と鹿屋市の関係	・花岡島津家とは・島津岩子夫人による用水路建設 83
	043	鹿屋市の城跡 1	・高雲加瀬田ヶ城・鹿屋城 等 85
	044	鹿屋市の城跡 2	・鶴亀城（串良城）・長谷城 等 87
	045	野町・浦町・麓について	89
	046	鹿屋・吾平・串良 人配物語	91
	047	西原城の攻防と明治10年の戦い	・西南戦争時（明治10年の戦い） 93
	048	幕末からの教育のあらし	・学校の創立から太平洋戦争へ 95
	049	太平洋戦争に関する歴史	・戦没者慰霊祭（小塚公園）・桜花の碑 97
	050	戦争の秘話「太平洋戦争は鹿屋から始まった」	・市内の戦跡 99
	051	シラス台地とのたたかい	・笠野原台地は6,000ha 101
	052	高隈ダムの完成	103
	053	輝北ダムの完成	105
	054	昭和天皇の行幸	・昭和天皇の1回目の行幸 等 107
	055	学校の変遷	・鹿屋市立鹿屋女子高等学校の沿革 等 109

分野	項目番号	項目名	頁	
文化	056	鹿屋市の神社 1 ・中津神社・七狩長田貫神社 等	111	
	057	鹿屋市の神社 2 ・利神社・諏訪両神社 等	113	
	058	鹿屋市の神社 3 ・八幡神社・鶴戸神社 等	115	
	059	鹿屋市の神社 4 ・月読神社・事代主神社 等	117	
	060	「吾平山上陵」が導く歴史ロマン	119	
	061	鹿屋市の寺院 1 ・清池山玉泉寺跡・宝蛇山含粒寺跡	121	
	062	鹿屋市の寺院 2 ・瑞雲山安住寺・高栄寺 等	123	
	063	鹿屋市の昔話 ・猿と蟹ん寄合餅・波見穴 等	125	
	064	郷土料理 1 ・ぎっちゃんこ・がね 等	127	
	065	郷土料理 2 ・そまげ・ねったぼ 等	129	
	066	郷土料理 3 ・神川酒造 小鹿酒造 大海酒造	131	
067	大人・子どもの楽しみ ・鹿屋競馬場・大人・子どもの遊び	133		
文化財	068	県指定文化財 1 ・短甲・衝角付冑・中尾地区横穴墓群出土品 等	135	
	069	県指定文化財 2 ・山宮神社春祭に伴う芸能 等	137	
	070	市天然記念物 ・大賀ハス・苫野川産カワゴロモ 等	139	
	071	市指定有形文化財 ・仁王像・古銭 等	141	
	072	市指定無形文化財 ・大始良西方棒踊・しか祭	143	
	073	各地域の棒踊り ・祓川の棒踊り・末次の棒踊り 等	145	
	074	郷土の芸能 ・八月踊り保存会・中央麓そば切り踊り保存会	147	
	075	鹿屋の有形文化財 ・田の神像	149	
まちづくり	076	平和の花束 ・平和へのメッセージの募集 等	151	
	077	催物 文化 ・鹿屋市美術展・鹿屋市の文化協会 等	153	
	078	高校生ミュージカル ・ヒメとヒコ	155	
	079	各種スポーツ大会等 1 ・くしら桜まつりジョギング大会 等	157	
	080	各種スポーツ大会等 2 ・ツール・ド・おおすみサイクリング大会 等	159	
	081	各種スポーツ大会等 3 ・宮下相撲・野里相撲	161	
	082	鹿屋市の祭り 1 ・かのやばら祭り・かのや夏祭り 等	163	
	083	鹿屋市の祭り 2 ・くしら桜まつり・くしら黒土まつり 等	165	
	084	鹿屋市の祭り 3 ・伝承されてきた祭り・その他の祭り	167	
	085	観光名所 1 ・吾平自然公園・“神野”山の学校キャンプ場	169	
	086	観光名所 2 ・ユクサおおすみ海の学校・かのやばら園	171	
	087	観光名所 3 ・輝北うわば公園 輝北天球館	173	
	088	国際交流 ・タイ王国との交流・韓国との交流	175	
	089	英語教育	177	
	090	鹿屋市の地域づくり 1 ・鹿屋市の共生 協働・町内会は「住民自治」の基礎的組織 等	179	
	091	鹿屋市の地域づくり 2 ・社会教育関係団体の取組を通じた地域づくり 等	181	
	人物	092	人物 1 ・森宗吉・中原菊次郎・小野勇市	183
		093	人物 2 ・永田良吉	185
		094	人物 3 ・上別府市郎・坂元親夫	187
		095	人物 4 ・高橋正風	189
096		人物 5 ・和田貞則・平田禎	191	
097		人物 6 ・立元明光・寺崎健	193	
098		人物 7 ・米重修一・福里修誠	195	
099		人物 8 ・内山昇	197	
100		人物 9 ・三森泰明・かのやばら大使名簿一覧	198	
資料集他			歴史年表	200
		鹿屋市の成り立ち	210	
		かのや歴史探訪紹介	211	
		参考文献一覧	213	
		かのや風土記～鹿屋学入門～ 編纂組織	214	



鹿屋市旗



鹿屋市章

- 市民憲章 -

市民としての誇りと自覚を持ち、明るく住みよいまちづくりをめざして、以下の憲章を定めています。

- 1 自然と資源を活かし、豊かな鹿屋市をつくりましょう。
- 2 とともに学び、働き、日々の暮らしにいきがいをもてる生活をしましょう。
- 3 きまりを守り、安心して暮らせる健康都市を築きましょう。
- 4 助け合い、支えあい、楽しく明るいまちづくりをしましょう。
- 5 環境を整え、未来にはばたく人材を育てましょう。

鹿屋市HPトップ



001

鹿屋市の概要

○鹿屋市の概要

鹿屋市は2006（平成18）年1月1日に鹿屋市、輝北町、串良町、吾平町の1市3町が合併して誕生しました。

人口約10万人、面積約448 km²の本市は、大隅半島の中央部に位置し、鹿児島湾に面した美しい海岸線や壮大な高隈山系、日本一の星空など豊かな自然に恵まれています。また、国立大学法人鹿屋体育大学や国立大隅青少年自然の家、県民健康プラザ、串良平和アリーナ等の健康・スポーツに関する機関・施設が集積しているほか、じんだいさんざんりょう神代三山陵の一つである吾平山上陵や、戦争遺跡をはじめとする多くの史跡、かのやばら園、輝北天球館などの観光資源を有しています。

基幹産業である農林水産業は、日本の食料供給基地としての役割を担い、なかでも黒毛和牛や黒豚を中心とする畜産業や水産業における養殖カンパチは、全国有数の品質と産出額を誇っており、これらを生かした6次産業化の取組も進められています。

○新「鹿屋市」誕生までの歴史

1889（明治22）年、町村制の実施に伴い、現在の「鹿屋市」には、鹿屋、花岡、大始良、高隈、始良、西串良、もびき百引、いちなり市成の村が置かれました。「鹿

【市の木】クスノキ



【市の花】ばら



屋市」に至るまでの歴史を振り返ると、旧鹿屋市は、1912（大正元）年に鹿屋村が町制施行により、「鹿屋町」となり、1941（昭和16）年には鹿屋町・大始良村・花岡村の3町村が合併し、「鹿屋市」として市制が始まりました。その後、1955（昭和30）年には高隈村、1958（昭和33）年には垂水町の一部地域（ねぎはら根木原・ありたけ有武）が編入しました。

旧輝北町・旧吾平町・旧串良町は、1932（昭和7）年に西串良村が「串良町」に、1947（昭和22）年に始良村が「吾平町」に、1956（昭和31）年に百引村と市成村が合併し「輝北町」として町制が施行されました。

○【平成の大合併（新 鹿屋市の誕生）】

2002（平成14）年4月に肝属地区の市町に輝北町を加えた2市10町による肝属地域市町村合併調査研究会が発足し、合併後の効果や将来像等についての調査・研究が始まりました。2004（平成16）年7月に鹿屋市、輝北町、串良町、吾平町による大隅中央合併協議会が設立され、同年11月に合併協定の調印式が行われました。

2005（平成17）年1月には県に廃置分合を申請し、3月に国が新「鹿屋市」の設置を告示しました。そして、2006（平成18）年1月に新「鹿屋市」が誕生し今日に至ります。

市旗

形は大隅半島をデザインし、若さと澄んだ空、海を青色で表現。その中心に大隅の中核都市鹿屋を躍動のシンボルである赤い円で表現し、「カノヤ」を金色（黄色）で図案化したものです。

市章

カタカナの「カノヤ」の文字を図案化したものです。

市の花「ばら」

かのやばら園があることや、地域一体となって「ばらを生かしたまちづくり」に取り組んでいることから、市花に決めました。

市の木「クスノキ」

大地に深く根をおろし、青空高くすくすくと成長するクスの姿に、市勢の力強さと鹿屋市の発展を願い、市木に決めました。

人口

総人口：101,096人
世帯数：46,139世帯
2020（令和2）年
国勢調査



和牛日本一のまちづくり

2022（令和4）年に開催された第12回全国和牛能力共進会鹿児島大会で、本県から出品された24頭が、9部門中6部門で首席を獲得し、なかでも第4区の繁殖雌牛群については、本県が30年（島根大会以来）ぶりに種牛の部で、名誉賞に輝くなど「和牛日本一」という素晴らしい成績となりました。

本市からは3部門で首席を獲得しました。中でも花形である第6区総合評価群で、上別府種畜場の種雄牛「安亀忠」の子が種牛群と、肉牛群で最高賞を獲得したことは、今後の繁殖、肥育用の子牛購買や、枝肉市場において、より一層需要が高まることで、市場等活性化に寄与するものと期待されます。

さらに「和牛日本一」の称号は、今後の畜産振興はもとより、ふるさと納税や、商業の活性化や、全国への本市のPRなどに、活用していきます。

[項目024参照]

002

新しいまちづくり

鹿屋市は、「ひとが元気！まちが元気！『未来につながる健康都市かのや』」を将来都市像に掲げ、第2次鹿屋市総合計画において、次の5つの基本目標を定め、各種施策に取り組んでいます。

○基本目標1「やってみたい仕事ができるまち」

農林水産業や商工業の振興、雇用の促進として、本市で生産される農畜産物の6次産業化などによる高付加価値化を図るとともに、担い手の育成や農作業の省力化に取り組めます。また、中小企業等への経営支援、創業や事業承継等への支援のほか、企業誘致に取り組むとともに、ICTを活用した柔軟な働き方を支援します。

○基本目標2「いつでも訪れやすいまち」

観光・スポーツによる交流や移住・定住の推進として、本市の豊かな自然や食、戦争遺跡等の地域資源を生かしたツーリズムの推進や、大隅地域の官民連携による広域的な魅力ある観光地づくりに取り組むとともに、スポーツ合宿の誘致や、自転車によるまちづくりを進めます。また、本市の魅力の積極的な情報発信や、移住者のニーズに合わせた助成制度の充実など、移住・定住につながる取組を進めます。



「気付き・考え・行動する」
青少年赤十字（JRC）活動【串良小学校】



「地域の大先輩と米作りに挑戦！」
総合的な学習の時間【鹿屋小学校】

1 学校規模適正化

児童生徒の減少等を背景とした小・中学校の小規模化による課題に対応するため、2008（平成20）年9月に「鹿屋市学校規模適正化（学校再編）基本方針」を策定し、保護者や地域住民の理解と協力を得ながら、地域バランスや地域特性などを生かした小・中学校の規模適正化の取組を進めてきました。

< 学校規模適正化

（学校再編）の状況>

輝北地区[H23.4.1]

百引・平南・市成・高尾

・岳野小 5小学校

輝北小学校に統合

百引・市成中 2中学校

輝北中学校に統合

吾平地区[H25.4.1]

神野小 吾平小学校と統合

花岡地区[H25.4.1]

鶴羽・古江・菅原小

3小学校

花岡中 1中学校

小中一貫校花岡学園に

統合

高須・浜田・大始良地区

[H27.4.1]

浜田小 大始良小学校と

統合

高須中 第一鹿屋中学校

と統合

[R2.4.1]

高須小 野里小学校と統合

003

学校教育

○鹿屋市の学校教育

学校教育とは、学校教育法に基づき「学校において、教授言語によって行われる教育」のことを言います。本市では、2009（平成21）年に「鹿屋市第1期教育振興基本計画」が策定され、現在、「第3期（令和2年）」による、自立・協働・創造の理念の下、「未来を担う心豊かでたくましい人づくり」を目指しています。

○鹿屋市の学校教育の歴史

第2次世界大戦、日本の学校教育は大きく変化します。1947（昭和22）年、現在の学校制度のもととなる「教育基本法」「学校教育法」が制定され、「六・三制」といわれる義務教育がスタートしました。

1869（明治2）年、鹿屋市に最初の小学校が誕生すると、その後、多くの小・中学校が開設される中、2006（平成18）年1月1日に、鹿屋市、吾平町、輝北町、串良町が合併し、新「鹿屋市」が誕生しました。当時は、28の小学校と13の中学校でした。その後、児童生徒の減少に伴い2011（平成23）年から学校規模適正化 1が進められました。

2023（令和5）年現在、鹿屋市には、23の小学校と12の中学校があります。[項目 055 参照]



「受け継ぎ郷土芸能
『大始良西方棒踊り』」
文化祭での発表【大始良中学校】



「日頃の練習の成果を1つの音に奏でる」
部活動の取組【鹿屋中学校吹奏楽部】

○鹿屋市の学校教育の取組（令和5年3月現在）

鹿屋市では、全小・中学校において共通して実施する取組を中心に、知・徳・体を調和的に育む教育 2 を推進しています。

取組の例として、

- 1 コミュニティ・スクール：H26年度に2中学校でスタートし、R2年度に全小中学校で導入
- 2 小中一貫教育（9年間を通じた教育カリキュラム）：H25年度に花岡小・中でスタートし、R2年度に全中学校校区で実施
- 3 JRC（青少年赤十字）加盟：H28年度全小中学校が加盟
- 4 フッ化物洗口：H29年度に3校でスタートし、R2年度に全小中学校で完全実施
- 5 教育課程特例地域（英語）：H17年度からの小学校の外国語活動を、R3年度に英語教育の発展・充実を目指し「英語科」に設定〔項目092参照〕
- 6 構成的グループエンカウンター：好ましい生活集団・学習集団づくりを目指し、その予防的取組として、H29年度に1校で実施し、R元年度に全小中学校で実施（年間6時間以上）

などがあげられます。

2次元バーコードでもっと詳しく分かる

2「知・徳・体を調和的に育む教育」取組例

コミュニティ・スクール



フッ化物洗口



構成的グループエンカウンター



心の架け橋プロジェクト



ICT教育の充実



青年団活動



子ども会大会のデッカルタの様子

地域学校協働活動



学校応援団「脱穀」の様子

青年団活動

「鹿屋市青年団協議会」は、若者が「地域のために」活動する機会や交流する機会をつくるために、「～みんなで燃やそう情熱を！！ みんなで創ろう地域の環～ 若い力でゲンキなKANOYAをもう一度」をスローガンに、2009（平成21）年に12人の団員で発足しました。

現在では、団員数も21人と増加し、主な活動として、12月に事前に申込みされた家族へ団員がサンタに扮装し、プレゼントを届ける「クリスマス大作戦」や1月に行われる子ども会大会での「デッカルタ」（鹿屋市のイベントや場所等にちなんだ内容で大きなカルタを作成し、子どもたちに楽しく遊びながら学んでもらう活動）に参加するなど、積極的に地域の活動に取り組んでいます。

地域活性化のための一員として、これからもますます活躍の場が期待されています。あなたも仲間に入りませんか。

004

社会教育

○鹿屋市の社会教育

社会教育とは、「学校教育以外の主として青少年及び成人に対して行われる組織的な教育活動」のことを言います。2009（平成21）年に「鹿屋市生涯学習基本構想」が策定され、生涯学習の振興及び推進体制の整備が行われました。本市では2012（平成24）年に「生涯学習課」が設置され、「いつでも」「どこでも」「だれでも」生涯を通じて、自ら主体的に行う学習の推進を図っています。

○生涯学習の推進

学習環境や生涯学習推進体制を整備し、各種公民館講座や出前講座など、学習機会の充実に努めています。

○地域の子どもは地域で育てる環境づくり

「かのや地域学校協働活動」（令和2年度～）の推進
地域全体で子どもたちの学びや成長を支え、地域と学校が相互に連携・協働して行う様々な活動に取り組んでいます。

「かのや学校応援団」（平成25年度～）の推進

学校からの要請に応じて、学校に対する多様な協力活動（学校支援ボランティア）を行っています。

「鹿屋寺子屋事業」（平成28年度～）の開設

地域の方々と子どもたちが学習体験や体験活動を行

鹿屋寺子屋事業



学習活動（自主活動）の様子

婦人会活動



食育活動の一環として餅をついている様子

い、31か所（2022（令和4）年12月時点）で展開しています。生涯学習の拠点施設である公民館等を活用し、異年齢での学習を希望したり、学ぶ環境が十分整っていない子どもたちを対象に、学習活動や地域の方々との交流活動等をとおして、学び合う楽しさと郷土愛を育むとともに、高い教育力をもつ地域づくりと安心して子育てできるまちづくりを推進しています。原則、週1回の学習活動と月1回程度の体験活動を実施しています。

○成人教育の充実

鹿屋市中央公民館や各地区公民館、学習センター等（中学校区ごとに設置）での市民のニーズやライフステージに応じた講座、現代的課題、実情に応じた講座、高齢者大学、PTA等の社会教育関係団体での研修、二十歳のつどい等を実施しています。

○家庭教育の充実（家庭教育の支援）

家庭教育学級の開設中や子育て講座、保育体験等の実施、家庭教育ガイド作成・配布等を行っています。

○人権教育の充実

市民を対象とした人権問題講演会や各種団体、学級講座における人権学習、人権ポスター・標語コンクール、作品展等を行い、人権意識の高揚を図っています。

社会教育の分野は、「人づくり」や「地域づくり」、そして「つながりづくり」のために、今後ますます重要度が高まり、欠かせないものとなっています。

婦人会活動

「鹿屋市地域婦人団体連絡協議会」は2006（平成18）年の市町村合併直後は、鹿屋、吾平、輝北のそれぞれの地域で活動していましたが、平成22年度から統合し、一つの団体になりました。

婦人相互の連絡調整と親和を図り、婦人の地位向上と福祉増進及び社会の発展に尽くすことを目的とし、ひと声添えたあいさつ運動を含む青少年の健全育成事業や赤い羽根共同募金の立哨などのボランティア活動を通して、地域社会の人と人をつなぎ、地域の力を深める重要な役割を担っています。

【主な活動】

- ・青少年育成広報
- ・火災予防広報
- ・各種イベントの運営補助
- ・婦人新聞発行
- ・あいさつ運動
- ・ふるさと料理教室の実施
- ・女性演芸大会の開催
- ・鶴戸神社等清掃
- ・クロスカントリー大会運営補助
- ・火災予防の広報活動
- ・文化活動の促進



鹿屋市立図書館



鹿屋市文化会館

りが学んだ成果を地域社会で生かしていける場づくりや、生涯学習の指導者、リーダーの人材育成に努めています。

○多様性に溢れ、創造的で活力ある社会の構築

市民が、生涯を通じて文化芸術に触れられる機会の充実や主体的に文化芸術活動に参加できる場、自ら主体的に学習できる学習機会の提供、多くの人が学習活動に参加しやすい環境づくりのために、複数の生涯学習施設を整備しています。

公民館、図書館、学習センター等の社会教育施設における市民講座・短期講座・高齢者大学等の開設や同好会等の活動のほか、リナシティかのや、農業研修センター、勤労者交流センター等の施設を活用した多様な講座や活動が展開されています。

特に、「親と子の20分間読書運動」や「各公民館等での学習発表会」などの取組、文化会館やリナシティかのやでの自主文化事業、各学校での芸術鑑賞事業などは、市民一人ひとりが気軽に参加しやすい事業となっています。

【図書館HP】



【文化会館HP】



【リナシティかのやHP】



自主文化事業とは

「地域文化の創造」「文化事業の企画、実施」「地域芸術家・団体育成」「生涯学習推進」「芸術文化作品等の展示」の観点から教育委員会が必要と考える各種事業を行っています。例えば、古典芸能から演劇、クラシックなどのコンサートなどがあり、文化会館での高校生ミュージカル「ヒメとヒコ」、リナシティかのやでの「りなかる！&りなメロ♪」などは聞いたことがあると思います。

大隅半島で映画

リナシティかのやのリナシアターは、大隅半島唯一の映画館です。一度途絶えた映画文化を再興すべく2007（平成19）年から営業を行っており、多くの方が楽しんでいただける映画を上映しています。

各種割引も設けているので、ぜひ、足を運んでみてください。



収容門



初代火葬場

ハンセン病について

ハンセン病は、細菌の一つである「らい菌」の感染によって発症する病気です。

主に皮膚や末梢神経が侵されるために、有効な治療法が確立されていなかった頃から近年まで、顔や手足などの後遺症が目立つことから、ハンセン病を発症した患者さんは偏見・差別の対象となっていました。

特に明治時代に入ってから国の法律によって、ハンセン病の患者さんは全国の療養所に強制収容する政策がとられてきました。

その後、法律は1996（平成8）年に廃止されましたが、今でも多くの元患者さんが星塚敬愛園をはじめとする、各地の療養所で生活をされています。

現在、ハンセン病は治療法も確立し、完治する病気として一般の医療機関での診療が可能です。

006

ほしづかけいあいえん 国立療養所星塚敬愛園

○星塚敬愛園について

星塚敬愛園は、1935（昭和10）年10月28日に全国で10番目に設立されたハンセン病療養所です。

地元大始良村出身の、当時衆議院議員で、後に鹿屋市長になる故永田良吉氏が尽力し、この地に誘致し、設立されました。

星塚敬愛園の「星塚」とは、当地が「星塚っ原」と呼ばれていたことから、「敬愛」は西郷隆盛が好んだ「敬天愛人^{けいてんあいじん}」から引用されたものと言われています。

敬愛園は入所者の方々の医療空間以外に日々の生活空間も備えた施設であり、敷地内には様々な施設があり、様々な職種の方々が勤務しています。医療施設としては、外来治療棟やリハビリセンター、病棟があり、生活施設としては、比較的自立している方が居住されている「一般舎」と、介護を必要とされる方々の居住区として、二つのセンター（バラ、コスモス）があります。

現在、すべての入所者の方々の、ハンセン病は治癒していますが、後遺症や高齢化により、施設内にて医療、看護・介護サービスが提供されています。



初代納骨堂



社会交流会館

○主な歴史的建造物（写真、 ）

収容門

開園当時の収容門であり、当時は観音開きの鉄の扉での開門でした。この門を通して多くの患者が強制収容されました。戦後まもなく鉄の扉は撤去され、今は門柱のみにその面影を残しています。

初代火葬場

1935（昭和10）年から1949（昭和24）年まで使われました。火葬場の存在は、まさしく隔離政策の象徴となりました。3代目の火葬場まで建築され、2002（平成14）年6月まで園内で火葬を行っていました。

初代納骨堂

1939（昭和14）年完成。西本願寺鹿兒島別院を中心とした県下の同派各寺院からの寄付と入園者の労力奉仕によって建築されました。

○社会交流会館（資料展示室：写真 ）

療養所での生活を余儀なくされた方々が懸命に生きてこられた証の歴史パネルや資料、入所者の方々の生活用品などが展示してあります。見学をとおして、ハンセン病や敬愛園の歴史、偏見・差別について学ぶことができます。

ワゼクトミー

ワゼクトミーとは、子どもができなくなるよう、男性を対象に行う断種手術のことです。

療養所内での結婚は認められていましたが、その条件として男性はこの断種手術を受けなければなりませんでした。

また、女性が妊娠した場合は、強制的に中絶手術をして、子どもを生ませないようにさせられました。

当時は、ハンセン病は遺伝すると考えられていたため、患者の子孫を残さない方法がとられたのです。

入所者の方々は、子どもをもつことを許されず、未来への希望すら奪われたのです。

【星塚敬愛園 HP】





鹿屋体育大学全景



3種公認競技場でナイター設備を備える陸上競技場

鹿屋体育大学と 地域のかかわり

鹿屋市内の小中学校は、学生を教育実習生として受け入れるだけでなく、スポーツトレーニング教育研究センター協力校としても共同研究を行っています。

また、多くの学生から学校応援団やスポーツボランティアとして協力をもらい、体育・保健体育の授業等において、児童生徒が直接、技術的な指導を受けたり、持久走大会等の学校行事においても、補助員としての協力をもらったりしています。このような取組は学生にとっても、指導の機会を得られる貴重な学びの場となっています。

最近では、自重負荷運動で筋力や全身持久力を向上させることが期待できる運動として鹿屋体育大学が考案した「Exseed」を、授業の導入場面で取り入れる学校が増え、本市の子どもたちの健康・体力づくりの取組が益々充実しています。

007

国立大学法人鹿屋体育大学

1981（昭和56）年10月に国立大学として初めての体育系単科大学として鹿屋市に設立され、2021（令和3）年に開学40周年という節目を迎えました。毎年全国各地から約200名の学生等を受入れ、これまで卒業生約6,000名、修了生約650名が巣立ち様々な分野で活躍しています。社会体育指導者の育成を主な目的とした建学の理念のもと、40年経過した現在も、多くの最先端技術・設備等を用いスポーツを科学的に研究し、その結果を基に実践的なスポーツのリーダー育成等に取り組んでいる大学です。

○大学の概要

学部などの構成は体育学部が2課程（スポーツ総合課程、武道課程）で構成され、学生772名と外国人留学生2名が学んでいます。大学院は体育学研究科体育学専攻が2課程（修士課程、博士後期課程）と体育学研究科共同専攻（筑波大学）が2課程（修士課程、後期3年の課程のみの博士課程）で構成され、学生81名と外国人留学生6名が学んでおり、他にも科目等履修生、研究生、聴講生、特別聴講生が8名学んでいます（2022（令和4）年5月1日現在）。

さらに、22の体育系課外活動団体があり多くの学生



一般市民も利用可能な附属図書館
 (令和5年3月現在はコロナウイルス感染症対策として一時停止しています)



スポーツパフォーマンス研究センターにおける測定の様子

が所属しており、各種競技会で優秀な成績を残しています。

○スポーツパフォーマンス研究センター

2015(平成27)年3月には国内初のスポーツ分野のコーチングに必要なパフォーマンス研究の科学的検証が行える最先端研究設備を備えたスポーツパフォーマンス研究棟(現在センター)が、鹿屋市等の寄附により竣工。今ではオリンピックやパラリンピアンを含む多くのトップアスリートが訪れる施設となり、今後の体育・スポーツ界の発展に重要な施設となっています。

○地域への貢献

大学の持つ知的・物的財産を活用した地域の方々への社会貢献としては、公開講座の開催、NIFSスポーツクラブの運営をしています。また最近、鹿屋市と連携し大学スポーツを通じて地域との交流の輪を広げ、地域活性化に寄与する取組である“Blue Winds”事業に取り組んでおり多くの市民の方が参加し、おおいに盛り上がった運動会「かのやエンジョイスports」や、体育大生のフォローとともに自己ベスト更新にチャレンジする「みんなのタイムトライアル」などを開催しています。



鹿屋市との連携

市では、地域の財産でもある鹿屋体育大学と2010(平成22)年に「国立大学法人鹿屋体育大学と鹿屋市との連携に関する協定」を締結して、同大学の資源を活用した交流の促進や市民の健康づくり、競技力向上など、スポーツを通じた地域活性化に取り組んでいます。

そのような中、同大学の施設を活用した市民参加型のスポーツイベントや、市民が一緒になって大学スポーツチームの試合を観戦、応援する「カレッジスポーツデー」など、同大学と連携したBlue Winds事業に取り組み、大学スポーツの振興による地域活性化を推進しています。

また、本市のスポーツ合宿の受入実績は平成23年度以降、県内上位を占めており、今後も同大学をはじめ、かのやスポーツコミッションや競技団体等と一体となって、積極的にスポーツ合宿やトップアスリートの自主トレーニングを誘致していきます。



鹿屋航空基地周辺の航空写真

提供：国土地理院

滑走路

鹿屋航空基地の滑走路は2本（主滑走路・副滑走路）あり、並行の滑走路は海上自衛隊の中でも鹿屋基地にしかありません。

- ・主滑走路
長さ:2,250m 幅:45m
- ・副滑走路
長さ:1,200m 幅:40m

米軍機の展開

在日米軍再編に伴う訓練移転により、2019（令和元）年9月から、空中給油機KC-130によるローテーション展開が行われています。

また2022（令和4）年11月から1年間、我が国周辺海域における情報収集活動のため、米軍無人機MQ-9が一時展開し、これに伴い、この間、米軍関係者が市内に滞在・生活しています。

【海上自衛隊鹿屋航空基地HP】



008

海上自衛隊鹿屋航空基地

海上自衛隊鹿屋航空基地は、鹿屋市の西原に所在し、1954（昭和29）年から海上自衛隊の航空部隊として利用しています。主に哨戒機による警戒監視、他にはヘリコプター搭乗員の教育訓練を行っています。

日本の南西海域の安全保障と、将来を担う搭乗員養成の基地として約1,700名の隊員が任務に従事しています。

○沿革

- ・1936（昭和11）年 大日本帝国海軍鹿屋海軍航空隊創設
- ・1950（昭和25）年 警察予備隊鹿屋駐屯部隊編成
- ・1954（昭和29）年 海上自衛隊鹿屋航空隊と改称
- ・1961（昭和36）年 第1航空群新編
- ・2018（平成30）年 第1航空群改編

○施設概要

敷地面積：約120万坪（東京ドーム 約85個分）

部隊数：10

配備機体等：P-1、SH-60K、TH-135



哨戒機「P-1」



鹿屋航空基地史料館

○部隊紹介

日本本土の南方の海上自衛隊航空部隊として、最新の哨戒機「P-1」により周辺海域における警戒監視等の任務に当たるとともに、部隊の精強性・即応体制維持のため、日々訓練等に励んでいます。

○所在部隊紹介

【第1航空群司令部】

鹿屋航空基地の中核で各部隊を総括して訓練、警戒・監視等の任務を実施しています。

【第1航空隊】

海上自衛隊航空部隊の中で最初に編成された航空部隊であり、哨戒機「P-1」で昼夜を問わず日本周辺海域の海上防衛を担っています。

【第1整備補給隊】

鹿屋航空基地に配備されている航空機の整備・補給等に関する業務を行っています。

【鹿屋航空基地隊】

鹿屋航空基地全般の施設管理、基地警備、航空管制、契約業務及び予算管理、隊員の福利厚生・給食、健康管理等広範囲にわたる支援業務を行っています。

鹿屋航空基地史料館

鹿屋航空基地の敷地内にある海軍航空の歴史史料館で、館内には戦争に関する貴重な資料が数多く展示されています。

二式飛行艇一二型

(通称：二式大型飛行艇・二式大艇)



旧日本海軍が九七式飛行艇の後継機として日本の航空・造船などあらゆる技術を集結して設計・開発した大型飛行艇で、航続距離・高速性能において当時世界最高の性能を誇る傑作機とされていました。

性能等

全長：28.1m

全幅：38.0m

最大速力：453.2km

最大航続距離：約7,200km



カピックセンター



世界の国旗が鮮やかなロビー

鹿児島県立大隅広域公園

大隅半島の古い歴史に培われた文化や遺産の復元をつちか図るとともに、県民が自然の中でスポーツやレクリエーションを気軽に楽しめるように、吾平山上陵に隣接した鹿屋市吾平町と肝付町にわたる丘陵地に「人間性の回復と緑に囲まれるレクリエーション空間の創造」をテーマに鹿児島県が整備し、平成6年度からオープンしています。

【施設（無料）】

- ・花の広場 ・ピクニック広場 ・噴水広場
- ・大隅の里 ・冒険の谷 ・歴史の広場等

【有料施設】

- ・大隅アリーナ21（体育館、屋内人工芝コート等）
- ・運動広場 ・ゴーカート場 ・オートキャンプ場



【大隅広域公園HP】



カピックセンター

カピックセンターとは、鹿児島県アジア・太平洋農村研修センターの通称です。鹿児島県の国際交流・国際協力の拠点として1994（平成6）年4月に上高隈町に開設されました。

豊かな自然の中で、日本人対象の国際理解研修や、世界各国から研修員の受入れ、外国人との国際交流イベントなどを行っています。

[施設概要]（全館Wi-Fi完備）

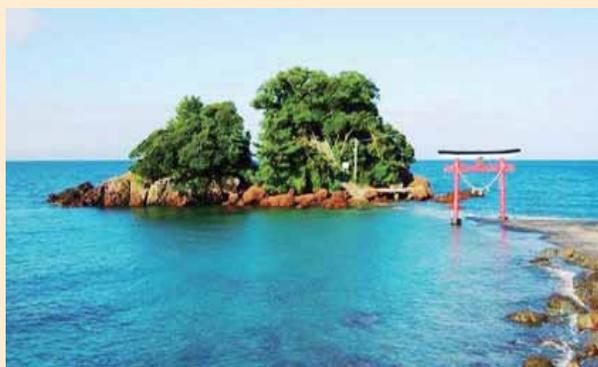
- ・大隅湖のほとりの約1万㎡の広大な敷地で、自然あふれる施設を形成しています。
- ・宿泊施設 定員60名
- ・研修室3室（最大200名）レクリエーション室等

[事業特徴]

- ・国際理解教育や国際交流の他、外国料理を食べるイベントや英語イベント等も行っていきます。研修なしでも、どなたでも宿泊利用ができます。

【カピックセンターHP】





荒平天神



荒平天神（社殿）

大隅半島全体が 自然の宝庫

鹿屋市は大隅半島のほぼ中央に位置しており、周囲を見渡せば、広い範囲が国や県によって自然公園の指定を受けています。

国立公園

霧島錦江湾国立公園

（霧島や佐多岬、根占海岸一帯）

国定公園

日南海岸国定公園

（志布志湾一帯）

自然環境保全地域

稲尾岳自然環境保全地域
（大隅半島南部の稲尾岳周辺）

生物群集保護林

高隈山生物群集保護林

（高隈山の標高500m以上の一帯）



010

鹿屋市の風景

日本の原風景が広がる鹿屋市には、多くの美しい景色があります。ここでは、これらの鹿屋市を代表する景色の一部をご紹介します。

あらひらてんじん ○荒平天神

鹿屋市の天神町にある「菅原神社（荒平天神）」。

この神社、鳥居が小島と海岸を結ぶ砂州に建っていて、まるで世界遺産の厳島神社をほうふつとさせる、鹿屋の代表的な風景となる神社です。

菅原神社には、古い歴史があり、創建は戦国期の天文年間（1532～1554）と言われています。祀られているのは学問の神様として有名な菅原道真公で、受験時期には、合格祈願などで訪れる方が絶えません。ただ、小島の頂上にある社殿に参拝するには、急な階段を登らないと行けません。また、大潮の満潮時には潮が満ちて渡れなくなりますので、ご注意ください。

たかくま たなだ ○高隈の棚田

棚田の美しい風景が高隈地区には残されています。

多くの方が写真でしか見たことがない棚田の風景が身近な場所にあるので、ぜひ、足を運んで日本の原風景を感じてみてください。



高隈の棚田



中岳山頂からの眺望

左は高隈山、中央奥には鹿児島湾を経て霧島山が見える

○輝北うわば公園

クロスカントリーも行われる、輝北うわば公園は、天体観測ができる天球館が注目されますが、標高550mから望む鹿児島湾に浮かぶ桜島、霧島連山、太平洋、高隈山など360度のパノラマが楽しめます。

特に夕暮れ時は鹿児島湾の向こうにある桜島や霧島連山、薩摩半島に綺麗な夕日が沈んでいく様子は、一見の価値があります。夕日が沈めば壮大な星空をそのまま堪能する時間になっていきます。



鹿児島湾に沈む夕日

[項目 079、087 参照]

あいらかみのちく

○吾平神野地区に残る原風景

神野地区には先人が守り続けてきた自然の風景が沢山あります。

ドライブに出かけると、なにげない自然の中に思わず車を止めて眺めたくなる景色が随所にあります。中岳（吾平富士）と始良川の見事な景色、山に入れば素敵な滝など、魅力ある原風景に触れてみて下さい。



中岳と始良川

[項目 085 参照]

「鹿児島湾」＝「錦江湾」

本書では、学校の教科書や国土地理院発行の地図のとおり、「鹿児島湾」と記載しました。

しかし、多くの鹿児島民が「錦江湾」と呼んでいます。

鹿児島県のHPなどでは、島津氏第18代家久が、「浪のおりかくる錦は磯山の梢にさらす花の色かな」という歌を詠んだことが、錦江という言葉を生み、それが後にこの湾を錦江湾と呼ぶ起源になったと紹介しています。

錦江湾という名を取った地名や建物などがあり、錦江湾が校歌に出てくる学校は県内に多数（今は廃校となった古江、菅原、高須も含む）があります。有名な歌でも錦江湾と大きく歌い上げているのもあります。

鹿児島湾が正式名称ですが錦江湾は鹿児島県民の気持ちに根差した名称なのかもしれません。



湯遊ランドあいら



串良さくら温泉



県民健康プラザ

県民の生涯を通じた健康づくりを総合的に支援しながら、県内の保健所、市町村保健センターや健康づくり関連施設における健康づくり活動を支援する中核となる施設です。

同施設には、健康づくりの場として多目的温泉施設、プール、トレーニング施設を設置しています。

トレーニング施設は、筋力系マシン、有酸素系マシン等の各種トレーニングメニューを豊富に行えます。

また、プール・多目的温泉施設は、水着を着用して利用する温泉施設です。温水プール、全身浴/半身浴、気泡浴・圧注浴・箱蒸し、寝浴などがあります。

住所 鹿屋市札元1丁目8-7



011

鹿屋市の銭湯

桜島を有する鹿児島県内では、温泉を利用した銭湯が多くあります。ここでは、鹿屋市内の銭湯を紹介していきます。

○湯遊ランドあいら

泡浴、低周波浴、寝湯、イベント湯など様々な種類の浴湯やサウナや水風呂も完備されて、レストランや宿泊施設が併設されている複合施設です。

住所 鹿屋市吾平町麓2973

○串良さくら温泉

隣接する焼却所で発生した熱を利用して温泉を加熱しています。無色透明のきれいな湯は弱アルカリ性の重曹泉（ナトリウム-炭酸水素塩・塩化物泉）です。

住所 鹿屋市串良町下小原3948-1

○ゆたか温泉

現在の施設正面にある丘から田んぼに「赤水」と呼ばれた温泉が流れていました。深さ1,388m、約7ヵ月にも及ぶ大掘削の末、濃厚な重曹泉が湧出しました。

住所 鹿屋市田崎町319-1

○山寺鉾泉浴場

鎌倉時代から使われてきたといわれる源泉。高隈山の1合目から、噴出するその鉾泉を2,000m引水し、



輝北ふれあいセンター



鉱泉分析法指針（平成26年改訂）からの抜粋

鉱泉の定義と分類

1-1 鉱泉の定義

鉱泉とは、地中から湧出する温水および鉱水の泉水で、多量の固形物質、またはガス状物質、もしくは特殊な物質を含むか、あるいは泉温が、源泉周囲の年平均気温より常に著しく高いものをいう。
 温泉法にいう「温泉」は、鉱泉の他、地中より湧出する水蒸気およびその他のガス（炭化水素を主成分とする天然ガスを除く）を包含する定義である。
 鉱泉は、温泉法第2条別表に従い、常水と区別する（第1-1表）、鉱泉のうち、特に治療の目的に供し得るものを療養泉とし、第1-2表により定義する。

第1-1表 鉱泉の定義（常水と区別する限界値）

1. 温度（源泉から採取されるとき温度）摂氏25度以上
2. 物質（下記に掲げるもののうち、いずれかひとつ）
表省略

第1-2表 療養泉の定義

1. 温度（源泉から採取されるとき温度）摂氏25度以上
2. 物質（下記に掲げるもののうち、いずれかひとつ）
表省略

輝北ふれあいセンター

地域福祉の向上、活性化のための施設として、また、地域住民の皆様のための指定避難所として運営しています。

風呂の湯は、霧島の妙見温泉を毎日運搬して浴場の湯として使用しています。

住所 鹿屋市輝北町上百引2100-1

温泉とは

温泉の泉質はその含まれる成分により10種類に分けられます。源泉が25以上で温泉法に定める物質が規定値以上ふくまれているものになります。

この項目に記載されている銭湯は「かのやファン倶楽部」に掲載されています。



沸かしている源泉^{とうじゆ}かけ流しの湯治湯です。
 ナトリウムなど10種類の成分を含む単純泉です。

住所 鹿屋市上祓川町8775-4

○アビルランド坂元

浜田海岸近くに創業100年を超える、かつては湯治湯として栄えた秘湯です。第一鉄イオンやナトリウム等を多く含む鉱泉となっています。

住所 鹿屋市浜田町139-1

○水明荘

かつて、高隈の麓に住む土族によって発見され、「不老長寿の霊泉」として知られていました。

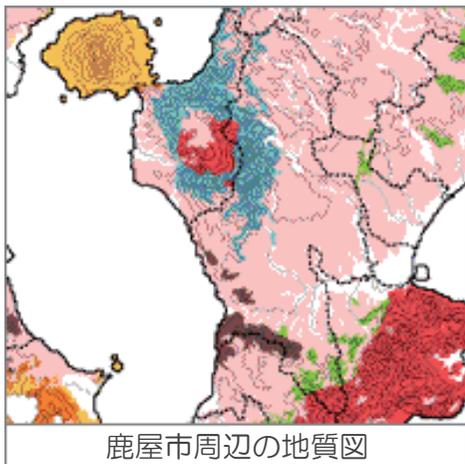
湧出する鉱泉を引水し沸かした湯はうぐいす色をしています。

住所 鹿屋市上高隈町196

○ホテル太平温泉

鹿屋市街地中心部の城山公園近くにある温泉です。
 俗にいう「美人の湯」と呼ばれる、ナトリウム炭酸水素塩泉を含んだ湯は、トロトロとした滑らかな肌触りとなっています。

住所 鹿屋市新生町5-25



新生代	第四紀	1万年前 259万年前	堆積岩類 (野里安山岩)	火山岩類 (火砕流堆積物 (入戸・阿多))	【凡例(層序表)】
	新第三紀	2303万年前	深成岩類 (大隅花崗閃緑岩)		
	古第三紀	6600万年前	日南層群		
中・古生代	白亜紀 ジュラ紀 三疊紀		四万十層群 (高隈山層) (郷之原層)		

鹿児島フィールドミュージアムより転載

火山活動により 形作られた南九州

鹿児島湾は約90万年前に出現したことが報告されています。それ以前は大隅半島と薩摩半島が接していたと考えられています。南九州の大地が東西に引き裂かれ、溝状に陥没した「鹿児島地溝」に海が入り、2つの半島が離れて大隅半島ができたようです。

「鹿児島地溝」の中に堆積した海の地層(国分層群)は、地溝の北部にあたる始良市や霧島市に広く分布し、鹿児島市や指宿市ではボーリング調査で地下に存在していることが報告されています。この「鹿児島地溝」の出現した理由に火山活動があります。その証拠に、「鹿児島地溝」に沿って、カルデラが並びます(上図カルデラ分布図参照)。日本の10%にあたる11の活火山も、この「鹿児島地溝」に沿って南北に並んでいます。

まさに、この南九州の大地の姿は、「鹿児島地溝」に沿う地域に上昇してきたマグマの活動の賜物と言えます。

012

鹿屋市の地形・地質1

○概要

鹿屋市の北西部に当たる高隈山周辺には、中生代白亜紀の四万十層群(砂岩、頁岩、塩基性岩など)と、それを貫く優白色の高隈山花崗岩が分布しています。また、高隈山体と南の大隅山体に挟まれた中央の低地帯は、始良カルデラの噴出物である入戸火砕流(笠野原等のシラス台地)が広がっています。

南部の吾平地区に広がる福師岳付近には、新生代古第三紀の日南層群の砂岩と頁岩からなる互層(交互に重なり合う層)が分布しています。

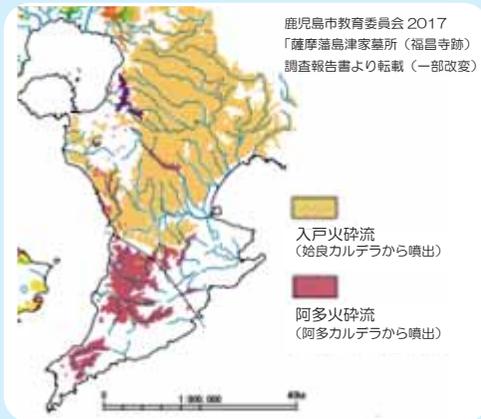
また、福師岳の西方大始良地区の横尾岳付近は、新生代新第三紀の火山活動で噴出したと考えられる輝石安山岩からなる300m近い丘陵が見られます。この安山岩は、主に緑灰色で柱状節理や放射状節理がよく発達しています。

鹿児島湾沿いの海岸線付近には、入戸火砕流より古い時代に噴出した阿多火砕流の溶結凝灰岩の美しい海岸線が見られます。この溶結凝灰岩は、赤みを帯びた加工しやすく美しい石で、荒平石と呼ばれ、昔から家屋の石垣など、石材として広く利用されてきました。

○高隈山地の特徴と鉾山

高隈山地は、大隅半島の中央部に位置し、鹿屋市と

いと あた 入戸、阿多火砕流堆積物分布図



カルデラ分布図



垂水市との境界付近に連なる山地であり、南北25km、東西15km、標高1,000mを超す山岳群（7座）があります。これらを総称して高隈山と呼んでおり、高峯、大隅湖、猿ヶ城溪谷などの景勝地は「高隈山県立自然公園」に指定されています。【項目016参照】

地質的には、白亜紀後期以降に堆積したであろう四万十層群と呼ばれる地層等が隆起したものと、その上に、阿多カルデラ、始良カルデラなどの火山活動による噴出物が積み重なっているところもあります。

また、これらの堆積岩に、地下深いところでマグマが入り、そのマグマが冷えて（高隈山花崗岩）になりましたが、そのマグマの熱によって堆積岩は変成し、大笠柄岳や御岳などの山塊に見られるように、緻密なホルンフェルスという変成岩となって侵食から取り残され、尾根状の峰となって残っています。

大笠柄岳の西側斜面には、直径約7kmの花崗岩ドーム「高隈花崗岩体」があり、その周辺部にタングステンやモリブデン、金などの鉱脈が存在しています。また、鹿屋体大前から御岳へ向かう鳴之尾林道には、明治から大正時代に大隅重金鉱山として、タングステンや金などを対象に採鉱された場所もあります。

【鹿児島フィールドミュージアムHP】



火砕流堆積物

鹿屋市の基盤をなす地層は、深海に堆積した四万十層群・高隈山層と日南層群、これらの堆積層に貫入した花崗岩です。これらの古い地層が侵食された地表面を覆う地層は、鹿児島湾の湾口部に位置する阿多カルデラから、約11万年前に噴出した阿多火砕流、湾奥部に位置する始良カルデラから、約3万年前に噴出した入戸火砕流の2つの火砕流堆積物です。

阿多火砕流の溶結凝灰岩は、鹿児島湾に面した海岸に露出し、荒平天神の天神島などの美しい景観をつくりだしています。また、この溶結凝灰岩は荒平に石切場があって、最近まで「荒平石」の石材名で採石されていました。また、南から流れてきた阿多火砕流は高隈山の南斜面を駆け上がり、高須川の上流まで達しています。

入戸火砕流は、上記火砕流分布図では省かれていますが、南九州全域を覆い、北は熊本県の人吉盆地、東は宮崎市まで達しています。



シラスの崖



笠野原台地

荒平石・細山田石

採掘・加工が容易なため以前は建築用石材として広く利用されてきた溶結凝灰岩は、高温で厚い火砕流堆積物の内部が凝結して固い岩石になったもので、軽石などが押しつぶされて、黒っぽいガラス質のレンズ状になっているのが特徴です。

天神町から南東方に通じる道路沿いで溶結凝灰岩が採掘され、荒平石の名称で特に石垣石として用いられています。これは、九州南部には加久藤カルデラ、始良カルデラなどがありますが、11万年から5.5万年前に活動していた阿多溶結凝灰岩になります。

また、串良町で碎石されている細山田石も、同様に阿多溶結凝灰岩であり、荒平石はピンク色・細山田石は灰色の特徴があります。

013

鹿屋市の地形・地質2

○地形

鹿屋市の地形は、南部には肝属山地があり、北部には高隈山地がそびえており、西縁（鹿児島湾側）にも比較的高い地形が南北に形成されています。その凹地はほとんどシラス台地が占め、その下には阿多火砕流堆積物が混在しています。

○シラス台地

シラス台地は、九州南部に数多く分布している火山噴出物からなる台地です。鹿屋、串良、志布志付近に広く分布しています。

台地面の高さは鹿屋市街地より下流の肝属川沿いが最も低く、南方、西方及び北方に向い緩やかに高度を増し、肝属郡北西部ではかなりの高さには達しています。

シラスは、細粒の軽石や火山灰から形成されています。水の浸食に弱いため、笠野原台地のようなシラス台地は通常数十mの崖でとりかこまれ、その崖部は台風や梅雨時の豪雨によって崩壊しやすく、大きな土砂災害を引き起こすことが少なくありません。

そんな中、シラスを原料とする工業化が進んでおり、硬質レンガ・タイル・人工軽量骨材・ガラス繊維など、多くのものが開発されています。



鳴之尾牧場近くの白滝
(露出した花崗岩上を流れる滝)



くろぼく土からなる広大な畑

○高隈山周辺の地質

高隈山は砂質岩や泥質岩からなる地層と、おもに、火山性堆積物である郷之原層と名付けられた塩基性岩などの時代未詳層群と、これらを貫く高隈花崗岩からなっています。高隈山地はこの高隈花崗岩が地層や岩石内に入り込むことによってほとんど全域にわたり接触変成作用（火成岩の熱により岩石が変化すること）を受けています。

高隈花崗岩体は垂水市猿ヶ城付近を中心として東西6km、南北9kmの楕円形に分布しています。

色調は、中粒ないし粗粒黒雲母を含むことから、灰白色でゴマのように、黒い粒が入っており大隅地域一帯の墓石として使用されています。

○くろぼく土

くろぼく土とは火山灰と植物が腐って土にかえたもので形成され軽くて細かい粉末のような土です。鹿児島県では曾於、肝属、川辺、指宿、始良、熊毛等に広く分布しており、保水力をもちながら水はけがよい土壌です。曾於、肝属では地域全畑面積の9割以上を占めています。また、甲子園の土にも使われていることでも有名です。

地下資源

鹿屋市における地下資源として、高隈山地における金属鉱床（銅山・鉱山・砂鉄）が挙げられます。

しかし、現在ではいずれも休山しています。



他にも

- ・鹿屋銅山黒岩林道鉱床
- ・梅平鉱区小屋谷鉱床
- ・吉ヶ別府鉱床
- ・砂鉄鉱床

などがあり、多くは高隈山南側斜面に点在し、かつては探鉱または採掘されたこともあります。



かのやばら園

バラと気候

バラは本来、高温多湿が苦手な植物です。

かのやばら園では、素敵なバラが咲き誇っていますが、実は雨の多い鹿屋市の気候は、バラの栽培に適したものではありません。

しかし、品種や栽培方法の工夫により、かのやばら園は維持されています。

鹿屋の気象観測施設

鹿屋市には、気象庁が全国1,300か所に設置する「地域気象観測システム（通称「アメダス」）」という無人の観測施設が、鹿屋（寿（県立鹿屋農業高校内）、吉ヶ別府（下高隈町）、輝北（輝北町市成）の3箇所にあります。アメダスは降水量の他、風向・風速、気温等の観測を24時間自動的に行い（吉ヶ別府のアメダスは降水量観測のみ）、大雨や台風などの気象災害の防止や軽減に重要な役割を果たしています。

その他、気象庁の施設として、地球内外の地磁気の状態や変化を監視する「地磁気観測所」が東原町にあります。「地磁気観測所」は鹿屋の他、茨城県石岡市の柿岡、北海道大空町、東京都小笠原村父島にあり、世界各国の観測所と連携しながら、地磁気の定常的な観測を行っています。



014

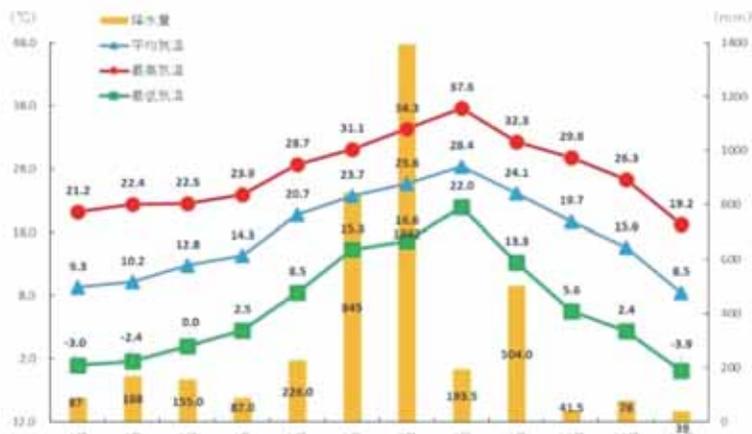
鹿屋市の気候

鹿屋市は本土最南端へ伸びる大隅半島のほぼ中央に位置しており、一般的な全国の気候区分によると、

「太平洋側の気候」に分類されます。また太平洋側の気候を細かく分類した場合、鹿屋市は「南海型気候区」に当てはまり、夏は太平洋の暖かく湿気を多く含んだ南から吹く季節風の影響で多雨多湿、冬は北西から吹く冷たく乾いた季節風の影響で少雨乾燥な天候となります。

春になると高気圧と低気圧が交互に通過するため、天気は数日の周期で変わります。毎年6月から7月上旬頃が梅雨の時期となります。この時期が一年の中で最も雨が降りやすく、梅雨末期の集中豪雨など雨による災害が起きやすくなる時期でもあります。また、九州南部は台風の常襲地帯じょうしゅうちたいです。年平均4個の影響を受け、台風が鹿屋市の西側を通過したときに、風雨が強い傾向にあります。秋になると再び移動性高気圧と低気圧が交互に日本付近を通るようになり、天気は数日の周期で変わるようになります。最近では地球温暖化の影響等により、残暑が秋の終わり頃まで続くことがあります。冬は西高東低の冬型の気圧配置が強くなると、九州山地や霧島山などの東側に位置する鹿屋市は乾いた空気が吹き下ろすため、晴れの日が多くなります。

鹿屋市の雨温図 2020（令和2）年



○気候の特色と災害

鹿屋市は、夏は降水量が多く暑いですが、冬は降水量はそれほど多くなく、比較的暖かくて過ごしやすい気候です。気温や降水量に着目すると、年平均気温は約17.6、年平均降水量は2,856mmであり、全国と比較すると温暖で雨が多い気候といえます。この気温と降水量を鹿児島市と比べてみると、最高気温が約1℃低く、最高気温は2.5℃低い状況であり、降水量は約250mm多い状況です。同じ鹿児島県でも、鹿屋市は鹿児島市よりも少し涼しく、雨が多いところ です。

このような気候の特色がある鹿屋市では、年間の降水量が集中する夏から秋にかけて、自然災害が集中的に発生します。特に、梅雨末期の大雨や台風による暴風雨によって、土砂災害や川の氾濫が時々発生し、市民生活に影響を与えています。

近年では、2016（平成28）年9月の台風第16号通過の際は市の北部を中心に大規模な土砂災害が発生しました。また、2020（令和2）年7月の記録的な豪雨の際は新川町や白崎町、菟川町大園地区など市内各所に浸水被害が発生しました。さらに、2022（令和4）年9月に接近した台風14号は、暴風雨の影響で長期間の停電が発生しました。これは統計史上5番目に低い気圧です。

戦後の風水害の記録

鹿屋市では、戦後発生した様々な風水害によって、人々は甚大な被害を受けました。その中でも1976（昭和51）年6月の豪雨災害では、肝属川の増水により市の中心部が冠水するとともに家屋流出、床上浸水、土砂崩れ等が多数発生し、4名の尊い人命が失われました。

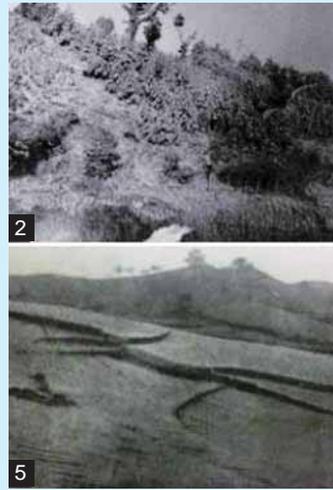
また台風被害では、2016（平成28）年台風第16号通過の際は輝北町や高隈を中心に、家屋損壊、床上浸水、土砂崩れや橋梁流出等、甚大な被害が発生し、重軽傷者8名の人的被害を出しました。

さらに2020（令和2）年7月豪雨と呼ばれる大雨では、線状降水帯の影響を受け、1日で7月の降水量を超える雨が降り、7月6日に観測した総降水量と1時間雨量は、統計を取り始めてからのデータの1位を更新しました。





写真は広報かのや 2018年5月号より引用
 1 牛根村（現在の垂水市牛根）から撮影された桜島大噴火



石碑から見る大噴火

大噴火による災害は、溶岩や降灰のみならず、降り積もった軽石や火山灰が影響し、市内各地で洪水が起きました。

記念碑は、爆発碑（3か所）、河川等改修碑（8か所）、耕地整理碑（3か所）、移住碑（1か所）の4種類があります。



記念碑（輝北町上百引・岳野小学校跡）

1926（大正15）年3月に、百引岳野と牛根岳野が共同で建立。大噴火後、両岳野全体の世帯数が一時5分の1になったとされています。

串良川改修記念碑（東串良町・豊栄橋左岸）

1917（大正6）年6月建立。大噴火で串良川の源流部が荒れ、土石流や洪水が頻発したため、西串良村と東串良村が連合組合をつくり改修しました。

015

鹿屋市と桜島

○大正の大噴火と鹿屋

1914（大正3）年1月12日、午前8時ごろから、桜島東側と西側の標高500m付近及び山頂から白煙が吹き上がりました。そして、10時15分、標高350m付近の谷間から黒煙が上がり、噴火が始まりました。約10分後には、標高400mからも噴火が始まりました。噴火口からは火炎と噴石が噴出しました。その後、噴煙は7,000～8,000mの高さに達しました。桜島の噴火はしばらく続き、溶岩は斜面を流れ降り、西側の集落を埋めながら海岸線に達しました。また、東側の溶岩は集落を埋没しながら、幅360mの瀬戸海峡を閉鎖し、桜島と大隅半島は陸続きになりました。

当時、西寄りの風が吹いていたため、大量に噴出した軽石・火山灰は大隅半島を広く覆いました。特に肝属郡高隈村（現在の高隈町・下高隈町）、同百引村（現在の輝北町上百引・下百引）、曾於郡市成村（現在の輝北町市成・諏訪原）などでは、軽石・火山灰が厚さ約30cm、最も深いところでは1m以上積もるなど、辺り一面、灰色に埋め尽くされました。これらの噴出物で農地は長い間利用できずに、農業は壊滅的な被害を受けました。また火山灰が排水を妨げ路面が泥状化したり、噴出物で埋没したりして道路が寸断されるな



2 火山灰が積もった杉林（高隈村付近）
 3 4 火山灰が積もった民家（百引村上百引）
 5 軽石・火山灰が積もった畑（同）
 6 火山灰で埋まった川に立つ人々（同）
 噴火後に起きた洪水で池と化した田地（西串良村細山田）
 1～4は鹿児島県立博物館
 『桜島大正噴火写真』
 5～7は講和会編
 『大正三年桜島噴火状況（桜島爆発肝属郡被害始末誌）』から



噴火前と噴火後の作付け状況

桜島の大噴火による降灰は、鹿屋市の農作物にも影響を与えています。野菜、花、たばこ、茶、飼料作物、果樹などに多くの被害をもたらしました。

1973（昭和48）年に制定された「活動火山対策特別措置法」に基づいて、鹿屋市では桜島降灰対策事業が進められました。これにより、野菜、花、果樹のハウス栽培が行われるようになりました。また、たばこや茶の洗浄施設が設置されたり、飼料作物のサイロ貯蔵や機械による刈り取りが行われたりするようになりました。



サイロ
 農産物や飼料作物などを保存する容器

ど、市民生活に大きな影響を与えました。河川の上流では土石流や泥流による土砂災害が度重なり、中・下流ではその後も継続して洪水等が頻発しました。この大正の大噴火では、桜島を中心に死者・行方不明者58人、負傷者112人、全焼家屋2,148戸、全倒家屋113戸の被害が発生しました。

○現在の桜島とのかかわり

現在、桜島のマグマの蓄積は、2020年代に大正噴火が起こる前のレベルまで戻っていると推定されており、大正噴火級の大規模噴火への警戒が必要です。

一方、観光面以外では厄介者扱いをされている火山灰ですが、これを有効利用する方法もあります。灰そのものを缶詰にしたり、陶芸の粘土に練りこんだり、^{ゆうやく}釉薬に混ぜて焼くなどの取組がされています。

また、過去の火山灰が堆積してできたシラスについては、古くから研磨材として利用されてきましたが、現在では、シラスコンクリートや石鹼などに幅広く利用されています。

火山灰の有効利用がより拡大されるようになると、桜島は宝の山になることでしょう。



炭焼き窯

笠野原台地開発史～水をもとめて苦難の歴史～から転載



ブナの木

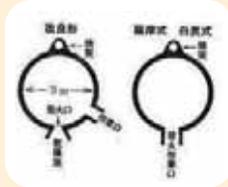
写真提供：大隅森林管理所

炭焼き窯

鹿屋市でも以前は、炭の生産が多く行われていました。木炭は、1955（昭和30）年頃まで高隈の重要な基幹産業でしたが、現在では数戸で生産されているだけとなっています。

「窯の改良」

1955（昭和30）年頃より、火口と作業口を別にした窯が普及し、品質が改善されました。



「穴窯」

白砂の崖などを掘り利用する炭焼き窯です。窯は直径3m、高さ1.2mくらいです。粘土、石で壁を固めて、火口、作業口煙突をつくり原木を入れます。



016

照葉樹の原生林

鹿屋市の照葉樹林は、高隈山に多く自生していることから、ここでは高隈山に自生する照葉樹林について紹介いたします。

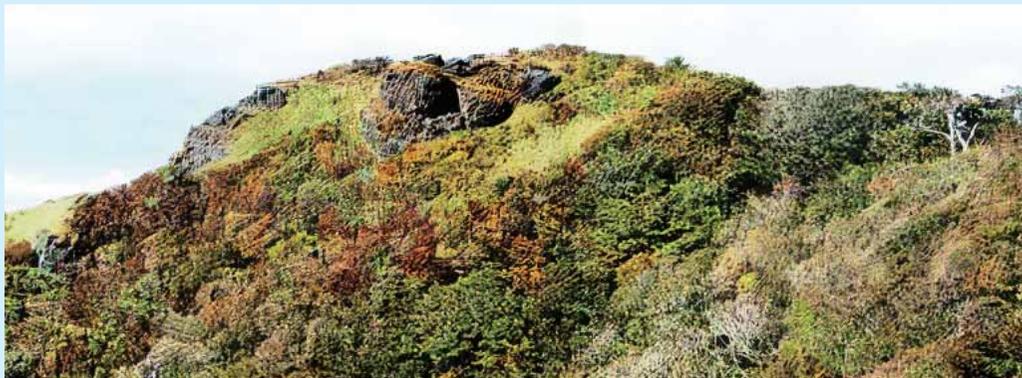
高隈山は世界各国の植物学者が調査に訪れるほどの貴重な照葉樹の原生林を今も残しています。本市の植生は、大部分をスギやヒノキ、サワラなどの植林地植生や耕作地植生が占めていますが、垂水市との境にある高隈山は、林野庁から高隈山生物遺伝資源保存林に指定されています。

植物をみると、麓から500～800mまではイスノキ、シイ、タブなどの照葉樹林で、そこから1,000mまではアカガシの大木が多く、ところどころにモミの大木が目立ちます。頂上近くになると気温が下がるため、温帯にみられるブナの大木があります。

○高隈溪谷の照葉樹林

大隅自然休養林として、溪谷一帯の植物が保護されており、遊歩道（安全確保のため通行止の場合有）に沿って昔ながらの照葉樹林が広がっています。

ツブラジイを中心にイチイガシ、イスノキ、ウラジロガシ、ホソバタブ、ツクバネガシ、アラカシ、マテバシイなど代表的な常緑樹が林立し、中には幹回り5mのイチイガシの巨木も見られます。また、下草植物も豊かで、タカクマホトトギスをはじめシダ類も多種にわたって見られるなど、学術的参考資料林の感があり、サルの生息地にもなっています。



大箆柄岳

写真提供：大隅森林管理所

○大箆柄岳のブナ林

ブナは北方系の植物で、日本の温帯を代表する植物で、大箆柄岳のブナ林はその南限となっており、植生範囲は大箆柄岳のほか小箆柄岳、御岳、平岳、横岳にも僅かながら分布しています。

本来、ブナは高木になるのですが、ここのブナには成長限界が見られます。さらに、種子の発生量が少なく、幼木を見かけることも少ない状況です。加えて昨今の温暖化により今後もこの生態が維持されるかには不安があります。

○御岳のミズナラ林

ミズナラは御岳にだけ見られ、北東又は西南の海拔900mから山頂にかけて植生しており、ブナとともに南限植生地に育った温帯植物の代表樹種の一つです。

本来、高木となるミズナラですが、南限という不利な環境（本来より低温な地域に生息する）から8m未満になっていますが、種子放出は豊かで幼木も育っているようです。

○人類の宝とよばれた樹林

1974（昭和49）年5月16日、国際植生学会日本大会の折に、世界各国の植物学者54人と鹿児島大学田川日出夫教授ら日本人学者23人がバスで高隈山のイス原生林を視察調査し、「世界の貴重な宝」だとして原生林の保護を訴えました。この模様は全国に報道され、「高隈山の照葉樹林」の名を全国に広めました。

高隈山の7つの峰

高隈山は1,000mを超す7つの峰が連なっています。

- ①御岳（おんたけ）
- ②平岳（ひらだけ）
- ③横岳（よこだけ）
- ④二子岳（ふたごだけ）
- ⑤妻岳（つまだけ）
- ⑥大箆柄岳（おおのがらだけ）
- ⑦小箆柄岳（このがらだけ）

この7つのうち最高峰はどれでしょう？

御岳頂上から見た6つの峰



答え

- ⑥大箆柄岳（1,237m）：最高峰
- ①御岳（1,182m）
- ⑦小箆柄岳（1,149m）
- ⑤妻岳（1,147m）
- ④二子岳（1,107m）
- ②平岳（1,102m）
- ③横岳（1,094m）



高隈山



ブナの実



ツクシアケボノツツジ



スズタケ



ホソバシュロソウ



シコクママコナ

とまのがわ

苫野川水系のカワゴロモ

カワゴロモは、石の表面を覆う衣のような植物で、苔類や藻類によく似た形状をしています。カワゴロモは花を咲かせるので、サクラと同じ被子植物です。緑色の衣は根が変形したものと考えられており、根の上に花ができます。退化した葉はありますが、茎に相当する軸状の器官はありません。葉は根の内部からつくられています。

このように、独特な形状をしているカワゴロモは、南九州にのみ生育する植物で、本県のレッドデータブック（RDB）では準絶滅危惧に選定されています。

肝属川水系では、苫野川でのみ確認されていて、肝属川では1954（昭和29）年の調査によって1950年頃までに絶滅したものとされていたが、1990（平成2）年の調査によって、上流の苫野川に生育しているのが確認されています。

017

鹿屋市の植物

鹿屋市の植物は、本市の中部から北部へ広がる高隈山系に広く自生しており、高隈山の植生を知ることで、本市の植物について理解できます。

高隈山地は山々が連なっており、北部の山々に比べて比較的暖かく、雨量は北部と同様に多いため、植物がよく育成し種類も豊富です。ここでは、本市の植物の中でも、1,300種以上の植物が生息するとされている高隈山の自然植物について紹介します。

まず、高隈山の植生を標高ごとにみていきます。

低標高域にはスダジイやタブノキ、イスノキ、ウラジログシ、ヤブツバキ、アオキなどが分布します、中標高域にはサカキ、シキミ、サザンカなど常緑広葉樹が広く分布しています。

1,000m前後の比較的高標高域にはブナ（南限）やカナクギノキ、ナツツバキなどの落葉広葉樹が、イヌガシやアセビなどの常緑広葉樹と混生しています。

場所ごとにみていくと、大笹柄岳や御岳山頂付近ではリョウブやマンサクなどの低木林が見られます。また、大笹柄岳～小笹柄岳の稜線沿いにはスズタケが密生し、林床に実生や草本種はあまり見られません。御岳の北東尾根では、オオマルバノテンニンソウが林床に群落を形成しています。高隈山を縦断する九州自然歩道では、希少種であるホソバシュロソウ（本県レッドデータブック（RDB）：絶滅危惧 類）、シコクママ



タカクマミツバツツジ



タカクマヒキオコシ



タカクマホトトギス



カワゴロモ



高須川の様子

写真提供：鹿児島県立博物館
写真提供：野の花ひとりごと ステラ

コナ（本県RDB：絶滅危惧 類）、本県では大隅半島でのみ見られるツクシアケボノツツジなどが見られます。他にも、タカクマミツバツツジ（本県RDB：絶滅危惧 類）、タカクマホトトギス（本県RDB：絶滅危惧 類）、タカクマヒキオコシ（本県RDB：準絶滅危惧）などの『高隈』の名を冠した固有種も見られます。

地質学的な視点で高隈山をみると、今から約1万年前に氷河期が大隅半島に達した時代に、それまで日本本土に分布していたブナなどの落葉広葉樹が大隅半島まで南進してきたため、ブナやミズナラなどの南限種が多く見られます。また1万年もの間、他の地域と隔離された状態にあるため、生息する植物は遺伝的な多様性を保存する上でも重要な地域となっています。

このように、高隈山は多くの貴重な植物が生息し、落葉広葉樹の南限になっていたりと、遺伝的にも重要になっていたり、学術的に非常に重要な自然を有しており、まさに、植物の宝庫といえます。

このほか、鹿屋市南部にある吾平地域には、^{とまの} 吾野川のカワゴロモ（鹿屋市指定文化財）やヤッコソウ（神野地域）などが自生しています。ヤッコソウは、ヤッコソウ科の1年生の寄生植物で、シイ属の植物の根に寄生します。10月から11月に、高さ7cmの^{かけい}花茎を出します。この形が江戸時代の「奴」の姿に似ていることから、この名前がついています。

たかすがわ

高須川水系のカワゴロモ

鹿屋市では吾野川だけではなく、高須川でもカワゴロモの生育が確認されています。高須川におけるカワゴロモの分布は広範囲に及び、飛び石のように数十mから時には数百mも離れて点在しています。生育環境については、水深0.1～0.5mにある凝灰岩の表面に付着していることが多く、平均0.64m/sの水流の中で生育しています。

高須川は河積が狭小であり、河道の蛇行が甚だしく、流下能力も不足しており、幾度となく浸水被害が発生しているため、現在も河川を改修中です。カワゴロモが生育している河川環境を保全・継承するため、関係機関や地域住民との連携を図り、河川の多様性を意識しつつ、治水・利水・環境に関する施策を行っています。吾野川・高須川とともに、今後もカワゴロモが生育できる環境を保っていくことが大切です。



タカクマホトトギス



タカクマヒキオトシ



タカクマミツバツツジ



リンドウ



ツチトリモチ



オオマルパノテンニンソウ

おおが 串良の大賀ハス



大賀ハスは、2000年以上昔のハスの実から発芽・開花させたもので古代ハスとも呼ばれています。1951（昭和26）年、大賀一郎博士の手によって1粒の発芽、そして開花に成功しました。大賀ハスは2000年以上自然交配されていないことが植物学的にも大変価値があります。串良地区で株分けによって大切に育てられています。（串良総合支所の駐車場前で見られます）

018

鹿屋市の野草

鹿屋市の野草は、地形的、気候的にみて植生が非常に豊かであり、昔から多くの人々が植物研究に訪れ、植物名にこの地方名を冠したものが多くも特徴です。それは、以下のとおり5つのグループに分けることが出来ます。

大隅に特産する種及び県下唯一の産地である植物大隅半島はカシヤシイの常緑広葉樹で特徴づけられる暖温帯常緑広葉樹林であり、地形、地質、地史また気候要因によって分化したと考えられる特産種も多くみられます。

キュウシュウイノデ、クワノハエノキ、ミトガンピ、タカクマミツバツツジ、ヒロハドウダンツツジ、ヘツカコナスビ、タカクマムラサキ、オカウツボ、サイゴクガマズミ、タカクマソウ、ウラジロノギク、タカクマザサ等

西南日本の太平洋型要素

近畿地方南部や中国地方の瀬戸内海斜面および四国との共通種です。

イヨクジャク、オオチャルメルソウ、ヒメシャラ等 北方系要素

サハリン、千島から南下した高山や亜寒帯系の要素で北海道や本州を経て南下したと考えられている種です。

イヌガンソク、ハルニレ、コウモリカズラ等



アケビ（つるを薬用）



サルトリイバラ（根茎を薬用）



イタドリ（根茎を薬用）



ジュズダマ（種子や根を薬用）



ヒガンバナ（鱗茎を薬用）

写真提供：鹿児島県立博物館

大陸系要素

中国北部、東北部、朝鮮半島と共通に分布し、中部内陸や瀬戸内海などの大陸的気候を示す地域を中心に分布するものです。

イヌガヤ、サンショウソウ、ツメレンゲ等

南方系要素

南西諸島、台湾、南中国やマレーシアの南方系要素に富み、大隅を北限とする種も多いようです。

ヘゴ、ヤッコソウ、カワゴロモ、ソテツ等

○漢方薬としての野草

鹿児島県薬剤師会の現地調査によると、鹿屋市では高隈溪谷において19種の薬草を確認しています。

[高隈溪谷（1989（平成元）年9月）]

ウツボグサ・キンミズヒキ・イタドリ・ゲンノショウコ・イワタバコ・ウラジロガシ・ジュズダマ・ヨモギ・オナモミ・アカネ・ヒガンバナ・イノコズチ・ヘクソカズラ・クズ・ムベ・サルトリイバラ・アケビ・ピナンカズラ・アキグミ

野草の漢方薬としての使用は危険を伴うので、信頼のおける文献での確認や専門家の指導の下で採取等を行ってください。

水生植物



○ショウブ

玉泉寺児童公園などに、見られます。玉泉寺公園内にはツツジ、フジ、ショウブなど、四季折々の花が美しく咲いています。



○ヒメガマ

高さ1.5mほどで休耕田などに群生する大型の多年草。葉は幅1cmほどで約2cmあるガマより細かたい。直径15mmほどの円柱状の雄花群と、それより上につく長さ15cmほどの雌花群との間には、5cmくらい緑色の花序軸が見えます。



写真提供：
オオタカ保護基金

クマタカ
(絶滅危惧 類)



写真提供：
鹿児島県立博物館

ミサゴ (準絶滅危惧)

カモの種類

日本には約50種のカモ科に属する野鳥が生息しています。カモ科には椋鳩十氏の童話「大造じいさんとガン」に登場するガンやハクチョウも含まれ、日本の湖や川などで多く見られる野鳥の仲間です。鹿屋市でも大隅湖や各河川でマガモやカルガモ、オシドリなど多くのカモ科の野鳥を見ることができます。

カモといえば、茶色の羽毛で「地味な鳥」というイメージですが、オスだけ季節によって装いが変化します。夏から秋の羽衣を「非生殖羽」(= エクリプス) といい、秋から冬の羽衣を「生殖羽」と呼びます。オスは繁殖期になると、メスへのアピールのために羽毛が派手になります。



マガモの生殖羽



マガモの非生殖羽

019

高隈山の野鳥や動物

鹿屋市に生息する野鳥や動物は、高隈山に主に生息しており、全て網羅できることから、高隈山林野庁により、森林生物遺伝資源保存林に制定され、多くの野鳥や動物が生息しています。

野鳥に関しては、80種類以上生息しているといわれていますが、26科43種が鳥類調査によって報告されています。

これらの野鳥は、自然環境によって生息域が異なり、山間部では鹿児島県のレッドデータブックにおいて絶滅危惧 類に選定されているクマタカや、準絶滅危惧に選定されているコシジロヤマドリなどの希少なことから、ウグイスやシジュウカラ、メジロ、キジバト、ヒヨドリ、アマツバメなどの野鳥が観察できます。

大隅湖周辺では、準絶滅危惧に選定されているミサゴをはじめ、カワセミ、ヤマセミ、オシドリ、カイツブリ、アオサギ、オオバンなどの野鳥が観察できます。

特定外来生物に指定されているソウシチョウも確認されており、高隈山の生態系に影響を与えることが懸念されています。

動物に関しては、絶滅危惧 類に選定されているヤマネや絶滅危惧 類に選定されているスミスネズミなどの希少なことから、ニホンザルやキュウシュウノウ



コガタブチサンショウウオ
(準絶滅危惧)



カワムツ

< 特定外来生物 >



ソウシチョウ

写真提供：鹿児島県立博物館



大隅半島のヤマネ (メス)



ヤマネの冬眠姿勢

写真提供：船越公威 (鹿児島国際大学)

サギ、ホンドテン、ニホンイノシシ、キュウシュウジカ、ニホンアナグマ、ホンドタヌキなどが確認されています。

また、浅く水が溜まっている様な沢には絶滅危惧類に選定されているコガタブチサンショウウオなどの両生類が生息していたり、肝属川の上流域から中流域の瀬にオイカワ、流れがよどみ深くなった場所にはカワムツ、水際の緩流部にはメダカなどの魚類が生息しています。

大隅湖では、特定外来生物に指定されているオオクチバスが生息しており、県内外から多くの釣り人が訪れているものの、肉食で魚類、両生類などを多岐にわたり捕食するため、生態系への影響が懸念されています。



アナグマ



イノシシ



サル



タヌキ

高隈山で確認される動物

水鳥とは

海洋、河川、湖沼などの水域とその水辺を主な生活空間とする鳥の一般的な呼称です。

ラムサール条約(1)では、「生態学上湿地に依存している鳥類」と定義されており、主に湿地や干潟などの水辺に生息する鳥類を指して使われるようです。

対象となる鳥類はアビ目、カイツブリ目、ペリカン目、コウノトリ目、カモ目、ツル目、クイナ目、チドリ目です。中でも渡り性の水鳥は個体数の減少が報告されており、原因として越冬地・繁殖地の減少や環境悪化があげられています。

- 1 特に水鳥の生息地として国際的に重要な湿地及びそこに生息・生育する動植物の保全を促し、湿地の適正な利用を進めることを目的として、1971(昭和46)年2月2日、イランのラムサールで開催された「湿地及び水鳥の保全のための国際会議」において採択されました。



戦車橋近くの公園



左はカワムツ、右はギンブナ。きもつき川水辺館では、肝属川に生息する生き物が見学できます。

湧水について

鹿屋市内は、笠野原台地を抱え不毛の台地と古来から言われてきましたが、実は、その台地はシラスひもこでできているため、台地の麓では、沢山の湧水(湧き水)ポイントがあります。特に趣のある場所が高隈地域にある「観音淵」です。シラスをドーム状にくりぬいたような洞窟の奥と両脇からこんこんと湧き水がでてきており、地域の方々も、飲料水としても利用されるほどきれいな水が湧き出しています。

また、串良町細山田の戦車橋近くでは、湧水が出る場所に、公園が整備され乳幼児や園児など小さい子供たちの水遊び場にもなっています。吾平町神野地区や吾平山上陵脇からも水が湧き出しており本市域はとても豊富で、きれいな水があります。

020

川や海の生き物

○川の生き物

私たちの住む鹿屋市で一番大きな川は、一級河川の支流が流れ込む肝属川です。ここには約50種類の魚が住んでいます。私たちの近くの川にどんな生き物がいるか紹介していきます。

まずは、カワムツ(コイ目、コイ科)。上・中流に生息し、昆虫を好んで食べます。目の後ろから尾ヒレにかけて黒い帯のような線が特徴です。次にギンブナ(コイ目、コイ科)。中・下流に生息しています。よくコイと間違われますが、コイと違ってヒゲはありません。オイカワ(コイ目、コイ科)。上・中・下流のすべてで見ることができ、肝属川でいちばん多く見られる魚です。産卵時期には、オスは体が赤や青の美しい色になります。

多種多様な生き物が住んでいる肝属川ですが、流れる水は残念ながらきれいとは言えません。よごれの原因は、家庭からの雑排水や、農畜産等といわれています。鹿屋市では、肝属川の水質浄化活動の推進に取り組んでいます。みんなで協力し、肝属川をきれいな川にしていましょ。

○海の生き物

鹿屋市の海の魚が最も良く釣れる場所として知られ



産卵場所が満潮時、海に浸かる可能性のある場所であったため、ウミガメ保護施設カメのゆりかごへ移設します。

浜田海水浴場と高須海水浴場のウミガメ

鹿屋市は、ウミガメが上陸・産卵する全国でも有数の海岸を持っています。ウミガメにはアカウミガメ・アオウミガメなどがいますが、鹿屋市への上陸が確認されているのはアカウミガメです。アカウミガメは雑食性でクラゲやイカ、カニなどを食べて生活しています。

鹿児島県のレッドデータブックで絶滅危惧 類に指定されており、その保護が求められる動物種で、県はウミガメを守るために「鹿児島県ウミガメ保護条例」を制定し、県内全域、無断でウミガメを捕獲したり、卵を採取したりすることを禁止しています。

本市では、地元住民、ウミガメ保護監視員と協働で、アカウミガメの保護活動を毎年で実施しています。ウミガメは非常にデリケートな生き物で、上陸する海岸が汚れていたりすると産卵することが出来ません。ウミガメが安心して産卵できるように、ご協力をお願いします。

るのは、船間町の海岸部や天神町の天神鼻・ニツ島そして、古江漁港周辺です。様々な魚が釣れるので、大勢の釣り人で休日は賑わっています。また、家族づれにおすすめな釣り場は、天神鼻周辺です。どこで何が捕れるか主な魚を紹介します。船間町の海岸部や天神町の天神鼻・ニツ島では、四季を通してイシダイやミズイカ・アラカブが釣れます。また、古江漁港周辺では、年間を通してチヌが狙えます。

○鹿屋市の主な水産物

鹿屋市は豊かな漁場である鹿児島湾（錦江湾）に面しており、小型底曳網漁業の漁船漁業も行われていますが、カンパチなどの養殖が盛んで、水揚量全体の9割以上を占めています。令和3年度に鹿屋市漁協に水揚された上位5魚種ですが、1位から4位までを養殖魚が占めています。このほかには、ヒメアマエビ、シマアジなどが水揚げされています。

令和3年度鹿屋市漁協水揚量

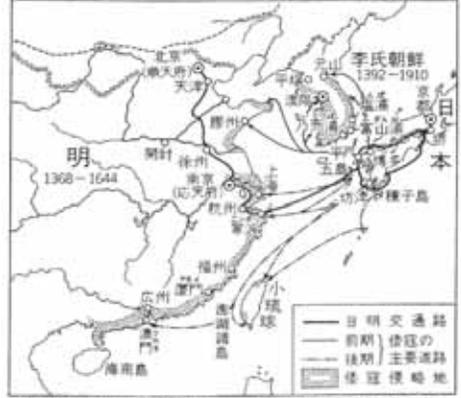
順位	種類	水揚量 (t)
1	カンパチ	3,636
2	ヒラマサ	512
3	ブリ	351
4	ブリヒラ	31
5	ヒジキ	18

鹿児島城下の湊の賑わい



(「鹿児島城下絵巻(部分)」鹿児島市立美術館蔵)

14世紀頃の東アジア



「歴史46 鹿児島県の歴史」山川出版社 1999年より

古代の交通

鹿屋市域の古代の交通の主流は、海や川を使った海上交通が主でした。古くから海上交易によって奄美諸島や沖縄・中国・朝鮮半島と密接に結ばれ、それを示す地名や遺物が近隣の町や本市に残っています。

地名

東串良町とうじんの唐仁町

鹿屋市高須町の唐仁町

遺物

串良町岡崎18号古墳出土の鉄錠

肝付町塚崎古墳群出土の貝輪かいわなど

中世になると応仁の乱後に遣明船が大内氏の領域外を通るようになったため、日明貿易も盛んに行われるようになりました。この頃には、倭寇わこうも古江や根占、波見、柏原の港を拠点に活発な活動を始めます。倭寇は、中国人集団だったと言われています。

021

鹿屋市の交通の歴史

○藩政時代の交通

近世の鹿児島藩では外城制度による行政区分がなされ、城下113（数字は時代によって若干異なる）の外城（のちに郷と改称）からなっていました。郷には藩直轄地と有力家臣の一所地の私領じとうがあり、地頭（鎌倉時代の役職とは別で、鹿児島藩特有の直轄地を治める役人の名称）や領主等が政務をとるかりや仮屋が行政の中心として置かれ、多くはその周辺に郷土むちとが集住する麓が形成され、その近くに野町や浦町が形成されそれらを繋ぐように道（街道）が造られました。鹿屋市地域では、大隅の主要な6街道の内、4街道が通っていました。

○4つの街道とは

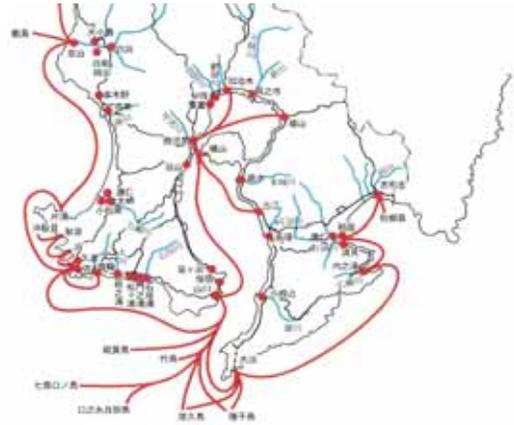
- ・ 鹿屋筋
福山郷-牛根郷-垂水郷-新城郷-花岡郷-鹿屋郷
- ・ 佐多筋
花岡郷-大始良郷-大根占郷-小根占郷-佐多郷
- ・ 内之浦街道
鹿屋郷-大始良郷-始良（吾平）郷-高山郷-内之浦郷
- ・ 志布志筋
鹿屋郷-串良郷-大崎郷-志布志郷

近世の街道は、郷支配の中心となる仮屋やその周辺

街道と麓・町場・湊等の関係

郡	麓	野町	湊町	主な湊・湊	城壁と山麓の関係	麓と町場の関係
海山郡	○	—	○	海山湊	—	隣接
牛久保郡	○	—	—	牛久保(入船)湊	—	—
豊水郡	○	—	○	豊水湊	当初は豊水城跡内	隣接
新城郡	○	—	—	新(船尾)湊	—	—
古江郡	○	○	—	古江湊	木谷城跡	古江口内
鹿屋郡	○	○	○	高須湊	鹿屋(高須)城跡	野町と隣接
大始良郡	○	—	—	—	大始良城跡	—
松島郡	○	○	—	—	山古城跡	隣接
大板古郡	○	—	—	—	—	—
串良郡	○	—	○	板古湊	—	隣接
佐多郡	○	—	—	伊波敷湊・大泊湊	佐多(伊波敷)城跡	—
田代郡	○	○	—	—	田代(鹿尾)城跡	隣接
内之浦郡	○	—	○	内之浦湊	—	隣接
高山郡	○	○	—	波見湊	行張城跡	野町と隣接
串良郡	○	○	○	相原湊・唐仁湊	串良(龍島)城跡	野町と隣接
大板古郡	○	○	—	—	大板古城跡	隣接
志布志郡	○	○	—	志布志湊	志布志(内)城跡	隣接
松山郡	○	○	—	—	松山城跡	隣接(豊野村)
末吉郡	○	○	—	—	当初は末吉城跡内	隣接

近世の湊と航路、町場(浦町)の分布状況図



に形成された武士の集住地である麓、町場(野町・浦町)と海上交通の拠点である湊を結んでいます。

花岡郷(花岡町)は、花岡島津家の私領で領主は旧鶴羽小学校に仮屋を置き周囲に麓が形成され、海岸部の古江浦から鹿児島城下と肝属地域を結ぶ主要航路とされていました。古江浦町付近に野町もでき、鹿屋筋が通っていました。

鹿屋郷は、鹿児島藩直轄地で、地頭仮屋は鹿屋城(現在の城山公園)近く(旧市役所跡リナシティかのや付近)に置かれ、古前城や打馬地域に麓が形成され仮屋の南側に野町が形成されました。海岸部の高須川河口に飛地があり、浦町がありました。麓・野町に接して志布志筋があり、海岸部の浦町を佐多筋が通っていました。

大始良郷・始良(吾平)郷も直轄地で大始良城跡の北側に、吾平は、吾平小学校下の吾平総合支所付近に麓が形成され、これに隣接するように内之浦街道が通っていました。

串良郷もまた直轄地で、仮屋は現在の串良小学校と串良総合支所付近に置かれ麓が周辺に形成されました。また、野町と浦町は、現在の東串良町の豊栄野町、柏原浦町・唐仁浦町にあたり、これらを通して、志布志筋やその他の街道が通っています。

ろくさいいち
にぎやかだった六斉市

鹿屋郷の野町で立つ六斉市は鹿児島・川内とともに藩政時代の三市と言われ賑わいを見せていました。現在は、かつての六斉市に代わって毎週土曜日に朝市がリナシティかのや駐車場で行われ、近隣住民等が多く訪れています。

六斉市とは、中世から近世にかけて、1か月に6回開かれた定期市。



現在の土曜朝市



大隅縦貫道串良鹿屋道路

東九州自動車道（鹿屋串良JCT）



大隅線の整備そして廃止

大隅半島の東西沿岸部を結ぶ鉄道の建設は、1915（大正4）年南隅軽便鉄道が高須～鹿屋間を開業したのが始まりです。翌年には大隅鉄道と社名を変更し、大正時代には路線の東側は古江、西側は高須まで延伸されました。その後、1935（昭和10）年に国に買収され串良～高須間を古江線とし、同年に志布志～東串良間の古江東線が延伸開業し、古江線は古江西線と改称され、翌年には東串良～串良間が延伸開業、その後、志布志～古江間が1本の鉄路となり古江東西線を統合して古江線となりました。

また、古江から国分方面への開業により、路線名を大隅線としました。

1915（大正4）年7月14日に開業し、1972（昭和47）年9月9日に路線総延長（98.3km）を全通させ、駅数は33駅ありましたが、車社会の到来で鉄道離れが進み、15年後の1987（昭和62）年3月14日全線廃止となりました。

022

交通と運輸

鹿屋市の公共交通は、路線バス、鹿児島空港行き空港連絡バス、一般乗用タクシー、コミュニティ交通（コミュニティバス（くるりんバス）、かのや市乗合タクシー）です。

路線バスの運行は、中心市街地にある鹿屋バス停留所を交通結節点に、大隅半島の各市町の行政施設や商業施設・医療福祉施設等を結び、放射状に大隅半島全域へネットワークを形成しています。

また、鹿児島市のマリポートかごしまに寄港した外国のクルーズ船の乗客が、小型高速船で鹿屋港を訪れるなど、鹿屋港を活用した取組も始まっています。

一方、昭和40年代初めに要望活動が始まった「東九州自動車道」は、1973（昭和48）年から整備が始まりました。そして、東九州自動車道「鹿屋串良～曾於弥五郎間」と、その道路とつながる高規格道路大隅縦貫道「鹿屋串良～笠之原間」が2014（平成26）年12月21日に開通、続いて、東九州自動車道「鹿屋串良～志布志間」が2021（令和3）年7月17日に開通し、鹿屋市から九州各地への移動時間が短縮されました。これらのことにより、九州各地と大隅地域が結ばれ、交通混雑の緩和、輸送時間の短縮・コスト削減が図られ、畜産業の更なる活性化や大規模災害時の避難道等の効果が期待されています。

コミュニティバス（くるりんバス）



大隅半島直行バス



○東九州自動車道と大隅縦貫道

「東九州自動車道」は、北九州市を起点に大分県、宮崎県を経て、鹿児島市に至る延長約436kmの高速自動車国道です。本路線は、九州縦貫自動車道及び九州横断自動車道とともに九州の高速道路ネットワークを形成し、東九州地域の産業・経済・文化の振興と均衡ある発展を図り、また、交通混雑の緩和、輸送時間の短縮など沿線都市の生活向上・活性化に資するために計画されたものです。2021（令和3）年7月には、鹿屋串良JCT～志布志IC間が開通し、鹿屋市内における整備は完了しました。

一方、「大隅縦貫道」は、東九州自動車道鹿屋串良JCTから鹿屋市、肝付町、錦江町を経て南大隅町に至る延長約53kmの高規格道路です。東九州自動車道と一体となって大隅地域の広域交通ネットワークの形成を図る重要な路線です。6次産業の推進、輸送コストの縮減や飼料の安定供給による農林水産業の活性化、企業誘致や新たな雇用創出、観光を軸とした地域活性化、第2次救急医療施設への搬送時間が短縮され救命率の向上が図られます。また、異常気象による豪雨災害などに対応する安全・安心な道路の確保、国道269号や国道448号の災害時の代替え道路として防災のダブルネットワークが図られます。

市民の移動手段

鹿屋市の路線バスは、1930（昭和5）年から運行が開始されています。1987（昭和62）年に鉄道が廃止されて以降は、路線バスや自動車が移動手段の中心となりました。「鹿屋バス停」を中心に、大隅各市町や市内各方面へ路線バスが運行され、人々の移動を支えています。

また、鹿屋市が運行を委託しているコミュニティバス（くるりんバス）は、2007（平成19）年9月に運行を開始して以降、エリアを広げ、鹿屋、輝北、串良、吾平地区で16路線が運行されています。

この他、鹿児島中央駅と鹿屋を結ぶ直行バスは、大隅地域の利便性の向上や交流人口の増加を促進するため、2009（平成21）年12月から運行されています。

バス以外にも、かのや市乗合タクシーや社会福祉協議会がコーディネートするドライブサロンなど様々な移動手段があります。

霧島ヶ丘公園



子供広場

霧島ヶ丘公園



コスモスと夕日

公園の話

公園には小規模なものから大規模なものまであり、小中学生の頃友達と遊んだ公園、遠足などで大勢で行った公園、大人になってから行くようになった公園など、皆さんそれぞれ思い出があると思います。

ここで、公園の種類等について紹介します。

公園には法律で定められた都市公園のほか、市の条例で定められた市立公園や健康ふれあい運動広場、農村運動広場などがあります。

また、都市公園の中でも霧島ヶ丘公園は総合公園（休息、鑑賞、散歩、遊戯、運動等総合的な利用を目的とする）、平和公園は運動公園（主として運動することを目的とする公園）など、その機能・目的により区別されています。

このように、公園には様々な種類があり、皆さんに一番なじみのある公共施設といえるのではないのでしょうか。

023

鹿屋市の公園

皆さんが、遊んだり、運動したり、休憩したりするときに使える公園が、鹿屋市には全部で119カ所あります。（2022（令和4）年4月1日現在）

ここでは、代表的な公園を紹介していきます。

○霧島ヶ丘公園

1986（昭和61）年4月に開園した霧島ヶ丘公園は、鹿屋市街地から南に約7kmのところのところに位置し、標高が約160mで、公園全体がなだらかな丘陵地となっています。ひまわりやコスモス、チューリップなど、四季折々の花が楽しめるほか、展望台からは、鹿児島湾や桜島、開聞岳など鹿児島の代表的な自然が眺望できる絶好のロケーションが魅力です。

また、大型遊具やゴーカートなど子供向けの施設から、キャンプ場やサイクリングコースなど、大人もアクティブに楽しめる施設まで幅広く充実しているほか、黒豚グルメやテイクアウトができる飲食店もあります。

公園内の「かのやばら園」は、春（4月下旬～6月中旬）と秋（10月下旬～11月）に見頃を迎え、例年この時期に「かのやばら祭り」が開催され、様々なイベントが行われます。[項目086参照]

平和公園



串良平和アリーナ

鹿屋海浜公園（浜田海水浴場）



海岸と松林

○平和公園、平和記念公園、平和桜並木公園

かつて海軍航空隊串良基地があった場所が今では公園になっています。この公園の東西1,300m、南北1,200mの直線道路は、1945（昭和20）年3月1日から終戦までの半年間に多くの若者が飛び立った滑走路でした。現在は両脇に桜の木が植えられ、3月末から4月初旬にかけて桜の名所となっています。

平和記念公園内には、串良基地から出撃し命を落とした特別攻撃隊363名、一般攻撃隊210名の方々の御霊を祀る慰霊塔が建てられています。また、公園周辺には串良平和アリーナなどのスポーツ施設が設置されています。

○鹿屋海浜公園

この公園は市街地の西南に位置し、鹿児島湾に面した公園です。海岸沿いは、樹齢100年を越える松林が続く白砂青松はくしゃせいしょうの砂浜です。また、鹿児島湾を隔てて開聞岳や桜島も一望できます。海辺へは木製スロープが松林の間を縫うように設置しており車椅子でも行けます。

夏場は夏季観光施設として松の木陰でゆったりと休憩できて、遠浅の海岸で安心して泳ぐことのできる海水浴場やキャンプ場として開放され県内外から多くの利用者で賑わっています。また、海岸は全国でも有数のアカウミガメの産卵地として知られています。

城山公園と北田の湧水

この公園は、中心市街地に位置する鹿屋城（亀鶴城）跡の公園です。ここはかつて鹿屋氏いじゅういんだむねや伊集院忠棟しまづさぎのみのかみひさのぶ、島津相模守久信らの居城でした。山城であった城山も今は開発が進み空堀を残すのみですが、その歴史的な価値は高いものです。山頂城跡の展望台からは市街地を一望のもとに見渡せます。公園の基底からは今も豊富な地下水が湧き出しています。かつてはこの湧水を利用したプールが市民に親しまれていましたが、現在は日本庭園がつけられ、市民の憩いの場となっています。

また、山頂公園一角には「鹿屋小唄」かのやこうたを作った野口雨情のぐち（童謡）「シャボン玉」作詞）の詩碑が建てられています。

[項目067参照]



鹿児島黒牛



黒豚

鹿屋市のブランド鶏

鹿屋市では、通常の肉用鶏（ブロイラー）の他に、シャボーン鶏やさつま地鶏、黒さつま鶏、日本キジといったブランド鶏が生産されています。

ブランド鶏は、食感や味わいなどの特徴をそれぞれ持っており、普段食されている鶏肉とは異なった感覚を楽しむことができます。

一方で、生産数も少数であり、鹿屋市内でも限られた農家のもとでしか生産されていません。

このような希少価値の高いブランド鶏は、一部の飲食店や農家が運営している販売サイト等で販売されています。鹿屋市のブランド鶏を、ぜひ味わってみてはいかがでしょうか。

024

鹿屋市の畜産

鹿屋市の畜産業は、温暖な気候と豊富な自然、広大な大地を活かしながら発展してきました。

肉用牛・乳用牛・養豚においては、鹿児島県で1位の飼養頭数を誇っており（2021（令和3）年2月現在）、県内有数の畜産地帯となっています。また、全国市町村農業産出額ランキングにおいて、第9位2019（令和元）年に位置する本市の農業産出額のうち、約75%を占めるなど、基幹産業として鹿屋市を支えています。

○肉用牛

鹿屋市の肉用牛経営は、畜産業が生み出す農業産出額のうち、約半分の割合を占めるなど、本市畜産業の中心的な役割を果たしています。また、肉用牛の農業産出額では、全国第2位2019（令和元）年の数字を残しており、全国トップクラスの肉用牛産地となっています。

さらに、5年に1度開催され「和牛のオリンピック」とも称される「全国和牛能力共進会（コラム参照）」においても、鹿児島県代表として、本市から多く出品され、活躍をしています。



黒さつま鶏



乳用牛（ホルスタイン）

このように、経営規模を広げ、実績を積み重ねてきた鹿屋市肉用牛経営は、今後更に知名度を広げ「和牛のふる里かのや」のブランド確立に向けて進み続けています。



○養豚

鹿屋市は肉用牛と同じくらい養豚も盛んな地域であり、鹿児島県内でもトップクラスの養豚地帯です。

なかでも品種や与えるエサなど厳密な基準で育てられ、厳選された豚肉である「かごしま黒豚」を生産している養豚農家も多数あり、「かごしま黒豚」生産の中心地になっています。

また、鹿屋市には地元のブランド豚が多く存在し、中でも、希少豚であるサドルバック種と在来種を交配させた「幸福豚」は、赤身の多さと柔らかさを併せ持っています。一方、輝北町で育てられたごく一部の白豚だけに認められる「輝北スターポーク」は、肉に旨みと甘みが凝縮され、風味があり、しゃぶしゃぶにしてもアクが出にくいなど特徴があります。

このように、鹿屋市では、養豚農家の高い技術と愛情が込められ、高品質な豚肉が生産されています。

「全国和牛能力共進会」とは

「全国和牛能力共進会」（通称：和牛オリンピック）は、1966（昭和41）年に岡山県で第1回大会が開催されました。日本全国から優秀な和牛を集め、改良の成果や優秀性を競う大会です。審査は、種牛の体型の良さなどを審査する「種牛の部」と肉質を審査する「肉牛の部」があります。この大会で優秀な成績を収めることで、和牛ブランドの向上に大きくつながることから、和牛関係者にとって最も重要な大会と位置づけられています。

1970（昭和45）年の第2回大会は鹿児島県で開催されています。2017（平成29）年に行われた第11回大会（開催地：宮崎県）では、鹿児島県が総合優勝を果たしており、鹿屋市からも7頭出品され、日本一に大きく貢献しました。そして、2022（令和4）年の第12回大会は、鹿児島県が全国初となる2回目の開催地となりました。



機械化されたばれいしょの収穫作業



農業用ドローンの活用による省力化

米の品種

鹿屋市で栽培される米の品種を紹介します。

3～4月に田植えをして、7～8月に収穫する早期米は「コシヒカリ」、「イクヒカリ」、「なつほのか」等があります。

6月に田植えをして10月に収穫する普通期米は「ヒノヒカリ」、「あきほなみ」等があります。

飼料用米（WCS）は「タッチアオバ」等が作られており、5月に田植えをして、9月に収穫します。

各品種は、田植えの時期をずらしたり、地域ごとに同品種を作るなどして交雑が発生しないように配慮されています。

米にまつわる伝承

江戸時代に薩摩藩が編纂した三国名勝図絵には、古代の神話にまつわる史跡として、吾平町の水田地帯にある飴屋敷が紹介されています。

また、奈良時代に編纂された大隅国風土記では、大隅の風習として、米を口噛みして醸す、口噛みの酒が記載されています。

025

鹿屋市の農業

鹿屋市では土地利用型の農業が盛んで、さつまいも、茶、ごぼう、ブロッコリー、キャベツ、だいこん、にんじん、水稻等が栽培されています。ピーマン、きゅうりは、県のブランド指定を受け市場から高い評価を受けています。ここでは、その一部を紹介していきます。

○水田農業

鹿屋市の水田は、シラス台地の間を流れる大小の河川の水系に沿って存在し、山間部には谷田や細山田等の地名を有する小規模な水田地域があります。肝属川とその支流である串良川や始良川の下流域にある肝属平野は、県内でも有数の水田地帯です。

肝属平野では、江戸時代から、堰や水路等のかんがい施設が整備され、明治以降の耕地整理や、ほ場整備事業による大区画化により、効率的な水田営農が行われています。

現在米は、鹿屋市の農業産出額で「さつまいも」に次ぐ第2位となっています。食生活の多様化や人口減により、主食用米としての需要が減少しているため、全国有数の規模を誇る畜産業と連携した飼料用米（WCS）や、お菓子や酒類の原料としての加工用米の作付けにより、水田基盤の維持が図られています。

近年では、スマート農業機器も導入されつつあり、ドローンによる薬剤散布に取り組むなど、一層の省力化が図られています。



ハウス栽培ピーマン
(かごしまブランド)



かのや紅はるか

〇畑作農業

鹿屋市の畑作は南九州特有の地形であるシラス台地のうち、最も広い笠野原台地を中心に行われています。笠野原台地は、戦前まで、水源の確保が困難であることや、土壌の保水力が低いことから、農業経営が安定せず、乾燥に強いさつまいも等の限られた作物しか作られていませんでした。

戦後、食料増産のため、国営笠野原畑地かんがい事業が実施され、高隈ダム等の施設が整備されたことで、水源が確保され、野菜や飼料作物の安定生産が可能となりました。

また、吾平地区や鹿屋市南部を対象地とする肝属中部地域においても、荒瀬ダムの完成により、2018（平成30）年から一部通水が始まっており、更なる営農の展開が期待されています。

現在の鹿屋市の畑作における農業産出額の上位5品目は、「甘藷」、「ばれいしょ」、「ピーマン」、「茶（生葉）」、「にんじん」の順で、桜島の降灰による影響から、いも類・根菜類の栽培が盛んです。施設園芸では、鹿児島県のブランドであるピーマンが吾平、串良地区を中心に栽培されており、近年では、環境制御装置の導入により、収穫高の向上が図られています。

茶も笠野原台地や鹿児島湾沿岸部を中心に栽培されています。

かのや紅はるか

焼酎用やでん粉用が主流の鹿屋市で、青果用さつまいもとして取り組まれているのが、「かのや紅はるか」です。糖度が40度にもなる紅はるかを、鹿屋市が定めた基準で栽培管理したものをブランド認定しています。全国規模の大会で最高賞を受賞する、スイートなさつまいもです。

ふかむ ちゃ 鹿屋深蒸し茶

笠野原台地を中心に多様な茶種が栽培されています。

県茶品評会で11回の産地賞を受賞するほか、国際GAP認証や、有機栽培の取組みも行われています。

また、茶業青年の会を中心に、お茶の入れ方教室や、イベントでの宣伝販売活動も行われています。





古江港（鹿屋港）



高須港

古江、高須の港について

古江港（鹿屋港）は、藩政時代から大隅と薩摩を結ぶ要港として栄えていました。1910（明治43）年から1913（大正2）年にかけて県営の第1期築港工事が始まり、その後、大正から昭和初期にかけて第2期築港工事や村営事業等が行われ港の整備が行われてきました。1936（昭和11）年から15年に鹿屋海軍航空隊の用船港として整備され、旧港を一般使用、新南港を海軍専用とし、1941（昭和16）年の鹿屋市制に伴い鹿屋港に改称しました。戦後、1953（昭和28）年に地方港湾指定を受け、1958（昭和33）年から改修工事を行い、現在に至っています。

高須港は、高須川河口を利用した天然の良港で、藩政時代より漁港・商港として栄え、甘藷をはじめ多くの農産物が港から積み出されました。古い護岸石垣は河口300mほど上流まで続いています。1927（昭和2）年に護岸工事、1932（昭和7）年から翌年にかけて船溜まり工事などの施設整備が行われました。

026

鹿屋市の水産業

鹿屋市の西部は鹿児島湾に面しており、古江港や高須港といった港を中心に海面漁業が行われています。特徴は養殖業が盛んで、その水揚量は海面漁業全体の約99%を占めています。また、内水面漁業では、生産量のほぼ全てをウナギ養殖が占めており全国でも有数の産地となっています。

○カンパチ

鹿屋市で養殖されるカンパチは全国2位の水揚量（平成30年度実績）を誇ります。鹿屋市漁協の「かのやカンパチ」は、鹿児島県認定のブランド魚です。

黒潮が絶えず流れ込むミネラル豊富な鹿児島湾で2年かけて育てられるカンパチは、生餌と配合飼料を併せて与えており、仕上げには抗酸化作用の高いバラのエキスを含む餌を与えることで、臭みが少なく、おいしいカンパチに育てあげられます。鹿屋市漁協ではカンパチの外国輸出の試みも行っており、今後輸出額の増加が期待されます。

○養鰻

内陸部では豊かな湧き水を利用した「大隅産うなぎ」の養殖が盛んで、鹿屋市串良町にある大隅地区養まん漁業協同組合から全国へ出荷されています。



カンパチ



かのやカンパチロウ

○その他の主な水産業

養殖業のほか、豊かな鹿児島湾では、さまざまな漁業が行われておりそこびきあみぎよぎょう小型底曳網漁業では、ヒメアマエビなどのエビ漁、さいかいさいそうぎよぎょう採貝採藻漁業では、ひじき漁などが行われています。

○水産物の加工・消費

2022（令和4）年には鹿児島市漁協に新たな水産物の加工施設が完成し、消費者のさまざまなニーズに対応した加工商品の展開により、かのやカンパチのブランド力向上や、魚食の普及も期待されています。また、鹿児島市漁協に併設された「みなと食堂」では、その日に水揚げされたかのやカンパチのほか、新鮮な水産物を使用したおいしい料理を堪能することができます。



ギョギョギョ カンパチロウの紹介 コーナーですギョ！

鹿児島市のPRキャラクター「かのやカンパチロウ」は、頭は鹿児島市特産品の「かのやカンパチ」、身体はヒトの半魚人です。

トレードマークはビシッと決めた、スーツに革靴、金色のネクタイ。

特技は、かのやカンパチならではの活きのよさを感じさせる、キレッキレのダンス！

かのやカンパチPRソング「COME ON！ PARTY！かのやカンパチ！」に合わせたカンパチダンスで、仲間の「かのやカンパチ」のPRに泳ぎ回っています。

現在は、「鹿児島市PR特命係長」に任命され、鹿児島市の魅力を全国に広く発信するため奮闘中です。



カンパチロウ
世界記録チャ
レンジ動画



カンパチダンス
レクチャー動画



苗木の植付け
(人工造林)



雑草木の除去
(下刈り)

鹿屋市の森林状況

鹿屋市の森林は鹿屋市全体面積44,815haのうち、23,088ha(約52%)を占めています。

その内訳は、国の森林7,251ha(約31%)、県の森林481ha(約2%)、市の森林1,464ha(約6%)、個人の森林13,892ha(約60%)となっています。

また、植林された人工林の森林は13,500haであり、自然豊かでありながら整備された森林が多いのも特徴です。



人工林資源

027

鹿屋市の林業

○森林資源の循環利用を目指して

鹿屋市の森林面積は、鹿屋市全体の51.5%を占めており、森林には国が所有する国有林とそれ以外の民有林があります。(民有林とは、個人所有の私有林、県が所有する県有林、鹿屋市が所有する市有林のことです。)民有林には、スギなどを植林した人工林と自然に木が生えた天然林があり、民有林の人工林割合は60.5%となっています。

森林には水や空気をはぐくみ、災害を防止し、多様な生物を守り育てるなど、様々な役割がありますが、その役割を今後も発揮させるために、間伐などの森林の管理を続けていくことが重要です。

しかし近年、木材の需要が高まり、森林伐採が増えているなか、後継者不在などが原因で、森林所有者の森林への関心が低下し、森林伐採後に人工造林が行われない森林が増えてきたことで、森林の持つ様々な役割が損なわれることが心配されます。

そのようなことから、森林の持つ様々な役割を損なわず、森林整備を低コストで効率的に継続するために、機械導入や林道などの環境整備を行い、また将来に向けた森林資源の確保を図るため、伐採後の再造林の推進に取り組んでいます。



不要木の除去
(除伐)



伐採(間伐、皆伐等)

林野庁 森林整備事業のあらまし(令和4年度版)より

○鹿屋市の特用林産物

鹿屋市の特用林産物は、サカキやヒサカキ、シキミ、などの「^{えだもの}枝物」や「しいたけ」など、地域ごとに特色ある特用林産物が生産されています。

枝物は、主に畑やスギ林内に植樹し生産しています。出荷先は市場や花き卸売業者などを通じて関東や関西の都市圏へ出荷されています。

しいたけは地元で伐採したクヌギなどの原木を使用し、生産しています。農業協同組合などを通じて出荷されるほか、市内のスーパーや物産品販売所などでも販売されています。

また、上高隈町にある特用林産物出荷加工センターなどの加工施設では、地域グループなどが、特用林産物などを利用した食品加工を行っています。



サカキ



ヒサカキ



シキミ



しいたけ

サカキ＝榊
ヒサカキ＝姫榊
シキミ＝柘

枝物と言われても、一体何なのかわからない方も多いと思います。これらは、お供えに使うものです。お仏壇、神棚、お墓に、良く緑の葉がお供えされているのを見たことがあると思います。

地域やご家庭によっても違いはありますが、

	仏事	神事
サカキ	○	◎
ヒサカキ	○	○
シキミ	◎	×

上記のような使われ方をしているようです。ぱっと見た感じではどれがどの種類かわかりにくいと思います。気になる方は、ぜひ調べてみてください。



鹿屋内陸工業団地



前鳥居農工団地

鹿屋市の産業は？

鹿屋市の2019（令和元）年の市内総生産額は3,562億8,549万8千円となっています。内訳を産業別で見ると、高い順に製造業484億900万円（13.6%）、保健衛生・社会事業472億2,300万円（13.3%）、卸売・小売業452億9,300万円（12.7%）不動産業320億6,400万円（9.0%）公務320億1,700万円

（9.0%）となっています。

なお、本市の基幹産業である農業は、2020（令和2）年の農業産出額は439億7,000万円で、全国第11位となっています。

製造業事業者の規模や、盛んな製造業は？

市内89社のうち、従業員数300人以上の大規模事業者はわずか1社（1%）で、残りの88社（99%）は中小規模の事業者となっています。鹿屋市内の製造業事業者数の多い業種は、食料品製造業（28社）、飲料・たばこ・飼料製造業（11社）となっています。

028

鹿屋市の工業

鹿屋市には、89社（※）の製造業事業者があり、そこで約3,600人が働いており、地域特性である豊富な農林水産物を活用した食品製造・加工業や、一定の集積を持つ電子部品関連、金型製造業など、数多くの地場企業や誘致企業が立地しています。

※2020（令和2）年工業統計調査：従業員4人以上の事業者

○立地企業の変遷

立地企業の歴史は古く、大正時代から、甘藷の澱粉工場や蚕業・紡績企業などの誘致が行われており、当時はこれらの産業が隆盛を迎え、鹿屋市の産業振興を支えてきました。

その後、戦後の厳しい時代を乗り越え、日本の高度経済成長に伴い産業構造の転換が図られ、繊維産業等に変わり、食品、電子関連産業などの立地が進み、近代工業の発展とともに鹿屋市の工業の礎が築かれてきました。

特に、昭和40年代の高度経済成長期からは企業誘致に力を入れ、大手文房具メーカーの生産拠点となる工場の立地や、金型企業の集積など、新規産業の創出や雇用の場の拡大を図ってきました。

現在は、工業団地や工場適地などに、全国トップクラスの産出額を誇る農林水産業を活かした食品関連企



日本モレックス合同会社
鹿児島工場



株式会社サクラクレパス
鹿児島工場

業を中心に電子関連産業や情報通信業など、年々、誘致等によって立地した企業も増えています。

○市内の工業団地

現在、鹿屋市には4か所の工業団地があり、15社が進出し、約1,500名の雇用が創出されています。

全ての工業団地で操業率が、ほぼ100%となっており、活発な生産活動が行われています。

市内最大の規模を誇る鹿屋内陸工業団地は、川西町及び永野田町にまたがる約33haを超える土地を、鹿児島県開発公社が造成し、1978（昭和53）年に分譲を開始しました。現在、電子部品や食品関連、運送業など12社が立地しており、鹿屋市における工業振興の拠点となっています。

その他、吾平地域にある二つの農工団地には、自動車部品製造業など3社が進出し、輝北地域にある工業団地には太陽光発電事業が実施されています。

現在、既存の工業団地に余剰地がないため、今後、企業誘致を進める上で、新たな工業用地の確保が課題となっています。

かつて鹿屋市で世界的なビッグプロジェクトがあった？

大正時代から戦前にかけて、繊維産業は日本の最重要産業で、日本の輸出の70%を製糸が占めるほどでした。

当時、鹿屋市では日本一の売上を誇る紡績会社の誘致に成功し、当時としては画期的な養蚕から糸の製造まで一貫体制で行う計画が立ち上がりました。

最盛期には3,000人の従業員が働き、付近の民家に電灯がない時代に、同社には煌々と明かりが付き、ハイカラな別世界の印象を与えていたようです。

反響も大きく、県内外から視察が相次ぎ、アメリカからの視察もあったとのこと。

しかし、製糸工場の建設計画が進む中、化学繊維の普及により、養蚕業も下火となっていき、このビッグプロジェクトの夢は破れ、1951（昭和26）年に撤退を余儀なくされました。



大隅竜神大祭



秋まつり

○商店街・通り会

鹿屋市には中心市街地にある北田・大手町商店街振興組合等をはじめとする、複数の商店街・通り会が存在します。商店街の空き店舗の増加や後継者不足に悩まされる中、街の活性化のため、市、鹿屋商工会議所、かのや市商工会、商店街・通り会が連携しながら様々な地域のイベントを開催しています。

○商店街等の主なイベントカレンダー

- 7月
 - 秋葉神社六月灯
 - 打馬夏祭り
- 8月
 - 札元夏祭り
- 9月
 - 笠野原十五夜大綱引大祭
- 10月
 - 大隅竜神大祭
- 11月
 - 秋まつり（歩行者天国）
 - 本町イルミネーション
 - 水神祭り
 - にしはらフェスタ

029

鹿屋市の商工業

市の商業は、「リナシティかのや」などがある中心市街地を核として発展してきましたが、近年では西原・寿地区に多くの店舗が集中するなど、商業地域は広く市内全域に広がりを見せています。また、輝北・串良・吾平地域においては地元密着した商店街が、地域独自の祭りやイベントを開催するなど、地域経済を支えています。

一方、事業所数については、2016（平成28）年経済センサス産業別事業所数の全産業から農業・林業・漁業を差し引いた商工業者数は4,548件となっており、2012（平成24）年経済センサスと比較すると28件減少しています。

その中でも、最も大きな割合を占める「卸売・小売業」が1,305件、全体の28.69%を占めていますが、2012（平成24）年経済センサスと比較すると21件減少しています。その主な理由は、郊外への全国資本のチェーン店等の出店による中心市街地の空洞化や消費者ニーズの変化、小規模事業者等の高齢化、後継者不足等によるものです。



イルミネーション



リナシティかのや

○鹿屋商工会議所

商工会議所は、商工会議所法に基づいて設立された特別認可法人で、地区内の商工業の総合的な発展を図るとともに、社会一般の福祉の増進に資することとしており、鹿屋商工会議所は1947（昭和22）年に創設されました。

商工業者（個人・法人）であれば、加入することができ、各種相談やセミナー、講習会を開催し、会員の経営支援等を行っています。

○かのや市商工会

商工会は、商工会法に基づいて設立された総合経済団体で、地域の事業者がお互いの事業や地域発展のために活動する団体です。

かのや市商工会は、2012（平成24）年4月に輝北町商工会と串良町商工会が合併して発足し、その後、2014（平成26）年に吾平町商工会と合併しました。経営相談、税務相談、金融相談など、様々な相談に応じています。また、国、県の補助を活用し、各分野の専門家の派遣も行っています。

リナシティかのや

鹿屋市大手町には2007（平成19）年に開業した複合交流施設「リナシティかのや」があり、若い世代から年配の方まで、幅広い年齢層の方に利用されています。

- 4階 屋上庭園
- 3階 芸術文化学習プラザ
健康スポーツプラザ
- 2階 情報プラザ
芸術文化学習プラザ
福祉プラザ
- 1階 情報プラザ

プラネタリウムや400席あるホール、ミニシアター、フィットネスホールなど、楽しめるスポットがいろいろとあります。屋上には庭園もあり、市街地を眺めることができます。

また、敷地内のどこかには、ハート型のタイルが隠れています。このタイルにカップルが一緒に乗ると幸せになれるといわれています。



かのや豚ばら丼



カンパチ漬け丼

「かのや豚バラ丼」 3つの条件

「鹿屋産の豚」のばら肉がメイン食材として使用されていること。鹿屋の市花である「ばら」が丼の中で、何らかの形で表現されている又は使用されていること。鹿屋に対する愛情が丼の中に注がれていること。

マスコットキャラクター「ばらブー」

豚ばら丼を通して、子どもたちにもっと豚を好きになってもらい、鹿屋が豚の町であることを認識してもらうため、市の職員がマスコットキャラクターを製作。市内の小中学生に愛称を募集した結果、「ばらブー」と名付けられました。実は、最後まで選考に残った名称は「豚田薔薇之助」だったそうです。



「ばらブー」



030

食のまち鹿屋（グルメ）

鹿屋市には、県内外からの観光客の舌をうならせる様々なグルメがあります。特に、肉などの素材を生かした食事（焼肉やとんかつ等）については、多くの方から評価を得ています。その中でも市として推薦するグルメについて紹介します。

○かのや豚ばら丼

鹿屋の二大地域資源である「豚」と「ばら」をコラボさせた「かのや豚ばら丼」。2014（平成26）年に市内の飲食関係者、畜産・食肉関係者、ばら観光関係者間の異業種連携をきっかけに、「豚ばら丼研究会」が発足し、多様な市民が「どんぶり」のように一緒になって取り組めるものとして「かのや豚ばら丼」が誕生しました。2016（平成28）年11月に霧島ヶ丘公園で開催された「全国丼サミットinかのや2016」では2日間で1,200杯、全国のスーパーでも1年で約23,000食が販売されるなど、ご当地丼として定着。今も市内数か所の飲食店で、そのお店独自の豚ばら丼が堪能できます。

○カンパチ漬け丼

身が引き締まり、あっさりとした脂が特徴の「かのやカンパチ」は、鹿屋市漁協直営の「みなと食堂」で手軽に味わえます。特に、カンパチ漬け丼は絶品です。



みなと食堂



ばらソフトクリーム

【開発秘話】

カンパチ漬け丼は、地元のしょうゆをベースにした「秘伝のたれ」にカンパチの切身を漬け込んで味付けしていますが、漬け丼自体は、その切身をごはんに乗せるだけのシンプルな構成です。

カンパチ漬け丼の開発にあたっては、「新鮮こだわりの【かのやカンパチ】を皆さんに食べてほしい。」「【かのやカンパチ】の美味しさを伝えたい。」という気持ちから、素材を生かすため、あえて技巧を凝らさないようにしたとのこと。

また、より多くの市民へ親しんでもらえるように、市が主催するこども料理教室のメニューにも、カンパチ漬け丼を取り入れています。



子ども料理教室の作成例

○その他のグルメ

鹿屋市内には、まだまだ多くの美味しいものがあります。例えば、畜産が盛んなので焼肉屋が多く、特産品のだっきしょ（落花生）を使った豆腐や饅頭、最中なども作られています。また、かのやばら園ではばらの香りのするばらソフトクリームが販売されています。

家でも鹿屋産の牛肉

スーパーなどに行けば、国産牛も普通に買えます。でも、そのお肉、どこで育ったお肉か考えたことがありますか？地元の生産者が育てた牛さんのお肉を食べたくないですか？

実は、スーパーなどで販売されているパック商品の商品ラベルや商品表示欄に記載されている個体識別番号をスマホなどで専用の検索ページに入ると簡単に調べることができます。

この個体識別番号は、消費者が牛肉のトレーサビリティ（生産及び流通の履歴情報の確認）を可能にするためのものです。下記QRコードで検索サイトに入れます。

あなたがよく知っている生産者が大切に育てた牛さんのお肉が見つかるかもしれません。

店舗により、独自の管理番号から個体識別番号を検索する所もあります。





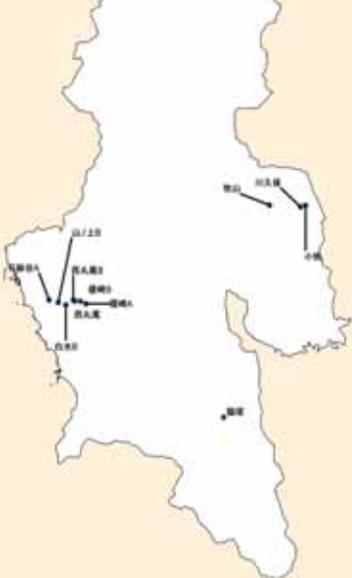
西丸尾遺跡のナイフ形石器

市内の旧石器遺跡

大変古い時代である旧石器時代の遺跡は、鹿屋市内ではあまり知られていませんでした。

しかし、近年の高速道路、国道220号バイパス、県道建設の工事に行なわれる発掘調査で、次々と旧石器時代の遺跡が確認されています。

現在は11遺跡が知られ、太古の鹿屋の様子が少しずつわかり始めています。



031

旧石器時代

日本では、およそ3万7000～8000年前から人類が出現するといわれ、縄文時代が始まる1万6000年頃までを、旧石器時代といいます。種子島では、3万5000年前を越える地層から生活跡が見つかっていますので、その頃から大隅半島にも人類がいたものと考えられます。

この時代の日本は大陸と陸続きになった時期もあり、大陸からナウマンゾウなどの大型動物を追って、人々が日本列島へ移住してきました。当時は簡単な小屋や洞窟などに住み、食料を求めて移動生活をしていました。打製石器は、狩りに使う槍先やり、動物の解体、木や骨の加工など、目的にあわせて石を加工していました。

鹿屋市でも旧石器時代の遺跡が見つかっています。郷之原町榎崎遺跡えのきさきや白水町西丸尾遺跡などで石器が見つかっており、約2万5000～6000年以上前から人々が生活したものと考えられています。

榎崎遺跡からは、細石刃さいせきじん・細石刃核さいせきじんかく・削器さっき・搔器そうき・くさび形石器・ナイフ型石器・台形石器・石斧せきふなどが出土しています。特に、水晶で作られた石器や畦原型うねはらがたと呼ばれる細石刃核などは貴重な資料とされています。



うねはらがたさいせきかく
川久保遺跡の畦原型細石核

写真提供：鹿児島県立埋蔵文化財センター

す。西丸尾遺跡からは、シラス直上の黒褐色粘土質からナイフ型石器、剥片尖頭器、台形石器等が出土し、その上の茶褐色粘土質からは、細石刃や局部磨製石斧、礫器、敲石が出土しています。

一般的にナイフ形石器文化から細石器文化へと変遷します。串良町川久保遺跡では、ナイフ形石器文化や細石器文化の時代の礫群が多く見つかりました。これらは、縄文時代の集石と同じように調理に用いられたものです。狩猟が行われる一方で、南九州では落とし穴も多く見つかり落とし穴猟も行われていました。今から約3万年前の始良カルデラの噴火により、厚いシラス層の下に深く埋もれているため、これより古い旧石器時代の全容をつかむことができません。始良カルデラ噴出物の薄い、種子島や宮崎県では、4万年前に遡る石器や礫群・落とし穴が見つかっています。



畦原型細石核等（川久保遺跡）

写真提供：鹿児島県立埋蔵文化財センター

シラスから見つかった炭化木



1997（平成9）年輝北町諏訪原での工事中、シラスから突き出た炭化木が発見されました。

この炭化木は「カシ」の木で、始良カルデラの噴火と火砕流の熱によって炭になってしまったものですが、直立状態で見つかることは大変珍しいそうです。

始良カルデラの大噴火の前はカシなどの照葉樹が茂り、ドングリなどの採取が容易にできたことが想像できます。



小牧遺跡で見つかった石皿を
主体とした祭祀空間



田原迫ノ上遺跡の縄文時代早期
の貝殻文円筒土器と石器

連穴土坑で燻製づくり

連穴土坑は、燻製づくりの施設であるという説が打ち出されて以来、実験考古学の立場などからその説をあとおしする実験結果が得られています。

具体的には地面に掘った二つの穴を地下つなぎ、一方の穴に肉などをつるし、もう一方の穴で火を焚いて燻製を作るものです。

鹿児島県内でも多くの連穴土坑が発見されていて、上野原縄文の森（霧島市）などで復元されたものを見ることができます。



益畑遺跡（串良町細山田）
で発掘された連穴土坑

032

縄文時代

縄文時代は縄文土器の出現とともに開始し、最近の研究では1万6000年前から3000年前までの1万3500年間で縄文時代といわれます。

今のところ鹿屋市で最も古いのは、約1万4000年前の隆帯文土器が出土した南町の伊敷遺跡で、草創期にあたります。

縄文時代早期の打馬平原遺跡や串良町益畑遺跡では、住居跡や連穴土坑、そして九州南部特有の貝殻で文様をつけた土器などがみつかりました。また飯盛ヶ岡遺跡では、この時期に約130基もの集石遺構が見つっています。

縄文時代の人々は、^{たて}竪穴住居を築いて定住を始め、狩猟・採集や漁をして暮らしていました。自然の恵みに左右される生活であったために、人々はさまざまなまじないをしていたと考えられています。

例えば垂水市柘原貝塚の人々の埋葬された様子を見ると、屈葬という体を曲げて埋葬する方法がとられています。これは、死者の霊がさまよい出るのを防ぐためと考えられています。また、発掘された頭骨によると、ある一定以上の年齢になると抜歯（歯を抜くこと）を行っていたことがわかっています。これは、成人の儀式の一つではなかったかと考えられています。



町田堀遺跡の埋設土器（地甕・縄文時代後期）



町田堀遺跡出土 埋設土器

写真提供：鹿児島県立埋蔵文化財センター

縄文時代後期の牧山遺跡では意図的に土器を埋めて、儀式に使ったと考えられる痕跡があり、小牧遺跡では石皿を中心として儀式を行った痕跡が見つかっていません。東日本の縄文文化にみられる石製呪術具である石刀と石冠も出土しており、豊かな実りを祈った縄文時代の人々の姿が浮かんできます。

鹿屋市から大崎町に広がる縄文中期の細山田段遺跡では、遠くは瀬戸内地方や近畿地方の系列の土器も出土していることから、縄文時代の人々が遠方の人々とも交流していたと考えられます。

また、近年見つけた縄文時代の遺跡のほとんどが、旧石器時代から近世の遺物や遺構と一緒に発見されています。このことから、鹿屋市の周辺は昔から人が暮らしやすく、人々がずっと生活してきた土地であることがわかります。



町田堀遺跡の竪穴住居跡（縄文時代後期）



町田堀遺跡の石刀（縄文時代後期）

写真提供：鹿児島県立埋蔵文化財センター

縄文時代のゴキブリ？

小牧遺跡（鹿屋市串良町細山田）で見つかった約4500年前の土器片の底には、何とゴキブリの卵鞘（卵を包むカプセル）の圧痕が検出されました。人間が住むところにゴキブリがいるというのは、今も昔も変わらないようです。



上述土器片の底面拡大



上述土器片の側面と底面

写真提供：鹿児島県立埋蔵文化財センター



山ノ口式土器



西ノ丸遺跡
最南端の環濠集落東側大溝

弥生文化の^{でんば}伝播

遺跡の発掘から、九州南部に多く見られる農耕や土器などの文化は、まずは薩摩半島西岸地域に伝播し、次第に海岸沿いに広まったと考えられています。

鹿児島市魚見ヶ原遺跡、大隅半島において、鹿屋市高須、浜田の榎原遺跡や垂水市宮下遺跡から弥生時代前期の土器の出土が見られ、鹿児島湾岸の低地に弥生文化が伝播したものとされます。

また、串良川、肝属川流域の吉ヶ崎遺跡や西ノ丸遺跡、高付遺跡等にも弥生土器が多く出土しています。

突帯文土器（板付Ⅱ式）と呼ばれる弥生時代初めの土器や弥生時代中期の山ノ口式土器なども数多く見つかっています。

033

大きなムラの誕生

鹿屋市における弥生時代は、遺跡の遺物等から約2500年前ぐらいからと考えられます。また、「ムラ」を考えるうえで、稲作の伝播が密接に係わっているともいわれています。一般的に弥生時代の稲作は、海岸砂丘の後背湿地から初期水田が定着したといわれています。しかし、鹿児島県ではシラス台地を^{かいせき}開析する谷水田^{すいでん}も利用されました。また、台地が多く平野の少ない大隅半島では、弥生時代前期の人々は台地の上で^{りくとう}暮らしていました。畑作を中心とした生活（陸稲）を行いつつ、水田を取り入れながら水田稲作へと向っていったと考えられています。

弥生時代中期になると、大きなムラが見られるようになります。弥生時代中期の大規模な集落跡である王子遺跡^{ほったてはしらたてもの}では、^{ほったてはしらたてもの}竪穴住居跡が27軒、掘立柱建物跡が14棟発見されました。この他、串良町細山田の田原迫ノ上遺跡でも竪穴住居跡が31軒、掘立柱建物跡が41棟で構成される集落が確認され、大型の住居と通常の住居、倉庫跡など共同体の存在がうかがわれます。

やがて弥生時代中期になり、人々は収穫をあげるため積極的に平野の開拓を始めます。



名主原遺跡 花卉型住居



王子遺跡資料館復元住居

大崎町沢目遺跡、肝付町後田遺跡、東串良町西牟田遺跡など、^{こうはいしつち}後背湿地や^{びこうち}河川沿いの微高地などに遺跡が見つかっており、集落が形成されたことをうかがわせません。また、串良町の西ノ丸遺跡では、標高約4mの^{ちゅうせきち}沖積地に^{かんこう}環濠（東大溝と西大溝がつながることを地中レーダー探査により確認）を持つ集落が確認され、稲作に適した場所へ集落も移ってきたことを示しています。本市では、王子遺跡や田原迫ノ上遺跡のように台地上に形成された集落や、沖積地に形成された集落等が発生し、いずれも家族だけの単一集団でなくいわゆる一族（親族）集団が増加し集落を形成しています。これらのことから、本市においても鹿児島県内の弥生時代中期には、集落＝「ムラ」が発生し、その「ムラ」は円熟して大規模な「ムラ」へと成長し、他地域とも活発に交流し、幅広い文化を受入れそれらを我がものとして、次代へつなぐ基礎をなしたものと考えられます。



王子遺跡出土 モミ跡のある土器

土器に描く

鹿屋市の遺跡から出土する弥生土器は、錦江町の山ノ口集落の砂丘から出土した土器（山ノ口式土器）と同じ形文様のものが多く発見されています。



櫛描文のある土器



矢羽根状の透かしのある土器

王子遺跡から見つかった山ノ口式土器は、煮炊きにするカメ形土器と穀類や水等を貯蔵する壺形土器があります。

壺形土器の口縁部や胴部付近に、工具で引いた線のできた文様（櫛描文）が描かれたものや、^{やばねねじょう}矢羽根状の透かしを入れた高坏の脚台、三角形の形をしたものも見つかっていて、瀬戸内地方や東九州と交流があったこともわかります。



王子遺跡空撮

石包丁の使い方

名主原遺跡出土の石包丁は頁岩製で、背部が弧状に湾曲し、刃部は直線で、背部中央に2個のひも通しの穴があります。使い方は、中央にあけられた穴に紐を通し、そこに指を入れて握り、稲などの穀物の穂を摘み取るようにできています。現在の鉄製の鎌と比べると手間のかかる作業ですが、実った稲から順に収穫ができる便利さもあったようです。



名主原遺跡出土石包丁

写真提供：鹿児島県立埋蔵文化財センター

034

他地域との交流・鉄使用

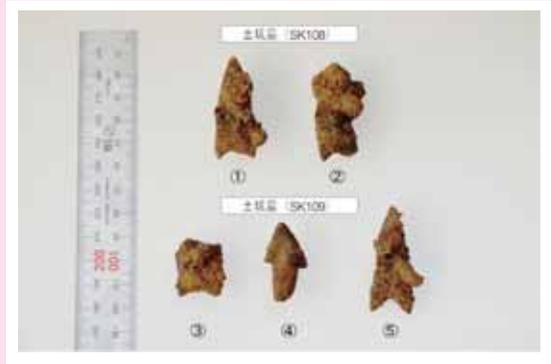
弥生時代に入り、九州北部等では中国・朝鮮半島から金属器が流入し、鉄器や青銅器と石器が使われる時代になっていましたが、大隅地方では、新しい文化がまだ伝わらず石器が多く使われていたようです。そのことを裏付けるように、串良町上小原の栄田地区からは青銅製の剣をまねた磨製石剣が出土しました。出土した磨製石剣は、長さ17cm、剣身部は12cmの硬質の粘板岩製で、欠けは見られるものの完形品でした。また、他にも居住床面からも鉄鏃をまねた石鏃が発見されています。

鉄属製品としては、弥生時代中期の牧山遺跡から青銅製ノミ、弥生時代前期の永吉天神段遺跡（大崎町）鉄鏃、沢目遺跡（大崎町）鉄斧などが出土されており、武器から鉄器化が始まり、工具などに広がりました。王子遺跡からは、鉈、刀子などの加工用工具が出土しています。この中の鉈は福岡県太宰府市の吉ケ浦遺跡から出土した鉈と同じ型であることが報告されています。王子遺跡からは、さらに鉄の加工技術をもっていることを示す鍛冶滓も出土し、この鍛冶滓は、朝鮮半島で製鉄された鉄が素材として持ち込まれて、この地で鍛冶により形作られたとも考えられます。

これらのことから北州北部・東部から金属器文化が



栄田遺跡出土石剣



大崎町永吉天神段遺跡の弥生前期の鉄鏃

写真提供：鹿児島県立埋蔵文化財センター

波及し鉄文化が大隅半島に渡来したと考えられます。

一方、土器の変遷をみていくと、弥生時代前期は北部九州の板付式土器が持ち込まれ、やがて在地化した入来式土器や山ノ口式土器が使用される中で、弥生時代中期後半から後期には、北部九州のものや瀬戸内のものが王子遺跡からも出土していることから、これらの地域との交流が行われていたことが考えられます。

- 鉈（やりがんな）・・・木材を平らに削る工具
- 刀子（とうす）・・・切る工具 現在の小刀のようなもの
- 鍛冶滓（かじさい）・・・鉄くずのこと

王子遺跡出土鉈



○台地に暮らした人々の集落



「王子遺跡住居跡」

写真提供：鹿児島県立埋蔵文化財センター

青銅製ノミ

（牧山遺跡出土）

銅ノミは、銅製品で発見されているものは日本で5例しかなく、特に鑄造したものは3例しか出土例がありません。その3例の中の1つです。鏡や銅鐸など鑄造する鑄型に文様を彫り込むために使われたものといわれ、なぜ九州南部に単独で出土したかは謎です。



牧山遺跡青銅製ノミ

（長さ4.4cm、幅0.8cm、最大厚0.7cm、重さ10g）

写真提供：鹿児島県立埋蔵文化センター



岡崎古墳群は鹿屋市串良町岡崎の事代主神社周辺に位置しています。

古墳と地下式横穴墓

「古墳」は高く土を盛り上げて造られる墓です。鹿児島県では、円墳や前方後円墳が志布志湾沿岸や北薩西岸にのみ見られ、大和政権とのつながりを意味します。

一方、「地下式横穴墓」(下図)は、大きな墳丘をもたず、地面に竖穴を掘り、さらに横穴を掘って墓室をつくるもので、宮崎・鹿児島だけに集中してみられるものです。



西祓川町の「祓川地下式横穴墓」では34基が確認され、昭和25年に形を残した短甲と膏(下写真)が出土しました。串良ふれあいセンター内に展示しています。



035

鹿屋の古墳～岡崎古墳群

3～4世紀になると、土を高く盛り上げて造る「古墳」と呼ばれる大型の墓が近畿地方を中心に盛んに造られるようになりました。豪族と呼ばれる当時の権力者たちが、権力の大きさを示すために造らせたお墓とされています。様々な形の古墳のうち大阪府の大仙陵古墳(大仙古墳：仁徳天皇陵)のような前方後円墳も日本各地に造られるようになりました。

これは大和地方(奈良)の豪族(大和政権)が、各地の豪族を支配した証として、日本各地に造らせたものとされています。

そして鹿屋市串良町の岡崎古墳群にも前方後円墳が2基見つかっています。さらに志布志湾に面した肝属平野(肝付町)や横瀬古墳(大崎町)、飯盛山古墳(志布志)など、多くの前方後円墳が見られ、特に唐仁古墳群(東串良町)の唐仁大塚古墳は全長180mもの大きさで県内最大の前方後円墳です。さらに範囲を広げると、宮崎県西都原古墳群など日向灘に面する一帯にかけて前方後円墳などの古墳が発見されていることから、大和政権の勢力は南海産貝交易のため九州南部の東岸に沿って強大な豪族たちとつながりがあったと考えられます。



(左) 現在の岡崎 15 号古墳の様子。写真右側が前方部にあたります。
 (右) 15 号墳から発掘されたヒスイ製の勾玉、管玉。

鹿屋市串良町の岡崎古墳群はこうした志布志湾岸の古墳の1つです。5世紀前半のものと見られ、1985（昭和60）年から調査が始まり、住宅横や竹林の中に、12基の古墳がこれまで確認されています。従来はすべて円墳とされてきましたが、2004（平成16）年に2基が前方後円墳であると確認されました。中でも15号墳は全長25mの帆立貝型の前方後円墳で、石棺の内外からは甲冑片やヒスイ製の勾玉かっちゅうなども出土しています。また、前方後円墳のくびれ部に地下式横穴墓まがたまが造られているという珍しい例も見られました。立小野堀遺跡や町田掘遺跡でも大規模な地下式横穴墓群が見つかっており、大和政権に従いながらも伝統的な地下式横穴墓も造っていたのです。地下式横穴墓は保存や公開が難しく、埋め戻されているものも多いです。

さらに岡崎古墳群からは、他にも朝鮮半島で作られたと考えられる鉄鋌てつてい、U字形鋤鋤先くわすきさきなどの、鉄製品や琉球のイモガイ製貝釧いもがいしるなどの副葬品が良好な状態で見つかり、古墳時代の交易が九州南部だけでなく、朝鮮半島や琉球など、広範囲に及ぶ地域とつながっていたと考えられています。

※貝釧・・・貝製のうでわ

上小原古墳群



岡崎古墳群と同じ串良町の上小原には5世紀中頃の前方後円墳2基、円墳20基、地下式横穴墓4基をもつ上小原古墳群があります。円墳は消滅したり、墳丘が削平されているものも多いです。前方後円墳である4号墳の近くからは1977（昭和52）年に須恵器すゑきの樽形ハソウ（下写真）が出土しています。





益畑遺跡：出土品



名主原遺跡：石包丁

縄文時代に沢山 見つかるのは どんな土器？

皆さんは、縄文時代の土器は、縄目の模様を付けた土器だけと思っていませんか？

実は、鹿児島県では、縄文時代の土器には縄目の模様の土器が見つかることはほとんどなくて、縄文人がよく食べていた、貝殻を使った文様が数多く見つかっています。

また、縄文土器の文様は何種類あるのでしょうか？

実は、数百種類あるといわれています。

縄目の模様



縄目以外の模様と道具



山内清男1979「日本先史土器の縄紋」から転載

036

遺跡から見つかった物

ここでは、縄文時代から古墳時代にかけて鹿屋市で見つかった遺物を紹介します。

串良町の益畑遺跡や吾平町の和田遺跡は、今から約10600年前の縄文早期の遺跡で、縄文土器や石器が多数見つかっています。輝北町の前床遺跡や鳥居ヶ段などからも縄文土器が発見されています。鹿児島県では上野原遺跡が縄文時代の遺跡として有名ですが、鹿屋地域でも縄文早期には、上野原遺跡と同じような生活をしていたことが分かっています。

鹿児島県は、現在でも活発な活動を続けている活火山「桜島」を代表とするように、古くから火山やカルデラが活発な噴火活動を繰り返した様子が地層によって明らかになっています。近年、火山学の研究が進歩したおかげで、数千年前の年代もほぼ正確に把握できるようになってきました。

弥生時代の集落の跡も各地に見られ、稲作で使われた石包丁や弥生土器が発見されています。串良町の西ノ丸遺跡では、碧玉製の管玉やその玉類を作るときに使われた筋砥石も見つかっています。

吾平町の西側に立地する名主原遺跡からは、人間



名主原遺跡：絵画土器



王子遺跡：絵画土器

(武人)を表現した「^{かいがどき}絵画土器」が県内で初めて発見されました。また、王子遺跡からは、魚(イルカ?)を思わせる絵画土器も見つかっています。

古墳時代の出土品で特殊なものは、もともとは馬の装飾品であったといわれる「鈴」です。銅製の鈴や鉄製の鈴などが見つかっています。特に串良町の立小野堀遺跡では10個の青銅製鈴が見つかっており、その中の2つが馬につける^{さんかんれい}三環鈴の一部であることも分かっています。また、人骨や鉄製の刀、剣、^{やじり}鏃なども見つかっています。

アクセサリーのいろいろ

鹿屋市の遺跡からは、様々なアクセサリー類が発見されています。特に弥生時代や古墳時代の遺跡からは、ネックレスや耳飾り等が見つかっています。これらは現在でも高価な翡翠製や銅を金で塗ったものなどが見つかっています。

また、土器を作るのと同じ技法でネックレスのパーツを作り、それを赤い顔料で染めたものも見つかっています。

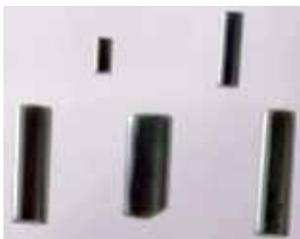
古代の遺跡からは、ズボンなどに着けるベルトのバックル部分も見つかっています。これらは、権威を表す為に身に着けたものと考えられています。さらに、それらのアクセサリーを付けていた人が飼っていた馬等にもアクセサリーを着けていました。それらが、馬具や鈴等です。



立小野堀遺跡人骨など



筋砥石



西の丸遺跡の管玉



鈴(立小野堀遺跡)



「勾玉と管玉 岡崎15号墳出土」



短甲の破片



花崗岩製の石棺



須恵器の大甕

037

古墳から見つかった物

大隅半島には鹿屋市を中心に、前方後円墳や円墳、地下式横穴墓といった古墳時代の墓がたくさんあることが分かりました。それでは、それらの古墳からはどのようなモノが見つかったのでしょうか。岡崎古墳群や中尾地下式横穴墓群から出土した遺物を中心に紹介します。

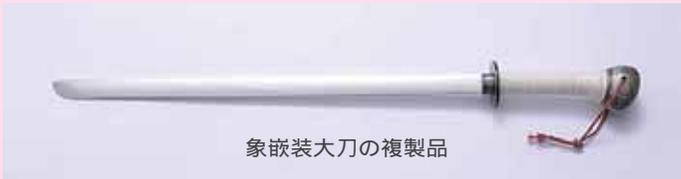
○岡崎古墳群から見つかった物

岡崎古墳群は鹿屋市串良町岡崎に所在し、串良川の河口に近い微高地にあります。岡崎古墳群は前方後円墳2基、円墳18基からなり、いくつかの古墳には地下式横穴墓が共存していることが分かっています。

そのうち15号墳（帆立貝式前方後円墳）の主体部からは、勾玉、管玉、短甲の破片が見つかっています。勾玉は県内で初めて見つかったそうです。その勾玉は新潟県糸魚川流域産のヒスイでできていると推測されており、当時の人々の交流の証となる大変に注目される出土品となっています。また、18号墳は、直径18.8mの円墳で、周溝（古墳の周りにある溝）部分から3基の地下式横穴墓が発見され、その内の2基は玄室まで調査されています。地下式横穴墓の間からは、お葬式などで使われたと考えられる多数の土器が見つかっています。なかでも地元は生産できなかった須恵器



象嵌装大刀の实物



象嵌装大刀の複製品



複製されたツバ



象嵌装大刀解体
親(深)書HP

が見つかったことで、大和政権との関わりが分かります。また、遺体を埋葬した玄室からは花崗岩製の石棺、U字形鋤鋤先、ピンセット状の道具や、銀の代用品だったと考えられる錫、イモガイ製の貝輪などが見つかりました。

○中尾地下式横穴墓群から見つかった物

中尾地下式横穴墓群(中尾遺跡)は鹿屋市吾平町に所在し、これまでに8基の地下式横穴墓が確認されています。その中で6号墓からは象嵌装大刀が見つっています。これは約1500年前の刀で「はばき」と「つば」の両面にハートの文様・切羽縁金具部分には、二重半円文の象嵌が施されています。ハート型に見える模様(心葉文)は、鳳凰が羽を広げた様子を表しています。

象嵌の施された大刀で一般に知られているのは、熊本県の江田船山古墳出土の大刀や埼玉県行田市の稲荷山古墳から出土鉄剣などがありますが、いずれも象嵌銘である点で、本市のものと異なります。象嵌が絵や模様を使ったものは、宮崎県の島内地下式横穴墓群の第114号出土の銀象嵌龍文大刀等がありますが、同じ心葉文は、大分県中津市三光村の上ノ原横穴墓群59号出土の大刀があります。心葉文が施された剣や刀は、出土例が全国的にも数十点と類例はあまり多くありません。このように、貴重な逸品であり、鹿児島県で1本しか発見されていない貴重な資料です。その他にも6号墓からは、鉄の刀や剣の他に、鏃、耳環、刀子、3人の古代人の骨(全て男性)も見つかっています。象嵌とは、装飾技法のことです。



絵画土器



須恵器のはそうと樽型はそう



たんこう しょうかくつきかぶと
短甲・衝角付膏



だこうけん
蛇行剣



国司城跡の碑



1961（昭和36）年の市制20周年記念で作成されたものです。

大隅風土記逸文

「風土記」とは、元明天皇の頃の713（和銅6）年、諸国に命じて撰進させたもので、地方の伝説、風俗、人情、物産などが記されたものです。しかしそれが散逸し、現在では、わずかに五つしか残っていません。しかし、鎌倉時代に仙覚が著した万葉注釈集の中に「大隅風土記逸文」が記されており、その中に串ト郷（くしらのさと）の貢が残されています。奈良時代風土記が編纂された頃には、この地域の人は今と変わらない地名で呼んでいたことがわかる資料です。

「鹿屋」の語源

「鹿屋」という地名の由来は大きく3つほどに分けられます。

- ① 熊襲の首長鹿文（かや）の名による説
- ② 大隅地方に多く生えた茅の名が「かのや」に転じた説
- ③ この地に鹿が多かったので「鹿屋」とする説
このような説が語源の説とされていますが、定かではありません。

038

中央と鹿屋市

○中央とは

当時の日本の政治の中心であった奈良地域のことで、当時（奈良時代）は、鹿屋市域を含む大隅半島地域のことを、大隅国と呼んでいました。

当時の鹿屋市は、肝属川流域の平野部や台地上に広がる平野部がある肥沃な穀倉地帯でした。このことから、大隅の国司である陽候史麻呂がたびたび鹿屋地域の巡検に来ていたことが解ります。巡検時には国司城（現市役所南側付近）を拠点に、高須地域まで巡検していたようです。この地域を治めることが、当時の中央政府に求められていたようです。

○大隅とは

字の字義（意味）については、「大」は接頭語の美称で、「隅」は末端、角の意があり、筑紫の南端であるという意味が含まれているともいわれます。

『鹿兒島神宮旧記』には、大隅のことを「大州見」と記しています。また、「大角」、「大住」とも記されており、当て字をしたものと考えられていますが、筑紫の南端の意味が妥当だと考えられています。



国司塚

○大隅国

713（和銅6）年に日向国あいらから肝坏郡きもつき・曾於郡そお・大隅郡・始羅郡を分けて大隅国はできました。政治の中心に置かれた国衙・国分寺は、現在の霧島市国分に置かれました。

これには当時大和朝廷と抗争を起こしていた隼人の勢力を衰えさせる目的もあったと考えられています。

大隅国設置から10年間は大和朝廷による行政下で政治が行われていましたが、720（養老4）年に隼人が反乱を起こし、大隅国初代国司こくしに任命された陽候史やこのふひと麻呂まろを殺害しました。これが後の隼人の反乱つなへと繋がることとなります。国司を襲った事件は、鹿屋地域の巡検中に起こりました。

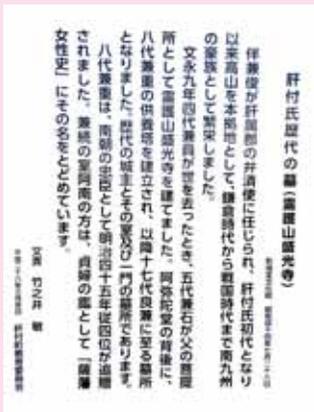
大隅国初代国司ようだいに任命された陽候史麻呂は、中国の皇帝「煬帝」の子孫にあたり、帰化人（帰化によってその国の国籍を得た者）です。帰化人を国司にしたことから、南九州と大陸との間に何らかの関係があったのではないかという説もあります。

国司塚

鹿屋市永野田町、旧国鉄の永野田町駅から左へぐると回ったところに、うっそうと茂った竹やぶの中に「国司塚」と呼ばれる石碑があります。

大隅国を設置する際、これを治めるために初代国司として陽候史麻呂を任命しました。伝説では、大隅国設置に反対した隼人が反乱を起こして、国司を攻めました。陽候史麻呂は部下と共に戦ったが敗れ、退き、永野田の地で息絶えたといわれています。

その場所が現在の「国司塚」であり、当時の戦死者を供養するための塚だといわれています。



肝付氏歴代の墓
(設置された看板)



肝付氏歴代の墓

大伴旅人・家持と肝付氏

720（養老4）年、大隅の隼人が大隅国司を殺害し反乱を起こします。その鎮圧を命ぜられたのが大伴旅人でした。旅人は征隼人持節大將軍に任ぜられ、1年半かけて制圧しました。

旅人の子が大伴家持です。家持は歌人としてたくさんの短歌を残し、日本最初の勅撰和歌集「万葉集」の編纂にも関わりました。薩摩守にも任ぜられています。

その大伴氏を祖先に持つのが肝付氏です。淳和天皇（大伴親王）が即位すると、その諱を避けて一族は伴と氏を改めました。その伴氏の一族が肝付氏を名乗りました。

039

肝付氏について

平安時代以降、薩摩・大隅・日向の三州各地に大きな勢力をもっていたのは肝付氏でした。

肝付氏は、5世紀ごろから中央で活躍した豪族の大伴氏を祖先に持ちます。大伴氏といえば、旅人・家持親子が有名です。その後、大伴から伴に姓をかえ、後に肝付氏を名乗るようになりました。

平安時代の半ば968（安和元）年、太宰府の役人だった伴兼行は薩摩国総追捕使に任ぜられると、薩摩国にやってきました。このころは鹿児島市の伊敷のあたりに屋敷があったそうです。その後、孫の兼貞は肝付郡の弁済使に任ぜられると、高山に移住しました。こうして本拠地を大隅に移した伴氏は勢力を拡大していきます。その一番の要因は、荘園の管理をするためです。島津荘は薩摩・大隅・日向の半分以上を占める広大な荘園でした。太宰府の役人だった平季基が日向国諸県郡の島津院を中心に開発した荘園で、兼貞はこの平季基の娘（あるいは季基の子の娘）と結婚し、島津荘の別当職を譲り受け世襲するようになりました。こうして大隅の役人として、そして島津荘の壮官として大きな勢力を誇るようになったのです。

その後、兼貞の子、兼俊は在地の地名を取って肝付氏を名乗るようになり、肝付氏一族は、その後たくさ



肝付氏の本城「高山城」跡



高山四十九所神社の流鏝馬

写真提供：肝付町

んの分家に分かれ、日向や大隅だけでなく北薩を中心に薩摩にまで勢力を伸ばしていきました。こうして以後約600年間にわたって大隅に大きな勢力をもつ肝付氏が誕生しました。

ところが、中央で平氏が滅亡すると、島津荘は源氏方の鎌倉幕府に没収されてしまい、肝付の地のみが保障されました。島津荘には、幕府の御家人、これむねのただひさ惟宗忠久が地頭として派遣され、忠久は薩摩国・大隅国・日向国の守護職に任ぜられました。そして忠久は島津荘を本拠地に定め姓を島津と改めました。

高山を本拠地に依然として大隅に力を維持していた肝付氏は、このあと島津氏に従うまでの約400年間、島津氏と三州の領有を巡って争いました。

島津氏の家臣となった肝付氏は、大隅の領地を没収され、大隅における肝付氏は滅亡してしまいます。しかし新たに喜入に領地を与えられ、いっしょもち一所持というかかく家格で厚遇こうぐうされます。この喜入肝付氏からは、のちに、明治維新で活躍した小松帯刀たてわきが出ます。帯刀は小松家の養子で、元は肝付氏の生まれでした。

やぶさめ 流鏝馬

10月の第3日曜日に肝付町高山の四十九所神社で毎年流鏝馬しじゅうくじゅう祭りが行われています。四十九所神社は、肝付氏の祖である伴兼行が創建したといわれています。伴兼行の孫、伴兼貞が1036（長元9）年に肝属郡の弁済使になっていますが、高山で流鏝馬が始まったのはそれから100年位後になるようで、900年近い歴史があります。



写真提供：肝付町



上は「熊襲の穴」
右は「隼人塚」

写真提供：霧島市



岩川八幡神社の弥五郎どん祭り

写真提供：曾於市

くまろ はやと 熊襲と隼人

古代の南九州には、中央政権に従わない部族が住んでいて、「熊襲」や「隼人」と呼ばれていました。

熊襲は、日本書紀や古事記に登場します。酒に酔った熊襲の首領兄弟を女装したヤマトタケルが討った話は有名です。そのときの場所であるといわれている「熊襲の穴」が、霧島市隼人町には残されています。

隼人も熊襲と同じように中央政権に従わない人々でした。しばしば反乱を起こしましたが、「隼人の反乱」を最後に、服従しました。隼人の霊を慰めるために建てられたといわれる「隼人塚」が霧島市隼人町には残されています。また、朝廷の前で相撲を取った隼人として大隅隼人は知られています。相撲に勝った大隅隼人は朝廷から厚く用いられ中央に土地を頂いて、住み着いた地が、現在の京田辺市大住とされています。

040

荘園、鹿屋の統治

荘園とは、8世紀から16世紀に存在した、中央の公家や寺社、武家といった権門・貴族による土地の領有形態を指します。律令制のもとでは個人による土地の領有は認められていませんでしたが、時代とともに律令制は形だけのものになってしまい、私的な土地（荘園）が全国に広がっていきました。

鹿屋を含む大隅地方には、713（和銅6）年に日向国から分国して大隅国が設置されました。このとき鹿屋市の大部分は始羅郡・大隅郡となりました。しかし、この頃の南九州は隼人の全盛期で、中央政権の力が及ばない半独立の状態であり、「隼人の反乱」と呼ばれる大きな反乱もありました。これは、大隅国の国司を隼人が殺害した事件ですが、その舞台となったのが鹿屋市永野田町のあたりだといわれています。このように大隅は隼人の力が強い地域でした。この反乱の鎮圧を命じられたのが、後の肝付氏の祖となる大伴氏の大伴旅人でした。この反乱の制圧後、大隅も中央政権の支配に組み込まれていきました。

しかし、平安時代になると全国に荘園が広がっていきます。鹿屋も薩摩・大隅・日向に広がる島津荘という大きな荘園の一部に組み込まれていました。島津荘



奈良～平安朝中期ごろの大隅の行政区画想像図



島津荘大隅方支配図（鎌倉初期）

弥五郎どん祭り

毎年11月3日に曾於市の岩川八幡神社で弥五郎どん祭りが行われています。これは720（養老4）年、隼人の反乱を朝廷軍は鎮圧しましたが、この時、隼人の戦死者があまりにも多かったので、慰霊のため放生会ほうじょうえを行ったのが始まりとされています。弥五郎どんのモデルは、朝廷に抵抗した隼人族の首領とも、朝廷側の竹内宿禰たけのうちのすくねともいわれています。岩川八幡神社の他に、都城市と日南市にも弥五郎行事が伝えられています。



は、太宰府の役人だった平季基たいらのすえもとが日向国諸県郡の島津院を中心に開発した荘園で、摂関家を領家として寄進して、その後薩摩・大隅・日向に大荘園が広がっていきました。鹿屋も大部分がこの島津荘に組み込まれていますが、吾平や輝北の一部は大隅正八幡宮領と分かれています。大隅では、国衙こくがの役人たちが在地化し、荘園の荘官にもなって勢力を伸ばし、領主となっています。そのうちの一つが肝付氏です。鎌倉時代には荘園の支配とは別に、大隅には北条氏が守護・地頭に任じられ、次第に荘園は在地の領主の私領となっています。この中で肝付氏は島津氏に対抗する力を身につけていきました。鹿屋も肝付氏の一族である萩原氏や鹿屋氏が支配していました。

肝付氏による支配が終わるのは戦国時代で、長く対立していた島津氏に敗れ、300年間にわたり鹿屋を支配していた鹿屋氏も鹿屋を追われました。この後大隅は島津氏の支配に組み込まれ、鹿屋も島津家家臣の伊集院氏や垂水島津家に支配されました。



三州割拠図
串良町郷土誌から転載



おなみごせん
阿南御前の墓

げんこう

元弘の乱と肝付氏

足利尊氏は一度都での戦いに敗れ、九州に逃れるが、迎え撃ったのが菊池氏で、菊池氏を応援したのが肝付氏でした。この戦は尊氏が勝ち、尊氏は菊池氏、肝付氏をひどく憎みました。菊池氏の所領を二木、一色氏と与え、肝付、伊東氏の所領を禰寝氏、執印氏に与えて、畠山直顕を日向の守護職におきました。これが肝付氏の没落のはじまりでした。1337（延元2）年、尊氏は勢いを盛り返し、今度は後醍醐天皇が九州に逃げました。「旧記雑録抄」によると指宿に上陸した可能性が高い。その時、菊池氏、肝付氏が後醍醐天皇を助けて、足利軍を打ち破り、錦旗を賜ったと記録されています。



南北朝時代各氏動向図

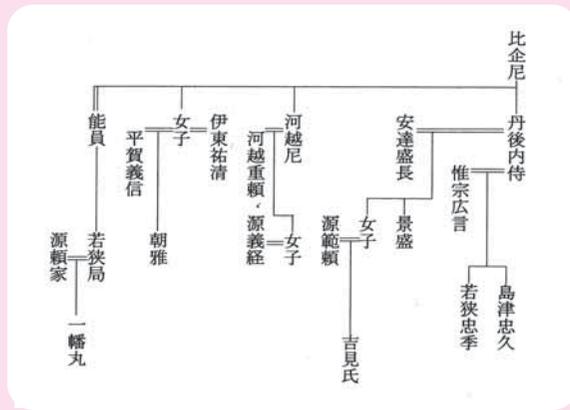
041

肝付氏の支配から島津氏へ

元弘の乱において島津氏と肝付氏はともに後醍醐天皇を応援しました。島津はその功績により、薩摩国に加えて、失っていた大隅国、日向国の守護職を賜りました。しかし、3年も立たぬうちに足利尊氏が反乱を起こし、島津氏は足利氏につき、肝付氏は後醍醐天皇につきました。熱心に後醍醐天皇を応援していた肥後（熊本）の菊池氏と肝付氏は都から逃げてきた足利軍に大敗しました。島津貞久は1336（延元元）年5月、肝付家当主兼重の甥、肝付兼隆のおさめる百引の加世田城を攻撃し、島津対肝付の正面的な戦いが始まりました。加世田城は陥落し、肝付兼隆は討ち死にしました。島津軍は高城を攻めましたが、肝付氏が島津氏をしりぞけました。1343（興国4）年には、島津貞久は一度宮方に降伏しました。実はこれは宮方について日向、大隅を手中に収めた同じ武家の畠山直顕への牽制だったという説もあります。一時は大いに勢威の上った宮方もやがては衰え、肥後に落ち延びることとなりました。畠山氏は禰寝氏に鹿屋を攻めさせました。畠山氏の勢いは止められず、大隅も次第に畠山氏の傘下に下ろうとしていました。ところが事態は意外な方向に動き、宮方として奮闘していた菊池武光が1359（正平13）年、宿敵である武家方畠山直顕を攻め、2年間



しまづただひさ
島津忠久像



島津忠久関係略系図

串良町郷土誌から転載

で滅ぼしました。島津氏は一兵も失うこと無く、再び日向、大隅、薩摩三国の鎮護としての重きをなすことになりました。また、畠山氏が滅びると、島津氏はもはや宮家の庇護はいらぬとばかりに武家に轉身し、足利家の傘下に入りました。元弘以来宮方のために力を尽くした伊東由祐は戦死し、野辺氏も衰え、島津氏の抵抗勢力は肝付氏だけになりました。島津義久が島津氏の家督を継ぐと、北郷時久に肝付氏を攻略するように命令します。この時、肝付氏の当主は肝付兼亮でした。島津義久は大隅半島南部に支配を広げていた禰寝重長を味方につけ、北郷時久とともに高洲浦（現鹿屋市）で大小の舟を奪うなど知略をもちいて、肝付氏を攻めました。肝付氏は牛根城（現垂水市）を失い、廻（現霧島市）と市成（現輝北町）を島津氏に差し出し降伏しました。しかし、島津氏は執拗に肝付氏の領地を奪い、最終的には高山、吾平、内之浦、岸良の支配のみを認められ、最後には高山以外のすべての領地を没収され、1580

（天正8）年に薩摩国日置郡阿多（現南さつま市）に領地替えをされて、肝付氏は大隅半島からその姿を消すこととなりました。

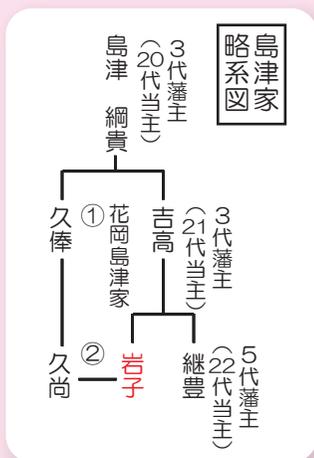


高山城跡

肝付氏の衰退と滅亡

元弘の乱終盤の大隅の状態はというと1339（暦応2）年、日向高城では肝付兼重が畠山直顕と戦い、鹿屋地方では禰寝氏の庇護下にあった武家方の大始良一族の勢力が強く、鹿屋氏を常に圧迫していました。その中であって、肝付氏当主兼重の弟、兼成は根占地方からの出口に当たる枢要の地であり、肝付氏の本拠である高山の地を死守していましたが、禰寝氏、横山氏の連合が攻め落としました。

兼成討死を契機に、肝付氏の勢力は大始良から急速に後退し、代わって志布志にあった楡井頼仲の勢力が一気に鹿屋、大始良、花岡、高隈方面に進展し、また徐々に島津の勢力も大始良を足がかりとして伸びてくるようになった。



花岡島津家墓地（真如院跡）

どん海庵

「どん海庵」とは、日本百僧の一人に数えられる名僧の玉山和尚という僧が建てた庵です。正しくは「呑海庵」と表記します。

玉山和尚は鎌倉時代末期、2回中国に渡り、2回目の帰国の際に暴風雨のため鹿屋市浜田町の海岸に漂着しました。そして海岸近くに「どん海庵」を建てて住んでいたそうです。

その後大始良城主の※楡井頼仲の招きにより、大始良城下に「竜翔寺」を建立して初代住職となりました。「竜翔寺」は鎌倉末期に建てられた、この地方で最も古いお寺です。

また楡井頼仲が戦いに敗れ、志布志に去ったので玉山和尚も志布志に移り「大慈寺」を創建しました。「大慈寺」は、室町時代の臨濟宗寺院で高い格付けをされたお寺の1つです。

※南北朝時代に南朝方として、大隅国で一時期活躍した武将です。

042

島津氏と鹿屋市の関係

島津氏と鹿屋市の関係について、花岡島津家の存在を抜きに語ることはできません。

○花岡島津家とは

江戸時代中期の1724（享保9）年6月、3代薩摩藩主・島津綱貴が次男の久儔に大始良郷内の木谷村などを与え、翌1725（享保10）年7月には、木谷を花岡と改めて花岡島津家を興させたことに始まります。

久儔より、7代の久敬に至るまでの145年間、薩摩藩の外城（とじょう・周辺の支城のこと）としての役割を果たしました。

花岡島津家初代久儔から9代久基が眠る墓地は、男性と女性の形式を区別した特色のある墓地で、鹿屋市にとって貴重な文化財として、1981（昭和56）年に市の指定文化財に指定されています。

○島津岩子夫人による用水路建設

花岡は昔から水に恵まれず、飲料水はもちろん、田地の灌漑にも困り、よく旱魃が起こる土地でした。開墾の意思を示した初代・久儔でしたが、実現できないまま1729（享保14）年世を去ります。



島津岩子の碑

久儒の跡を継いだ花岡島津家2代目久尚の夫人である岩子（5代藩主・島津継豊の妹）は、領民たちの長年の水不足に心を痛み、1773（安永2）年9月、飲料水供給や灌漑対策を兼ねた用水路建設の大事業を敢行しました。

高隈山麓の清流を引き、水量が豊かな高須川上流の堤防を修築。山腹を開け、数か所の隧道を設置し、1里（約4km）以上の用水路を整備する難工事でした。

領民たちもその重い任務に応え、1780（安永9）年10月に7年以上かけて、ついに用水路を完成させました。これにより20町歩以上（東京ドーム約4倍の広さ）が開田し、その後も次々に新田が開かれていきました。

岩子は温厚で、学を好み、書や琴をたしなむ女性で領民から尊敬されていたと伝えられています。1962（昭和37）年10月、鹿屋市は岩子が行った用水事業を顕彰するため、旧鶴羽小学校裏の木谷城跡（鶴羽城山公園）に碑を建てました。

1町 = 約9,917.36m²、m法では約100a（1ha）

海賊の話

日本の歴史において海賊と聞くと「倭寇」をイメージする方も少なくないのではないのでしょうか。

「倭寇」というと13世紀から15世紀にかけて、朝鮮半島や中国大陸の沿岸部などの地域において活動した日本の海賊です。

この鹿屋の地も「倭寇」との関わりが深い場所がいくつかあります。

高須町

中国、明の時代の日本研究書『日本一鑑』には、倭寇に連れ去られた中国人たちが奴隷として酷使・売買された施設が九州の「高洲」という場所にあると記録されている。

波見町

肝属川河口付近は、古くから交易と漁業の拠点であった。中世には「倭寇」の拠点としても伝えられている。

本コラムでは「前期倭寇」のこと指します。



亀鶴城址



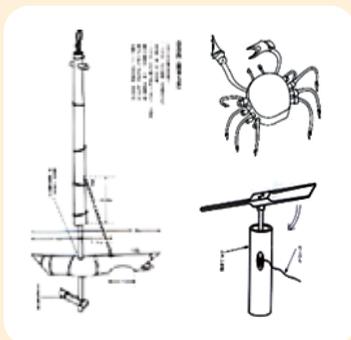
鹿屋城跡：現在の城山公園

伝統工芸「竹細工」

竹材は、そのしなやかで折れにくい性質から、今のように合成樹脂製品が一般的でない時代によく使われていた素材です。

最近では、あまり見かけなくなりましたが、箆やザルが鹿屋市全域で盛んに作られ、竹屋等とよばれるお店がつい最近までありました。

そのような竹細工がどのように作られていたかを現在に伝える本が、鹿屋市立図書館で閲覧できるので是非見てみてください。



楽しい竹細工美と強度を求めてより転載

043

鹿屋市の城跡1

鹿屋市には、自然の地形などを利用した山城が多く残されています。山城は居住空間を持つ平城とは違い、普段は麓と呼ばれる城下に居住し、戦乱の時だけ城に入りました。ここでは、輝北地域と鹿屋地域の山城を紹介します。

○高雲加瀬田ヶ城（鹿屋市輝北町平房）

肝付氏の居城である高山城の支城で、三俣（肝付兼重）の中間に位置し、戦略並びに連絡上非常に重要な城でした。この城は、南北朝から戦国期に使用され北側はシラスの絶壁、東南側は急斜面、両側は空堀がつくられ、場内には井戸があり、攻めるに難しく、守りに易い城でした。

○鹿屋城（鹿屋市北田町）

別名を亀鶴城といいます。鹿屋市街地の隘路にせまる火山灰台地の突端をたくみに利用した山城です。

城郭は本丸、二之丸、中城、松尾城、大明城、今城、取添城などに分かれ周囲およそ2 km、大手口は南面にあり、いまの大手町の地名を残しており、両面の水濠は現在、駐車場、公園となっています。

この城の始まりは「古城主由来記」に「島津久経時代津野四郎兵衛、鹿屋城主」とあるのでだいたい鎌倉時代承久年間頃と思われます。



大始良城跡

天正6年肝付氏没落後、伊集院忠棟により肝付地域の中心として本格的に築城された中世末から近世初頃の城郭です。

○大始良城（鹿屋市大始良町城内）

大始良城は平安末期の寿永年間頃から^{ねじめ}祢寝小太郎義明が築城し、その後は南北朝期には、^{ゆい}楡井氏や島津氏と主を変え、戦国期には肝付氏の支配となりました。

内城を中心として十二城から成り、その規模は肝付氏の高山城をしのぎます。大始良川の二つの川筋に^{からほり}囲まれ多くの空堀、^{どるい}土塁、^{ゆい}柵型等が現存し中世山城の典型的なものといえます。

○西原城（鹿屋市輝北町上百引）

別名舞天城ともいいます。図師家二十代にわたり、434年間も居城したところで、高山（肝属郡高山町）の本城（肝付氏の居城）と連絡をとり北朝系（島津勢）や外敵の襲来を監視し、万一の折は「^{のろし}狼煙」で急を高山へ知らせた肝付北辺の監視城として貴重な城でした。

図師家は、1181（養和元）年から1615（^{げんな}元和元）年まで百引を支配し、南朝系として活躍しましたが、後に島津氏に帰服しました。

高隈の刀鍛冶

高隈町重田の松尾城の西方、高隈川（串良川）を渡って田圃の中に鍛冶場の後があります。戦国時代文亀年間（1501年～1503年）のころから江戸期寛政（1789年～1800年）のころまで刀工がいたとされます。重包 - 重鎌 - 重鏡 - 重吉 - 重近など五代が伝えられています。

高隈刀には次のような話があります。三代重鏡が当時の名将から刀の注文を受けましたが、どうしたとか約束の寸法（長さ）と異なるものを作っていました。その大将が厳しく問いただしたところ重鏡は、「私は耳が遠いので寸法を聞き間違えたのだらう」と、答えました。それから三代重鏡作の刀の銘を「高隈つんぼ」と呼ぶようになりました。



鶴亀城跡（串良城跡）



長谷城跡



城ヶ崎城跡（小原城跡）

鶴丸城建設こぼれ話 （城つながり）

別名を鹿児島城といいます。城の地形が鶴が羽を広げた様子に似ていたからと鶴丸城とよばれました。

もともとは南北朝時代のころ上山氏が造った上山城で、山城でした。

島津氏は戦国時代、内城（大瀧小学校）を居城にしていましたが、関ヶ原の戦いで敗れ徳川氏の脅威に備えるために、1601（慶長6）年に、島津家久の命で建設が始まりました。建設にあたり、家久の実父義弘は海岸線に近いことから反対し、内城の前に居城としていた清水城（清水中学校）や帖佐建昌城（始良市）なども候補地に挙がりました。家久は広大な城下町建設を考えており、その主張通り築城が始まりました。その後徳川家康から本領を安堵されたことから、恭順の意思表示として、天守閣を作らず、屋形づくりとし、後詰め^{ちしろ}の城として上山城を城山とした平山城^{ひらやま}になりました。1606（慶長11）年に家久が内城から鶴丸城へ入城しました。

044

鹿屋市の城跡2

鹿屋市の城跡2では、串良・吾平地域の山城について紹介します。

○鶴亀城（串良城）

串良城ともよばれ、現在の串良総合支所あたりにありました。応永（1394～1428年）の末期ごろに島津家の重臣平田重宗によって築城されました。1520（永正17）年には肝付氏が鶴亀城を包囲しましたが、城代の平山近久が退けました。1523（大永3）年には新納・肝付連合軍により攻められ、翌4年から1577（天正5）年まで肝付氏の領地となりました。肝付氏の降伏後、1576（天正4）年に島津忠長が串良の地頭に任ぜられ、在城しました。8郭からなる大きな城で、巨大な空堀がありました。

○長谷城

祓川にあり、鎌倉時代か南北朝のころに築城されたといわれています。鹿屋川に接する小丘^{しょうきゅう}を利用して造られ、高いところで45mぐらいであったと思われます。ここは鹿屋に入る北の関門として軍事的にも重要であり、近くにある一ノ谷城とともに数々の激戦があったと伝えられています。現在は、シラスの採取場となり跡地は消滅しています。



末次城跡



筒ヶ迫城跡



鶴丸城跡で発見された花十字紋瓦

写真提供：鹿児島県立埋蔵文化財センター

○城ヶ崎城（小原城）

小原城ともよばれ、上小原の城ヶ崎にあります。南北朝のころに松崎氏によって築城されました。この城は、肝付氏に対抗するために近くの松崎城の出城的な役割として造られ、だんだんと整備されたものと推測されています。

○末次城

吾平川と鹿屋川の合流地点の近くの吾平町下名井神島にあり、末次家の子孫が代々居住していたと伝わっています。1351（正平6）年に禰占清重が攻め落としたと記録があるので、それ以前に築城されたと考えられます。その後肝付氏、楡井氏、畠山氏に支配されました。このころまでは井上城と呼ばれていました。1357（正平12）年に末次城と改称されました。1361（正平16）年に島津氏が攻め落とし、重臣の山田忠経を城主としました。南北朝時代に激戦地だったことがわかります。

○筒ヶ迫城

吾平と苦野川が合流した筒ヶ迫にあり、室町時代に築城されたと言われています。肝付氏の老中級の肝付兼清が1555（天文24）年に地頭として移り住んだといわれています。

肝付氏が島津氏に降伏後、吾平は島津氏の直轄地となり、地頭として伊地知重秀が1577（天正5）年に筒ヶ迫城に赴任しました。

海岸に近すぎる防衛上弱点があり、1863（文久3）年の薩英戦争では、鶴丸城は艦砲射撃の射程圏内だったために本陣は別の場所に移しました。実際に、城には砲弾が撃ち込まれています。1871（明治4）年の廃藩置県で島津忠義が去るまで、270年余り島津氏の居城として、薩摩藩の中心でした。

本丸や御楼門は1873（明治6）年の火災で、二之丸は1877（明治10）年の西南戦争で焼失しました。現在は本丸跡に鹿児島県歴史・美術センター黎明館、二之丸跡には鹿児島県立図書館、鹿児島市立美術館、鹿児島県立博物館などが建っています。大手門にあたる御楼門は、2020（令和2）年に復元されました。発掘調査で、キリシタン建築に使用された「花十字紋瓦」が見つかりました。家久の義母、永俊尼がキリスト教の信者で、関係があるのではないかと推測されます。



現在も残る麓の武家門1（吾平）



現在も残る麓の武家門2（吾平）

のまち
野町観音
(市指定文化財)

鹿屋市吾平町の野町は、町の十文字から南方向に（現在の上町・中町地区）ありました。十文字の角（元桐野シューズショップの角）にえびす様が祭られ、西側の角に野町観音様（総高約123cm）が祭られていました。この観音はやがて野町観音と呼ばれるようになりまし。この観音は、その後十文字周辺の交通量が多くなり、危ないので、戦争後、鶴戸神社へ移されました。野町は観音様を中心に集落が作られています。吾平町は、1681（延宝9）年、（約320年前）には、26戸ほどあったと伝えられています。



野町観音

045

野町・浦町・麓について

麓は、諸外城における地頭仮屋（直轄領の呼称）もしくは領主仮屋（一所地の呼称）および郷土年寄所・与頭役場・触役所・部当々役所などの諸役所や祈願所・菩提寺・射場・宗社などの施設が整い、外城衆中（郷土）の屋敷が集住している行政・軍事文化・経済の地方の中心地にあたります。（古前城町や打馬、吾平、串良、大始良、花岡、高隈など）

野町は、内陸部の交通の要地にあった藩公認の商人町や商業地のことをいいます。ほとんどが麓に隣接していましたが、もとは岡町とも呼ばれていましたが、1711（正徳元）年に野町と改称されました。薩摩藩は、自給自足を原則としていたので、野町といっても町人は半農半商のくらしで、町屋の戸数も数戸程度のところが多かったそうです。



現在も残る麓の武家門3（吾平）



現在も残る麓の武家門4（吾平）



現在の野町（吾平）

郷士の村

漁浦人 =

浦町

在
(百姓)

麓

= 郷士

在
(百姓)

野町

= 町人

浦町は、町場のある漁村のことです。漁村だけなら浦、それより小さいと半浦とっていました。浦町の商人は、商業・海運を営業とし、水主^{ぶえき}賊役を一般には負担し、一部の者はその営業について運上銀を上納したり、六反帆以上の大船持ちは御用船もつとめていました。元来薩摩の漁業生産力はふるわなかったのに、貧弱な漁業生産力を“高”結ばずに、平時にあっては海上賊役、戦時にあっては水軍^{すいふん}夫卒としての“水夫奉公”の徴収を目的としていました。藩財政の生命線は、上方および琉球列島の物資や貿易にあったから、浦町の果たす役割は非常に大きかったと考えられています。（高須町、古江町）

肝付郡の外城の概要

直轄領	郷士総人口(人)	所総高(石)	村数	用夫(人)	野町用夫(人)	浦方用夫(人)	備考
串良	429	18,024	10	2,071	32	328	大郷
高山	548	11,409	7	1,263	96	88	大郷
始良	179	7,045	3	792	41	—	中郷
大始良	243	7,487	7	1,111	—	—	中郷
鹿山	359	9,826	4	1,356	76	82	中郷
内之浦	99	4,482	3	403	—	332	小郷
高隈	99	3,074	2	247	—	—	小郷
一所在地	郷士総人口	所総高	村数	用夫	野町用夫	浦方用夫	
花岡	348	1,583	2	326	56	95	
垂水	1,669	6,723	9	470	—	391	

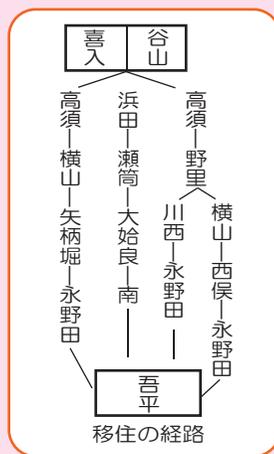
麓について

勇猛果敢な薩摩武士を育んだ地、鹿児島県。江戸時代、鹿児島（薩摩）藩の地方支配の中心地のことをいいます。

鹿児島藩では家臣団の城下町集住が完全に行われず、身分的には武士ですが日常は農業に従事し、外城^{とじょう}衆^{しゅう}と呼ばれ郷士が在村していました。これは、外敵からの攻撃に備え、本城である鹿児島城を中心とし、県内各地に外城を配置し、武士団を住ませることで、本城を守る役割を担わせていました。これら郷士の居住している地域が麓と呼ばれています。また、外城制度と呼ばれ、鹿児島藩独自の体制でした。

麓は、防御に適した場所に作られ、門と玄関の間に生垣を配置する等、まるで城のような構造を持っていました。そこでは、武士達が心身を鍛え、農耕に従事し、平和な時代でありながら武芸の鍛錬等に励みました。

現在も本市に残る麓地域を歩けば、江戸時代の武士達の往時の生き様が見えてきます。



にしめ
西目（薩摩半島）から
ひがしめ
東目（大隅半島）への
移住

江戸時代初期（1660年ごろ）から幕末末期まで、薩摩藩では、薩摩半島（西目）から大隅半島（東目）に人を強制的に移動させて、農耕をさせる政策をとりました。この政策を「人配」（「にんべ」または「にんばい」といいます。

移った人々を「永代移者」と呼び、門（かど）の籍に入れました。門とは、農民を数軒から多くても20軒程度のグループに分けて支配する制度です。そのグループには地名などからとられた門名という名前が付けられました。

移住した人の中には職人として薩摩半島から出稼ぎに来て、そのまま定住した人もいました。大工、左官（建物の壁を作る人）、木挽（製材）、桶、鍛冶、紙すき、瓦などの職人が薩摩半島の各地から大隅半島に came。 （職人が出稼ぎに来たのは、大隅半島の人たちは農業以外の職につけなかったからです。）

046

にんべ
鹿屋・吾平・串良 人配物語

薩摩藩は1655～1673（明暦～寛文）年のころから吾平・串良・祓川など鹿屋の各地で新しい用水路を作り、新田を開発していきました。そのためたくさんの方が必要なことから、薩摩半島からくじを引かせて、強制移住させました。（左コラム）始良郷の記録では、開発が進むにつれ門の創設が増えています。「門割制度」（右コラム）を確立するためにも、薩摩半島から強制移住させる「人配」を行いました。

この当時、大隅半島では「牟田田」とよばれ、常に水がある泥沼の田が多くありました。ぬかるみはひどく、浅いところで腰まで、深いところでは胸までつきり、田植えには「田下駄」を用いていました。

江戸中期以降、薩摩藩では「八公二民」と税率が高いこと、前述のような田で作業が大変なこと、災害や飢饉などの理由で、土地から逃げ出す農民も多くなり、つぶれた「門」も出てきました。このように人口の減少と農村の荒廃が激しかったので、「門」を維持するためにも継続的に人配が行われました。

江戸時代の後期になると、知り合いをたよって個人的に移住したり、定着した人が知り合いを呼び寄せたこともあったそうです。



始良郷下名人配・永代移者顕彰碑

郷 — 村 — 方限 — 門 —
 (郷土) (庄屋) (名主) (名頭) (乙名)
 年寄 (年寄) (庄屋) (名主) (名頭) (乙名)
 郷のしくみ

移住してきた人の出身地は、加世田、田布施（南さつま市）、谷山・喜入（鹿児島市）、伊集院、伊作（日置市）、市来・串木野（いちき串木野市）、甑島（さつま川内市）と記録が残っています。

経路は、谷山・喜入から藩の船で出発し、高須か浜田の浜に上陸して、瀬筒峠を越えるルートと野里をこえるルート、霧島ヶ丘・横山を経由するルートがありました。瀬筒峠は移住してきた人が薩摩半島を望むことができる最後の場所だったので「人配峠」と呼ばれています。そこから大始良・南・吾平と進む道を「人配街道」と呼びました。霧島ヶ丘・横山を経由するコースの峠の坂を「干石坂」と呼びました。この峠から出身地の薩摩半島とこれから住む大隅の平野をながめることができたといわれています。この峠には、今は残っていませんが、大きな「三本松」がありました。

移住者には成年男子一人につき6か月分の食糧、斧、鋤、鎌を一丁ずつ、家族6か月分の食糧、種子、牛馬、住宅が与えられました。人配の人たちはそれぞれ決められた門に入り、用水路開拓、新田開発などに努めました。

人配、永代移住者の苦労と功績、感謝の意を伝えるために、1997（平成9）年に吾平町下名の吉田橋付近に「始良郷下名人配・永代移者顕彰碑」が建てられています。

（江戸）島津氏の政策

薩摩藩は外城制度で支配し、鹿屋に鹿屋郷・高隈郷・大始良郷・花岡郷・始良郷・百引郷・市成郷・串良郷が設置されました。各郷は地頭と呼ばれる役人によって治められ、地頭が居住する場所を地頭館・地頭仮屋と呼んでいました。花岡郷と市成郷は島津本家の分家である、花岡島津家と土岐家の私領となっており、地頭は置かれず、領主が直接治めていました。

郷の中にいくつかの「村」があり「庄屋」が任命され、村の政務を行っていました。各村は複数の「方限」に分かれていてその長を「名主」といいました。「方限」はいくつかの「門」から成り立ち、その長を「名頭」または「乙名」と呼びました。「門」には、数軒の農家が属していました。

薩摩藩は、年貢や夫役の徴収などの農民支配は「門」単位で行われました。

このような薩摩藩の農民の支配制度を門割（かどわり）制度とよんでいます。



なんしゅうおうしゅうくはくち
西郷南洲翁宿泊地の碑（鹿屋市高須町）

○西郷隆盛は年に数回、鹿屋の高須を訪れこの地を基地にして、近くの山野や高山・小根占・大根占などへも出かけ、狩りをしていました。

古江港、高須港の西南戦争の様子

官軍は、軍艦数十隻で高須下浜に上陸し、糧米、酒樽、砂糖、餅、鯉節を運び、高須の120戸ほどの民家に宿をとったといひます。

住民は山に隠れたりしていましたが、高島少将は安心して家に帰れと呼びかけたため、帰宅したといひます。



大始良城、高隈城、串良城に官軍陣地

官軍は志布志・串良・鹿屋・高隈・百引という戦線を敷き、高隈へと本陣を進めていきました。鹿屋での西郷軍と官軍の戦いは、地理的優位を生かした西郷軍の優勢に始まり、官軍は援軍を招集してなんとか西郷軍を撃破していきました。

047

にしはらじょう 西原城の攻防と明治10年の戦い

○西南戦争（明治10年の戦い）

1877（明治10）年の初め、私学校の生徒たちの暴発を発端に、西南戦争が始まりました。西郷隆盛率いる西郷軍は2月14日に、前衛別府晋介率いる二個大隊の先発を皮切りに全軍1万5千の兵で熊本に進み2月21日に熊本城兵と戦闘を開始しました。4月14日背面からの官軍の襲撃により西郷軍はついに破れ熊本城の包囲を解きました。

その後、6月1日人吉、6月20日大口、7月11日飯野に敗れ、形勢は日に日に縮まっていきました。特に、田原坂たはらざかの敗戦を契機に敗走、転戦しながら鹿児島に帰り、城山（鹿児島市）での西郷らによる自害をもって西南戦争は終わります。今も、伊佐市大口の高熊山たかぐまや霧島市牧園町の山間部に壘跡が残っています。

官軍は、鹿屋にも陣をしいて西郷軍と戦いました。7月1日に官軍の高島少将は司令部を高須に置き、同日、上野少佐は串良を攻め砲弾を撃ち込んで鎮圧し、志布志に防塁を築きました。この串良での戦いの砲撃の激しかった痕跡は、今も串良総合支所前の地頭館仮屋跡（市指定文化財）に残っています。

このように官軍は志布志・大崎・串良・鹿屋・高隈・百引という戦線を敷き、高隈へと本陣を進めていき



官軍が駐屯していたとされる西原城跡地（鹿屋市輝北町百引）

ます。一方、西郷軍の主将村田新八は、岩川・末吉・大崎・百引方面を左翼、財部方面をもって右翼とし福山・清水方面を中央として都城を根拠地とし決戦を挑みます。

7月5日に百引の麓に進軍してきた官軍は、一個大隊半司令官は古川少佐でした。同日午後11時ごろ、西郷軍の約400名は、牛根村二川にある官軍警戒線を守る加藤・山形中隊と激戦となり、官軍は三度敗れ援軍を百引に求めましたが、百引は、西郷軍の急襲を受けなかなか援軍を出せなかったと記録にあります。また、7月7日には、都城の西郷軍より、振武隊を主とし、奇兵隊を応援させ午後10時、恒吉から西郷軍の両将振武隊長中島健彦、同官軍貴島清は、振武隊十四個中隊を率いて8日午前7時半、輝北町宮ヶ原・中平房を潜行し、三隊に分かれて進軍し、一弾も発せさせずに前段、茶屋之元、本田氏上の丘を占拠しました。その後、官軍は、西原城に西郷軍がせまるのを察して、山頂に兵を集中させながら、さらに一隊をその左右に配して防戦に努めましたが、西郷軍の精鋭部隊に歯が立たず市成に援軍を求めました。しかし市成も西郷軍の精鋭部隊と交戦中で援軍が出せず、西原城にいた官軍は散り散りになりながら高隈の本営に逃げ帰りました。この時午後4時のことでした。この戦いは、西郷軍の大勝利でした。

官軍は戦況の不利を覆すべく、鹿児島から援軍を求め、援軍が高須から上陸し、各所で西郷軍を破り、7月24日には都城を占領して、大隅方面の戦局の大勢を決しました。

西原城の攻防の結果

この戦いは、西郷軍の大勝利でした。

死傷者 官軍 95人
西郷軍 10人

西郷軍の戦利品

金貨1,648円 大砲2門
小銃48挺 ラッパ2本
弾薬（小銃）3,000発
弾薬（砲）17箱 軍刀6本
胴乱2個 毛布330枚
外套226着 衣袴288枚
被服若干 糧食1,000包
鞍馬一匹

その他 兵士10余名
軍吏補

これらの戦いの官軍の戦死者は曾於市岩川の「官軍墓地」に葬られています。



○県立鹿屋農学校の全景
1917（大正6）年
1908（明治41）年
までは大隅半島唯一の
中等学校でした。



寺子屋は江戸時代に なかった？

「日本教育資料集」によると、鹿児島では私塾1校、寺子屋19校で、掲載されている県では下から2番目でした。地域も限定的で薩摩半島や奄美、徳之島などにありました。鹿児島には郷中教育がありましたが、これは基本的に武士の子ども達を対象にしている寺子屋の場合もそうでした。鹿屋では庶民のための寺子屋というのはほとんど記録に残っていません。

現在の鹿屋市では、鹿屋寺子屋事業として市内31か所の公民館や学校を活用して学習活動の支援や地域の方々との交流活動を行っています。対象は小学生です。これらの活動を通して、子ども同士の学び合いや郷土愛を育むことを目的としています。そうした意味では鹿児島の伝統的な郷中教育とつながっているともいえるのではないのでしょうか。

048

幕末からの教育のあらまし

明治になり、生活様式や風俗にも変化が見られ、また新政府によって、さまざまな改革が行われました。この改革のうち教育面では1872（明治5）年学制が定められ、全国の市町村に必ず小学校を設け、義務教育を徹底させようとなりました。しかし学校といっても、掘っ立て小屋に茅葺きの、名ばかりの校舎で、年額6円の授業料の負担は父母にとってはひどく重いものでありました。当時の1円は約2万円。このころ、鹿屋地域でも郷校が設置されましたが、これが鹿屋地域の学校の始まりです。鹿児島県の場合、寺子屋などの庶民教育施設が少なく、学制に定めた小学校を開設することができませんでした。そこで、変則ではあるものの、各地に増設されつつあった郷校を小学校としました。

1871（明治4）年の廃藩置県により大隅地方の大部分が都城県に編入され、鹿屋では都城県第〇〇郷校という名称で設立されていきました。1872（明治5）年の都城県第三六郷校が鹿屋小学校です。その他、高隈、大始良、南、花岡、笠野原などの郷校が設立されました。

大正時代になると、12年に鹿屋中学校、14年に鹿屋女学校など上級の学校も設置されるようになりました。

現代の寺子屋：放課後、地域住民によって運営されています。



りりし田崎塾



高須浜っ子塾



寺子屋しんかわ塾

○学校の創立から太平洋戦争へ

第一次世界大戦によって日本は繁栄しましたが、その後は一転して不況のどん底に落ち込むことになりました。

この不況から抜け出す手段として日本は戦争への道を歩むことになり、学校もその影響を強く受けることになります。1941（昭和16）年3月、「国民学校令」が公布され、これまでの小学校の名称が廃止され、国民学校に切り換えられました。

太平洋戦争が始まり、学校などでも竹やり訓練が行われるようになり、国内は総力戦の様相が一段と強まってきました。中学校では運動会が中止になったり鹿屋高等女学校では外国語の学習が廃止になったり教育が限定されるようになりました。

野里小学校や笠野原小学校は特攻隊の兵舎として、祓川小学校は戦車隊の兵舎として使用されたため、授業は中止されたり分散授業となったりしていきました。

総力戦の名の下、小学生であっても、出征家族の援護のための田植えや草取りなどの農作業奉仕がありました。

戦災を免れたのは鹿屋・大始良・南・西俣・古江・鶴羽の各小学校のみでした。このように、戦争は物質的にも精神的にも大きな打撃を与え、8月の終戦となりました。

江戸時代の学問所（串良）

江戸時代の串良の教育は、鶴亀城の西端の射場屋敷という台地に二才集会場を設け、そこを学問所としました。

薩摩藩には、郷中教育とよばれる独特の教育システムがあり、その特徴は同じ地域に住む異年齢集団の自主的な相互教育になります。串良ではその学問所を鶴亀城にあやかって鶴亀学舎とよんだそうです。鶴亀学舎は現在の串良小学校にあたります。

郷中教育は青少年を稚児「ちご」と二才「にせ」に分けて、勉学・武芸・山坂達者（今でいう体育・スポーツ）などを通じて先輩が後輩を指導することによって強い武士をつくろうとする組織でした。

現在の鶴亀城跡を見学するなら鹿屋市串良町岡崎を訪ねると、本丸の城郭を確認できます。



※鶴亀城
本丸跡



進駐軍上陸地の碑



戦没者慰霊塔（小塚公園）

真珠湾攻撃の訓練

1941（昭和16）年、鹿屋基地の淵田美津雄中佐は、鹿児島湾で浅海面雷撃の訓練を実施しました。鹿児島市の上空40メートルという超低空の危険な飛行や、海面すれすれに雷撃機が何機も飛び出し、次々に雷撃を繰り返すといった危険な飛行訓練に、市民たちはとても驚いたといえます。

鹿屋での周到な計画と準備によって、真珠湾攻撃は太平洋戦争における日本が成功した作戦のひとつとして語り継がれるものになったといえるでしょう。



鹿児島県とオアフ島を同縮尺で比較

049

太平洋戦争に関する歴史

満州事変、盧溝橋事件を発端とする日中戦争の行き詰まりから日本は真珠湾を攻撃し、5年間にわたる太平洋戦争が始まりました。日本軍はマレー半島及び真珠湾の先制攻撃を成功させましたが、1941（昭和16）年6月のミッドウェー海戦を契機に受け身の戦いを強いられ、全国各地が空襲の被害を受けるようになりました。1945（昭和20）年4月にはアメリカ軍が沖縄に上陸、8月には広島・長崎に原爆が投下されるなど日本軍に勝算はなく、8月15日にポツダム宣言を受諾、太平洋戦争は終結しました。

鹿屋では終戦後の混乱の中、1945（昭和20）年9月4日に、高須の金浜海岸に進駐軍アメリカ海兵隊約2,500人が上陸しました。当時、鹿屋の多くの人々が進駐軍を恐れ山間部等に逃げたといわれています。

○戦没者慰霊祭(小塚公園)

小塚公園慰霊塔は、1958（昭和33）年3月20日に建立されました。尊い生命を祖国のために捧げた若者たちの御霊が祀られています。高さ11mの慰霊塔の頂上には平和の象徴である鳩の像が設置され、塔内には908名の戦没特攻隊員の発進日・所属



桜花の碑



野里国民学校跡の国旗掲揚台

隊名・階級・氏名を書いた過去帳が納められ、^{こんりゅう}建立の日を命日として、毎年戦没者慰霊祭が行われています。慰霊祭には全国各地から遺族が訪れ、海上自衛隊鹿屋航空隊員や市民と共に祈りを捧げます。

○^{おうか}桜花の碑

先ほどの慰霊塔に近い野里町に元特攻隊員らによって建てられた記念碑（桜花の碑）があります。この場所は「神雷特別攻撃隊」（桜花専用の特攻部隊）の宿舎として使われていた旧野里国民学校跡地の一角です。この碑に書かれた文字は神雷部隊と海軍報道班員として生活を共にした作家・山岡荘八氏が書いています。

桜花とは、人間爆弾と呼ばれた特攻専用の飛行機で、1,200kgの徹甲爆弾^{てつこう}が組込まれ航続距離が37kmしかないため、母機に搭載され敵の近くで切り離され敵に体当たりをします。この桜花の碑の辺りは、宿舎から滑走路に向かう位置にあり、出撃する特攻隊員が最後の別れの盃を交わした場所といわれています。

今は車道が横切っていますが、当時は、その道路向かいに、旧野里国民学校がありました。今でも国旗掲揚台が当時のそのままの場所に残されています。

平和記念公園

平和記念公園には、旧海軍航空隊串良基地から飛び立ち戦死した特別攻撃隊員・一般攻撃隊員を祀る慰霊塔が建立されています。滑走路跡の2本の直線道路は桜の名所としても知られ、ドラマ「永遠の0」のロケ地にもなりました。



慰霊塔



滑走路跡



鹿屋基地1ビル



金浜海岸に上陸するブルドーザー



会談が行われた部屋（現在は解体）



上陸した米軍と挨拶を交わす陸海軍代表

鹿屋平和学習ガイド について

鹿屋市内には戦時中3つの（鹿屋、串良、笠野原）海軍基地があり、日本で最も多くの特攻隊員が出撃したまちとして知られています。

「鹿屋平和学習ガイド」は、平成27年度に鹿屋市が正式に認定したガイドで、旅行ツアーや修学旅行などにおいて市内に残る戦争遺跡や歴史についてわかりやすくご案内します。

【対象人数や料金】

個人や団体で料金が異なりますので、下記までお問い合わせください。

【連絡先】

〒893-0064
鹿屋市西原3丁目11-1
鹿屋市観光協会
TEL0994-41-7010
FAX0994-41-6000
(関連サイト)



050

戦争の秘話「太平洋戦争は、 鹿屋から始まった」

鹿屋には海上自衛隊鹿屋航空基地があり、前身は^{ぜんしん}1936（昭和11）年設置の海軍佐世保鎮守府所属^{させぼちんじゅふ}鹿屋航空隊です。日中戦争以降、中国大陸や南方へ向かう軍事拠点として重要な役割を果たしてきました。そしてこの地は、太平洋戦争が始まるきっかけとなりました。「鹿屋会談」が行われた場所でもあります。「鹿屋会談」とは、1941（昭和16）年^{おおにしたき}連合艦隊司令長官山本五十六の命を受けた、大西瀧^{おにしだき}治郎参謀長と源田實^{げんだみのる}参謀によって、「鹿屋基地1ビル」（写真左上・左下）でハワイ真珠湾への奇襲作戦が練られました。その密談が「鹿屋会談」と呼ばれています。それが「鹿屋から始まった」と言われている理由です。

1945（昭和20）年8月15日の日本の敗戦後、9月4日東京湾に次いで2番目に、進駐軍（アメリカ海兵隊）が日本本土に上陸した地（写真右上・右下）が鹿屋市高須町の金浜海岸です。その後、GHQによる日本の占領政策が始まっていきました。

鹿屋市の戦跡地図



○市内の戦跡

日本でも最も多くの特攻隊員が飛び立った「鹿屋」

- 川東掩体壕
- 敵機の空襲等から飛行機を守るために作られた格納庫
- 桜花の碑・野里国民学校跡
- 人間爆弾桜花の神雷部隊が宿舎としていた場所
- 小塚公園
- 特攻隊908名の御霊をまつる慰霊塔がある公園

特攻隊の足跡が残る串良エリア

- 串良基地跡の地下壕第一電信室
- 特攻隊が突撃前に送る電信を受信していた地下壕
- 平和公園（串良航空隊の航空基地跡）
- 滑走路跡の2本の直線道路は桜の名所

戦後が始まった地 高須エリア

- 金浜海岸（進駐軍上陸地の碑）
- 1945（昭和20）年9月4日、日本本土で2番目に進駐軍アメリカ海兵隊2,500人が上陸
- 1945（昭和20）年9月2日、ミズーリ号調印式の前に、東京湾に日本本土初上陸している。
- 高須トーチカ
- 米軍の本土上陸に備えて海岸部に作られたトーチカ（陣地）

弾薬集積所の大爆発

鹿屋市郷之原町にあり、敷地約800㎡に、日本軍の250キロ爆弾315個や10キロロケット弾など78個など総重量226.7tの爆発物が集められていました。1945（昭和20）年11月8日午前11時ごろ、爆発事故が発生。近くの2集落69戸が焼け、344人が家を失いました。

2020（令和2）年、鹿屋市は米国立公文書館に保管されていた米軍の事故報告書を発見しました。報告書によると、日本人作業員が小型照明弾を誤作動させて大型照明弾に引火したのが事故原因とのことでした。



米国立公文書館に残る爆発前の弾薬集積所の写真



鎌田堀の深井戸で、生活用水を汲み上げている様子
(1927(昭和2)年頃)



つつもっほい

土持堀の深井戸県指定文化財

鹿屋市串良町細山田5323番地1

天保(1818年から1843年の間)に掘削された
直径約90cm、深さが約64mもある井戸

昭和産業の進出 (かねがらち 鐘淵紡績)

昭和産業とは、鐘淵紡績(現クラシエ)が全額出資した会社です。1929(昭和4)年に設立されました。目的は、養蚕(蚕を育てて生糸をつくること)でした。鹿屋に大隅支店が置かれ、笠野原を中心に、13km²(東京ドーム270個分以上)の土地を昭和産業が買い上げて桑畑をつくり、大規模な養蚕を開始しました。鹿屋だけでなく、志布志や宮崎県でも大規模に養蚕を行うようになりました。

しかし、会社創立の年に世界恐慌という世界的な大不況が発生したことで生産が縮小され、鹿屋では1934(昭和9)年に製造を中止してしまいました。また、日中戦争や太平洋戦争が始まったことにより、戦争に関する産業が優先されるようになっていき、製糸業は優先されなくなっていきました。

化学繊維がつくられるようになった1952(昭和27)年に、昭和産業は解散しました。

051

シラス台地とのたたかい

シラスとは、約2万6000年前の始良カルデラの噴火の時に出了た火砕流や、空中に舞いあがった軽石や火山灰などからできた土で、鹿児島県の約6割はこのシラスに覆われています。シラス台地とはその土が積もってできた少し標高が高い土地のことです。

シラス台地は水が得にくく、さらにシラス自体が栄養分に乏しい上に、水を保ちにくくて雨が降ってもすぐに水が地下に吸い込まれてしまうため、農耕がしづらく、「不毛の地」と呼ばれていました。

そのため人々は陸稻、アワ・ヒエ・麦類・大豆・菜種などを細々と作って暮らしてきました。江戸時代中期に琉球(今の沖縄県や奄美群島)から伝わったさつまいもは水が乏しくあまり土地に栄養が無くても育つ作物だったため、飢えをしのぐために当時の薩摩藩で急速に広まっていきました。

また、シラスの土地ではがけ崩れや土石流などの災害が起きやすく、シラスとのたたかいは災害とのたたかいでもあります。土砂崩れの被害を防ぐための砂防ダムを作ったり、道路をがけの側から離したりする対策が行われています。



笠野原台地を開発するトラクター（1931（昭和6）年頃）

○笠野原台地は6,000ha

笠野原台地は、東側は串良川、西側および南側は肝属川に囲まれた南北16km東西12kmほどの三角形に近い形の台地で、シラスと水の不足で生活がしづらいところでした。

「いやじゃ いやじゃよ 笠ん原はいやじゃ55尋の綱を引く」という民謡が残っています。55尋とは約100mの長さです。笠野原では水を得るために川に水を汲みに行くか、深いところで80mを超す井戸から綱で引っ張って水を得なければなりません。水汲みの仕事が嫌で、笠野原に嫁ぐことを女性が嫌がったことを歌われるほどたいへんだったのです。

笠野原台地では養蚕やさつまいもの栽培などを行っていましたが、大正時代に笠野原耕地整理組合が結成されました。そこで、農業の増産の前に飲料水の確保が先ということが決まり、1925（大正14）年から1927（昭和2）年かけて、組合員からお金を集め、ほぼ人力で水道をひきました。また、農地を区画整理して直線にしたので農作業が格段にしやすくなり、笠野原台地の農業発展の基礎となりました。

鹿屋初トラクター

笠野原はもともと松や茅という植物が生い茂り、耕地にするためには開墾する必要があります。人力や馬を使って木の根を抜いて開墾が進められました。荷馬車を使って道具を運搬したことで開墾は進んでいきました。

さらに、開墾への補助金を農林省（当時の国の役所）に申請して補助金を得ることに成功しました。

1931（昭和6）年頃にはトラクターが導入され、開墾がさらに進んでいきました。このトラクターが鹿屋で初めて使われたトラクターのようです。「昭産」という文字が見えます。昭和産業が養蚕のために開墾を進めた際の写真だと考えられます。トラクターの側に立つ人はどこか誇らしげです。不毛の地を緑の地にするのだという気持ちだったのかもしれませんが。この開墾地には桑や、現在も栽培が盛んな茶などが植え付けられました。

この後も農業用の水は不足し、人々の暮らしは決して楽ではありませんでした。



笠野原台地開発史
～水を求めて苦難の歴史～より転載



完成した高隈ダム

水が貴重だった逸話 「タタキ水」

1916（大正5）年頃、細山田地域に県の役人が視察に来て、ある有力者の家に泊まった時の話です。

歓迎の宴で、役人が有力者の娘に水が欲しいと頼みました。

役人が娘の行動を見ていると、娘は水瓶をカーンと叩いては水を汲み、カーンと叩いては水を汲んでいました。役人は飲料水が大切なので水神様へのお礼の意味で鐘をたたいて水を汲むのだと、その娘の水への感謝の気持ちや素直さにとても感心したそうです。

翌朝、そのことを家の主に伝えると、「それは、カンとたたいてボーフラを沈めてから水を汲んでいるんだ。」と言われました。

役人は気分が悪くなり、お酒を飲みなおしたそうです。

052

高隈ダムの完成

『いやじゃいやじゃよ 笠野原（かさんばい）は
いやじゃ 馬の背中で水を飲む』

この台地に住んだ人々の、水に苦しんだ悲痛な心情が歌われた民謡です。

江戸時代から移住が始まった笠野原台地は火山噴出物が積み重なってできたシラス台地が広がり、農業だけでなく生活用水の確保にも人々は苦労を重ねていました。降った雨を桶おけにためて掃除に使ったり、一度沸わかした風呂さはんじを3日水を替えずに入ったりすることは日常茶飯事でした。

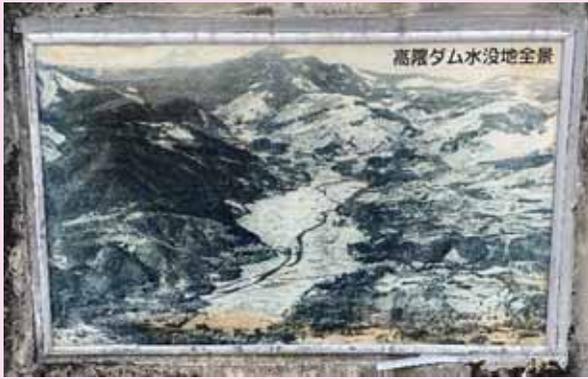
1925（大正14）年、県議会議員であった中原菊次郎らが中心となり、まずは飲料水の確保に動きました。1926（昭和2）年、初めて上水道が引かれたとき、台地には人口約5,000人、1,000戸の農家が生活をしていました。その後耕地開発が進められ、戦後になると食糧不足の解決のため、笠野原畑地かんがい事業の構想が持ち上がり、1953（昭和28）年高隈ダムの建設が計画されました。

総事業費26億円

高隈貯水池：上古園・下古園・井手の3集落

高隈ダム：柏木地区204戸 耕地

移転家屋193戸（学校・公民館）



水没した柏木地区



寺園勝志県知事像

ダムの建設をめぐるっては、反対運動が巻き起こりました。寺園勝志鹿児島県知事の懇親会の際は、200名の反対総決起集会が開かれました。デモは繰り返され、地区内を二分するほどでした。畑かん推進派は粘り強く説得に当たりました。県庁前で約1,200人がデモを行なうほどの反対運動でしたが、除々に収束し、水没財産保障交渉の調印が行われました。

1967（昭和42）年、ダムから水が送られ、スプリンクラーで水が散布されたときは歓声が上がりました。スプリンクラーが設置されたことで、東原地区の茶園は霜の害から免れ、全国品評会でも上位入賞するほどの銘茶となっています。

1980（昭和55）年、全ての工事が完成しました。甘藷かんしょや菜種しかとれなかったような荒地であった笠野原台地は、高隈ダムで貯水した水が配水されて生まれ変わりました。

現在は、稲・露地野菜・施設野菜・花卉・たばこ・飼料作物・麦・蕎麦そば・茶・桑くわ・果樹・芝しばなどが収穫できるようになっています。

沈んだ集落

高隈ダムの建設にあたり柏木地区（上高隈町下古園・上古園・井手の3集落）が水没することになりました。1959（昭和34）年にダム建設が正式に決定すると水没地区の住民による高隈ダム対策委員会が設置され、1962（昭和37）年8月にその補償について決着し、1963（昭和38）年2月に着工し、1967（昭和42）年3月にダムは完成しました。

実際にはダム建設に関わる論争は15年に渡って行われており、笠野原開発の礎いしづえとなり離村などされた方々のことは、忘れてはならない歴史です。

〔水没した主な財産〕

- ・完全水没…152戸
- ・水没線上…44戸
- ・非移転…8戸
- ・水田…57町9反
- ・畑…5町1反
- ・山林…17町6反
- ・宅地…3万408坪

〔移転人員〕

- ・大人…638人
- ・子ども…284人



正面からの輝北ダム

重力式コンクリートダムの堂々とした姿を見ることができます。

守られた神社の宝物



12個の仮面

ダムに沈む家々の民俗は、その戸数は少なく、地域は狭いものの有形無形の文化の伝承は豊かでした。輝北歴史民俗資料館には水没を免れた12個の仮面が展示されています。写真の鬼神面は利神社の神舞面として使用されました。



鬼神面

053

輝北ダムの完成

鹿屋市輝北町^{ひらぼう}平房にある輝北ダムは鹿屋市・志布志市・大崎町の農業用水のダムとして建設されました。本地区は、鹿児島県の東部、大隅半島の中央部に位置する4,000haの畑地帯で、県内でも中核的な農業地帯であり、畜産は県内有数の生産量を誇り、いも類や茶の栽培も盛んです。

しかし、もともと保水性の乏しい火山灰に覆われ乾燥しやすく干害を受けやすいため、かんがい施設の整備が必要でした。これまでも先人の努力により、^{ひら}拓かれた広大な畑地の生産性向上と保全のために様々な整備が行われてきましたが、かんがい施設整備はその総仕上げとも位置づけられるものです。その中心が輝北ダムになります。

輝北ダムの建設工事が始まったのは1994（平成6）年で、本体工事は1999（平成11）年に着工しました。完成したのが2005（平成17）年です。この工事は、正式には曾於南部畑地かんがい事業という名称になります。この輝北ダムの規模は長さ140m、高さ41.9mの直線コンクリート^{せき}堰（長方形の大型の箱）で、総貯水量は820万³mにもなります。それぞれの畑地への支流を合わせると79.1kmになり、地域農業の発展が期待されました。



ダム周囲に咲き乱れるアジサイ（6月頃）

しかしながら建設に伴って平房川流域の水没という避けられない問題が発生し、今まであった宅地、山林、田畑、道路が湖底に沈むことになりました。先祖代々長い歴史のある郷土のもの全てが失われることに対して地元の人々の悔しさ、悲しさは大きなものでありました。当然そこに大きな反対運動も起こり、何回も話し合いが行われました。ダム建設予定地は人間の営みが縄文時代にまで遡れるほどに長い歴史を持つ地域であるといわれており、水没前に貴重な歴史的、民俗文化財について調査し、保存策についても検討する必要がありました。

具体的には、農地等約79haが水没し、民家45世帯と公民館の移転が避けられないことが明確になり一戸一戸交渉が行なわれました。その結果、曾於地域の農業の発展をはかるための畑地かんがいの必要性について住民の理解を得ることができ、輝北ダムの建設につながりました。水没地域の歴史的民俗文化財の調査については、鹿児島大学の民俗学専攻の学生らを中心とした調査団が編成され調査が行なわれました。このような経緯をへて造られた輝北ダムは、種類としては重力式コンクリートダムと呼ばれるもので、一番多く造られているダムです。水の力をダムの重さで支える構造で、横から見ると三角形になっています。重い堤体を支えられる硬い地盤に作られました。

ダム湖の活用



農業用水のダムとして建設された輝北ダムですが、ボート競技の練習場としても利用されており、2023燃ゆる感動かごしま国体ではローイング（ボート）の会場となります。輝北ダム建設に伴い、移転記念として設置されたのが輝北ダム平房公園です。きれいに整備され市民の憩いの場になっています。





1935（昭和10）年の昭和天皇行幸



平田邸に到着した昭和天皇
写真提供：平田盛家氏

平田邸

平田邸は鹿屋の麓に位置する、鹿屋でも最も古い武家集落である古前城の中心にあります。古い武家屋敷作りの建物ですが、昭和天皇が宿泊されるにあたって、和室を洋風にしつらえたそうです。

二鶴（料理屋）

現在の北田・大手町商店街に「二鶴」という料理屋がありました。お店の情報についての記録は残っていないのですが、お店の外観と、大通りに掲げられた看板の写りが残っています。

看板には、「二鶴」「電話二〇八番」「うなぎ蒲焼」「ちり鍋」「折詰」などの文字を見ることができます。

「ちり鍋」は、白身魚を野菜などと一緒に水炊きにした鍋料理で、「折詰」は、木で



できた浅い箱に料理を詰めたお弁当です。

054

昭和天皇の行幸ぎょうこう

鹿屋の地に昭和天皇が行幸されたことが、2回あります。上皇陛下（平成の天皇）は皇太子の時に行啓ぎょうけいされました。そのことについて紹介します。

○昭和天皇の1回目の行幸 1935（昭和10）年

あひらのやまのうえのみさきぎ
明治時代に正式に吾平山上陵が確定された後、1935（昭和10）年11月に昭和天皇は宮崎県と鹿児島県の陸軍の軍事演習の視察で志布志に来られた際に、初めて吾平山上陵を行幸されました。

これ以前は、1907（明治40）年に大正天皇が皇太子時代に、1920（大正9）年に昭和天皇が皇太子時代に、代理の方が御代拝ごだいはいされています。

○昭和天皇の2回目の行幸 1949（昭和24）年

戦前の日本では天皇陛下のことを神様の末裔として敬っていましたが、終戦翌年の1946（昭和21）年1月1日、昭和天皇は“天皇は神ではなく人間である”という宣言を表明されました。そして、戦後苦しい想いをしている国民をなくさめ励ますために、1946（昭和21）年2月～1954（昭和29）年8月にかけて日本各地をご巡幸しゅんこうされました。

1949（昭和24）年6月1日から4日間、鹿児島



上皇陛下の皇太子時代の行啓

写真提供：長崎まさ子氏

県を行幸される昭和天皇を一目見ようと、多くの県民が駅や沿道などに集まりました。

鹿屋には6月3日、鹿屋農業高等学校の奉迎場（特設会場のようなもの）に昭和天皇が到着すると、約3万人の鹿屋市民が旗を振り、歓声をあげて出迎えました。

その後、福岡商工局鹿屋無水酒精工場などを視察されました。

視察を終え、昭和天皇は鹿屋市古前城町の平田邸へ宿泊され、翌朝には大勢の市民の歓声の中、鹿屋駅から志布志へのご出発されました。

○上皇陛下の皇太子時代の行啓

上皇陛下（平成の天皇）は、1962（昭和37）年5月9日に、1959（昭和34）年に上皇后の美智子様とのご結婚の報告に吾平山上陵を訪れています。この時の写真は、吾平山上陵に複数枚残されています。



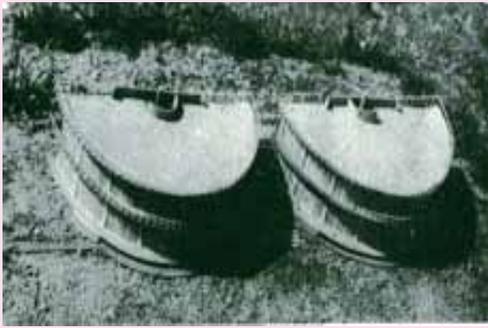
その他の皇族の吾平山上陵への参拝

吾平山上陵は、天皇家の始まりの地であるため、皇族の方（てるのみやしげこないしんのう照宮成子内親王殿下、みかさのみやたかひと三笠宮崇仁親王殿下、きたしろがわふさ北白川房子様）が訪れています。

その中で、北白川房子様（明治天皇の7女、伊勢神宮祭主）については、その時の写真も吾平山上陵には残されています。



- ・照宮成子内親王殿下... 昭和天皇の第1皇女子（2男5女のうち第1子）
- ・三笠宮崇仁親王殿下... 大正天皇の第4皇男子（昭和天皇の弟）



鹿屋小学校の半円校舎
(昭和32～55年)



旧百引中学校
(2011(平成23)年3月閉校)

西暦・和暦	学校数合計	鹿屋市小・中学校の沿革
1864 (元治元)	小1校	百引小 (当時:和泉ヶ野「学問所」)開校
1869 (明治2)	小4校	鹿屋小(当時:第三十六郷校)開校 鶴羽小(当時:第六十五郷校)開校 高隈小(当時:素謙館)開校
1873 (明治6)	小7校	笠野原小 (当時:第七十五郷校)開校 大始良小 (当時:第五十五郷校)開校 串良小(当時:第七郷校)開校
1874 (明治7)	小9校	吾平小 (当時:下第六十一郷校)開校 南小(当時:第五十六郷校)開校
1876 (明治9)	小12校	市成小 (当時:市成尋常小学校)開校 細山田小 (当時:細山田尋常小学校)開校 上小原小(当時:上小原小学)開校
1877 (明治10)	小13校	高尾小(当時:柏木の馬庭源四郎宅 借用寺小屋式見習い)開校
1878 (明治11)	小14校	田崎小(当時:永吉小学校)開校
1878 (明治11)	小15校	高須小(当時:北高須の上原の家屋 を教場として)開校
1878 (明治11)	小17校	被川小(当時:上名小学)開校 大黒小開校
1879 (明治12)	小20校	野里小開校 平南小 (当時:平房簡易科小学校)開校 鶴峰小(当時:上名小)開校
1892 (明治25)	小21校	菅原小学校 (当時:白水尋常小学校)開校
1899 (明治32)	小22校	下名小 (当時:下名尋常小学校)開校
1909 (明治42)	小24校	西原小 (当時:西原尋常小学校)開校 浜田小(当時:大始良尋常小学校分 教場)開校
1918 (大正7)	小25校	神野小(当時:鶴峰高等尋常小学校 裏岳分教場)開校
1923 (大正12)	小26校	西俣小 (当時:西俣尋常小学校)開校
1924 (大正13)	小27校	古江小(当時:鶴羽尋常高等小学校 分教場)開校
1936 (昭和11)	小29校	柏木小 (当時:柏木金太郎宅を借用)開校 高牧小(当時:西原尋常高等小学校 高牧分教場)開校
1941 (昭和16)	小30校	桜町小(当時:新城小学校校野分教 場)開校
1943 (昭和18)	小31校	鹿屋小(当時:鹿屋国民学校)が分 離し、寿小(当時:第二鹿屋国民学 校)開校

055

学校の変遷

1872(明治5)年の「学制」発布により、本市(合併前の鹿屋市・輝北町・串良町・吾平町)にも小学校が増加し、1945(昭和20)年代前半までの間に30校以上整備されました。また、1947(昭和22)年には、現在の6・3・3制が導入されたことにより、14校の中学校が誕生しました。

また、1970(昭和50)年代になると、市街地の学校が大規模化し、新たに3校(2小学校・1中学校)が開校することになりました。

一方、本市全体の児童生徒数は年々減少するなかで、学校規模の二極化が進み、地域によっては小規模、過小規模の学校が増加してきました。特に、平成20年代に、統廃合が行われ、2021(令和3)年には、小学校23校、中学校12校となっています。





吾平中学校
(1955(昭和30)年)



串良中学校
(1954(昭和29)年)

今後本市では、学校規模の適正化や学校施設の長寿命化を図りながら、子供たちの学びの環境を整えてまいります。

○鹿屋市立鹿屋女子高等学校の沿革

鹿屋女子高等学校の歴史は、1958(昭和33)年4月1日から始まります。当時の定員は300人で、全日制家庭科の高等学校として授業を開始しました。1962(昭和37)年の創立5周年式典では県立図書館長の久保田彦穂(椋鳩十)氏作詞の校歌が発表されました。その後、定時制畜産科(高隈校舎)が併設され、1973(昭和48)年に鹿屋女子高等学校併設高隈高等学校と改称しました。(昭和63年閉校)平成26年に現在の普通科、情報ビジネス科、生活科学科に再編され、2020(令和2)年の3月には現在の新校舎が完成しました。

○鹿屋市立鹿屋看護専門学校の沿革

鹿屋市立鹿屋看護専門学校は、豊かな人間性を培い看護師として必要な知識・技術・態度を修得させ、地域社会に貢献できる有能な人材育成を目的に、1978(昭和53)年に看護婦養成所として開校しました。1994(平成6)年には鹿屋市立鹿屋看護高等専修学校と統合され、高等課程准看護学科・専門課程看護学科の2学科を有する学校となりました。2008(平成20)年4月、3年課程の看護師養成所へ課程変更し、現在に至るまで、多くの卒業生が保健・医療・福祉施設等で地域に貢献する看護職として活躍しています。

西暦・和暦	学校数合計	鹿屋市小・中学校の沿革
1947 (昭和22)	小31校 中14校	鹿屋中(当時:被川中)・第一鹿屋中(当時:西原中)・田崎中・大始良中・花岡中・高須中・高隈中・市成中・百引中・串良中(当時:串良第一中第三教場)・吾平中・神野中(当時:吾平中神野分校)
1948 (昭和23)	小32校 中14校	東原小(当時:被川小学校東原分校)開校
1950 (昭和25)	小33校 中14校	西俣小星塚分校が開校
1958 (昭和33)	小34校 中14校	岳野小(当時:二川尋常小学校岳野分教場)開校
1966 (昭和41)	小33校 中14校	西俣小星塚分校が開校
1971 (昭和46)	小31校 中14校	高牧小・桜町小が開校となり、鶴羽小学校に統合
1979 (昭和54)	小32校 中14校	西原小が分離し、西原台小開校
1983 (昭和58)	小33校 中14校	寿小が分離し、寿北小開校
1987 (昭和62)	小33校 中15校	鹿屋中・田崎中が分離し、鹿屋東中開校
1988 (昭和63)	小33校 中15校	柏木小が開校し、高隈小に統合
1990 (平成2)		岳野小が休校(2011に閉校)
1991 (平成3)	小32校 中14校	神野中が開校し、吾平中に統合
2006(平成18)		鹿屋市・輝北町・串良町・吾平町の合併
2011 (平成23)	小28校 中13校	百引小・平南小・市成小・高尾小・岳野小(休校中)が開校し、輝北小開校 市成中・百引中が開校し、輝北中開校
2013 (平成25)	小25校 中13校	鶴羽小・古江小・菅原小が開校し、花岡小開校 施設一体型小中一貫校(花岡小・花岡中)開校 神野小が開校し、吾平小学校に統合
2015 (平成27)	小24校 中13校	浜田小が開校し、大始良小に統合 高須中が開校し、第一鹿屋中・大始良中にそれぞれ統合
2020 (令和2)	小23校 中12校	高須小が開校し、野里小に統合



中津神社



田崎神社

かぎ 鉤引き祭

このお祭りは、2月の第3日曜日に行われる神木引きで、市無形民俗文化財に指定されています。当初は旧暦2月の卯の日に行われていました。起源は不詳ですが、300年以上前から伝わる農業生産の予祝行事です。

上、下の地区に分かれ、祭りの当日の早朝、それぞれカギとなる長さ10mほどのサクラ、エノキ、ニレなどの堅い木を切り出し、根元がV字状のカギとレ状のカギをからませて引き合い、木が裂けるか、大きく引き込まれた方が負けとなります。勝った地区が豊作といわれ、また勝った側の木の枝は家内安全のお守りになるといわれています。別名「けんか祭り」ともいわれます。



056

鹿屋市の神社1

日本では古来から民俗信仰として高い山、森、老木、巨岩などを神聖なものととらえ、その周りに垣を造り、^{注1}ひもろぎを建て崇拝しました。文化が進むにつれて、拝所を建てたり、鳥居を造ったりして、現在の神社の基になっています。ここでは、鹿屋地域に所在する神社について紹介します。

なかつ ○中津神社（鹿屋市上高隈町759）

この神社に祀られている神様は、^{ナカツウダツミノミコト}中津少童命です。日本創生神の伊弉諾命が小戸の阿波伎原で楔ぎをされた時に生まれた神で、^{イザナギノミコト}天照大神、^{アト}須佐男命の姉兄神であり、全国八万社で唯一の祭神です。

神社は、1351（正平6）年頃に領主の肝付氏によって創建されました。ところが1608（慶長13）年に社殿が焼失し、その後建築に取りかかり1653（承応2）年に完成しました。この本殿が360有余年経った現在にも残っている本殿です。新田開発のため、現在地に移転され、2007（平成19）年に社殿の改築が行われました。

ななかりおさたぬき ○七狩長田貫神社（鹿屋市田崎町517） （通称 かりおさ神社・田崎神社）

この神社に祀られている神様は、^{ワケイカツチノミコト}別雷命です。1504（永正元）年11月15日、伊勢の国の田丸玄蕃とい



菅原神社

う人が伊勢の国から神像を背負って来て創建したといわれています。また一説には、1383（永徳3）年12月24日、山城の国（現在の京都市付近）の加茂神かも社より分神したともいわれています。

すがわら
○菅原神社（鹿屋市天神町 4014）
（通称 荒平天神）

この神社に祀られている神様は、菅原道真公みちざねこうです。道真は平安時代の文章博士として詩歌、書道に秀で、遣唐使の廃止を進言した事でも知られ、宇多天皇の信任が厚い人でした。しかし藤原氏との政争に敗れ、太宰府さいふに左遷され失意のうちに亡くなりました。彼の死後、都ではさまざまな天変地異があり、人々は道真の霊れいのたたりだとして、京都北野天満宮に「天神様」として祀り、学問の神様として信仰されています。

本神社の創建年代は不明ですが、戦国期または1532年～1555年（天文年間てんぶん）頃と伝えられており、昔から地元住民の崇敬すうけいが篤く、毎月25日は縁日あつとして多くの参拝者が訪れます。

県道68号線沿いにある、海岸から海に突き出した岩山に建立されており、満潮時に海に浮かぶその様子から岩山は「天神島」とも呼ばれる神社とその風景は「鹿屋八景」にも選ばれており、周辺を含めて風光明媚な場所となっています。

注 1...ひもろぎとは、臨時に神を迎える依り代

田崎神社のクスの木とハートマーク

田崎神社には樹齢約950年といわれる大クスがあり、鹿屋市の文化財に指定されています。

また、本殿左側社務所近くにある銀杏の木にはハート型をした穴があります。これは自然にできたものだそうです。





利神社



諏訪両神社

諏訪両神社の古木



境内にあるイチヨウ、イヌマキの古木は、1981（昭和56）年に輝北町指定文化財に指定されました。いずれも樹齢400年以上といわれています。

しかし、たび重なる台風襲来などにより現在は、イチヨウのみとなっていました。

境内周辺のイヌマキの幹には約3cmの傷が無数にあります。この傷は昔、戦に臨む際、武運長久を願ってお守りとして神社より鉄の鎌を受け、無事帰還すると願ほどきの意味からこの神木へ打ち込んだ跡です。こうした風習は太平洋戦争まで続き、戦争の恐ろしさを樹内に包み込んでいます。



057

鹿屋市の神社2

ここでは輝北地域に所在する神社を紹介していきます。

○利神社（輝北町上百引3215-2）

この神社に祀られている神様は、アメノコヤメノミコト天兒屋根命です。

利神社は、輝北小学校の近くにあるおいざくら老桜に囲まれた社で、784（延暦3）年にふじわらのうおな藤原魚名が京都に創建したのが始まりです。1181（養和元）年、魚名の子孫であるすしづせんのかみすけさだ凶師豊前守祐貞が利大明神を奉じて西原城へ赴任したことがきっかけです。当時、社殿は下百引にありましたが、たびたびどうごもり堂籠川のはんらん氾濫に遭いました。そこで、1882（明治15）年、現在の上百引に移転しました。

例祭は11月17日で、明治末期まで浜戸下りのみこし神輿、なぎなた舞、神舞などが奉じられていました。

○諏訪両神社（輝北町上百引1754）

この神社に祀られている神様は、タヂミナカタノミコト建御名方尊とコトシロ事代主命の二柱の神様です。

諏訪両神社は、国道504号沿いの諏訪集落下の水田地帯にあります。1558（永禄元）年に創建され、昔は付近に人家が立ち並び、にぎやかな町でした。

例祭は9月28日です。



日枝神社



太玉神社

ひえだ
○日枝神社（輝北町市成1818）

この神社に祀られている神様は、オオヤマズミノカミ大山祇神です。

日枝神社は、「山王さん」や「山王どん」の愛称で、さんのう周辺地域の人々に厚く信仰されている「牛馬の神」を祀る神社です。

1457（長禄元）年、肝付兼忠（高山城城主）と肝付兼秀（市成城城主）により建立されました。その後、肝付左馬守が再興、1873（明治6）年に現在の輝北町市成に移転されています。

例祭は4月第1申さるの日（現在は第2日曜）で、畜産まつりが行われています。

ふとたま
○太玉神社（輝北町市成2149）

この神社に祀られている神様は、フトダマノミコト太玉尊です。国道504号沿いの輝北町市成にあります。

創建は1362（正平16）年以前とあるだけで明らかではありません。輝北町市成の出生とされる太玉尊は「穀物の神」として崇められてきました。

例祭は3月1日で、「御田打」という行事がおたうち壮年たちによって行われ、今でも氏子たちにより例祭が続けられています。



祭事で使用していた仮面（輝北歴史民俗資料館所蔵）

日枝神社畜産まつり

日枝神社の広場は、昔から武士の乗馬の鍛錬場や馬のせり市場など、畜産振興の場として広く利用されてきました。

現在も続く例祭では、家畜の安全を祈願し、畜産業がますます繁栄することを願って毎年4月第2日曜日に畜産まつりが日枝神社境内にて行われています。

このまつりでは、牛1頭が当たる抽選会があり、参加者に人気のイベントとなっています。また、ステージでは演芸大会や歌謡ショー、地元住民参加のカラオケ大会なども催されています。





八幡神社



鵜戸神社

八幡神社の移転

八幡神社は1871（明治4）年10月鹿児島県から大始良麓の新八幡神社へ一緒に祀るよう指示がありました。しかし、吾平町は八幡神社を上名村の神様にして下さいと願い、中福良の田中神社の土地を八幡神社の土地と決め、吾平山上陵近くにあった鵜戸神社の建物をそこへ移し、今に至ります。

八幡神社には、煙草神社と鍬をもっためずらしい田の神様があります。



058

鹿屋市の神社3

ここでは吾平地域に所在する神社を紹介していきます。

○八幡神社（吾平町上名816）

この神社に祀られている神様は、応神天皇（15代天皇）・応神天皇の母神功皇后じんくうこうごうの他全部で6柱が祀られています。

1871（明治4）年10月頃、吾平総合支所隣から今の大字上名の中福良へ移されました。この八幡神社は、大隅正八幡（現在の鹿児島神宮）の四所の別宮の一つとして、始良（吾平）の荘を開発をしていた平良宗が1043（長久4）年に建てたと伝えられています。

○鵜戸神社（吾平町麓3579）

この神社に祀られている神様は、ウガヤフキアエズノミコト 鷓鴣草葺不合尊、タマヨリヒメ 玉依姫命、イツセノミコト 五瀬命、イナヒノミコト 稲飯命、ミケイリノミコト 御毛入野命、カンヤマトイワレ 神日本磐余彦尊ヒコノミコト 6柱が祀られています。

1871（明治4）年に八幡神社が中福良へ移された後、吾平山上陵の川の向かい側にあった鵜戸神社を、現在の吾平総合支所隣へ移しました。今の建物は1964（昭和39）年に造り直したものです。境内には、あ 愛宕様・たご 馬頭観音・ばとうかんのん 薬師様・ごりんとう 正安の五輪塔・野町観音・護国殿・平和の碑などがあり、クス・カヤ・ムク・ハゼ・イチョウが大きく立派に育ち、森を作っています。



大川内神社



宮比神社

おおかわうち

○大川内神社 (吾平町麓椎実田5645-1)

この神社に祀られている神様は、^{カンヤマトイワレヒコノミコト}神日本磐余彦尊と妻の^{アイラツヒメ}吾平津媛、そしてご両親の^{ヒコナギサタケウガヤフキ}彦波瀲武鸕鷀草葺不合尊・^{アエズノミコト}玉依姫と祖父の^{ヒコホホテミノミコト}彦火火出見尊の5柱が祀られています。

大川内神社は神野にあり、以前は麓村の神社でした。

みやび

○宮比神社 (吾平町下名417)

この神社に祀られている神様は、^{アメノウズメノミコト}天宇受売命です。下名の^{いがんじま}井神島にあり、別名^{たかめ}高目神社といいます。

1544(天文13)年肝付家16代肝付兼続が健康で長生きすることを願い、建てたという記録があります。古事記によれば、天宇受売命が、天の岩屋戸の前で踊り、かくれていた天照大御神を引き出すことができ、神々の住んでいる場所や地上も自然と日が照り、明るくなったそうです。

いくさ

○軍神社 (吾平町上名6997)

この神社に祀られている神様は、^{イワナガヒメ}石長比売です。^{コノハナサクヤヒメ}石長比売と^{ニニギノミコト}木花咲耶姫は姉妹で瓊瓊杵尊に嫁ぎますが、容姿を理由に石長比売だけ家に帰されます。寿命をつかさどる神様であった石長比売はこのことを恨んで、寿命の無いはずの神様である、瓊瓊杵尊や生まれてくる子どもを短命にしたとされています。

いくさの神 (大川内神社、軍神社)

大川内神社の吾平津媛は、神武東征に子の手研耳命を同行させ、自身は吾平の地で、夫やわが子の御東征成功と無事を祈りました。そして、その成功から今では「いくさの神」と崇められています。しかし、手研耳命は御東征後に反逆の罪で異母兄弟から殺害されています。

軍神社に祀られている石長比売は、寿命を司る神であることから後に「いくさの神」としても崇められます。どちらも、非業の経験をしています。今では「いくさの神」として地域の人々から大切に守られています。



軍神社



月読神社

万八千神社の神事

万八千神社は、奈良時代に社司である石塚左近の祖先が都からこの地にやってきたことがきっかけで建てられた神社です。この神社では初め、「本社山城国賀茂大明神・下総国香取大明神・常陸国鹿島大明神」の3柱の神を安置していたという記録が残っています。また、万八千神社には祀られている神々に由緒の深い宝物や日常で使われていた道具、衣装類などが置かれています。

万八千神社では、旧暦の6月28日に鹿屋市の船間海岸で特殊な神事を行っていて、船間海岸には神社に伝わる舟つなぎ石があり、この舟つなぎ石にしめ縄を張ってお祓い等を行います。その後、海岸から帰ってくる途中にある橋口屋敷の石のほこらに塩を供えて、再びお祓いを行うという神事です。この神事は夏越祭の本番前に行われていて、夏越祭における神事は、藩政時代から欠かさず継承されています。

059

鹿屋市の神社4

ここでは串良地域に所在する神社を紹介していきます。

つきよみ ○月読神社（串良町有里3134）

この神社に祀られている神様は、ツキヨミノミコト クニノトコタチノミコト月読尊や国常立尊のほか4柱です。

この神社は十五社大明神の末社であると言われています。また、元々は細山田にありましたが、1397（明応4）年に鶴亀城を攻略した島津豊後守忠朝が現在の宮ノ下に移したと言伝えられています。

ことしろぬし ○事代主神社（串良町岡崎1785）

この神社に祀られている神様は、コトシロヌシノミコト シタテルヒメノミコト ミナミカタミノミコト事代主命や下照姫命、南方刀美命です。

この神社は大隅国が建国される前、飛鳥時代から奈良時代の間創建されたと言われています。また、事代主神社は1118年～1120年（元永年間）以降8回ほど再興されたという記録も残っています。祈年祭や棒踊り、夏越祭など、地域に根付いた様々な年中行事が行われています。

まんはっせん ○万八千神社（串良町下小原4857）

この神社に祀られている神様は、ワケイカスチノカミ フツヌシノカミ タケミカスチノカミ ウカノミタマノミコト別雷神や経津主神、武甕槌神、倉稻魂神です。



十五社神社での鉤引き祭り



十五社神社の様子

この神社は、山城賀茂の宮という京都の本社から神霊を分けて祀った神社であると言われています。

やまみや
○山宮神社(串良町細山田3530)

この神社に祀られている神様は、スサノヲノミコト素戔鳴尊です。

この神社は十五社神社の末社であると言われていいますが、記録書によってはそのような事実が記載されておらず、神社が建てられた時期は不明です。またこの神社では、その年の豊凶を占う春祭りが有名で、鹿児島県指定無形民俗文化財に指定されています。

[項目069参照]

きりしま
○霧島神社(串良町細山田445)

この神社に祀られている神様は、ニギギノミコト瓊瓊杵尊やコノハナ木花之サクヤヒメ開耶姫です。

由緒は明らかになっていませんが、この地域には天照大神の命令を受けて孫の瓊瓊杵尊が降臨し、この霧島山から天下を治めたとの言い伝えが語り継がれています。また、霧島神社には昔の神社の歴史を物語る巨大な鬼瓦2個が現存しています。

はくさん
○白山神社(串良町上小原5429)

この神社に祀られている神様は、キクリヒメノミコト菊理姫命です。

この神社は旧万八千大明神の末社でしたが、1870(明治3)年に太政官布告による1村1社令に基づいて、現在地にそうし創祀されました。

じゅうごしゃ
十五社神社のいわれ

十五社神社は、串良町有里2525にあります。この神社には、伊邪那岐尊イザナギノミコトや伊邪那美尊イザナミノミコトが祭神として祀られていて、現在でも新年祭や新嘗祭など、様々な祭が行われています。

十五社神社は、同じく串良町有里にある月読神社の母神であると古くから言い伝えられています。さらに582年、仏教伝来に起因する神仏戦争に破れた物部守屋が日向国に逃れてきたことがきっかけで、この神社が建てられたといわれています。

物部守屋は戦争に負けた後、細山田の一之宮ヶ宇都という場所に引きこもって暮らしていました。その後、彼は先祖である15の神々を祀り、場所を有里に移してからも神様を祀り続けました。後に、その場所が十五社神社と呼ばれるようになるのです。

この神社の祈年祭では、鉤引き祭りかぎひきまつりと似た祭りや種子蒔き神事など豊作を祈願する神事が行われています。



広葉山の葉（前）杉の葉（奥）

こようざん
広葉山

中国の杉で、樹齢は400年と推定されています。岩屋近くの事務所の斜め向かいに1本だけ立っています。



東宮侍従を吾平山上陵に案内時の記念写真
大正9年（1920年）

吾平山上陵が登場する歴史書

ひとつは日本書紀で神代下に「ウガヤフキアエズノミコトは、西洲の宮でお隠れになった。それで日向の吾平山上陵に葬った。」とあります。次に見られる文献は、延喜式の諸陵寮です。



延喜式諸陵寮

「ウガヤフキアエズノミコトの吾平山上陵は日向国に在って、陵戸（陵を世襲で守る人）はない。」と読み取れます。

060

「吾平山上陵」が導く歴史ロマン

アマテラスオオミカミは皇室の祖とされる神で、その孫、ニギノミコトは高天原から高千穂峰に天下ったといひます。その後の系譜はニギノミコト—ホホデミノミコト—ウガヤフキアエズノミコト—神武天皇と続きます。

吾平山上陵は、鹿児島県鹿屋市吾平町上名にある皇族陵（お墓）で宮内庁によりウガヤフキアエズ陵に治定（遺跡や古墳の由来を認定する事）されています。鹿児島県内には3つの御陵があり、他に可愛山陵（ニギノミコト陵）・高屋山上陵（ホホデミノミコト陵）があり、これを総称して神代三山陵といひます。延喜式諸陵寮では「日向吾平山上陵」とあり、他の陵墓のように郡名・兆域は記載されていません。また「在日向国、無陵戸」とのみ記され、陵を世襲で守る陵戸も置かれていません。皇族の祖の陵墓が場所も記載されず、陵戸もないのは不思議です。おそらく『延喜式』当時には所在が失われていたというのが無理のない推測でしょう。これは県内の他の2つの山陵にも当てはまります。吾平山上陵が治定されたのは1874（明治7）年の事で明治政府によってなされました。実はそれ以前に神代三山陵を見つけようと多くの人が努力しています。例えば薩摩藩の国学者嚙矢白尾国柱はその



○岩屋は東北に向かい、入口の高さは3m少し、奥行きが14.5m、横幅が23.6mあり、広さは297㎡(約90坪、180畳ほど)。その中に、高さ1.3m、周囲5m、その横に高さ0.9m、周囲3mの円形の塚が二つあります。大きい方がウガヤフキアエズノミコト、小さい方がタマヨリヒメの御陵と言われています。岩屋の中の御陵は、全国でも類を見ない貴重なものです。

説を本居宣長が認めた事で有名になりました。吾平山上陵の位置は明治時代からほとんどの学者が現在の位置を認めています。なぜなら吾平は鹿児島に1か所しかないからです。吾平山上陵と極めて関係が深いと思われる、かつては鵜戸六所権現、鵜殿神社などと称された神社が吾平山上陵の東側に位置し、747(天平19)年に「六所大権現と号した」という記録があります。また、吾平山上陵内には「鵜戸六社権現」がありましたが、1871(明治4)年の災害により、陵外の鹿屋市吾平町麓ふしもとに移り、名称も鵜戸神社に改められています。本殿は1043(長久4)年建立とされ、社殿は1660年代に島津綱貴つなたか(島津20代当主)が、宝殿と拝殿は1768(天明8)年に島津重豪しげひで(25代当主)がそれぞれ造営しました。

また、飴屋敷跡あめやしきあとが吾平町鶴峰地区にあります。ウガヤフキアエズノミコトの母はトヨタマヒメといい、本当の姿は「わに(サメ)」でした。出産の際に本当の姿を夫のヤマサチヒコに見られてしまったのを恥じて海に帰ってしまいました。乳飲み子ちのこを残されたヤマサチヒコは悲嘆にくれました。そこに一人の老婆が現れ、乳母の代わりに飴を練り、その飴のおかげで成育できました。吾平町上名あめにある飴屋敷跡はその飴を差上げた人の住宅跡あとと伝えられています。

吾平山上陵の読み方

正式な呼び名は「あいらのやまのうえのみささぎ」といいますが、鹿屋地域はもちろん、県内外多くの方々から「あいらさんりょう」と呼ばれています。

行幸記念碑

項目054にある昭和天皇の行幸の記念碑を1936(昭和11)年11月に公爵の島津忠重が建立しました。



飴屋敷跡





玉泉寺跡の住職の供養墓など

玉泉寺公園



061

鹿屋市の寺院1

鹿屋市には由緒のある寺などが多いです。ここでは、始良名勝志などの古記録に記されているものを地域ごとに紹介します。

○清池山玉泉寺跡（玉泉寺公園）

吾平町上名にある清池山玉泉寺跡は、赤野の南の龍喰^{たつばん}という地区にあります。宗派は曹洞宗で、祀^{まつ}ってある仏は如意輪観音^{にょいりんかんのん}です。下野国（現栃木県）の泉溪寺^{せんけいじ}の支配下にある小さい寺です。寺を初めて建てたのは源翁和尚^{げんのうおしょう}、宗派などを作ったのは玉広守泉禅伯と伝えられています。

源翁和尚^{げんのう}は1395（応永2）年、赤野に来て玉泉寺を建て、ここで亡くなり、玉泉寺内に石の塔（源翁塔）が建てられたといわれます。玉泉寺の資産は1677（延宝5）年10石、1707（宝永4）年22石でした。1659（万治2）年玉泉寺の前に池を掘り、豊富な湧き水を利用し溝をたて、畑を開いて新しく田んぼにするのに7年かかり、およそ450石の資産を増やしたと伝えられています。

玉泉寺は約470年間人々のために力を尽くしてきた立派な寺でしたが、1868（明治元）年、廃仏毀釈によって無くなりました。玉泉寺跡には、源翁和尚など



含粒寺跡の石柵（吾平町）

の供養塔が約20基あり、1983（昭和58）年玉泉寺
児童公園（後の玉泉寺公園）が造られ、史跡と花のきれいな場所として知られています。

○宝蛇山含粒寺跡

吾平町上名にある宝陀山含粒寺跡は、上名の門前にあります。曹洞宗玉龍山福昌寺（鹿児島市に現在跡地として残されている）の含粒寺の支配下にあった小さい寺です。寺を初めて建てたのは仲翁和尚（7代島津元久の長男、福昌寺3代目住職）です。9代島津忠国は1429（永享元）年吾平に含粒寺を建て仲翁和尚を招きました。仲翁和尚は1445（文安2）年6月7日に67歳にて含粒寺で亡くなり、寺の中に石の塔があります。仲翁和尚の母、妹、御南御前の3人の墓もありました。含粒寺は約440年間栄え、吾平町の位牌を代々守っていましたが、1869（明治2）年、廃仏毀釈により無くなりました。含粒寺跡にはお坊さん等の墓が約50基あります。

その後、上名にあった含粒寺と鹿屋市の南町にあった元朗寺を合体させて、今の含粒寺（南町）になりました。仁王像や地藏、観音、薬師などが残っています。

含粒寺跡（吾平町）

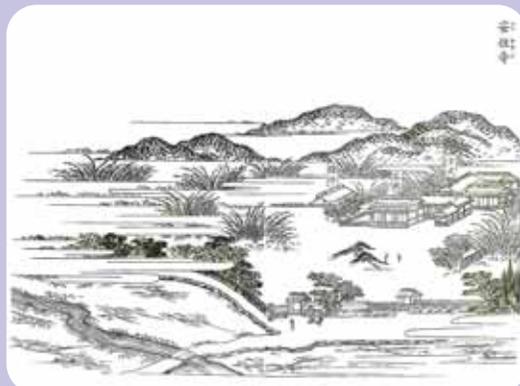


含粒寺石像群（南町）





位牌
猛誉和尚の字が読み取れる



安住寺
三国名勝図から転載

猛誉和尚

串良町に存在したとされる高栄寺の僧で、名僧との呼び声が高いです。

亡くなる際、自ら墓穴を掘って入寂（僧が死ぬこと）しました。遺言で、「所有していた鐘の音が途絶えたならば自らは死んだということだ」と残しました。その後、1618（元和4）年11月16日に鐘の音が途絶えたそうです。

門下生たちは僧の徳を慕い、毎月16日には鐘を打ち鳴らして和尚の霊を弔うという行事を行っていました。和尚の死後370年経った今なお、岡留上町内会の宝印堂においてその行事は継承されています。和尚がいかにな僧と評されていたかが分かります。



串良にある祠

062

鹿屋市の寺院2

ここでは、串良地域と輝北地域の寺院跡^{あと}などを紹介していきます。

○瑞雲山安住寺^{あんじゅうじ}

串良町にあった曹洞宗のお寺。始良郡福山の大安寺の末寺です。1532（天文元）年鹿屋の打馬において三峯山華善寺として開山後串良に移しました。肝付氏の没落と共に一時志布志蓬原に移すも、天正初期（安土桃山初期）に串良地頭島津忠長の代に再び串良に移して安住寺と改称。1867（慶応3）年に廃仏毀釈により廃寺となりました。

○高栄寺^{こうえいじ}

串良町にあった寺で、設置の理由、年代、由緒、宗派さえも不詳とされています。しかし、高栄寺の僧である「猛誉和尚」は名僧であると評されています。

○法城山両足寺^{りょうそくじ}

輝北町にあった寺院。設置の理由、年代、由緒、宗派さえも不詳とされています。しかし、その山門には一対の仁王像が据えられていたようで、現在も輝北町市成に仁王像が現存しています。

この仁王像は昔から風邪（百日咳）を治す仁王さま



輝北町市成の仁王像
左が「吽」像、右が「阿」像



袓川町瀬戸山神社前の瀬戸山公園内
五代寺跡の仁王像（「阿」像、「吽」像）

南町の含粒寺仁王像



「阿」像



「吽」像

として住民に親しまれ、病が治ると火吹き竹を供えていたようです。市成が島津家の支流敷根氏の所領であった頃、両足寺の山門に据えられた室町時代の作と伝えられています。廃仏毀釈の被害を免れるために地中に埋められていたものが、後年、掘り起こされ現在の場所に安置されました。

口を開けている像を「阿」像、口を結んでいる像を「吽」像といいます。阿吽とは仏教の真言の一つで、口を大きく開いた「あ」から始まり、口を完全に閉じた「ん」で終わることから、宇宙の始まりから終わりまでを表す言葉とされてます。仁王像は金剛力士像とも呼ばれ、よく寺院の入り口の門の左右に二体一対で阿吽の呼吸で仏法を守っています。



「吽」像の表情



「阿」像の表情



長谷観音像



長谷観音堂
三国名勝図から転載

はせかんのん はらい 長谷観音（祓川）の いわれ

昔、都から祓川に来た炭焼五郎治という者が、妻をめとり炭を作り暮らしていた。ある日、山で作業をしていると、銅の出る場所を見つけた。五郎治は銅を堀り都で売り、彼は都でも指折りの大金持ちになった。

彼は都にいたときから長谷寺（鎌倉）の観音様を深く信仰し、大金持ちになったのもそのおかげだと感謝していたので、長谷寺の観音様にお参りをし、その姿を丁寧に書き写し、それをもとに観音様の像を彫ってもらい、祓川にお祀りした。

明治時代に全ての寺や仏像をこわすよう命令が出され、祓川の人々も、観音様を泣く泣く高山の宮下の大川に流すことになった。

ところが、観音様は深い淵に立ったまま、少しも流れない。これを見た宮下の人々はお堂をつくりお祀りした。それを聞いた祓川の人々は、再び観音様を元の場所にお祀りし、現在でも観音様は祓川で大切に祀られている。

063

鹿屋市の昔話

鹿屋にも昔から語り継がれる地域に根差した話があります。ここではその一部を紹介していきます。

さいとがねんよいえもつ 〇猿と蟹ん寄合餅

昔猿と蟹がいた。正月が近づき、蟹が猿に餅をつこうと言った。蟹は川で餅米を、猿は山で杵の木を探した。蟹は餅米を手に入れ帰ってくると、猿は曲がった木で作った杵で餅をつこうとした。しかし蟹は、その杵が気に入らず木を探しに山へ向かった。その間に猿は餅をついた。戻ってきた蟹がその餅を分けるように言ったが、猿は食べたかったら木の上まで来いと取り合わない。蟹は美味しく食べる方法があると猿を騙し、木から落とす。怒った猿は、食べられないよう餅に糞をかけようとしたが、蟹はお尻を鋏ではさんだ。猿はそのまま逃げだした。このことがあってから、猿の顔と尻は赤くなり、蟹の鋏には猿の毛がついたままなのである。

はみあな 〇波見穴

昔、高須波之上神社の神様が大しけにあった。船が沈みかけた時、大亀と二ベ（魚）が現れて神様を助けた。神様は大亀と二ベのおかげで岸に打ち付けられ助かった。それから、人々はここを打ち付け平（ウチツピラ）と呼ぶようになった。また、高須の



波之上神社と高須の町並み

人々は長く亀とニベは食べなかった。ウチツビラは西南に開聞岳、北に桜島を望む景色の美しい所である。ここには大きな^{ほらあな}洞穴があり、ある人がこの洞穴に白い^{にわとり}犬と、白い鶏を入れた。犬は戻ってきたが、鶏は戻ってこなかった。やがてその鶏は洞穴から遠い^{はみ}波見（肝付町）の海岸に出てきたそうだ。それ以来、この洞穴を波見穴と呼ぶようになった。

○^{ねここう}被川の「猫講」

昔、被川に猫好きのお婆^{ばあ}さんがいた。その猫好きは有名で、いろいろな猫を飼っていた。特に「ヤス猫」という猫をかわいがった。ヤス猫はとても利口で、村人が畑仕事をしているとお昼前にやってきて、「もうお昼ですよ」というように大きな声で鳴いて知らせるのだった。ところが、ヤス猫が急に姿を消した。お婆さんは探し回った。何日たっても、ヤス猫は帰らなかった。そんなある日のこと、村人が観音様の下の井手の竹でヤスの死体を見つけた。お婆さんは泣き、悲しんだ。ヤスを家に連れて帰ると、お婆さんは墓^{ていねい}を建て、丁寧に弔^{とむら}った。その頃「猫使い」が村に現れ、「ヤス猫の祟^{たた}りが来るぞ」と、村人からお金や品物をだまし取ろうとした。怒った村人は、ヤスの墓石を取り外してサコンタロ（水力で米をつく道具）の臼にした。しかし村人は猫を大切にし、猫の敵である犬は飼わなかった。お婆さんの子孫たちは、「猫講」というお祭りをし、ヤス猫の魂^{たましい}を慰^{なぐ}めている。

^{きつね}狐をだました話

今から120年ほど前のこと、大始良村に三郎という若い男がいた。三郎はある日、鹿屋に買い物に出かけたが、帰りが遅くなってしまった。

暗闇を帰っていると、後ろに何者かがついてくる気配がした。三郎が暗闇で目を凝らすと、暗闇には狐が1匹いた。自分の荷物の干魚を狙っていることに気付いた三郎は、じっと狐を見つめた。

すると、狐はぐるぐると3回ほど回ったと思うと、狐は友達の休助に姿を変えた。狐の休助は三郎に近づき、「おまえが持ちこたえる荷物の持ち加勢をしてやろうか」といった。あまりにもそっくりなので、危うく渡しそうになったが、休助をよく見ると、腰の辺りに狐の尻尾が見えている。

三郎は「こりゃ、ばか狐、だまされはせんぞ」といきなりどなった。狐の休助は30mほど飛び上がり、すっとんでいった。その姿を見た三郎は高笑いをし、我が家に向かって歩き出した。



ぎっちゃんこ（でんぷん団子汁）



がね

ななとこずし（七草がゆ）

鹿児島では7歳になる子ども達が七草の日に「七草詣り」をする風習があります。

七草がゆは、一年間の邪気を取り除き、万病を防ぐといわれ、お宮参りの後に、7軒の家庭から「七草がゆ」をもらって健やかな成長を願うものです。

7か所からいただくので「ななとこずし」と言われます。

「ずし」とは寿司ではなく鹿児島弁で混ぜご飯や雑炊などのことを指します。作り方は、だし汁に、洗った米と野菜を食べやすい大きさに切ったものを一緒にして中火にかけ、しばらく煮ます。柔らかくなったら、塩・薄口しょうゆを加えて味を整え、餅を入れてすぐ火を止めて、蓋をしてしばらく置き、最後に青菜を加えて出来上がりです。



064

郷土料理1

郷土料理1では、鹿屋で昔から食されていた、今では、なかなか食べることがなかったり、今でも親戚の集まりなどで出てくるような昔懐かしい料理を紹介します。

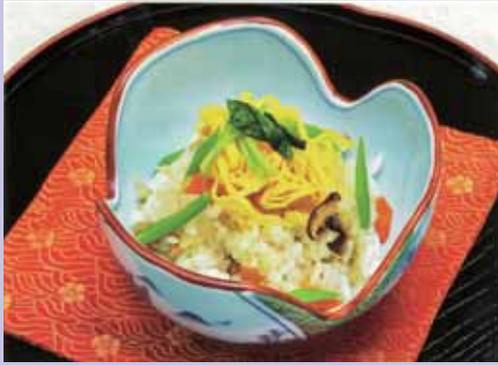
〇ぎっちゃんこ（でんぷん団子汁）

戦時中の一般に言うスイトンです。食料が無いのででんぷんの粉を熱湯でかきまぜて団子を作り菜っ葉と煮ます。そういった質素な料理が、戦後の冬の寒い時期に欠かせない料理へと変わり、このでんぷん団子の汁が体を温めてくれる具だくさんの母の味として、昭和40年代から浸透しました。

〇がね

「がね」は鹿児島県の特産品としてさつまいもを食材とした郷土料理です。さつまいもや野菜を太めの千切りにし、衣をつけて揚げる料理です。揚げた形が「かに」に似ているので、鹿児島弁の「かに」＝「がね」といいます。

年間を通して食べられ、おかずや子どものおやつ、酒の肴さかなとして食べられています。そのほかにも、正月料理や葬式かんこんそうさいなどの冠婚葬祭ふまの際にも振る舞われます。



混ぜ飯



落花生豆腐

○煮しめ

日本古来より伝わる家庭料理の一つです。名前の由来は、“煮汁が少なくなるまで時間をかけてじっくり煮る”という調理法の「煮しめる」からきています。

おせち料理の元祖とも言われており、お正月、祝い事、節句など人がたくさん集まるときにも振る舞われてきた縁起の良い料理です。



○混ぜ飯

地域での行事や人の集まる祝い事のときによく出されます。

具飯とも呼ばれ、鶏肉、ごぼう、人参、干しいたけ、たけのこ、油揚げなど具材を細かく切って炒め、醤油や砂糖で味付けしたものを炊き立ての温かいご飯に混ぜます。

具材には様々なバリエーションがあり、こんにゃくやかまぼこ、ごぼうが入ったり、海に近い地域ではチヌ(タイ)やツベタ(マキガイ)を入れたり、大根の収穫の時期にたっぷり入れたものがあるなど地域や家庭によって違いがあります。

だっきしよ豆腐 落花生豆腐

落花生は1700(元禄13)年ごろに、中国の南京から伝えられたので、南京豆とも呼ばれます。花が咲いた後、土の中で豆が育つことから落花生という名前がつきました。

鹿屋市や奄美地方で多く生産されています。

落花生は、栄養的にタンパク質、脂肪、ビタミンB1・B2を多く含んだ食品です。

「落花生豆腐」は、さつまいもでん粉を使った代表的なものであり、精進料理や各種行事のときなど、現在でもよく作られています。



落花生豆腐の材料
(採れたての落花生)



そまげ



ねったぼ

めいしゆ 今では味わえない銘酒1

○日本酒桜川

今では名を知る人もなく、醸造も絶えています。藩政時代においては大隅半島中唯一の酒屋である木下家が醸造していました。

この酒は、一名鹿屋酒、またはあられ酒と称され、藩主島津家はもちろんのこと、琉球王公にも献上されていました。酒名を「桜川」と命名したのは琉球王公で、あられ酒が、まるで桜の散るような状態に見えたので、王公はこれを桜川と名付け、改めたといいます。

島津公が賓客のために饗宴を催すとき、あるいは高貴の方に対する用酒には、この桜川と限定されていたほどでした。

しかし幕末から明治にかけて2回の火災に遭い、家宝、什器や貴重な古文書なども焼失し、また時勢の推移に順応できず衰微してしまいました。

現在本町に居住している木下家に箱入りの提灯が残っています。なお、看板は鹿児島市にある鹿児島県歴史・美術センター黎明館に寄贈されています。

065

郷土料理2

郷土料理2でも昔懐かしい料理、特に子供に人気があった料理を紹介します。

○そまげ

鹿児島県の郷土料理の「そまげ」は、さつまいもを煮て、熱々のうちにつぶしたところにそば粉を加えて丸めたものにきな粉をまぶして食べていました。「そまげ」の「そま」はそばのことで、「げ」はおかゆのことです。

べたつくことから「やっけなそまげ、あぶれば灰がつっ」という言葉もあったそうです。

○ねったぼ

「ねったぼ」は、さつまいもが主食だったころ、おはぎを食べる思いで、さつまいもと餅を一緒に蒸し、練りあげて丸め、お茶うけやおやつにしたものです。

「ねったぼ」の名の由来については、“練ったぼたもち”からきたという説や、餅を“ぼったぼったと練ってつく”などの諸説があります。

○ふっのもつ

「ふっ」とは、鹿児島弁でよもぎのことです。節句用の餅として、新芽の出たよもぎと米、黒砂糖を混ぜ、一握りずつ握りよもぎ餅とします。



豚味噌



ふくれ菓子

○豚味噌

豚味噌は、鹿児島県を代表する食材である豚肉を使った料理です。

年間を通して常備菜として重宝します。ご飯のお供に、野菜スティックにつけたり、冷奴にのせたり、野菜炒めの仕上げに使っても美味しいです。豚バラ肉を、包丁で細かく切り、しょうがは細切りにします。フライパンに豚バラ肉を入れて弱火でじっくり炒め、肉から油が出てきたら、しょうがと味噌を加えてさっと炒めます。仕上げに、砂糖・料理酒・みりんを入れてよく混ぜ合わせてできあがりです。

味噌は麦味噌が豚肉と合いますが、無ければ他の味噌でも構いません。

○ふくれ菓子

鹿児島県において黒糖が甘味料として強く根づいたのは江戸時代といわれています。

琉球王国を支配していた薩摩藩が、琉球や奄美地域で行われているさとうきびの栽培や、黒砂糖の製造を独占し、薩摩藩の有力な財源としていたことがきっかけだと考えられています。

かつては、豊作を願う祭りの席や農作業時のお茶うけとして食べられていました。現在は、時期を問わず食べられています。

黒砂糖を入れたものが定番ですが、よもぎやココア、ドライフルーツなどを入れても美味しいです。

今では味わえない銘酒2

看板は「御用酒櫻川」と表裏面ともに大書された浮出彫りのもので、金箔を着せた豪華なものです。板木の厚さ6cm、幅50cm、長さ1m余の一枚板で、縁を造り2個の丈夫な金具が付けられています。

提灯は箱入りで、箱には「十文字御紋付御桃灯入」と朱で漆書してあります。もちろん中の提灯は、長い間使用されていないので古び、紙も破れています。

醸造に欠くことのできないものは水ですが、その水については2説あります。

1説は宅地内の井戸水を使用したというものです。他の説では、鹿屋城（現在は城山公園）内の豊富な湧き水を使っていたとも伝えられています。



鹿児島県歴史・美術センター黎明館に寄贈されている看板



神川酒造



小鹿酒造

ゆ 茹で落花生

大隅地域では茹で落花生は人が集まった時や飲み会の時に出される郷土料理です。

鹿屋では、殻のまま茹でた落花生を誰しも食べたことがあるのではないのでしょうか。

あの塩加減と何とも言えない食感。そして、豆の濃厚な味わいが口の中に広がります。

特に、運動会シーズンの子どものおやつ代わりによく出され、地域の人々に愛された「だっきしょ」です。

そして、焼酎にも良くあい、焼酎のあてとしても良く出されます。



茹で落花生

066

郷土料理3

郷土料理3は、地元の料理に合うお酒の話です。

世界の酒で、地理的表示が認められているのは、ワインのボルドー、シャンパーニュ、ブランデーのコニャック等があり、鹿児島県の焼酎も、2005（平成17）年にWTO加盟国間の国際的な知的所有権の保護規定であるTRIPS（トリプス）協定に基づき、地理的表示として「薩摩」が厳格な条件の下に認められました。

少し歴史を遡って、焼酎王国と呼ばれるほどの鹿児島県には1970（昭和45）年頃までは地域に焼酎工場が多数点在していました。しかし、大手メーカーに対抗すべく複数の酒造会社が協業化するという動きが起りました。そして現在の鹿屋市内では、下記の3社の酒造会社が薩摩焼酎を製造しています。

○有限会社神川酒造

大根占町神川（現錦江町）にあった神川酒造の製造免許を、小鹿酒造の当時の役員が出資して、1988（昭和63）年に引継ぎ、その名を残しました。現在の永野田町に1990（平成2）年に新工場が完成しました。

2022（令和4）年現在、主に3種類のレギュラー商品と2種類の限定流通商品で展開しており、小規模ながらこだわりを持った焼酎造りが行われています。



大海酒造(創業時航空写真)



黒ぢよか

〇小鹿酒造株式会社

吾平町上名に、鹿屋市、東串良町、吾平町、佐多町の4酒造会社が均等出資の基に協業組合として1971（昭和46）年に設立され、「小鹿」としての販売を開始。1978（昭和53）年には鹿屋市の2企業が新たに加入し、2007（平成19）年に小鹿酒造株式会社となり現在にいたります。

仕込みには、湧水が豊富な玉泉寺公園からの水を利用しており、現在、本格焼酎「小鹿」を筆頭に、10種類以上のレギュラー商品群と各種限定品をそろえ、自然と地元への感謝の心を大切に焼酎造りが行われています。

〇大海酒造株式会社

1975（昭和50）年、鹿屋市白崎町に地域の9つの酒造会社が集結して大海酒造協業組合を設立し、代表銘柄「さつま大海」の販売を開始。2012（平成24）年に大海酒造株式会社となり現在にいたります。

地元鹿屋の契約農家が栽培した新鮮な芋にこだわり、杜氏を中心に、機械に頼り過ぎない造り手の五感を活かした妥協しない焼酎造りを信条として、蔵人は蔵に寝泊まりして真摯に焼酎造りに向き合っており、現在、「さつま大海」を始め20種類以上のレギュラー商品群と各種限定商品をそろえ、全国展開されています。

鳥刺し

鳥刺しも鹿児島ならではの食べ物の一つです。

ほかでは、宮崎の一部等で食べられているようです。

鳥刺しを口に含むと、鶏肉の旨味が口の中いっぱいに広がります。そして、鹿児島ならではの甘口醤油がその旨味に追い打ちをかけます。さらに薬味の生姜やニンニクが口の中に深い味わいを広げます。

仕上げは焼酎です。芋焼酎の優しい甘みと後味のキシの良さが、口の中に広がる鳥刺しの旨味をサラッと喉の奥に流し込んでくれます。そして、また一口。

ご飯にも、地元の焼酎にも良くあう郷土料理です。

【鹿児島県HP】
生食用食鳥肉等の安全確保
について





鹿屋競馬場写真
1963（昭和38）年頃



現在の地図に当時の競馬場の
場所を重ねた図



競馬場跡の現在
提供：国土地理院

方言は地方の宝

方言は地域の文化を伝え、地域の豊かな人間関係を担うものであり、美しく豊かな言葉のひとつとして位置づけることができます。後世に受け継ぐべきかけがえない宝です。

鹿児島県では、毎年11月の第3週を「鹿児島県方言週間」として定めています。

ひとつ鹿児島方言を紹介します。

「まだつこがなって、あつたらしかこつしやんな」これは、「まだ使えるのに、もったいないことをするな」という意味になります。

からいも普通語

「私は鹿児島県には語らないよ」と思っている人からその言葉。実は方言だったんです。鹿児島県人が公用語としてだと思ってる。話す「語り口」を「からいも普通語（標準語）」といいます。

からいも普通語

楽しかったです
ほうきで掃く
一緒に行くが
〇〇さんだぞ
明日は休みは？
後でいいぞ

共通語

楽しかったです
ほうきで掃く
一緒に行くぞ
〇〇さんじゃないですか？
明日は休みですか？
後でいいです

067

大人・子どもの楽しみ

昔の鹿屋の人々はどのような楽しみに興じていたのでしょうか。代表的なものを紹介します。

〇鹿屋競馬場

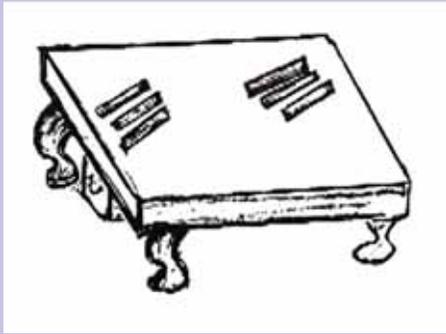
住宅地が広がる鹿屋市札元1丁目辺りには、かつて「鹿屋競馬場」がありました。1929（昭和4）年に西原地区から移転したこの競馬場では、1965（昭和40）年ごろまで公営の草競馬が開催され、手に汗握るレースが行われていました。

競馬場の直線やカーブの一部は、現在も道路として残っており、地図上でもその名残を確認することができます。

〇大人・子どもの遊び

「薩摩拳」

鹿児島県と宮崎県に伝わる酒席での伝統的な盤上遊戯で、「なんこ」と呼ばれています。10cmほどの木の棒数本を使って、お互いの手の中にある本数を当てる遊びです。現代でも大人も子供も楽しめる遊びですが、大人は酒の席で、負けた者が杯一杯の焼酎を飲み干すなどのルールを作り楽しめます。



さつまけん
薩摩拳(通称：なんこ)



はまクラブのようなもの

「はま投げ」

正月遊びの一つで、これには年少の者は参加できず、12・13歳以上の男の子たちが、集落対抗たいこうで試合をしていました。

はまは、直径2、30cmぐらいの生の櫛かしの木を厚さ5、6cmに輪切りにします。はまを投げると、向こうではゴルフのクラブのようなもので受け止めて打ち返します。打ち返されたはまは、カーンと高く跳ね上がって飛んでいきます。少し危険な遊びではありますが、勇壮で面白いです。

「遊戯」

子供たちの遊びは実に種類が多いものでした。鹿狩りしかがりや、なわとび、ぶらんこ、石けり、かごめかごめ、鬼あそび、陣取り、片足跳び、人形遊び、ままごと遊びなどがありました。戦後もしばらく行われていたこれらの遊びも2、3を除いてほとんどが姿を消してしまい、ハイテクを駆使した今の子供たちの遊びを見ると、まさに隔世の感があるようです。要するに昔はお金のかからない道具で遊んだものでした。

野口雨情との関係

野口雨情は1940（昭和15）年のころから4年間、全国各地を順訪し、地方小唄こたぎを作詞しています。

雨情が「鹿屋小唄」を作るために、鹿屋を訪れたのは1940（昭和15）年5月です。野口雨情詩碑が、鹿屋市の城山公園の鹿屋城（亀鶴城）跡の広場に建てられています。 [項目023参照]

生活（衣・食・住）

古代の竪穴式住居にも流行がありました。弥生時代に、円や四角といった単純な形ではなく、小部屋の様な場所を追加することが流行します。

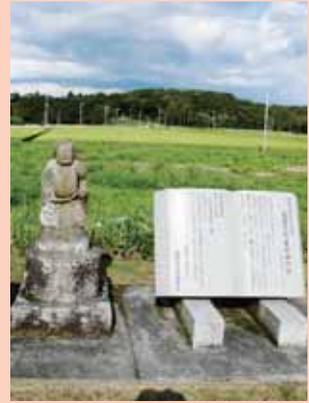
真上から見ると花が開いたように見えるものもあり、「花卉状間仕切住居」と呼ばれます。 [項目033参照]



短甲・衝角付冑



中尾地下式横穴墓群出土品



野里の田の神

ぞうがんそうたち 象嵌装大刀

1996（平成8）年に当時の吾平町教育委員会によって発掘された古墳時代（約1500年前）の大刀の鐔と鍔と柄頭の部分に銀象嵌が施されているのが判明しました。

象嵌が施された大刀は鹿児島県内で初の発見となっています。

象嵌とは、かたどってはめこむという意味で、中国から朝鮮半島を経由して日本に伝わった彫金技術です。この大刀は、鉄に銀をはめ込んであります。



068

県指定文化財 1

県指定文化財とは、文化財の中で、特に重要なものを、県が指定・選定を行って指定文化財として保護の対象にしたものです。

たんこう しょうかくつきかぶと

○短甲・衝角付冑(1966(昭和41)年3月11日指定)

「短甲」とは短いよろい、「衝角付冑」とは戦闘帽様の古代のかぶとのことで、1950(昭和25)年6月11日鹿屋市西葭川町で古墳時代の墓(地下式横穴墓)から発見されました。古墳時代(5世紀頃)の物と推定されますが誰のものは分かっていません。

○中尾地下式横穴墓群出土品

(2013(平成25)年4月23日指定)

鹿屋市中尾地下式横穴墓群は、6世紀後半から7世紀初頭頃の地下式横穴墓8基から構成されます。

特に6号地下式横穴墓からは、象嵌装大刀、鉄剣、鉄刀、鉄鏃、耳環等、多様な副葬品が出土しました。象嵌装大刀は、鍔と鐔の両面と切羽縁金具部分に銀象嵌で心葉文や二重半円文を施したものです。

これらの出土品は、本県における古墳時代の副葬品の中でも屈指の情報量と質を誇る貴重な資料です。

○野里の田の神(1968(昭和43)年3月29日指定)

江戸時代1751(寛延4)年に建立されたもので、



笠野原土持堀の深井戸



岡崎古墳群(15号)

石台の上に両ひざで立ち、頭にコシキをかぶり、シャモジを右手に、鈴を左手に持ち、ほほをふくらませ口をあけ、何かを語りかけているような像で、鈴持神舞型では県下でも最も古いものです。

○笠野原土持堀の深井戸
(1982(昭和57)年5月7日指定)

シラス台地の笠野原は雨が降ってもすぐ地下に吸いこまれ、長い間耕作できませんでしたが、江戸時代頃から少しずつ開発されてきました。

井戸は生活用水が不足するために掘ったもので、現存する何か所かの井戸のうち最も原形をとどめています。掘られたのは文政年間から天保年間ごろと考えられています。

井戸の深さ約64m、表面の直径は約90cm、円筒形の素掘りです。この井戸は笠野原台地の開発の苦難の歴史を物語る貴重な文化財です。

○岡崎古墳群(4号・15号)
(2014(平成26)年4月22日指定)

岡崎古墳群は、肝属平野西側の台地上に立地する古墳群で、20基の古墳からなります。15号墳は、墳丘長25.5mの帆立貝形前方後円墳で、主体部には花崗岩製の箱式石棺があり、石棺の内部から甲冑片や勾玉、管玉等が出土しました。

志布志湾沿岸の他の古墳群との関連や本県の古墳時代の様相を知るうえで欠くことのできない遺跡です。

市内の古墳時代

古墳時代は、今から約1700年前から1400年前までとされていて、古墳が造られ始めてから造られなくなるまでの時代です。

県内において前方後円墳は大隅半島にしか存在せず、鹿屋にも数基確認されています。

また、地下式横穴墓と呼ばれる南九州特有のお墓もあり、鹿児島県を代表する遺物が数多く見つかっています。



岡崎古墳群全景



堂園棒踊り



生栗須棒踊り



馬掛棒踊り



鉤引き



田打

069

県指定文化財2

ここでは県内でも多く見られる棒踊りや鉦踊りかねおどの中でも特に鹿児島県において重要でかつ後世に伝えなければならない無形民俗文化財として指定を受けたものを紹介します。

○山宮神社春祭に伴う芸能

(1962(昭和37)年10月24日指定)

鹿児島県の無形民俗文化財に指定される山宮神社の春祭に伴う芸能は、この地域の五穀豊穡を願い、400年以上続いており、「正月踊りかぎ、鉤引きたうち、田打」から成り立っています。

内容は神事のあと、堂園いくるす・生栗須まかけ・馬掛集落の棒踊りが奉納されます。歌い手は踊り子の後ろにタカビとともに、後山として付き椎木の枝をたて回しながら、「焼野のキジはおか丘の上に住む、山太郎やま太郎がに蟹は川の瀬に住む」などの歌詞に合わせて勇壮に踊ります。

鉤引きは、雌鉤めかぎの股に雄鉤おかぎの鉤枝をかけてそれぞれの氏子うじこたちが、その枝をもって歓声とともに引き合います。近年は二度勝負し引き勝った方が豊作になるといい、引き分けの際は双方が豊作になると言われています。

田打は、太郎ふん(父親)と次郎(息子)に扮する神官が模型の牛に木製のワタイモガを引かせて、ユーモラ



王子町鉦踊り

すな所作をします。ニワコト（庭常）の若芽を束ねたものともみ種を蒔き、観衆がそのもみ種を自家の田に巻き付けると豊作になるといわれています。

○王子町鉦踊り

江戸時代の後期、1753（宝暦3）年、当時の島津藩政時代は盛んに新田の開拓が行われ、王子町に築かれた和田井堰取水口から下流域約12kmにおよぶ鹿屋盆地に通水し、約150haにわたる開田を記念して生まれたもので、豊作祈念と水神祭を兼ね、毎年、旧暦8月28日に和田井堰の水神様に奉納しています。

戦前、戦後は青年団を中心に集落ぐるみで継承していましたが、青年団の衰退に伴い、1990（平成2）年4月に保存会を結成し、会員約100名で町内に長年伝わっている「鉦踊り」と「銭太鼓」を保存継承しています。王子町鉦踊りは、太鼓、鉦などを用いて「鉦踊り」とカラスが飛ぶような所作が特徴的な「からす舞」の2種類で構成されており、「鉦踊り」が先陣を作り、それを取り巻くように、円陣になって「からす舞」を踊ります。

王子町鉦踊りは、1990（平成2）年に鹿屋市無形民俗文化財、2020（令和2）年に鹿児島県指定無形民俗文化財に指定されました。

王子町鉦踊り





大賀ハス
串良総合支所の駐車場前

苫野川産カワゴロモ



画像：リナシティ情報プラザ
ホームページ
(提供者：寺田仁志)

070

市天然記念物

○大賀ハス(2011(平成23)年2月23日指定)

大賀ハスは、2000年以上昔(弥生時代)のハスの実から発芽・開花させたもので古代ハスとも呼ばれています。1951(昭和26)年、千葉県検見川地区^{けんみがわ}で3粒発掘されたハスの実は、植物学の権威である大賀一郎博士の手によって1粒の発芽、そして開花に成功しました。このことから博士の姓にちなみ、「大賀ハス」という名称に命名されたものです。大賀ハスは2000年以上自然交配されていないことが植物学的にも大変価値があります。そのため故国分重春先生(元串良中学校教諭)の指導に基づき、株分けによって串良地域で大切に育てられています。

○^{とまのがわ}苫野川産カワゴロモ

(1980(昭和55)年8月23日指定)

カワゴロモ(カワゴケソウ科の多年草)は日本では南九州だけがあり、苫野川は肝属川水系で一か所しかない自然にカワゴロモが育つ場所です。コケ類のような形の根がよく発達し、10月~12月ごろ花が咲きます。花の茎は短く横向きにねており、花は水中では閉じていますが、つぼみが空気中に出ると開きます。熱帯植物で、日の光が十分あたる所で育ちます。



イヌマキ

鹿屋市中央公園近くの熊野神社



諏訪両神社の古木



○イヌマキ(1968(昭和43)年5月27日指定)

中央公園近くにある熊野神社の境内にあります。樹齢約300年を超えた高さ約20m、根廻り約9mを超える巨大な威容を誇るイヌマキです。この木の幹は大きな空洞になっています。県下にあるイヌマキの大木の中でも特に貴重な文化財として高く評価されています。

すわりょう

○諏訪両神社の古木

(1981(昭和56)年12月10日指定)

諏訪両神社の鳥居をくぐると、右側にイチョウ、左側にイヌマキの木があります。イチョウは、目通り9m、高さ19.8mあり、イヌマキは目通り3.75m、高さ22mあります。いずれも樹齢は約400年以上といわれています。イチョウは、昭和20年の台風で主幹が折れましたが、側枝が主幹化しつつあり、また脇芽も出ており、樹齢の古さを物語っています。イヌマキの幹には、鉄の鎌が打ち込まれています。これは、戦陣に臨むときに神社から受けたお守り鎌で、無事帰還したときに神木へ打ち込んだものです。



仁王像
鹿屋市輝北町市成



小型阿弥陀如来尊像
鹿屋市花岡町(花岡山浄福寺)



古銭
鹿屋市中央公民館

仁王像とは

金剛力士像のことで、口を開いた阿形と口を閉じた吽形の2像を一对として寺院の門などに安置されることが多いです。このとき仁王の名で呼ばれる。仁王像は、上半身裸形で、筋骨隆々とし、阿形は怒りの表情で、吽形は怒りを内に秘めた表情を表すものが多いです。このような造形は寺院内に仏敵が入り込むのを防ぐ守護神としての性格を表しています。

現存する仁王像で大きいものは、東大寺南大門金剛力士像が有名です。

仁王像は阿形と吽形の一对として造像するのが原則ですが、これを1体のみで表した、執金剛神とよばれる像もあります。その例としては、東大寺法華堂の本尊背後にある厨子内に安置された塑像執金剛神立像があります。

071

市指定有形文化財

○仁王像(1981(昭和56)年12月16日指定)

市成登見の丘の麓にある一对の仁王像で、昔から風邪(百日咳)を治す仁王像として親しまれ、病が治ると火吹き竹を供えました。市成が島津家支流の敷根氏の所領であったころ、菩提寺の法城山両足寺の山門に据えられた像で、今から約600年前の室町時代の作と伝えられています。「廃仏毀釈」の被害を免れるために、地中に埋めていたものを、現在の管理者の祖父吉水治左衛門が現在地に安置したものです。

○花岡町花岡山浄福寺の小型阿弥陀如来尊像 (2001(平成13)年9月16日指定)

浄福寺にある手の中に収まるほどの小さな阿弥陀像です。高さ3.8cm、幅2.1cmの厨子の中にあり仏像の高さは0.9cm程です。これは花岡島津家六代久誠の妻時子が所持していたもので、夫婦ともに密かに礼拝していたといわれています。

○古銭(1962(昭和37)年11月15日指定)

1961(昭和36)年、田崎町老神で工事中に発見された中国の前漢から元寇の中国銭で、ほとんどは北宗銭であり、室町時代に埋められたものと思われます。



中郷小野原墓地の納骨宝塔
鹿屋市串良町有里



車田の田の神
鹿屋市吾平町上名

○中郷小野原墓地の納骨宝塔
(1982(昭和57)年1月22日指定)

鎌倉末期ごろと推定される肝付家主流とみられる納骨宝塔は、正面と右側に薬師如来像、左側に烏帽子水干姿の合掌人物像が浮き彫りされており、古石塔としてまったく類例をみない宝塔です。

浮き彫りされている薬師如来像は、有名な鎌倉の薬師三尊の薬師像と同じく外傷の担当を意味します。三角巾を膝においた、特殊な姿勢の薬師如来像が浮き彫りされており、烏帽子水干姿の高貴な人物が薬師如来に合掌祈念する姿は、極めて暗示的です。肝付兼藤の納骨宝塔とする説が有力視されています。

○^{くるまだ}車田の田の神(1987(昭和62)年8月22日指定)

この田の神像には山水を表現したと思われるものが刻まれており、像高93.5cm、山水の高さは52cmで、渦巻き模様のシキを被り、袖の長い上衣と袴をつけています。左手はメシゲ、右手はスリコギをもち、山水の背面には磨崖仏風に小仏らしいものが浮き彫りしてあり、また頭上にも胸元にもさらに小さい仏像がつけてあります。この山水は修験道場としての山を示しており、その山から現れた効験あらたかな像を田の神としたと思われます。

祓川町の大園橋

1904(明治37)年5月に完成し、全長30m、橋の巾3.1m、高さ約5mで、大隅地方に現存する数少ない石橋です。地域の住民や市により大切に守られています。



田ノ神について

稲の生育を助け、豊穰をもたらす神の総称で、古くから水稻耕作が行われてきた我が国では、豊作を祈願し、収穫を感謝して田の神をまつてきました。

田の神像は鹿屋のいたる場所にあります。

[項目075参照]



中郷の田の神像



川原園井堰の柴掛け



大始良西方棒踊

いせき しば 川原園井堰の柴掛け

川原園井堰とは、江戸時代の初期に構築され、1902（明治35）年に改築された歴史的に価値の高い取水堰で、下流に影響がでないよう適度に水を逃がす柴を使った全国でも珍しい構造となっています。用水路は森を抜け、農家の庭先を巡りながら田畑を潤し、また、地域の防火用水にも利用されています。

この井堰は年に1度の補修（柴掛け）が必要です。

柴掛けは、近くの里山から切り出した柴を150束揃え、川幅いっぱい隙間なく並べます。一年に一度、皆で堰を再生し、水に感謝し、豊作を祈る場が、柴掛けの場です。地域社会にとってのアイデンティティの形成・確認の場であり、生かされているということを実感し共有するための場と言い換えることもできるでしょう。

このような井堰は、現在日本ではここにしか残されていません。

単純な利便性や合理性を超えたところに価値がある貴重な場所です。

072

市指定無形文化財

○大始良西方棒踊（1964（昭和39）年2月15日指定）

大始良、郷社としての岩戸神社には、数々の神事が伝わっていますが、西方の棒踊りもその一環として産土神に奉仕し、五穀豊穡、厄病退治、家内安全を祈願するために行われてきているものです。これは西方だけでなく、東方としても鎌踊、獅子目の鉦踊りというように、各集落からの出し物は一定していたのですが、東方、獅子目、横山方面のものはいつしか絶滅してしまい、今日においては西方の棒踊りだけが行われています。そのはじまりは、判然としませんが大体宝暦時代ごろからと思われる資料が残っています。それに1893（明治26）年谷山からの移住者たちが虚無僧踊りを加え、今日に至っています。構成としては、虚無僧踊りと棒踊りからなっています。踊りの組み立てとしては総指揮である旗持ちが5、6人を従え、上げ唄をうたいながら踊り場に入ります。その後15人に踊り子、さらに若干名の後継者が同じく上げ唄をうたいながら続きます。これを庭入りといいます。旗持ちの「こんだ踊りじゃっど」の合図によって踊り始めます。



しか祭り



刀舞

○しか祭（1966（昭和41）年4月1日指定）

七狩長田貫神社では、2月になると古い伝統を持つ名物の弓（30cm）、矢（15cm）作りに忙しくなります。2月17日（古くは旧暦1月17日＝旧正月3日）の早朝、太鼓の初音とともに恒例の「おきんだて」の儀式が行われます。10時になると、露払いを先導に、一之王を騎馬で神官が奉持し、神職、氏子総代、狩人、付添人を従えて笛を吹きながら約4km離れた外園まで神幸します。昔は16日にも下谷（新生町）を経て上谷まで神幸したといひます。集落の人たちは、田崎の神が通るのを今か今かと待ちました。久間田の神能祭りの御旅所では、昔から野元家が豆腐の田楽を作って差し上げるしきたりになっています。女は白糸を、男は手製の足中草履をそれぞれ神様に差し上げ、神幸の帰りには、神社の弓と矢をいただきます。もらった弓矢は神棚や仏壇に上げて、1年間のお守りにするといひます。神幸は、打馬の上にある早馬馬場の神能祭りの御旅所に到着します。神官はここから神能まつりの北方、約500mも離れた一の谷まで神幸切りに行きます。そこで神榊に御霊移しの儀が行われます。これを右祠の前に立て、小枝に弓と矢をかけて祀ります。以前は、この祭りに参加すれば、今年は大獵があるといわれていたので、大勢の狩人たちが集まっていました。

かんなめ

刀舞

旧6月15日八坂神社の祇園祭に行われる神楽舞です。刀、長刀、鬼神、田の神、弓の五つの舞いを同時に舞いながら神輿と共に町内をねりまわります。元来、祇園祭とは無関係に明治末まで波之上神社の神事として大晦日の夜、明け方まで行われていました。ところが、祇園祭りが故あって山車も廃止されさびれてしまったので、その復興策としての神楽舞を祇園に随伴させ、街頭まで進出して行われるようになったのです。祭は神社で祭典をしたあと、神前で青年二人が長刀舞を行います。このあと、神社を出発して街頭に繰り出します。この間、大太鼓を打ち、大通りの要所に停止して有名な和歌を朗詠しながら5種の舞いを同時に行います。役割は太鼓2人、露払い2人、御輿かつぎ4人、和歌朗詠者2人、舞人は多数であります。服装は白浴衣に袴、白足袋は共通のほか、それぞれ鬼神面、田の神面、陣笠、白だすき、青だすき等の舞い姿です。



祓川の棒踊り

はらいかわ

祓川の棒踊り



073

各地域の棒踊り

棒踊りとは、氏神の祭りや豊年祈願に行われることが多い、棒を打ち合わせて踊る踊りです。

そろいの着物に白鉢巻、白だすきをつけて2人一組に向かい合い、時には3人一組となり棒を激しく打ち合わせて踊ります。棒は六尺棒が一般的で、三尺棒が組み合わせられることも珍しくありません。所によっては、棒の代わりになぎなた薙刀や鎌、刀、尺八などを持って踊ります。薩摩藩が郷民に武術奨励のために行かせたと伝えられますが、棒を打ち合わせることによって悪霊を鎮め、豊作を祈り、村の安泰を祈る呪術として行われたと考えられます。

※1尺は、約30cm

○祓川の棒踊り

この棒踊りの起源は、はっきりしませんが、五穀豊稔・えきびょう疫病退治を祈願して3月の日曜日に瀬戸山神社にて奉納されます。唄も踊りもテンポが早く勇壮で気性の激しい踊りです。



末次の棒踊り

○末次の棒踊り

蔵助という人が谷山から当郷下名末次集落に移住して、末次集落の人たちに棒踊りを教えて有名になりました。そして、近所にある宮比神社^{みやび}に奉納したのが始まりと伝えられています。この集落で棒踊りが初めて踊られたのは明治2・3年頃とのことです。

[項目074参照]

○持田の棒踊り

加覧喜次郎という人が、1898（明治31）年5月のころ川辺から吾平^{てらがさこ}の麓寺ヶ迫に移住して、寺ヶ迫集落で自ら三尺の木刀と六尺棒を持って時折、棒踊りを見せていました。そのころ持田集落の東桂木三太郎は、20歳ぐらいの青年でしたが、喜次郎を師匠としてその棒踊りを伝授され、それを持田集落の棒踊りとして広めました。

[項目074参照]

○上・中・下平房、柏木の棒踊り

鹿児島神宮の御田で、農民集団が田植えの際に歌ったとされる「田歌」から始まり、後に薩摩示現流などの「棒術」と一緒になって出来たものです。

持田の棒踊り



下平房の棒踊り



柏木の棒踊り





持田棒踊り



八月踊り

持田棒踊り

項目073の補足です。

この棒踊りは、真影流と銘打って、踊りの勇壮さを誇るためのものとなり、6人一組で組数をつくり、アラソイ、ソイの掛声高く勇ましく踊るものです。

服装は、白鉢巻、浴衣、角帯、五色のたすき、手甲、けはん、わらじがけのいでたちです。

現在、持田棒踊保存会が結成され、この保存に力を注いでいます。



持田棒踊り

(第41回 美里あいら文化祭)

074

郷土の芸能

鹿屋市には、昔から続く郷土の芸能があります。時代の流れの中で少なくなってきていますが、今でも多くの方々が伝統的な芸能保存会を組織して継承されています。ここではその保存会を紹介します。

○八月踊り保存会

吾平町の八月踊りは、1758(宝暦8)年(今から約230年)以前の頃から踊られていたものとされています。旧暦8月13、14、15日は吾平の八月踊りの日でした。13日が庭ならしで、本踊りは15日、庭もどしは16日に上町の道路で踊っていたそうです。当日は、日が暮れると、「だしごろ山」に登ります。人々が三々五々として集まって来て、まもなく楽が鳴り出し、踊りが始まります。

この踊りには、歌い手(4~5人)、踊り子(老若男女約100人)の外に、三味線(2~3人)、太鼓(3人 最近では歌い手が太鼓をたたく)、拍子木(1人)、胡弓(1人)、鉦(1人)が必要です。

踊り子の服装は、浴衣が多く、烏追笠(主に女)、白足袋(女)、お面かぶり(男女)、頭巾(男女)、草履ばき、はだし(男)、袴(男)、鉢巻(主に男)、角帯、普通の帯、油へぐろを身体に塗った裸の男など、様々な装いでした。



中央麓そば切り踊り



末次棒踊り

現在、吾平町八月踊保存会が結成され、この保存に力を注いでいます。

○中央麓そば切り踊り保存会

今からおよそ120年以上前に、現在の吾平町麓地区町内会^{かこい}榊下班の中俣さんが、鹿児島市谷山から伝えたとされています。

昔、下働きをしていた娘のケサガメが、祝いの座で踊りをするように命ぜられました。踊りを知らないケサガメは、自分がいつも作っている「そば切り（そば切りの工程）」を踊りを交えて、母親と掛け合いをしながら、おもしろおかしく踊って見せました。その仕事^{くさ}草が、とてもユーモラスで皆大笑いしたそうです。それが発端となり、「そば切り踊り」が踊り継がれています。

【吾平そば切り踊り（歌詞の一部）】

ハイ つぼや とおれば しらはが みゆるや
 しらは みても よいやは～ ならぬ
 ア ソーラ 挽きかただんじゃが
 ア ソーラ 挽きかただんじゃが
 ア ソーラ 挽きかたすんだ
 挽きかたすんだ コサー ヨイサー

末次棒踊り

項目073の補足です。

この踊りは、三尺棒2人六尺棒2人の4人が一組となり、数組が一緒になって踊り、太鼓の囃子^{はやし}が必要です。

服装は、白装束^{しょうぞく}（白かすりの着物、白鉢巻、白たすき）、手甲（黒）、けはん（黒）、わら草履がきです。

平成12年度より休止中ですが、現在、末次棒踊保存会が結成され、この保存に努めています。



宮比神社での奉納



末次棒踊保存会



農民型

農業する自分たちに似た姿のものです。



衣冠束帯型

神社にいる神主さんのような姿をしたものです。

田の神像色々 市内で出会える主な形

田の神おっといについて

鹿児島弁で盗むという意味のオットイ。全ての田んぼが豊作とはならない場合があります。そこで豊作にしてくれる田の神を別の場所からオットってくるのです。オットられた田の神が行った先で豊作をもたらすと、米や野菜などたくさんのお土産をもって帰ってくるのでした。盗まれたというより出張といったところでしょうか。

まわり田の神

田んぼの側だけではなく、家々をまわる小型の田の神像。各家々で丁寧に扱われていました。



075

鹿屋の有形文化財

○田の神象

市内には142の田の神像があり、田んぼの側にあるもの、かつて家々を回ったものがあります。鹿屋市では、5種類のタイプに分類されていて、持ち物や姿に違いがあります。

左の田の神像は、鹿屋市野里町の田の神像です。鹿児島県の指定文化財になっています。

左手には鈴を持っていて、田の神舞を踊っている姿をしています。台座に作られた年号が入っていて、1751（宝暦元）年に作られたようです。素材になっている石もピンク色をしたきれいな石で、荒平石という地元の石で出来ています。





旅僧型

旅をするお坊様の姿をしたものです。



田の神舞型

田の神舞という踊りを踊っているものです。

たくさんある田の神像の中でも、特に変わっていたり、カワイイものを紹介します。

まずは、吾平町車田の田の神。

田の神像は、神様の像だけが作られることがほとんどですが、この像は、隣に山などが表現されています。

さらに、頭の上に小さい仏像が彫られています。とても珍しいものです。



次は、串良町田中屋敷の田の神。この像は、首をかしげていて、とてもユーモラスです。他の田の神様も豊作を一緒によろこんでいるようですね。



仏像型

田の神 = 大日如来との考えたものです。鹿屋市内には多くはありません。

写真は永野田町迫の木戸の田の神です。

田の神信仰

約2000年前の弥生時代から米を作り食べてきた日本人にとって、田んぼを大切にすることは大変大きなものです。ですから、田に関係する祭りや儀式が多く伝わっています。

田の神様は春の田植えの頃に山からやってきて、収穫の終わった秋に山にもどって山の神となるという考えに基づいて大切にされてきました。



2022年 表彰式



2022年 最優秀賞者メッセージ朗読

平和の花束セレモニー

平和への願いと 不戦の誓い

先の戦争において、我が国はもとより、多くの国や地域の、かけがえのない幾多の命が失われました。尊い命が失われたことや、家族を失った方々の悲しみ、そして、筆舌に尽くしがたい戦争による苦しみを体験された方々の辛い記憶や思いは、決して癒えることはありません。「二度と戦争の惨禍を繰り返してはならない。」何より、「平和を大切にしていかなければならない。」これは、私たちの共通する思いです。

鹿屋市には、鹿屋海軍航空基地や串良海軍航空基地のあったところであり、様々な戦争に関する思いや遺跡が残っています。戦後77年目を経た今日、私たちは、このような戦争遺跡や体験等を通して、それらに基づく平和への思いを世代を超えて受け継ぎ、より一層平和な世界を築いていく必要があります。

平和の花束については、
市役所ホームページも
ご覧ください。



076

平和の花束

世界平和を願う児童・生徒の「平和へのメッセージ」を鹿屋から世界に向けて発信し、その思いを届け、多くの人に平和や人権について考える機会を提供するという趣旨のもと、平成26年度から「かのや未来創造プログラム『平和の花束』事業」として取り組んでいます。

(主な取組)

- ・ 「平和へのメッセージ」の募集
- ・ 「平和の花束」セレモニーの開催
- ・ 本人の朗読によるラジオ放送
- ・ 記念誌の作成

それぞれの内容の詳細については、次のとおりです。

○ 「平和へのメッセージ」の募集

小・中・高等学校の児童生徒から「平和へのメッセージ」を募集し、日本語部門（小学5・6年生の部、中学生の部、高校生の部）では、それぞれに最優秀賞者、優秀賞者、特別賞を決定しています。

令和3年度からは、英語部門を新設し、メッセージを募集しています。小・中・高校生に加え、令和4年度は、台湾からも作品が寄せられました。

○ 「平和の花束」セレモニーの開催

第1部では、「平和へのメッセージ」入賞者の表彰



2017年講演会 千 玄室氏



ラジオ放送 朗読録音



記念誌

と最優秀賞受賞者本人による朗読を行います。

第2部では、「平和を考える」シンポジウムや講演等を行います。過去の講演等については次の通りです。

2015	一般社団法人アジア支援機構代表理事	池間 哲郎 氏
2016	落語芸術協会理事	桂 竹丸 氏
2017	裏千家利休居士15代前家元	鵬雲斎 千 玄室 氏
2018	鹿屋市平和学習ガイド戦跡調査員	迫 睦子 氏
2019	豊の国 宇佐市塾塾頭	平田 崇英 氏
2022	NPO法人まちづくり地域フォーラム・かごしま探検の会	東川 隆太郎 氏

○ 本人の朗読によるラジオ放送

各部門の最優秀賞者1名及び、鹿屋市内小・中・高等学校の代表者1名による朗読を、MBCラジオで年間40回程度放送しています。

○ 記念誌の作成

「平和へのメッセージ」入賞作品やセレモニーの取組、戦跡の紹介や戦争体験談等を掲載した記念誌を作成し、県内外の学校や教育委員会、協賛してくださった方々に配布しています。

平和の花束は、本事業に賛同する各種関係団体によって組織される実行委員会により、鹿屋の町全体での取組となるよう運営しています。また、ラジオ放送、記念誌の発行等は、各種関係団体、協賛企業の御協力により行われています。

平和のメッセージ

太平洋戦争末期に、日本で最も多くの若者が特攻隊員として飛び立ったこの鹿屋の地から、平和へのメッセージを発信する「かのや未来創造プログラム 平和の花束」は、平成26年度からスタートしました。

「平和の花束」において、小・中・高等学校から寄せられた平和へのメッセージは、毎年多くの応募があり、令和4年度は、九州管内及び兵庫県、台湾から4,148点の作品応募がありました。

毎年、応募作品には、児童生徒が戦争遺跡や戦争体験談などに触れる体験を基に、戦争の事実や現代社会が抱える問題等と向き合い、平和や命の大切さについて考えたこと、平和な未来を創るために今を生きる私たちに何ができるか、といったことが自らの言葉で綴られ、児童生徒の平和への熱いメッセージを発信しています。



洋画



日本画



陶芸

市民講座

市では、主に公民館（中央、花岡地区、串良、上小原分館、細山田分館）、学習センター（東地区、西原地区、大始良地区、田崎地区、高須地区）、コミュニティーセンター（吾平、輝北）、高隈地区交流促進センター、リナシティかのや、勤労者交流センターにおいて、各種講座を行っています。

文化系では料理や歌、楽器、絵、陶芸、花、習字、語学等、運動系ではヨガやストレッチ、ダンス等の内容で、初級者向けから中級者向けの講座を毎年少しずつ内容を変えながら、実施しています。

年間を通して実施するものや、夏休み冬休みに子ども向けのもの、短期で開催するものなど皆様の好奇心とやる気を刺激する内容を色々と思いを凝らせて提供していますので、最寄りの公民館等にお問い合わせください。

077

催物・文化

鹿屋市では、文化の香り高いまちづくりと市民文化の振興・伝承のために、市民の皆さんが主体的に文化活動を行いやすい環境づくりやひとり1スポーツ1文化活動の推進、各文化芸術団体等の支援、市民が気軽に生の芸術に触れられる文化事業の充実、子どもの頃から様々な文化芸術に親しむための環境整備などに取り組んでいます。その中で、継続的に行われている代表的なものを紹介していきます。

○鹿屋市美術展

毎年、大隅美術協会が主体となり、洋画、日本画、工芸、写真、手工芸、デザイン、彫刻を対象とした総合美術展を開催しています。

これは当初大隅美術協会展として行っていたものを、1983（昭和58）年に大隅美術協会展第15回展から鹿屋市が共催となり、第1回鹿屋市美術展として開催しています。当初の会場は、鹿屋市文化会館、中央公民館、市役所7階、桜デパートなど様々な場所で行っていましたが、第26回展からリナシティかのや2階ギャラリーをメイン会場として実施しています。

2022（令和4）年1月に第40回展を迎え、大隅の芸術文化活動の振興に寄与すべく今後も開催していく予定です。



彫刻



写真



手工芸

○鹿屋市の文化協会

鹿屋市には、鹿屋市文化協会、吾平町文化協会、串良町文化協会、輝北町文化協会と各地域に文化協会があります。所属団体は、演劇・詩吟・舞踊・書道・華道など多岐にわたり、近年では、ヒップホップやベリーダンスといったダンスに関連した団体も多く所属しており、時代の流れとともに、多様な文化芸術活動に励んでいます。

毎年、それぞれの地域において、文化芸術活動の推進や、貴重な伝統文化の継承に寄与しており、特色ある文化祭を開催しています。文化芸術に興味のある方は、ぜひ、地域の文化祭に足を運んでみてください。

○自主文化事業

文化会館、リナシティかのやにおいて、落語、喜劇、舞踏、ポピュラー音楽、邦楽、雅楽能楽、歌舞伎、クラシック音楽、バレエ、オペラ、演劇など市民の皆様にも多種多様な文化に触れる機会を設ける事業です。

○学校芸術鑑賞事業

子どもたちが本物の文化芸術に触れる機会として、市内の小中学校において開催している事業です。内容としては、県内外から出演者を招き、能楽などの伝統芸能や各種音楽鑑賞をはじめ、郷土愛を育むため、鹿屋の郷土芸能を鑑賞・体験する事業も行っています。

鹿屋市少年少女合唱団

リナシティかのやの芸術文化学習プラザにおいて、子どもたちの音楽文化の向上と音楽を愛する心を育むことを目指し活動しています。



ポップカルチャー

リナシティかのやで行っている自主文化事業の中で、若者を中心に人気のある事業が2013（平成25）年から行っている「りなかる！」&「りなメロ」などです。

コスプレ、痛車、アニソン、声優などをキーワードに、ポップカルチャー&サブカルチャーに焦点を当てたイベントで県外から参加する方も多くいらっしゃいます。毎年、少しずつ趣向を変えて、常に今の若者を捉えた催しを目指しています。



踊ります。(練習風景)



歌い奏めます。(練習風景)

ヒメとヒコとは

「高校生ミュージカルヒメとヒコ」は舞台の出演者が全員高校生の鹿屋で生まれたオリジナルミュージカルです。2008(平成20)年より毎年上演されており、2022(令和4)年現在で15周年を迎えました。

舞台に立つキャストは大隅の各地域から、公募で集まり、毎年2月に行われる年1回の公演に向けて、1年間稽古に励みます。稽古では演技や歌だけでなく、舞台に必要な基礎体力を身につけるためのランニングや筋力トレーニングも取り入れています。また、12月末に実施する合宿では、1泊2日で高隈山登山に挑戦。演技力や歌唱力だけでなく、精神面も鍛え、心身ともに成長しながら2月の公演を目指します。

078

高校生ミュージカル

○ヒメとヒコ

ストーリー

ごく普通の高校生のマナは、変わらない毎日に少し退屈しながら、楽しい高校生活を送っていた。そんなある日、マナは同じ夢を繰り返し見るようになる。島の人々が歌ったり、踊ったりする楽しそうな輪の中に、いつもとは違う自分がいる。居眠りから目が覚めたマナは友人達に呆れられながら、学校内のあるウワサを耳にする。

『姫子先生が誰かに恋をしている!』

相手は学校一のモテ教師、歴史の昭彦先生。大好きな姫子が昭彦に想いを寄せていることが信じられないマナは姫子の本心確かめることに。そこで姫子の純粋な想いを知ったマナは、姫子の恋を全力で応援することを決意する。昭彦から郷土芸能部に誘われていたマナは入部を決意し、部員と共にトレーニングに出かけるふりをして、姫子と昭彦が二人きりになるチャンスを作るが、姫子の告白に戸惑った昭彦は自分の想いを伝えられず、姫子を傷つけてしまうことに……。ある日、学校の授業で大隅の歴史を学ぶために訪れた古墳で、マナは姫子を振った昭彦に詰め寄る。昭彦の優柔不断な態度に呆れたマナは、昭彦を置いて一人



クラスでの様子（劇中の一場面）



ヒコを介抱するヒメ（劇中の一場面）

「ほこら」の奥に向かった。好奇心旺盛なマナは、たどり着いたほこらの中を探索し、石でできた棺の中で寄り添うように納められていた二体の遺骨と一本の太刀、そして勾玉で飾られた首飾りを見つける。マナは首飾りを手にし、マナを探しに来た昭彦と帰ろうとした瞬間、白い鳥の化身に誘われ、別の世界へと迷い込んでしまう。

たどり着いたのは夢で見ていた古代の奄美大島だった。平和を愛し、つながりを大事にする結ゆいの精神で固く結ばれた人々と暮らし始めたマナは、姫子にそっくりな島の巫女「ヒメ」と、島の海岸に流れ着いた昭彦にそっくりな「ヒコ」に出会い、大隅と奄美のつながりを体験していく。

だが、穏やかな日々は突如終わりを告げる。ヤマトの使者の侵略によりヒメを奪われたヒコは奪還を決意し、兵を率いてヤマトとの戦へ出陣する。戦うことを決意したヒコを必死で止めるヒメ。

互いを守ろうとする想いは交わることなく、悲劇へ向かって走り出す。ヒメとヒコ、そして姫子と昭彦を待ち受ける運命とは？



「大隅大好き」と叫ぶキャスト全員の姿が名物となっています。

ヒメヒコ会とは

キャストの保護者やOBの保護者、そして制作スタッフで構成されているヒメヒコ応援団が「ヒメヒコ会」です。ひたむきに頑張るキャストの姿を見て、ヒメとヒコの活動を盛り上げようと、たくさんの方が協力・応援してくれています。

夏になるとヒメヒコ会が中心となり、キャストの衣装代・移動費・合宿費の為の資金活動を行っています。

また、キャストと同じように、ヒメヒコ紹介のパンフレット作成に取り組んだり、ヒメヒコのキャストと同じ様に支える人たちも自分達にできることを実践しています。



くしら桜まつりジョギング大会



南日本クロスカントリー大会inきほく

国体の開催

1972（昭和47）年に本県で第27回国民体育大会「太陽国体」が開催され、鹿屋市ではバレーボールとボートが開催されました。

そして、2023（令和5）年には特別国民体育大会「燃ゆる感動かごしま国体」・特別全国障害者スポーツ大会「燃ゆる感動かごしま大会」が開催されます。

本市では、「かごしま国体」

- ・スポーツウェルネス吹矢（デモンストレーションスポーツ）
- ・ローイング（全種目）
- ・バレーボール（成年女子）
- ・自転車（ロード・レース）「かごしま大会」
- ・バレーボール（精神障害の部）

以上が開催され、全国から多くの選手等が訪れ白熱した試合を展開します。

079

各種スポーツ大会等 1

鹿屋市は、「スポーツを通じた活力ある社会の実現」を目指しており、鹿屋体育大学などの各関係機関や地理的特性を生かした多くのスポーツイベントなどを行っています。

各種スポーツ大会等1～3では、そのことについて紹介します。

〇くしら桜まつりジョギング大会

美しく咲き誇る桜並木を駆け抜け、春の喜びを感じながらスポーツに対する関心を深めるジョギング大会です。

会場となる平和公園は、1976（昭和46）年から数年間に渡り、関西の地で働く串良町出身の方々によって、東西南北3kmにわたり、桜（ソメイヨシノ）の苗木が植樹され、現在は大隅の桜の名所となっています。

ジョギング大会は、1km、2.5km、5km、10kmと分かれており、子どもから大人まで、体力に合わせて参加できます。





美里あいら運動会

○南日本クロスカントリー大会inきほく

起伏のある輝北うわば公園の地形を活かした、コースの高低差が35mもあるクロスカントリーの大会で、九州一過酷なコースと言われています。

会場となる輝北うわば公園は標高550mの高台にあり、鹿児島湾に浮かぶ桜島や霧島連山、太平洋や高隈山など360度の大パノラマを眺めることができます。



また、環境省主催の星空継続観測（スターウォッチングネットワーク）では、過去7回日本一星空がきれいに見えるところという結果が報告されるなど、壮大な星空や雄大なロケーションを楽しめます。



うましさと

美里あいら運動会

吾平地域住民の体力向上を図り親睦と交流を深め、スポーツ文化の高揚と明るく豊かな郷土づくりを目指し実施しています。

- ・対抗方法
町内10町内会対抗
- ・種目
かけっこ、各種リレー、玉入れ合戦など

美里あいら敬老会

吾平地域に住む高齢者の方々の長寿を祝福し、その貴重な知恵と経験を美里吾平のまちづくりへ活かすことを目的に、1909（明治42）年から続く歴史ある美里あいら敬老会を開催しています。

- ・開催日 10月末の日曜
- ・場所 吾平振興会館





かのやマウンテンバイカーズfes



ツール・ド・おおすみサイクリング大会

オリンピック

鹿屋体育大学からは、数多くのオリンピックが誕生しています。

鹿屋体育大学と関係のあったオリンピックはこれまで17名となっており、中でも、鹿屋体育大学でトレーニングを重ね、在学中や卒業後にオリンピック代表となった「津曲勝利：バレーボール」「柴田亜衣、高桑健、高鍋絵美、高橋航太郎：競泳」「萩原麻由子、内間康平、前田佳代乃、塚越（山本）さくら、橋本英也：自転車競技」「宮田悠佑：カヌー」以上の11名の選手は鹿屋体育大学の競技力向上の面での大きな成果ということで大学HPにも掲載されています。全17名について詳しく掲載されているので下記QRコードからご覧ください。



080

各種スポーツ大会等2

○ツール・ド・おおすみサイクリング大会

市制60周年を記念し、海上自衛隊鹿屋航空基地で開催される「エアーメモリアルinかのや」のスポーツイベントの一つとして、2001（平成13）年に第1回大会が開催されました。

本市を中心に、大隅半島の雄大な景観と豊富な食材を生かしたご当地グルメを味わいながら走ることができるサイクリングイベントとして、現在では全国のサイクリストに認知されています。

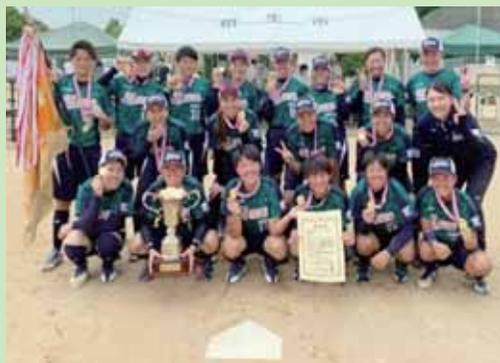
毎年、上級者から初心者、家族連れまで楽しめる複数のコースが企画されます。

地域密着型プロサイクリングチームである「CIEL BLEU KANOYA」や全国を舞台に活躍する「鹿屋体育大学自転車競技部」の選手たちと一緒に走ることができるのも、本大会の魅力の一つです。





CIEL BLEU KANOYA
(シエルブルー鹿屋)



MORI ALL WAVE KANOYA
(モリオールウェーブ鹿屋)

○CIEL BLEU KANOYA

2015(平成27)年に本市初の地域密着型プロサイクリングチームとして発足しました。

発足当初は、鹿屋体育大学自転車競技部の選手として活躍した、山本さくら選手(旧姓：塚越)と堀みなみ選手(旧姓：上野)の2名が所属していましたが、その後卒業生3名が加わり、オリンピック選手を輩出するなど、国内外の各種大会で活躍する一方、本市で開催されるサイクリングイベントにも積極的に参加し、地域密着型プロチームとして本市の自転車競技の発展や自転車を活用したまちづくりに寄与しています。

2021(令和3)年からは、ロードレース主体のチーム体制へ一新し、国内最高峰のロードレースツアー大会である「Jプロツアー」へ参戦しています。

○かのやマウンテンバイカーズfes

九州でも珍しいマウンテンバイクに特化した施設「霧島ヶ丘公園マウンテンバイクパーク」を会場として毎年8月(山の日前後)に開催されます。

120分の耐久周回レースや子ども向けのキッズアタックのほか、夜にライトアップされたコースを走るナイトクロスカントリーなど、特徴的なカテゴリーもあります。

MORI ALL WAVE KANOYA

2021(令和3)年に本市輝北町を拠点とする女子プロソフトボールチームとして発足しました。

2019(令和元)年の全国クラブ女子選手権において準優勝したことにより、プロリーグへの加盟権を取得し、2021(令和3)年から日本女子ソフトボールリーグへ参戦しました。

リーグ参戦初年度となる2021シーズンは、開幕戦から勝利を積み重ね、最終的には9勝1敗の成績で、見事3部リーグ初参戦初優勝という素晴らしい結果を収めました。

「人口減少が進む地方の活性化」「女性活躍の推進」「県民全体へスポーツの魅力を伝えていくこと」などを理念として活動しています。



宮下相撲
(乳幼児健康祈願土俵入)



宮下相撲
(小学生低学年の部)

かのやローズヒル駅伝大会

かのやローズヒル駅伝大会は、鹿屋市内を一周する「サンロード鹿屋」駅伝大会を前身として、鹿屋市市制施行5周年を機に、会場を霧島ヶ丘公園に、名称を「かのやローズヒル駅伝」に変更し、市全域で取り組む駅伝大会として、平成22年から始まりました。

市内の小学校区対抗駅伝競技を通して、市民が一体となり、健康づくりや優秀な選手の育成など、スポーツ振興や地域の活性化に寄与することを目的に、令和4年度までに13回開催されています。

市内小学校区を対象に、13区間21.2kmのコースを小学生から社会人までの代表者がたすきをつなぎ、健脚を競い合います。



081

各種スポーツ大会等3

みやした ○宮下相撲

美里あいら宮下相撲（別名：焼け相撲）大会は、1898（明治31）年に町中心街で発生した大火（被害戸数7戸）を教訓に、町民を元気づけることと、このような大火が二度とないように祈願の意を込めて始まったものであり、広く地域住民に相撲を普及させることで、健康で丈夫な身体と豊かな心を育てることと、青少年の育成と明るい郷土づくりに資することを目的に、令和元年度までに121回が開催されています。

のざと ○野里相撲

野里町の子鳥神社で開催される野里消防大相撲大会は、戦前は青年部で五穀豊穡を願って行われていましたが、戦争で一旦途絶えてしまいました。しかし、戦後、疲弊した地域の活気を取り戻すために、1949（昭和24）年に地元消防団が中心となり第1回大会が行われました。以来、現在まで開催されています。（途中、社会状況により中止もありました。）

再開当初は、地元の青年たちが中心となり取組が行われていましたが、近年は子供の取組も増え、豊作祈



野里相撲



串良町内一周駅伝大会

願に子供たちの健全育成、地域の安心安全の願いを込めた地元の大切な催しとなっています。

毎年9月の彼岸の中日に開催され、神社の境内に消防団で土俵づくりを行い開催しており、近年でも毎年80名程度の大小の力士たちが熱戦を繰り広げています。また、男児の土俵入りも毎年盛況を得ています。

地域の方以外の参加や、飛び入りもあるようなので、我こそはという方は、是非、参加してみたいはいかがでしょうか。

串良町内一周駅伝大会

串良町内一周駅伝大会は、住民の体力向上と健康増進の目的で1958（昭和33）年に始まり、今では60回を超える伝統的な大会です。

当初は、串良町青年団が主催していましたが青年団の衰退に伴い実施体制を変え、現在では地域おこしグループ『串良がんばる会』が主催しています。

大会は、一般、中高生、小学生と3つの部門が設けられ、子どもから大人まで幅広い年齢層のチームが参加して大会を盛り上げています。

スタートは串良ふれあいセンター前で、その後、中郷～下中へと北上し、細山田小中学校を通過して南下、十三塚～下方眼を抜けて下小原から串良総合支所前がゴールという全13区間、計23.4kmのコースで健脚が競われています。

例年、2月初旬に開催されることから、串良地域の新春の風物詩として地域住民に愛される大会となっています。

第67回 野里消防大相撲大会

令和元年9月23日 小島神社境内

《プログラム》 主催 野里消防分団

順番	種 目	出 場 者	予定時刻
1	神 事	中島宮司	8:00
2	土俵祭り	中島宮司、一年生	8:30
3	学年別個人戦	小学生全学年	8:40
4	学年別抜き相撲 各学年5人抜き・3人抜き	小学生全学年	9:40
5	チャンピオン決定戦	6年生選抜	10:40
6	優勝旗返還	前年度優勝子供会	11:00
7	子供会対抗戦	1チーム5名	11:10
8	中 入 り 分団長あいさつ 男児の土俵入り	野里分団長 一歳未満の男の子	12:30
9	優勝旗返還	前年度優勝チーム	12:50
10	地区対抗戦	校区内力士 子供2名 大人3名	13:00
11	表 彰 式		13:50
12	一般対抗お好み相撲	校区内力士 鹿屋市相撲連盟 他	14:00
13	これより三役 大開、開脇、小結	校区内力士	14:30
14	万歳三唱	野里消防後援会長	14:50
15	お楽しみ抽選会		15:00

(資料)
第67回
(令和元年)
プログラム

まちづくり



エアーメモリアルinかのや

イベントカレンダー 【1月～4月】

※令和4年度時点の主なもの

1月

- 【名物あいら木市祭】
吾平市街地
- 【くしら二十三や市】
串良市街地

2月

- 【山宮神社春祭り】
串良町細山田
- 【中津神社鉤引き祭】
上高隈町
- 【高校生ミュージカル
「ヒメとヒコ」】
鹿屋市文化会館

4月

- 【くしら桜まつり・
ジョギング大会】
平和公園
- 【中岳（吾平富士）山開
き登山】
吾平町神野
- 【エアーメモリアルin
かのや】
鹿屋航空基地
- 【かのやばら祭り春】
（～5月末まで）
かのやばら園

082

鹿屋市の祭り1

本市では、市民の皆さまが様々なイベントに参加し、鹿屋市に愛着を感じたり、地域、商工業などの振興やPRの一助となり、地域の活性化や観光の推進に役立ってほしいなどの思いを込めて、年間を通して様々なイベントを開催しています。鹿屋市の祭り1～3では代表的なものや、地域に古くから続く各種イベント（祭りなど）を紹介していきます。

○かのやばら祭り

「かのやばら祭り」は、バラの見頃である春のシーズン（4月下旬～6月中旬）と秋のシーズン（10月下旬～11月）の年2回「かのやばら園」で開催されるイベントです。期間中の土日祝日を中心に様々なイベントがあり、県内外から多くの方々が来園します。地域が一体となって実施し、地域の自立と住民の活力を呼びおこす「ばらのまちかのや」を創造することを目的としています。

○かのや夏祭り

「かのや夏祭り」の起源は「鹿屋青年実業団」が昭和初期に始めた祇園祭にあるとされています。1963（昭和38）年には「ばか踊り」が誕生し、「かのやハンヤ踊り」「曾の国の火祭り」と名称を変えながら、現在は「かのや夏祭り」として多くの方々に親しまれています。



鹿屋市農業まつり



かのや夏祭り（本祭）

「かのや夏祭り」は、中心市街地を踊り連が練り歩く「本祭」と「花火大会」からなり、「本祭」は商売繁盛、五穀豊穡を祈願した祇園祭の精神を受け継いでいます。

○エアーメモリアルinかのや

「エアーメモリアルinかのや」は、海上自衛隊鹿屋航空基地内で航空ショーをメインに開催するイベントです。これは、海上自衛隊鹿屋航空基地の開隊40周年を記念して、自衛隊・地域住民・行政の協力のもと、1994（平成6）年から開催しており、県内外から多くの航空ファンが来場します。

「航空ショー」のほか、佐世保音楽隊の演奏会や、航空機の展示など、様々なイベントを行います。

○かのや農業まつり

地域農業の豊かな実りに感謝し、生産者と消費者の交流を通じて生産者の生産・経営意欲の向上と消費者の農産物への理解を深めるとともに地域農業の活性化を図ることを目的に実施しています。

【主な内容】

- ・展示販売（各種農産物等）
- ・体験イベント
- ・食イベント
- ・各種ブース設置
- ・農業機械展示

イベントカレンダー 【5月～8月】

※令和4年度時点の主なもの

5月

【リナフェスタ】

リナシティかのや

【南日本クロスカントリー
inきぼく】

輝北うわば公園

6月

【ひらぼうホテルの里
ほたる祭り】

輝北町平房

7月

【かのやマリンフェスタ】

高須・浜田海岸

【串良夏祭り】串良市街地

8月

【美里吾平夏祭り】

吾平市街地

【かのや夏祭り「本祭」】

鹿屋市街地

【かのや夏祭り「納涼花火
大会」】

鹿屋港





星のふるさと輝北まつり



美里あいら夏祭り

イベントカレンダー 【10月～12月】

令和4年度時点の主なもの

10月

【大隅湖レイクサイドフェスティバル】大隅湖

【高須潮干狩り大会】

高須海岸

11月

【かのやばら祭り秋】

かのやばら園

【星のふるさと輝北まつり】

輝北運動場

【くしら黒土まつり】

平和公園

【美里あいら農業祭】

吾平中央公園

12月

【冬華火】

リナシティかのや

【クリスマスファンタジーナイト】

かのやばら園

毎週土曜日

【かのや土曜朝市】

イベント広場

不定期

【大隅花マルシェ】

市内外

083

鹿屋市の祭り2

〇くしら桜まつり

1985（昭和60）年から特攻基地跡の平和公園の桜をPRするため、桜の開花状況に合わせ開催しています。ジョギング大会とスポーツ大会、ステージショーなど各種イベントを実施し、祭り期間中は夜桜ちょうちんの点燈もあります。



くしら桜まつり

〇くしら黒土まつりくつち（串良農業祭にいなめさい）

1976（昭和51）年から新嘗祭として始めた伝統的農業祭りです。平和公園において、農畜林産物の生産者直売、農機具の展示即売、大抽選会等の催し物等があります。

農業者交流により農業者相互の親睦と連帯感を深め、更には消費者との交流により生産者と消費者が相互理解を深め合うことを目的に開催しています。



くしら黒土祭り



例年5,000人ほどを集め、湖面に映える花火とレーザーの共演は必見！

大隅湖レイクサイドフェスティバル
笠野原台地を干ばつから守り、畑作を振興するために1967(昭和42)年に完成した「高隈ダム」からなる「大隅湖」。その水の恵みと先人たちの苦勞に感謝し、高隈地区が誇る豊かな自然を市内外に周知し、地域の活性化と観光振興のため、1990(平成2)年にはじまった「あじさい祭り」から続く「大隅湖」での祭り。地域おこしグループが主催となり、2006(平成18)年から現在の祭りの形となりました。

○くしら二十三や市

およそ300年前の江戸時代後期から、旧暦の12月23日に正月用の物々交換の場として開かれた市です。大隅の春の訪れを告げる風物詩として毎年1月下旬の土曜日・日曜日、串良町商店街周辺の道路を歩行者天国として行われ、県内外の出店者や町内商工業者など約300店舗が一堂に集まり、花き・刃物類・日用品・雑貨等を販売します。ステージイベント、子どもが遊べるイベント等も開催されます。



くしら二十三や市

○名物あいら木市祭

吾平に新春を告げる名物祭。鶴戸神社前から吾平町麓交差点までの歩行者天国では、花木販売をはじめ舞台演芸や抽選会など楽しいイベントが開催されます。



あいら木市

美里あいら農業祭

宮下相撲大会と同時開催され、地域農業の豊かな実りに感謝し、生産者と消費者の交流による地域経済の活性化のために開催します。

美里あいら夏祭り 花火大会

地域に根付く伝統や文化の継承発展を目的に開催しており、鶴戸神社からの神輿担ぎや月見橋上流左岸での花火大会を行っています。また、前日には鶴戸神社で美里あいら伝統芸能祭が、八月踊り、そば切り踊り、棒踊りなど、地域の伝統芸能を広く知ってもらい、次世代へ継承することを目的に開催されます。

星のふるさと輝北まつり

毎年11月に輝北運動場と輝北コミュニティセンターで同時開催される輝北地域最大のイベントで、歌謡ステージや舞台発表、地元特産品の試食・販売など多くの催しが行われ、多くの観客でにぎわいます。



鬼火焚き（吾平）



鬼火焚き（輝北）

うす 臼起こし

正月に関係する行事には、鬼火焚きの他に「臼起こし（こたこん）」があります。12月31日の夕方、庭にきれいに掃除した臼を出します。一升ますの中に白米5合を入れて白い紙で覆い、その上に餅を奇数個、だいたいを1つ、子持ち里芋を1つ、ゆずり葉を1枚入れます。この一升ますを臼の中に入れ、箕みでふたをします。箕の上には手杵てぢりをのせ、歳神様へのお供え物を飾ります。臼起こしの歌も歌われます。そして元日の夜中から2日にかけて、年男の若者たちが徹夜で各戸の臼を回って、杵で臼のふちをたたいて臼を起こします。元日に臼を休ませることで臼をねぎらい、臼を起こすことで1年の幸せを願います。現在では吾平町などで、趣おもむきを変えながらも行われています。



084

鹿屋市の祭り3

○伝承されてきた祭り

皆さんは、季節の行事と聞いて何を思い浮かべますか。節分、ひなまつり、七夕、お彼岸など、日本古来の行事がたくさんあります。その他にもハロウィンやクリスマスなど、海外の行事も日本に浸透しつつあります。では昔の鹿屋の人々は、どのような季節ごとの行事やお祭りを行っていたのでしょうか。

1月に行われる行事には、五穀豊穡や無病息災など1年の幸せへの願いが込められています。1月15日（所によって7日）に、河原や田んぼでは「鬼火焚き」が行われます。生の竹を立て、持ち寄った門松やしめ飾り・書き初めなどを焼きます。竹に火が付くと爆竹のような大きな音をたてながら燃え上がるので、とても迫力のある行事です。火が弱くなると、子供たちはその火で餅を焼き、口の周りを真っ黒にしながら食べます。この餅を食べると、その年は病気になるまいと言い伝えられているそうです。

この鬼火焚きは平安時代からある全国的な行事で、この地域では「おねっこ」や「どんど焼」とも呼ばれます。昭和初期～中期、残り火による火事や子供たちの火遊びを心配して、鬼火焚きを中止にする傾向がありました。しかし、ふるさとの伝統行事とし

川東町光同寺水神祭



水神様の掛軸



社（やしろ）



古文書 文化の元号（江戸時代）

て復活させようという活動があり、現在は川西町などで行われています。

また、鹿屋には季節の行事の他にも「講」や「祭り」があります。講とは、地域に住む同じ信仰や目的を持った人々が集まって組織・運営する団体のことです。健康長寿を願う「庚申講」、田の神様に豊作を願う「田の神講」など、他にもたくさんの講があります。

その中のひとつに、輝北町で^{れんめん}連綿と引き継がれている「御鏡講」があります。御鏡講は、一向宗を信仰する人々の集まりです。薩摩藩の一向宗弾圧の厳しい取締りの中でも、役人の目を盗んで講を維持し続けたそうです。その努力の跡は、市指定文化財「朝倉のかくれ念仏洞」で見ることができます。

鹿屋の祭りといえば、夏祭りやばら祭りが思い浮かびますが、他にもたくさんの祭りがあります。その中のひとつである「水神祭り」は、豊作を祈り感謝する祭りです。水は農業や飲料水、水害など私たちの生活に大きな恵みと被害をもたらします。水神様を大切に思う気持ちが、信仰や祭りに表れています。

○その他の祭り

ここまで、代表的なものや、市が大きく関わって開催されている祭りなどを紹介してきましたが、鹿屋市には他にも町内会や商店街などが実施している祭りもあります。ぜひ足を運んでみてください。

ほんがま 盆釜

お盆の行事は、以前は旧暦の7月13～15日に行われていましたが、現在では8月13日～16日に行われます。この期間の風習のひとつに、「盆釜」があります。女の子が小さな釜や鍋を借りて庭先で食事を作る行事で、料理が上手になるようにという願いが込められています。燃料には、精霊迎え火用の松のツガを使用しました。作った食事は柿の葉によそい、庭に敷いたムシロや立木に竹を張った「ユカダ」の上で食べました。この間、男の子は凧を飛ばして遊んだそうです。

現在は高隈町などで盆釜を体験する行事が行われ、老若男女が参加しています。





簡易宿泊所なかん岳庵



ウォーターパール館

簡易宿泊所なかん岳庵^{だけあん}

旧神野小学校の校長住宅を簡易宿泊所として2020（令和2）年にリニューアルオープン。手頃な料金で10名まで宿泊できます（10名様最大5,500円）。

中岳トレッキング

神野地区の南端にある中岳（標高677m）は、その美しさから「吾平富士」とも呼ばれています。地元町内会の方々により登山道も整備され、また4つの滝をめぐるコースも楽しむことができます。



085

観光名所 1

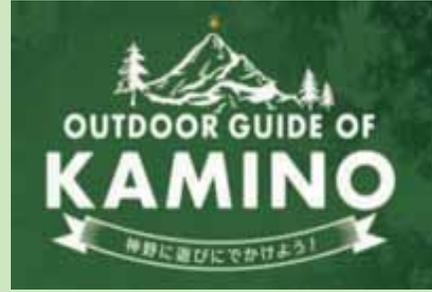
○吾平自然公園

吾平自然公園は、県道544号と吾平川沿いに位置し、山と、谷間を利用した農地に囲まれている公園です。周辺には吾平山上陵や県立大隅広域公園、湯遊ランド、「神野」山の学校キャンプ場などの観光施設もあることから、吾平町の観光ルートの一角として整備されました。吾平町神野地域のイメージである「清流」を感じられる立地に存在することから、「せわしなさ」「息苦しさ」といった都会の喧騒から解放され、「ゆったり」「心地よさ」といった雰囲気の中で過ごすことができます。園内には、四季の移ろいを感じられる樹木や、「清流」を視覚・聴覚など様々な感覚によって体感することができる水路、ウォーターパール館、水車小屋などの施設が整備されています。また、始良川が隣接していることから、夏には水遊びに来る来園者で賑わっています。

ウォーターパール館は、水に特殊な音波を与える水玉発生装置と専用の特殊ストロボによって水が空中で止まったり上昇したりしているような動きに見える不思議で神秘的な水演出を見ることができる施設です。



吾平自然公園周辺の景色



神野地区での登山に関する
お問い合わせ先
・美里吾平コミュニティ協議会
電話：0994-58-6566

○“神野”山の学校キャンプ場

廃校となった旧神野小学校の校庭をキャンプ場として2019（令和元）年夏にオープン。テント、BBQセットなどのレンタルも充実しており、キャンプ道具がなくても、家族や仲間と気軽にアウトドア体験ができます。



四極それぞれの証明書を4枚揃え合わせたその裏面

大隅半島に 唯一無二の場所

○内之浦ロケット基地

正式名称は鹿児島宇宙空間観測所で、天文観測衛星や惑星探査機を打ちあげています。

鹿児島県にロケット発射場があるのは、赤道に近いこと、東側に発射しやすい（東側が開けている）などの理由からだそうです。

せっかく近くにある立派な施設に一度行ってみたいかがでしょうか。

○本土最南端（佐多岬）

大隅半島には本土最南端である佐多岬があります。

「日本本土四極踏破証明書」を御存じでしょうか。これは、本土の「最南端」「最北端」「最東端」「最西端」で、発行される統一した様式の証明書です。

4つの端っこ内の一つは既に手に入れたようなものなので、あと3か所ですね。



2022グランプリ「夕暮れのひととき」



2021グランプリ「黄金の渚」

ユクサおおすみ海の学校の絶景



180度以上が海！



プライベートビーチ！



夕日とツリーハウスを
バックにキャンプ！

086

観光名所 2

○ユクサおおすみ海の学校

鹿屋市の鹿児島湾沿いの県道68号線沿いを、素敵なオーシャンビューを堪能しながら走っていると、それは見えてきます。

120年の歴史をもち「日本一海に近い小学校」と言われていた鹿屋市立菅原小学校をリニューアルした体験型宿泊施設が「ユクサおおすみ海の学校」です。

学校であった雰囲気はそのままだに、どこか懐かしさを感じさせる空間、周りを見渡すと、目の前には美しい海、山、空、素敵な景色が、ここに 있습니다。

サイクリングやカヤックなど、おおすみの自然を堪能できる様々な体験、BBQや磯遊びエリア、学校の雰囲気そのままの体育館や運動場など、豊富な体験アクティビティが用意されています。

そして、宿泊は全室オーシャンビューとなり、少人数のご家族やご夫婦・カップル向けのお部屋（職員室・校長室）、大人数の御家族・グループ向けのお部屋（教室）が準備されています。

詳しくは、右記QRコードからHPをご覧ください。





2022グランプリ「ベルベットな朝」



2021グランプリ「恋人の聖地」

○かのやばら園

かのやばら園は、8haの広大な敷地に、1,500品種35,000株のバラや四季折々の花々が植栽されている日本最大規模を誇る「ばら園」として、2006（平成18）年にグランドオープンしました。

開花期の春と秋には「かのやばら祭り」が開催され、県内外から多くの観光客が訪れる本市はもとより大隅地域の観光交流拠点施設となっています。

また、全国の観光地の中からプロポーズにふさわしいロマンティックなスポットとして、「恋人の聖地」に認定されています。

園内の見どころ

カラーガーデン

区画ごとに異なる色のバラが植栽してあるエリア。中央のハート型に誘引してあるバラは絶好のフォトスポット

つるバラトンネル

春限定で出現するエリア。トンネル一面に広がる優しい色と甘い香りのバラに全身が包まれます。

入園料

大人：630円 小中高生：110円

大人料金は、開花状況により変動します。

2023（令和5）年3月31日現在



高隈山系登山

本書の中にも、何度となく出てくる高隈山系は、登山で堪能するのもお勧めです。

鹿屋市観光協会が示している代表的な登山ルートをはじめ、垂水側の大野原林道から登り、大笹柄岳登山口に進むコース、鳴之尾林道から御岳山頂を目指すコース、峰越林道から大笹柄岳山頂を目指すコース、ますヶ淵下登山口から刀剣山を目指すコースなどがあります。

小中高生の頃に高隈山系に登山をされた方も多いと思いますが、社会人になってからの登山も視点が変わって新鮮な感動が得られるでしょう。

なお、登山の際には鹿屋市観光協会（0994-41-7010）や、国立大隅青少年自然の家（0994-46-2222）に連絡をすると、ルートの相談や登山道の地図などが入手できます。



輝北天球館



パノラマサイトと桜島

JIA 25年賞受賞 (日本建築家協会)

輝北天球館及び輝北うわば公園内の木造建築群が、「25年以上の長きにわたり建築の存在価値を發揮し、美しく維持され地域社会に貢献してきた建築」として2020（令和2）年に、JIA25年賞を受賞しました。

この建築群には、宇宙（コスモス）を観察するという目的、この立地、地元生まれでコスモロジーの思想を育んだ建築家の三者が邂逅し、場所の意味を顕在化させることに成功した建築物とされています。



輝北天球館及び木造建築群

087

観光名所 3

○輝北うわば公園・輝北天球館

「輝北うわば公園」は標高550mの高台にあり、鹿児島湾に浮かぶ桜島、霧島連山、太平洋、高隈山など360度の大パノラマが眺められ、周辺には牧場や風車もあり、異国情緒の漂う場所です。

公園内にはバンガローやアスレチックなども整備されており、県内外から家族連れやキャンパーも多数訪れる公園です。桜島の噴火口を同じ目線で安全に見ることのできるスポットでもあります。

また、環境庁主催の星空継続観測（スターウォッチング・ネットワーク）では、1991（平成3）年冬季から4季連続して、日本一星空がきれいに見えるところに認定されました。

この公園内の一角にユニークな造形が特徴の天文台「輝北天球館」があります。1995（平成7）年に完成し、天体観測ドームには口径65cmのカセグレネ式反射望遠鏡が設置されており、昼間でも美しく輝く一等星が見られます。

天球館内では、館長をはじめ学芸員による天体観測の解説もあり、夜は満点の星空を楽しむことができます。



テントサイトと風車



アスレチックと天球館

ユニークな造形で特筆すべきことは、斜めに突き出たラグビーボール状の物体の内部は、階段席が設けられた研修室となっていますが、その空間の形状は、外から目にした時の形と変わりません。

3本の斜めの柱は室内を貫いて、殻を破り、最後は天に呼びかける花のような形に編まれて、遠くからも目立つシンボルです。

周辺部の複雑な造形は遊歩路で、来訪者が楽しみながら、この地の360度のパノラマに親しめる効果をもたらしています。

8本の柱で支えられた展示室の独特の形も、天体観測という機能にもとづいた上部の半球ドームと違和感なく溶け込んでいます。

木造建築群は、それぞれの命が大地から芽吹いたような姿ですが、形態は構造とは無縁ではなく、また外観が、内部空間に率直に対応しています。

完成直後から、大きな話題を呼んだ「輝北天球館」は周辺にない名所となり、県内外から日常的に訪れる公園の景観として定着し、地域社会に貢献する存在となっています。



めいのお 鳴之尾牧場

素敵な景色といえば、鳴之尾牧場も欠かせません。

鳴之尾牧場は恵まれた自然環境のもと、優れた乳用牛を育成するために1966（昭和41）年から牛を放牧している鹿屋市営牧場です。高隈山の南西中腹（鹿屋市有武町）の標高500mに位置し、70.9ha（東京ドームの約15個分）に及ぶ広大な土地を有しています。

広い草原に100頭近い乳用牛が放牧され、雄大な高隈山を背景に赤いトンガリ帽子風の屋根をした研修館の建物とのコントラストは、南国におけるスイスのアルプスのような牧歌的な雰囲気味わいがあり、訪れた人々の心を癒してくれます。





東京2020オリンピック・パラリンピック競技大会の事前キャンプに関する覚書をタイ王国で締結しました。（2018（平成30）年5月）



タイ王国女子バレーボール代表チームが本市で事前合宿を行い、市民による歓迎を受けました。（2018（平成30）年7月）

鹿屋市と国際交流

鹿屋市においては、1980年代のドラゴンボート競技を通じたマレーシア・ペナン州との交流や旧串良町における韓国との交流など、主にアジア諸国との交流が行われてきました。

民間においては、1980年代に「からいも交流」が高隈・串良地域を中心に始まり、世界各地からの留学生が一般家庭で受け入れられました。

近年は市内に在留する外国人の数が増え、多くの技能実習生が市内の民間企業で農業や食品製造業などに従事しながら技術を学ぶとともに、地域の経済を支えています。

このような中、1996（平成8）年に設立された鹿屋市国際交流協会では、青少年の海外派遣支援などの人材育成活動に加え、異文化や日本文化体験を通じた地域における国際交流が行われており、鹿屋市においても国際交流員（CIR）を配置し、国際理解の促進と多文化共生社会の推進に努めています。

088

国際交流

○タイ王国との交流

鹿屋市は、「からいも交流」や鹿屋体育大学を通じてできた縁から、2018（平成30）年、東京2020オリンピック・パラリンピック競技大会におけるタイ王国女子バレーボール代表チームのホストタウンに登録されました。

タイ王国バレーボール代表チームによる事前合宿の実施や地域住民との交流、地元高校生によって食材提供やレシピ開発がなされた「食のおもてなし」、小学生らによる応援メッセージの作成など、子ども達を中心となってタイ王国との交流が行われました。

タイ王国女子バレーボール代表チームは、惜しくも東京2020オリンピック競技大会への出場権を獲得することはできませんでしたが、様々な交流活動により芽生えたタイ王国との関係がスポーツ・産業経済・観光・人材育成など多分野に渡る交流に広がっていくことが期待されます。



タイ出身CIRによる異文化理解講座



旧串良町を中心に、1980年代から韓国との交流が続けられています。



旧串良町3小学校と全州北一初等学校の交流。

○韓国との交流

韓国との交流は、1991（平成3）年に南日本子ども大使として全羅北道全州市を訪問した旧串良町の中学生の礼儀正しさに現地の小学校長（当時）の李氏が感心し、旧串良町を訪問したことから始まりました。

李校長の働きかけで、1993（平成5）年に旧串良町3小学校（串良小・細山田小・上小原小）と全州北一初等学校との間で友好親善盟約が締結され、2014（平成26）年に終了するまで、児童・関係者合わせて計846名が参加する交流が行われました。

民間においては、友好団体「李直会」が設立され、学校交流の支援の他、全州市に設立された全羅北道かごしまクラブとの定期的な交流がなされるようになりました。その交流は、現在「串良全北会」に引き継がれています。また、全羅北道完州郡の完州中学校サッカー部が鹿屋市で冬季合宿を行ったり、串良町柳谷町内会（通称：やねだん）が韓国大邱市の企業と交流を行うなど、現在も幅広い交流が行われています。

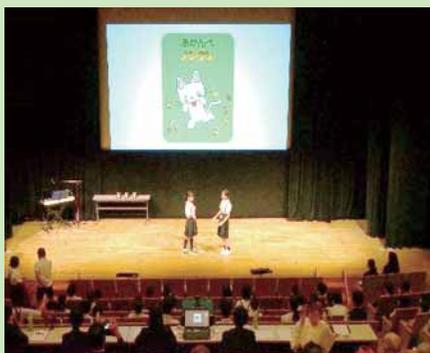
アジア・太平洋農村研修村

農山村と国際化の新たな取組の可能性を期待して、鹿児島県が1994（平成6）年「アジア・太平洋農村研修センター（通称：カピックセンター）」を、鹿屋市が1997（平成9）年「アジア・太平洋農村研修村民族館（通称：民族館）」をそれぞれ大隅湖畔に設置し、「アジア・太平洋農村研修村」が整備されました。

カピックセンターでは、大隅地域の国際交流の拠点として、世界各国からの研修生の受入や地域住民との交流が行われています。また、民族館では、様々な国の民族衣装の試着や楽器の演奏を体験することができ、地域の国際化の進展に寄与しています。



民族館



鹿屋市小中学校英語弁論大会
～小中一貫での開催～



Glocal English Day Camp
～鹿屋市の食でおもてなし～

文部科学省 教育課程特例の変遷

平成17年度
「かのや英語大好き特区」

平成21年度
「教育課程特例措置」認定

平成27年度
教育課程の在り方に関する
調査研究

令和元年度～令和2年度
文部科学省教育課程特例
継続申請

令和3年度～令和4年度
文部科学省教育課程特例
変更手続き

- ・小学校1年生から教科（英語科）新設
- ・鹿屋女子高等学校にて国立台北教育大学教育実習生12人の遠隔教育実習
- ・台湾国立台北教育大学と鹿屋市教育委員会との協定【10人の教育対面実習生受入開始（令和5年度～）】
- ・台湾9小学校と鹿屋市内10小学校姉妹校締結

089

英語教育

本市では、平成17年度に「かのや英語大好き特区」の指定を受け、平成19年度に鹿屋市総合計画を作り、「国際性豊かな人づくりの推進」を基本計画の1つの柱に掲げ、鹿児島県アジア・太平洋農村研修センターにおける文化交流、鹿屋体育大学の留学生とのスポーツ交流など、市民・地域、行政が一体となって国際交流を推進し、国際社会に対応できる人材の育成に取り組んでいます。

これまで、県内でも先進的に小学校英語教育を推進してきましたが、平成27年度から市内3小学校が外国語教育強化地域拠点事業の研究指定、さらに平成29・30年度小学校英語に対応した教育課程編成の在り方に関する調査研究の指定を受け、本市の英語教育の在り方について研究・実践を図ってきました。

新学習指導要領が完全実施された令和2年度から、各小学校において本格的に英語科の授業を実施し、4技能5領域に渡るコミュニケーション能力を育成してきました。令和3年度からは、5つの英語教育圏ごとに、研究テーマを設定し、小中一貫で、研究授業や授業研究会を開催し、その成果と課題を鹿屋市の成果と課題として取りまとめ、県内外に対して発信できるように本英語教育圏推進会議の改善を図っています。

令和4年度からは、文部科学省教育課程特例変更



国立台北教育大学との協定
～教育実習生受入れ～



台湾9小学校と鹿屋市10小学校
との協定 ～交流授業～

手続きの承認を受け、小学校1年生から「英語科」として新たに教科を新設し、「グローバル教育推進事業」の推進を図っています。

本事業の目的は、多文化共生都市づくり（英語がすきになるまち 英語でつながるまち）であり、グローバル人材「地球規模で様々な問題を考え、郷土の魅力を生かして、英語を使って、能動的に課題解決に向けた行動を起こす児童生徒」の育成を目標としています。

具体的には、「郷土の課題解決に貢献する志を持った人材」「郷土の魅力を世界に発信し、持続可能な社会の発展に貢献する人材」の育成が目標です。

具体策としては、国立台北教育大学教育実習生の受入による研究実践の充実を図ったり、台湾9小学校と鹿屋市10小学校との協定に基づき、遠隔交流や人的交流の推進を図ったりします。コミュニケーション能力の育成を図るためには、言語活動の目的・場面・状況等を明確にする必要があるため、同じように第二言語として英語を学び、時差1時間でのやり取りが可能な台湾との交流は英語を活用する必然性を高める機会となります。

また、多文化共生都市づくりに向けては、グローバル・イングリッシュ・デイキャンプ等において、地域に暮らす外国人や台湾からの実習生等を「おもてなす」という視点を持ち、郷土の魅力を発信したり、協働して世界の問題解決に貢献したりする活動を行っています。

グローバル教育推進事業

- グローバル・イングリッシュ・デイキャンプ
「郷土の魅力を発信」と「国際貢献活動」をテーマに、地域に暮らす外国籍の方々をおもてなしします。
企画・運営には、子ども会や町内会と学校教育課が協働して取り組んでいます。
- ホームステイ
国立台北教育大学教育実習生受入に伴い、受入小学校の保護者等を中心に、ホームステイの受入を行ったり、地域の行事に参加したりする機会を設定し、多文化共生都市づくりの機会をつくり出します。
- 鹿屋市小中学校英語弁論大会
「郷土の魅力」「私の学校」などをテーマに、小中一貫で開催しています。
- 台湾への鹿屋市PR子ども大使派遣
鹿屋市の魅力を発信する小中高生を短期で台湾へホームステイ派遣をします。

まちづくり

町内会の活動



ゴミステーションを管理・運営し、地域の美化が保たれています。



防犯灯を設置し、安全・安心の確保に努めています。

高隈地区 コミュニティ協議会

「高隈の恵みを活かし人々が集う郷づくり」を将来像として、2015（平成27）年に設立しました。

まちづくり部会、事業部会、生活安心部会、スポーツ部会で構成され、高隈地区の地域活性化とコミュニティづくりに日々取り組んでいます。



休耕田を活用した米づくり



鹿児島女子短期大学との事業連携

090

鹿屋市の地域づくり 1

住みよい地域をつくるのは行政の役割ですが、それは行政の一方的な考えでつくるのではなく、市民と行政が意見を出し協力し合い、役割分担をすることで、より良い「地域づくり」ができるものです。

地域の活力（地域力）を向上させるために、市民と行政が「共生・協働」の考えに基づき、より一層の協力関係を構築していくことが重要であると考えられます。

○鹿屋市の共生・協働

今日、私たちが日常的に使う「協働」という言葉は、1980年代から使われはじめ、2000年代に入ると、頻繁に聞かれるようになります。協働という言葉が一般化したきっかけの一つに、1995（平成7）年の阪神淡路大震災が挙げられます。大きな災害を通して、改めて地域に住む人と人との繋がりが、いかに大切であるかが再確認されました。鹿屋市では、さまざまな分野において、町内会や各種団体などの自主的な活動や奉仕作業をはじめ、有形無形の協力を得ながら、共生・協働の市民活動が各地域で行われてきました。これらの市民活動を持続、発展させ、市民による市民のための市政づくりを柱とした市民主体のまちづくりと地域コミュニティの活性化を促進するため、市では、



避難訓練等により、災害が発生したときも地域で助け合う精神が育まれています。



地域のコミュニティづくりや親睦を図るための取組を行っています。

2010（平成22）年に「鹿屋市共生・協働で進めるまちづくり基本方針」を策定しました。

○町内会は「住民自治」の基礎的組織

町内会は、その地域に住む人が気軽に付き合い、日常生活に必要な情報交換や安全確保などを行うとともに、地域での生活をより快適なものにするための、住民に最も身近な自治組織です。2022（令和4）年4月1日現在、鹿屋市には147の町内会があります。

町内会では、防災・防犯などの安全安心なまちづくりや除草や清掃、ごみステーションの管理等の環境美化活動、会員相互の福祉、助け合い活動や交流親睦を図る活動を行うことで、より身近な暮らしの向上に向けた活動に取り組んでいます。

○地域づくりに取り組むコミュニティ組織

地域コミュニティ協議会は、町内会だけでなく、地域にあるその他の市民団体・企業等が地域の身近な課題解決に向けて、一体となって地域づくりを行う組織であり、2022（令和4）年4月1日現在、高隈・吾平・串良・細山田の4地区に設立されています。また、最近では、課題解決の取組をコミュニティビジネスとして行うことで、自分たちで活動資金を稼ぎながら、より良い地域づくりに取り組む、地域コミュニティ協議会の形にこだわらない地域運営組織の立ち上げも進んでいます。

美里吾平コミュニティ協議会

「住んでよし 心やすらく美里吾平」を基本理念として、2014（平成26）年に設立しました。地域づくり部会、暮らし部会、プロジェクトグループで構成され、吾平の課題解決や活性化のため様々な活動に取り組んでいます。



吾平小学校校門坂ソーメン流し大会



吾平山上陵の四季を楽しむお茶会

まちづくり

PTA活動



市PTA連絡協議会総会

鹿屋っ子JLC



夏休み宿題お手伝い隊

PTA活動

現在小学校23校、中学校12校、高等学校6校、鹿屋養護学校（R5.4より鹿屋特別支援学校に名称変更）1校の計42校があります。このすべての学校が、鹿屋市PTA連絡協議会に加盟しています。

この会では「単位PTA相互間の連絡調整を図ること。

PTA運営の向上と教育の振興に努めること。青少年の健全育成に寄与すること」を目的としています。

令和4年度は「PTAは子どもたちの未来をつくる」

～いま求められていること～をスローガンに、以下の活動に取り組んでいます。家庭力の向上 会員の資質向上 PTA組織運営の改善・充実 子どもの安心・安全の確保 地域活動への積極的参加につながるよう各行事を計画し、参加者を募っています。

今後子どもたちの健全育成を図ることを核にして活動を進めていきます。



091

鹿屋市の地域づくり2

○社会教育関係団体の取組を通じた地域づくり

社会教育関係団体とは、学習・文化・スポーツなど社会教育に関する事業を行うことを主たる目的とし、その活動を地域文化・スポーツの向上や生活文化の振興、さらには社会福祉の増進につなげ、自主的な運営をする団体です。

【鹿屋市の主な社会教育関係団体】

鹿屋市子ども会育成連絡協議会、鹿屋市青年団協議会、鹿屋市PTA連絡協議会、鹿屋市地域婦人団体連絡協議会、鹿屋市校外生活指導連絡会、鹿屋市中央生活学校、鹿屋市文化協会などがあります。

○「鹿屋っ子クラブ」の活躍による地域づくり

鹿屋っ子クラブは、中学生・高校生のボランティアの団体として平成12年度に発足し、様々なボランティア活動や研修活動を通して、地域社会の発展に寄与する青少年育成を目的に活動しています。

○子ども会の活性化のための「KOKA（コカ）プロジェクト」（かのやオリジナル子ども会アソシエーション）の推進による地域づくり

子ども会は、地域づくり・人づくりの観点から、欠かすことのできない重要なもので、子どもの健全育成に大変有意義であることから、鹿屋市の子どもたち全

子ども会



アドベンチャー事業

子ども会



子ども会大会（創作活動）

員の参加（100%加入）を目指しています。しかし、会員数が年々減少してきている現状があります。そこで、子ども会について全ての市民に関心を持ってもらい、子ども会の活性化を図るため、「KOKAプロジェクト」を令和3年度から推進しています。

KOKAプロジェクトでは、「参加したくなる子ども会」をめざし、全員参加のための方策と子ども会活動の再構築（魅力あふれる未来型活動づくり）について、プロジェクトチームを発足させ、具体的な取組を進めています。主な取組として、子ども会を町内会組織に位置付けることや未加入者に加入してもらうための声掛けや周知、魅力あるプログラムの充実・開発・持続可能な組織や活動内容の在り方の工夫等があります。

以上のような取組により、子ども会活動を通して、地域の子どもは地域で育てることで、これからの地域づくりへとつなげていきます。

○「鹿屋っ子JLC（ジュニアリーダークラブ）」の自主的な活動による地域づくり

令和元年度に発足した中学生・高校生で構成される「鹿屋っ子JLC」は、「子ども会大会」や「アドベンチャー事業」等、子ども会のサポートをしています。

また、定例会で企画を立案し、小学生を対象にした「夏休み宿題手伝い隊」を行うなど、自主的な活動に取り組み、地域に貢献しています。

子ども会活動

子ども会とは、地域の小学生～中学生が集まり組織された団体（単位（校区）子ども会）で、体験活動など様々な活動を行っています。

主な活動（行事）として、十五夜や球技大会、クリスマス会等、地域独自の活動を行っています。市子ども会では、アドベンチャー事業や子ども会のリーダー（インリーダー）になるための「子ども会大会」等を行っています。

子ども会は、自分たちで運営して、やってみたい活動をやり遂げることが大きなテーマとなっています。

皆さんもぜひ、地域の子ども会活動に参加してみてください。



子ども会シンボルキャラクター「にこちゃん」



森
宗吉



森氏の功績を称える石碑
(三角公園内)

孟宗竹製の水道管

高隈村では、1900（明治33）年に、今本甚吉が孟宗竹による導水を行っています。

そして、小野勇市も、1901（明治34）年頃、集落に、高隈山中から8kmに及ぶ孟宗竹の導水管で引水しました。竹のにおいや、破損の続出など難点はありました。1927（昭和2）年に笠野原上水道組合による給水が始まるまでこの竹管は使われたそうです。

小野は笠野原台地の土地基盤整備の大志を胸に高隈川から笠野原台地にかけて調査を行い、大地の北端の三角あたりに導水可能であると確信したことから近隣への呼びかけに尽力しました。

092

人物 1

鹿屋市の笠野原台地での生活に欠かせない水の確保に貢献した人物を3方掲載します。

もり むねよし
○森 宗吉

1864（元治元）年笠野原に生まれ、鹿屋村の助役、村長、鹿屋郵便局長などを歴任しました。

笠野原開発問題が明らかになると、その事業計画推進に情熱を注ぎました。当初鹿屋町は、この問題にあまり積極的ではありませんでしたが、町役場や地主の協力を得るために、寝食を忘れて説得を続けてやっと賛同を得るに至ったといえます。

そして、水道工事が始まるとその援護に労をおしませんでした。

しかし、森は耕地整理事業の完成を見ずに1932（昭和7）年に亡くなりました。

なかはら きくじろう
○中原 菊次郎

1880（明治13）年西串良に生まれ、戦後、在郷軍人会長として戦後処理を行う一方、農業振興の為に尽力し、串良村農会長等の数々の要職を歴任し、西串良村長を経て県会議員となりました。

そのころ、後述の小野勇市らの動きに呼応し1926（大正15）年に笠野原耕地整理組合を創設して組合長



中原 菊次郎



小野 勇市

となり、一部の反対者の迫害や財政の苦しみを耐え忍んで処理し、前述の偉業を成し遂げました。1949（昭和24）年に亡くなりました。

○小野 勇市

1883（明治16）年高隈村に生まれ、30歳で村会議員となりました。彼は、常日頃、笠野原台地での生活には水が最重要と考えていましたが、高隈村だけではどうすることもできず、隣接する町や村に協力を呼びかけ、出会ったのが、前述の中原菊次郎でした。

二人は同じ理想を掲げ、互いに認め、強い志のもとに3町村（鹿屋町、高隈村、串良村）を突き動かし、笠野原耕地整理組合及び笠野原上水道組合を組織し、中原菊次郎は組合長、小野勇市は副組合長となりました。まずは、水道事業に着手し、並々ならぬ苦勞の末、3年の時を経て、1927（昭和2）年に笠野原台地の飲料水問題を過去のものとししました。

次に、以前から確信していた高隈川からの導水に向けて動き出したものの、その完成は、他の頁に記載されている通り平坦なものではありませんでした。それでも、1927（昭和2）年から1934（昭和9）年の7年2カ月で完成することができました。その後1939（昭和14）年に57歳で亡くなりました。

台地に「水」を夢見た男

中原菊次郎さんの娘であるタキさんの話です。

生前、まだ耕地整理が終わって間もないころ、二人で、串良から鹿屋へバスで向かっている時に車窓から見える十三塚辺りの畑の説明をしていた中原氏は、「やがては、ここを水田にするのだよ」と言われたそうです。それを聞いた、娘さんはびっくりして、「そんなことが出来るのですか」と、すると氏は、「うん、出来るんだ、川の水を引き上げて、畑に流すのだよ」と説明されたそうです。当時は、川は、遙か彼方の谷底にしかないのにどうやって、と驚くばかりだったそうですが、その話を聞いて50年余り、現在の台地の様子を見ると、畑地灌漑用水を使って、さまざまな野菜や花・お茶等が栽培され、まさにお父様の夢見た世界が広がっています。台地の様子をみるたびに、そのことを思い出し、感動されるそうです。



永田 良吉



科学航空大博覧会
水族館や物産館、売店なども
設けられていました。

星塚敬愛園の誘致

[項目004参照]

飛行機代議士

永田良吉は早くから飛行機の重要性を認識しており、まずは1922（大正11）年県会議員時代に笠野原に民間飛行場を造成し、衆議院議員となった後も航空機の誘致運動を継続し、1936（昭和11）年に鹿屋海軍航空隊の開隊にいたっています。

これは、彼の度重なる国への請願や協議によるもので、後に「飛行機代議士」や「請願代議士」と呼ばれるようになった^{ゆえん}所以です。

永田良吉に関する書籍

鹿屋市立図書館には永田良吉に関する書籍「永田良吉伝」永田良吉伝刊行同志会編集部編が蔵書されています。貸出はしていませんが館内での閲覧は可能となっていますので、興味のある方は、是非、手に取ってみてください。

093

人物 2

ながた りょうきち
○永田 良吉

大始良村会議員、大始良村長、鹿児島県議会議員、衆議院議員、鹿屋市長など、これらは永田良吉が歴任した役職の一部となります。

海上自衛隊鹿屋航空基地、星塚敬愛園の鹿屋市への誘致や高隈ダムの建設推進を行い、旧制中学校設置に尽力するなど、これらも彼が行った実績の一部です。まさに、今の鹿屋市に続く政治・経済・教育等の基盤を作り上げた人物と言えます。これから、その活躍の一部を紹介していきます。

○大始良村長時代

彼は1913（大正2）年に若干27歳で大始良村会議員に当選し、1917（大正6）年には31歳で大始良村長になりました。当時大始良村の財政は会社でいうと倒産寸前の状態でしたが、彼は村の財政の為に養蚕業を奨励します。その後、大始良には養蚕試験場が建設されます。（養蚕業は、その後の化学繊維の台頭により衰退していきました。）



市役所前にある胸像に埋めこんであるプレート

明治十九年 永野田に生る 性一徹
清貧に甘んじ 郷土を愛す 政治を
志し五十有余年 大隅の開発に精魂
を傾く 昭和三十九年勲二等旭日重
光章を受け同年名誉市民となる 世
人挙げて大隅の父と崇む
昭和四十二年十一月三日
永田良吉先生顕彰会

左記プレートの記載内容

○鹿児島県議会議員時代

1919（大正8）年に鹿児島県議会議員に当選し、鹿屋への旧制中学校設置運動を展開し、1923（大正12）年に県立鹿屋中学校が開校されます。これが現在の県立鹿屋高等学校になります。また、大隅半島への国有鉄道敷設も推進しました。[項目022参照]

○鹿屋市長時代

1943（昭和18）年に鹿屋市長に就任し、終戦後、アメリカ軍進駐地の交渉を、彼の機転により優位に進めました。その後、公職追放により1946（昭和21）年に一旦市長を辞職しています。

1956（昭和31）年に再び市長となり、1958（昭和33）年に科学航空博覧会を鹿屋航空基地内で開催、1959（昭和34）年には長年携わった高隈ダムが着工され1967（昭和42）年に通水しています。

永田良吉は1964（昭和39）年に鹿屋市長を引退し、同年鹿屋市初の名誉市民となりました。また、後年、藍綬褒章や勲二等旭日重光章を国から与えられています。1971（昭和46）年84歳で亡くなりました。

私財を顧みなかった

これだけ、情熱的に鹿屋・大隅の発展に尽力した永田良吉は、西郷隆盛の「金も要らぬ、名も要らぬ清廉潔白、誠実一路」を地で行くような方で、自身の財については全く執着がなかったようです。

例えば、1924（大正13）年の衆議院総選挙に落選戦後は、母親がその借金苦でかなりの苦勞をしています。

また、お孫さんの話によると、お孫さんが結婚後（昭和45年頃）嫁をつれて帰省した時、家のあまりのみすぼらしさに嫁が驚いたという話が残っています。

永田良吉の活躍をみれば、悠々自適の余生を送っているはずなのに、何もかも人に惜しげもなく分け与える性分のために、自分の手元に最低限のものしか残していなかったのでしょうか。



上別府 市郎



肝属中央家畜市場に設置されている
上別府市郎と第20平茂号の銅像

黒毛和種の「血統」とは

黒毛和種は、その牛の祖先をたどることで、どのような特徴を持った遺伝子を受け継ぎ、どのような能力を持っていることが期待できるか見ることが出来ます。

このような黒毛和種の血統には、その祖先に応じていくつかの「系統」に分けることができます。

本文中の「第20平茂号」と「第20気高号」は「気高系」と呼ばれる系統に分類されます。

気高系の牛は鳥取県で1959（昭和34）年に生まれた「気高号」を祖先とし、特徴としては、発育が良く、体が大きくて全体的なバランスが良いこととされています。

肝属地域には、この気高系の血統を持った牛が多く、地域の肉用牛改良の特色となっています。

この他主な系統として5つの系統が全国各地に存在し、その特徴に応じた地域特有の改良が進められています。

094

人物3

鹿屋市の基幹産業として発展している畜産業の振興に貢献した人物を2名紹介します。

かみべつぷ いちろう
○上別府 市郎

上別府市郎は、1926（大正15）年に鹿屋市で生まれ、25歳にして種雄牛を導入し、1961（昭和36）年に和牛家畜人工受精所を開設、2002（平成14）年1月に亡くなるまで、60頭以上の種雄牛を育成しました。

その中でも、1976（昭和51）年にその能力を見出して導入した「第20平茂号」は、肉用牛改良に多大な影響を与えた名種雄牛です。第20平茂号は、体の発育・バランスが非常に優れていました。この牛の産子たちはこのような優れた点を受け継ぐこととなり、肉牛として重要な産肉能力と親牛として重要な哺育能力に優れた牛たちが数多く誕生することとなりました。

第20平茂号の能力を受け継いだ産子たちは全国に多数生まれ、その中から各地域の肉用牛業界を担う後継牛も多く誕生することとなり、第20平茂号の持つ能力が全国の肉用牛改良に大きく貢献しました。

第20平茂号を名種雄牛に育て上げた上別府市郎のおかげにより、この鹿屋市及び肝属地域が、畜産の一大産地として全国に名を挙げることができるようになりました。



坂元 親夫



ダイエーセントラル牧場関係者との写真
(前列の左から2番目が坂元親夫)

さかもと ちかお
○坂元 親夫

坂元親夫は1944（昭和19）年に鹿屋市で生まれ、種馬・種雄牛の管理の傍ら、家畜人工受精師や家畜商も行っており、肝属地域の肉用牛改良に貢献することとなる「第20気高号」の育成を行いました。

坂元親夫が様々な事業を展開する中で、本市の畜産業に大きく影響を与えることとなったのが、当時まだ主流ではなかった大規模肥育預託を行う企業を本市へ誘致したことです。

肥育預託とは、企業が導入した子牛を農家へ預け、肥育を行う方法で、預かった農家は企業から預託料を受け取ることにより、成績に左右されにくい安定した経営を行うことができます。坂元親夫は地域の畜産農家の経営安定を願い、預託を行う企業である「ダイエーセントラル牧場（現鹿児島サンライズファーム）」と連携し、本市に定着させました。

このような生産方式を、現在は様々な企業が行っており、本市の安定的な肉用牛産業の運用の一翼を担っています。その仕組みの礎を坂元が築いたといえるでしょう。

その後も2014（平成26）年6月に亡くなるまで、地域畜産業の発展に尽力しました。

「和牛」と「国産牛」の違い

スーパー等のお肉コーナーで牛肉を見てみると「和牛」と「国産牛」の2種類の表記がされています。

同じ日本で生産された牛肉なのに、なぜ表記が違うのでしょうか。

実は、「和牛」と表記されている牛肉は「黒毛和種」「褐毛和種」「無角和種」「日本短角種」の4種類みの牛肉です。

黒毛和種は全国的に広く飼育されていますが、褐毛和種は主に高知県と熊本県、無角和種は主に山口県、日本短角種は主に岩手県や北海道で飼育されています。

「国産牛」と表記されている牛肉は、この4種類以外の牛で、国内で生産されたものとなります。

買い物するときには、パッケージの内容を見ながらお買い物してみてもいいでしょうか。



輝北歴史民俗資料館に展示されている「らしく」の書

095

人物4

ここでは、明治初頭に行政官にして歌人であり鹿児島県の歴史にも功績を残した方を紹介します。

たかさき まさかぜ
○高崎 正風

1869（明治2）年から1871（明治4）年まで、現垂水市・鹿屋市花岡・高隈・輝北地域の行政官（地頭）として赴任し、特に輝北地域の百引村の麓再編など、地域の声に耳を傾け治政を行い、教育にも力を入れました。また、高隈や輝北地域の「へし児」（妊娠中絶）対策を行いました。その後、輝北地域へ「らしく」の書を送るなど、地域の明主として現在も輝北地域の人々に慕われています。

この高橋正風は、現在の鹿児島市川上町の出身で、薩摩藩士高崎五郎右衛門温恭の長男。1849（嘉永2）年、お由羅騒動によって父五郎右衛門が切腹し、翌年に正風も連座して奄美大島

に流されますが、1852（嘉永5）年に赦され鹿児島に戻ります。しかし、士分に復籍することは許されておらず、苗字を名乗ることはできませんでした。

それから、10年後の1862（文久2）年に、藩より家督相続・士分復籍を許され、晴れて高崎姓を名乗り、五番組小与八番に組み入れられます。そして、薩摩藩主の父である島津久光が公武合体を実現すべく江戸へ上京していた時、京都では有馬新七ら尊王攘夷派が暴挙に出ようとしていました。久光はこれを知り、正風と藤井良節を京都に向かわせ対処させました。向かった正風等は、橋口壮介・柴山竜五郎らを見つけ、久光にこれを報告し、寺田屋騒動の立役者となり、これにより久光の信頼を得て、土佐の小南五郎右衛門や武市瑞山、長州の宍戸九郎兵衛や久坂玄瑞らと会うなど、諸藩との交渉役・偵察役として活躍します。また青蓮院宮（中川宮）とも会い、「九重の雲井の菊



高崎 正風

ゆらそどう
お由羅騒動とは、

江戸時代末期（幕末）に薩摩藩で起こったお家騒動。別名は高崎崩れ、嘉永朋党事件。藩主・島津斉興しまづなりあきの後継者として側室の子・島津久光を藩主にしようとする一派と嫡子・島津斉彬しまづなりあきらの藩主襲封しゅうほうを願う家臣の対立によって起こされました。

を 折りかざす今日そわが世のさかりなるらん」という歌を送っています。この歌は青蓮院宮を通じて時の孝明天皇こうめいてんの目に入り、天皇からお褒めの言葉を受けたそうです。

また、公武合体派である、久光の意を受けて会津藩公用方あきづきていじろう秋月悌次郎・広沢富次郎・大野英馬・柴秀治らに密かに接触します。そして1863（文久3）年、中川宮と秋月ら会津藩と協力して、京都から長州藩を追い落とすのに成功し（八月十八日の政変）、薩会同盟さつあいの立役者ともなります。その功績により京都留守居役に任命されますが、藩内で討幕を望む声が大きくなり、薩長同盟さつちやうが結ばれるなどして薩会同盟が消滅していくと、公武合体派は退潮を余儀なくされ、正風も一時帰国（鹿児島へ帰ること）することとなります。その後再び京都に上り、王政復古後の1868（慶応4）年に征討軍参謀に任ぜられますが、大坂城の落城を理由に征討軍

参謀を辞退し再び鹿児島へ帰ります。

武力討幕に反対して西郷隆盛らと対立したため、維新後は鹿児島に帰り、花岡や高隈・輝北地域の行政官になります。

その後は、1871（明治4）年に新政府に出仕。翌年に左院視察団の一員に任命されて、2年近く欧米諸国を視察し、1875（明治8）年に宮中の侍従番長、翌年から侍補じほになります。

1886（明治19）年に二条派家元さんじょうにしずえとも三条西季知が死去した後を受け御歌係長に任命され、1888（明治21）年には御歌所初代所長に任命されました。

1890（明治23）年には、初代國學院院長に就任し、1895（明治28）年に枢密顧問官すうみつ等も務めました。

1912（明治45）年75歳で亡くなりました。



和田 貞則



商工会議所会館

096

人物 5

ここでは、市の商工業界に大きな業績を残した方を紹介します。

○和田 貞則

和田貞則は、1923（大正12）年生まれで、第8代の鹿屋商工会議所会頭として、5期15年務め、その間、鹿屋・大隅地域の経済的浮揚の為、商工会議所議員定数の拡充や常設委員会構成の改編、また常設委員会委員長に若手経営者を起用するなどし、権限を大幅に委譲して商工会議所運営の強化を図ると共に諸制度の改革、充実に取り組みました。

具体的には、商工会議所活動の原点でもある会員拡大の必要性を強く訴え、会員増強委員会を設置し役職員一丸となった運動を展開し、鹿屋市内の商工業者の60%を越す組織率を達成しています。

また、日本の経済3団体の一つである日本商工会議所の議員に鹿屋商工会議所として当選し、組織の安定、財政基盤の強化を図り、行政はもとより各

業界からの信頼向上にも貢献しています（2023（令和5）年1月1日時点も議員継続中）。現在の商工会議所会館の建設の際は、事業費の捻出のために議員積立金制度の設置、国・県・市の補助金の獲得への尽力のみならず、一般募金の確保に当たっては自ら1億円を拠出、東奔西走して目標の達成に努めています。（1992（平成4）年11月に着工、1994（平成6）年2月竣工）さらに、鹿屋・大隅地域の振興のために、1995（平成7）年3月、大隅地域の2市17町（当時）の商工会議所・商工会を網羅した「大隅経済地域開発推進協議会」を自らが発起人となり結成し、会長として東九州自動車道の早期完成はもとより大隅縦貫道の建設、各種港湾・道路の整備等についても取り組んでいます。

また、今では鹿屋の3大祭りの一つとして定着している、「エアームリアルinかのや」を、自ら実行委員会会長となり海上自衛隊鹿屋航空基地の開隊40周年記念事業として、1994（平成6）年にスタートさせています。

和田は2021（令和3）年に98歳で亡くなりました。



現在鹿屋市で運用されている水力発電所の九州電力谷田発電所(下高隈町)

現代では電機は欠かせないインフラです。ここでは、鹿屋で初めて発電事業を行った方を紹介します。

○平田 禎

平田禎は、1870（明治3）年に鹿屋村古前城に生まれました。

鹿屋に初めて電灯が灯ったのは、1913（大正2）年6月8日です。鹿屋市の有志の間で、文明の利器である電灯にあやかりたいという願いから、平田などの発起人が街の旭通りに木炭による火力発電所（鹿屋電灯株式会社）を設けました。こうして鹿屋の街にも電気が灯るようになりました。この頃の逸話で、試運転のときには肝属川に放電したところ、付近の魚が大量に浮かび上がるということがあったそうです。

その後、1920（大正9）年頃には、高須でも高須川の地形を生かして岩之上発電所が設けられ、海岸の骨粉製造所や製材所へ送電し、余った電力は家庭用として提供しています。こうして鹿屋の地にも少しずつ電気が広まって

いったようです。

この他にも、平田の活躍は多岐に渡っており、当時、鹿屋地区の農家にとっての重要な用水路であった和田井堰はもともと柴井堰（柴で造られている）で、1879（明治12）年から1880（明治13）年にかけて禎の父である五郎左衛門が発起人となり、禎、そして禎の息子である太郎の三代にわたる大工事を行い石製の井堰に改築しました。

また、馬の改良研究や祓川・中名の耕地整理、田崎の耕地整理などにも尽力、産業面に多くの功績を残しており、晩年は山林の経営に専念し、1945（昭和20）年に亡くなりました。



谷田発電所遠景



立元 明光
(2011(平成23)年撮影)



1965(昭和40)年代の桜デパート
(跡地は「まちなかパーク駐車場」)

097

人物6

鹿屋市のみならず大隅半島に、40年以上住んでいる方には、とても懐かしく楽しい記憶であろう桜デパートの創業者についてここでは紹介します。

たつもと めいこう
○立元 明光

戦後から平成にかけて、鹿屋のまちでひとときわ輝きを放っていたのが北田町にあった「桜デパート」です。立元明光はその創業者です。

桜デパートは家族や友人との買い物やレストランでの食事、屋上遊具等を目当てに市内外から多くの人を訪れる、大隅随一の百貨店でした。

1945(昭和20)年の「桜商会」創業に始まり、桜デパートは1953(昭和28)年に県内2番目のデパートとして開店。その後、人気広がるにつれ規模を拡大し、地下1階地上7階建て、延べ床面積約9,200㎡を誇る大型百貨店として市民から親しまれま

した。名物の桜まんじゅうは、多い日で1日平均2千個販売されたといえます。また、寿や西原などにも店舗進出するなど、最盛期には860人ももの従業員を抱える一大企業に成長しました。その後、桜デパートは市民から惜しまれつつも1994(平成6)年に閉店。しかし、街と市民に夢を与えた鹿屋のシンボルとして、桜デパートは市民の記憶の中に今も刻まれ続けています。

このようにまちに夢を与えた立元は2019(令和元)年に99歳で亡くなりました。



休日は桜デパートだけでなく周辺も買い物客であふれていました。
1965(昭和40)年



寺崎 健

ツツガムシに注意しましょう

鹿児島県を含む南九州は、つつが虫病の患者が全国でも多い地域です。令和3年の感染症発生動向調査における発生状況は、鹿児島県では82件（全国544件）となっており、全国で最も多くなっています。

【本県及び全国における年別発生状況】

年	2019	2020	2021
本県	66	92	82
全国	404	538	544

鹿児島県ホームページより転載

つつが虫病というマダニを媒体とし病気を県内で初めて発見し、多くの鹿児島県民の命を救った方をここでは紹介します。

てらさき けん
○寺崎 健

現在の肝属郡肝付町で生まれ、1955（昭和30）年県立鹿児島医科大学（現鹿児島大学医学部）を卒業し、鹿児島大学医学部皮膚・泌尿器科助手を経て、1962（昭和37）年鹿屋市西大手町に開業し、皮膚科医として地域医療に携わりました。

大隅地域で昔から秋になると発生した熱病は、「大隅熱」あるいは「秋やみ」と呼称されていた原因不明の熱性発疹症で、死亡することもあり恐れられていました。

1979（昭和54）年に寺崎医師は、この病気の正体が、つつが虫病ではないかと考えました。しかし当時は、鹿児島県では1948（昭和23）年つつが虫病発症の届出制度開始以来1人も届け出がなく、つつが虫病は県にはない

はずだとされていたため、慎重に調査研究を続け、1980（昭和55）年12月に、5人の患者さんの血液を東京大学医科学研究所に持ち込み血清検査でつつが虫病と確認され、厚生省（現厚生労働省）に届けました。これが、鹿児島県での初めてつつが虫病の発見となり、県内のつつが虫病治療の第一人者となり活躍しました。

県からこれまでのつつが虫病研究の実績を買われ、寺崎医師はつつが虫病の対処法テキスト作成を依頼されています。このテキストにより多くの県民の命が救われました。

このような功績から、鹿児島県医師会より特別医学功労賞を贈られています。

その後も、2017（平成29）年86歳で亡くなるまで、地域医療に尽力しました。



米重選手と地元諏訪自治会との交流会



南日本クロスカントリー大会inきほく
コース確認時の一幕（左：米重選手）

098

人物 7

項目080では、体育大学出身のオリンピック人について紹介していますが、ここからは、鹿屋市出身のオリンピック人について紹介していきます。

よねしげ しゅういち
○米重 修一

輝北町出身の1961（昭和36）年生まれです。1988（昭和63）年ソウルオリンピック陸上に出場しました。

百引中学校陸上部時代に岐阜県の中京商業高校にスカウトされ、高校3年生時には高校駅伝日本一のメンバーになりました。1980（昭和55）年大東文化大学に進学し、1年生のときから箱根駅伝のメンバーに選出され、計3回出場しています。箱根駅伝では、2年生の時は心疾患を患い出場できませんでしたが、闘病後の4年時には区間賞をとりました。また、その年は全日本大学駅伝日本一に輝いています。

さらに、カナダで行われたユニバーシアード10,000mで優勝、ロサンゼルスプレ五輪の10,000mと5,000m

とともに優勝を果たしました。1984（昭和59）年3月の大学卒業と同時に同大学のコーチに就任しましたが、五輪出場の夢を果たしたいと1985（昭和60）年に実業団陸上の名門旭化成に入社しました。

1988（昭和63）年に開催された東京国際陸上において10,000mで自己ベストの27分43秒04（当時日本歴代3位）を記録し、続く7月のフィンランドやロンドンで行われた大会においても日本記録を樹立するなど、オリンピック標準記録も数回突破し、日本陸連の五輪選手に決定、ソウルへの切符を手に入れました。

ソウルオリンピックでは、10,000mと5,000mの2種目に日本代表として出場しています。

また、クロスカントリーにも積極的に取り組み、学生時代から国内の第一人者となり、日本が世界選手権に送り込んだ最初の選手でもあります。「南日本クロスカントリー大会inきほく」[項目079参照]が1988（昭和63）年から始まっていますが、米重がコースの確認などを行っている大会です。



鹿屋での練習風景（福里選手）



ロサンゼルスオリンピック決勝時の写真
（ゼッケン108番の後ろが福里選手）

ふくさと しゅうせい
○福里 修誠

鹿屋市寿出身で1955（昭和30）年生まれです。鹿屋中学校から鹿屋商業高等学校（現鹿屋中央高等学校）に進み、カヌーと出会いました。大隅湖や和田井堰で練習を積み、大正大学進学後からオリンピックを目指し、卒業後は戸田競艇組合で働きながらカヌーを続け、1980（昭和55）年モスクワオリンピックの日本代表に選ばれました。

しかし、政治的理由（ソ連のアフガニスタン侵攻に抗議した国々の集団ボイコット）により日本は不参加となり、ヨーロッパ遠征中にボイコットを知った福里は、失意のもと、カヌー選手を一度引退し、母校の大学のカヌーコーチに就任しました。

自らもカヌーを漕ぎながら、指導に当たっていた福里は、オリンピックの代表権を再び獲得し、1984（昭和59）年ロサンゼルスオリンピックで念願のオリンピック出場を果たし、カナディアンペア種目で8位に入賞しました。

これは1964（昭和39）年の東京オリンピックで初めて日本人がカヌー競技に出場して以来、初の入賞となりました。

後に福里は「オリンピックは、開閉会式を含め、会場の雰囲気、観衆の応援、ライバル選手たちの意気込みなど、これまで経験したどの国際大会とも全く異なる大会だった。」と述べています。

翌年、ドイツに1年間カヌーコーチとして派遣され、強化指導法の研修を受けた福里は、帰国後故郷に戻り鹿屋市役所に就職後、鹿児島県のカヌー指導普及に努めながら現役を続け、1990（平成2）年の北京アジア大会では3位という成績を残しています。

福里が鹿屋市で指導を行った中高生や鹿屋体育大学の選手たちは、国体やインターハイ、インカレで活躍し、日本一の選手を数多く輩出しました。

市役所退職後は、再び母校の大学のコーチを引き受け、後進の指導に努めました。指導を受けた選手たちは卒業後、全国各地で選手・指導者として活躍しています。



モントリオールオリンピックでの内山選手

099

人物 8

うちやま のぼる
○内山 昇

鹿屋市旭原町出身で1954（昭和29）年生まれです。

鹿屋中学校から鹿屋工業高校へ進み同校ボクシング部所属選手としてアマチュア・デビュー。1973（昭和48）年4月から中央大学ボクシング部所属、1976（昭和51）年のモントリオールオリンピックでは、ライトフライ級に出場しています。

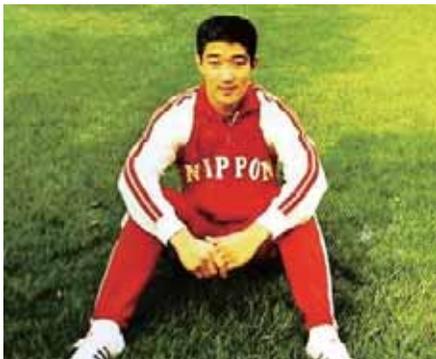
この時の結果について、内山は後に以下のように語っています。

「相手選手に2回1分42秒RSC（負傷して試合続行不可能と判断した時レフェリーが行う勝敗宣言）負けとなった。終始勝てる相手だと確信していたが、私が右フックを相手の顔面にヒットさせた後、相手が頭を寄せてきて私の右眼上から鮮血がしたたり落ち、医師から続行不能を告げられた。本来なら相手がバッティングによる失格負け

と思ったが、レフェリーは意外にも相手の勝利を告げた。このレフェリーは翌日、審判委員会で処分された。」

内山は、この思いもしない結果に、消えてしまいたい惨めな思いに襲われたそうです。さらに、プロからの声掛けもあった大学最後の試合で目を負傷し引退することになりました。失意の内山は、25歳の時、ある方から「人間万事塞翁が馬」の言葉を教えられ、このオリンピックでの苦い思いをプラスに転じることが出来たそうです。ボクシングを通じた様々な出会いが今の自分を支えているとも語っていました。

アマチュアボクシングの世界での内山の実績は華々しく、全日本アマチュアボクシング選手権大会ではライトフライ級で3連覇（1974・1975・1976年）、1974（昭和49）年には、アジア競技大会銅メダル、1975（昭和50）年にはアジア選手権銀メダルを獲得しています。



現役時代の三森選手



三森選手のフライングレシーブ

100

人物 9

みつもり やすあき
○三森 泰明

三森泰明は、鹿屋市東原町出身で1946（昭和21）年生まれです。1968（昭和48）年メキシコオリンピックバレー男子銀メダリストです。

三森氏は、鹿屋中学校で競技をはじめ、中央大学付属高校、中央大学と進み、日本鋼管に所属しました。

中学時代は、県内では三森のスパイクを誰も受けられないほどの選手でした。

メキシコオリンピックで銀メダルを獲得し、続くミュンヘンオリンピックで日本は悲願の金メダルを達成するのですが、彼自身は、ミュンヘンオリンピック出場は叶いませんでしたが、最後までそのメンバーの中で練習を重ねており、日本男子バレーを金メダルへと導いた影の立役者の一人ともいわれています。日本男子バレーの黄金時代を牽引した松平康隆監督の著書やその

他の資料のなかで語られる三森像は、「コートの外では多くを語らず自らをアピールすることもない、しかし、コートの中で力を出すために、勝つために求められることを実現できるよう黙々と練習をする選手」だったそうです。また、ボールに食らいつく執念、バネ、レシーブが三森を表す代名詞とも言われています。

そんな、彼を象徴するエピソードをいくつか紹介します。

多くを語らない三森選手は、チームで食事に出たときの注文は「も」としか言わなかったそうです。「も」は「俺も」の「も」です。因みに海外では「ツー」です。「Me too」の「ツー」です。冗談のようですが、実話だそうです。

身長185cmで中学、高校、大学とエースパイカーとして名声を築いた三森ではありますが、全日本の選手陣に入れば、小柄な選手であり、得意ではなかったサーブレシーブを黙々と練習し磨き上げ全日本に選ばれるようにな



ります。

ミュンヘンオリンピックで、三森はメンバー12人には選ばれませんでした。チームの出発の日に羽田空港への見送りに来ました。その清々しさに松平監督は驚き、そして感謝したそうです。

この清々しく、寡黙ながら果たすべきことを全うする気概などを備えた人柄もまた人気の一因でした。

また、第一線を退いたあとも、その人柄を買われ、インドネシアのバレー監督として赴任しており、東南アジア競技会でインドネシア男子・女子バレーを優勝へ導く偉業も成し遂げています。

バレー界に大きな実績を残した三森は2019（令和元）年に亡くなりました。



掲載は委嘱順です
令和5.3.31時点

「かのやばら大使名簿一覧」

- 哀川 翔 (タレント)
- 榎木 孝明 (タレント・画家)
- 浅井 慎平 (写真家)
- 桂 由美 (ブライダルデザイナー)
- 柴田 亜衣 (アテネ五輪競泳金メダル)
- 国生 さゆり (タレント・歌手)
- 中尾 正一郎 (元県民健康プラザ鹿屋医療センター院長)
- 萩 裕美子 (元鹿屋体育大学教授)
- 大田 瑠璃子 (タレント)
- 田邊 勉 (関東地区吾平会会長)
- 前田 義美 (関東鹿屋会会長)
- 中礼 思無哉 (関西鹿屋会会長)
- 江口 芳人 (関東串良会会長)
- サンダーソン・デービット・パークレイ (ばら園イングリッシュガーデン植栽管理者)
- 桂 竹丸 (落語家)
- C&K CLIEVY (歌手)
- C&K KEEN (歌手)
- 福井 逸人 (元副市長)
- 中小野田 智己 (囲碁棋士)
- 半田 あかり (お笑い芸人)
- サンシャイン池崎 (お笑い芸人)
- 今崎 裕一 (元副市長)
- 田原 博 (関西吾平会会長)
- 下内侍 恵由 (関西串良会会長)
- 奥園 義則 (在鹿串良会会長)
- 藤元 俊明 (関西輝北会会長)
- 宮地 修平 (元副市長)
- 鈴木 健太 (元副市長)

資料集

時代	西暦	年号	郷土の主な事項	鹿児島県内の主な事項	日本の主な事項	朝鮮	中国	世界の主な事項
旧石器時代					岩宿遺跡 日本列島が大陸から分離(約1万年前)		中国 殷 周 B.C.770 春秋 戦国 魏 B.C.221 秦 B.C.202 漢 (前漢)	400万年前 人類誕生 四大文明 B.C.566 釈迦誕生 B.C.553 孔子誕生 B.C.272 ローマがイタリア半島を統一 B.C.221 秦の始皇帝中国統一、皇帝の称号 B.C.202 漢の成立 B.C.27 ローマ帝国の成立 B.C.4 イエス・キリスト誕生 30頃 キリストが処刑される
縄文時代	早期 紀元前7500年頃 前期 紀元前3500年頃 後期 紀元前500年頃	但馬文化 縄文文化 弥生文化	榑崎A・B遺跡(郷之原町) 西丸尾遺跡(白水町) 打製石器を使用 釜畑遺跡(串良町)の集落(項目032) 野里小西遺跡(野里町) 前畑遺跡(郷之原町) 町田畑・十三塚遺跡(串良町) 横山3遺跡(横山町)	上野原遺跡(霧島市)の大規模集落 塞ノ神遺跡(伊佐市) 岩崎遺跡(錦江町) 上加世田遺跡(南さつま市) 高橋貝塚(南さつま市)	三内丸山遺跡(青森県青森市)の大規模集落 箕輪遺跡(佐賀県唐津市)で水田稲作 ・青銅器や鉄器が大陸から伝わる 吉野ヶ里遺跡環濠集落 ・ムラからクニへ	漢の四郡 高句麗 麗(北部)	殷 周 秦 漢 (前漢)	殷周 春秋 戦国 魏 秦 漢 (前漢)
古墳時代	300 372 391 451 478 552	古墳文化	古ヶ崎遺跡(串良町)集落遺跡(項目033) 王子遺跡(王子町)の大規模集落(項目033) 西ノ丸遺跡(串良町)環濠集落(項目033) 町田畑遺跡(串良町)	松木園遺跡(南さつま市) 中津野遺跡(南さつま市) 堂前遺跡(出水市) 地下式板石積石室始まる	倭の国女王が後漢に使いを送る 倭国師升が後漢に使いを送る 2世紀後半倭国大乱 倭国の女王卑弥呼が魏に使いを送る 卑弥呼の邪馬台国が狗奴国と戦う 前方後円墳が造られる(菅墓古墳 等)	漢 高句麗 麗(北部)	A.D.25 漢(後漢) 220 三国(魏・呉・蜀) 265 晋 316 五胡十六国 南北朝 589 隋	313 コンスタンティヌス帝がキリスト教を公認する ゲルマン民族大移動
飛鳥時代	562 593 600 603 604 607 608 612 616	飛鳥文化	名玉原遺跡(吾平町)大規模集落(項目033, 項目036) この頃、岡崎古墳群(串良町)が造られ始める(項目035, 項目037) この頃、上小原古墳群(串良町)や蔵川地下式横穴墓群(蔵川町)が造られ始める(項目035, 項目037) この頃、名玉原地下式横穴墓群が造られ始める(項目068) 中尾地下式横穴墓群が造られ始める(項目068)	この頃、環濠古墳群(肝付町)造られ始める 唐人古墳群(串良町)造られ始める 松ノ尾遺跡(枕崎市) 笹貫遺跡(鹿児島市)	任那が滅亡 聖徳太子撰政となる 第1回遣隋使派遣 冠位十二階 十七条の憲法 第2回遣隋使派遣 「日出づる処の天子日没する処の天子」の国書 第3回遣隋使の派遣 「東の天皇西の皇帝」の国書天皇号の始まり 法隆寺創建、小野妹子を隋に派遣 敏達(屋久)人、都に至る	高句麗 百濟 新羅	南北朝 589 隋	570頃 マホメットが生まれる 600頃 イギリスでアングロ=サクソンの七王国時代が始まる イスラム教始まる(610頃)

時代	西暦	年号	郷土の主な事項	鹿児島県内の主な事項	日本の主な事項	朝鮮	中国	世界の主な事項
平安時代	813	弘仁4	大隅・薩摩に蝗(イナゴ)の害と大風災害のため租税を免除	大隅吉多、野神の二枚を磨する	菅原道真、遣唐使廃止 古今和歌集ができる	新羅	唐	843 ベルダン条約でフランク王国3分される
	860	貞観2	常平倉設置	大隅正八幡宮炎上し、翌年造営する	源為朝、琉球に至ると伝える			870 メルセネ条約が結ばれる
	867	貞観9	高須常平倉跡(飢饉、災害に備える米倉庫)	大隅正八幡宮炎上し、翌年造営する	壇ノ浦の戦い→平氏滅亡 守護・地頭の設置			896 高麗 朝鮮半島統一
	874	貞観16	開聞岳が大噴火する(噴火による噴出物の堆積層は紫コラと呼ばれる)	開聞岳が大噴火する	奥州合戦により奥州藤原氏滅亡			
	882	元慶6		伴兼行、高山に移り高山本城を築城(説あり)	かなもじ 発遣 「古今和歌集」 「枕草子」			
	885	仁和元		伴兼行、高山に高崇寺を建立	藤原道長、摂政となる 刀伊の入寇			
	894	寛平6		奄美島人が薩摩国を襲う	前九年の役(~1062年)			
	895	寛平7		南蛮船(南西諸島の賊徒)が薩摩国襲来し、虜掠する	藤原頼道、平等院鳳凰堂を建立			
	969	安和2		大宰大監 平秀基、鳥津荘を開発する	荘園整理令。 後三年の役(~1087年) 白河上皇 院政を始める			1038 西夏が建国する (~1227)
	984	承観2		開白 藤原頼道に香進	鳥羽上皇、坊津の一乗院龍藏寺の寺号を名付けたという			1086 第1回十字軍
	985	承観3			鳥羽上皇、一乗院を相米寺(和歌山県岩出市)の別院にし御願所にしたという			
	1016	長和4						
	1019	寛仁3						
	1020	寛仁4						
	1024	万寿元						
	1028	長元元年						
	1051	永承6						
	1053	永承8						
	1053	天喜元						
	1069	延久元	藤原親光、禰雲を領す。大始良の地名あり					
1083	承保3							
1086	応徳3							
1105	長治2							
1133	長承2							
1134	長承3							
1156	保元元							
1159	平治元							
1167	仁安2							
1091	寛治5		大隅樟大塚 建部頼朝 没す霧島神火ある					
1112	天承3		高山氏・彌雲北學院(西保町)に土着					
1164	長寛2		肝付兼俊、丸城院(串良町)、教仁院(大崎町)を領する					
1165	長寛3		北原兼幸、北原城(串良町)に拠る					
1177	治承元							
1185	元暦2							
1187	文治元							
1187	文治3							
1188	文治4							
1189	文治5							
1190	文治6年							
		建久元年						

時代	西暦	年号	綱土の主な事項	鹿児島県内の主な事項	日本の主な事項	朝鮮	中国	世界の主な事項	
鎌倉時代	1192	建久3	彌三小太郎兼時、大始良(大始良町)を領す 島津忠久、山門院に入る		源頼朝、征夷大將軍となる		金	1086 第一回の十字軍遠征がはじまる	
	1196	建久7	藤原、日の三州「建久岡田攝」成立		鎌倉文化 鎌倉新仏教 東大寺金剛力士像 「新古今和歌集」 「平家物語」		宋(南宋)	1202 第4回の十字軍遠征はじまる	
	1197	建久8	鹿屋院(八十五町九反、西俣二十四町六反とあり、この中に始良(吾平)・西俣・百引・市成の名も見 肝付兼瓜、鹿屋弁済使となる	洪谷氏、入院院に来る	承久の乱 一後鳥羽上皇 vs 北条義時 幕府軍の勝利。 北条泰時が御成敗式目が制定			1215 イギリスでマグナ・カルタ(大憲章)が制定される	
	1211	建暦元	伴兼賢、鹿屋弁済使となる						
	1221	承久3	肝付千寿王丸、鹿屋弁済使となる						
	1232	貞永元	肝付兼兼、鹿屋弁済使となる						
	1244	寛元2	志々女(獅子目)弁済使職紛争始まる						
	1247	宝治元	肝付兼包、鹿屋弁済使となる						
	1252	建長4	日向、大隅、薩摩は冬三か月間、九州警固に当たる	島津久経、薩摩に下国して異国警固にあたる	文永の役(元寇1回目)	高麗		1271 フビライが元建国	
	鎌倉文化	1271 文永8							
	1272	文永9							
	1274	文永11							
	1275	建治元							1275 マルコポーロが元の都を訪問
	1276	建治2	名越時章、肝付郡地頭職、高山・串良・鹿屋方面を徐々に侵略する						1279 南宋滅びる
	1281	弘安4	肝付兼兼、鹿屋院弁済使に再度任ぜられる	島津久経が元寇のため出陣	弘安の役(元寇2回目)				
1284	弘安7	肝付兼石元寇へ、大奮戦する							
1293	永仁元	佐々木兼綱、西俣を領する							
1297	永仁5	沙弥観阿、鹿屋弁済使となる							
1298	永仁6								
1317	文保元	吾平阿弥陀山の板碑。肝付郡地頭代盛貞、肝付兼藤を殺害する							
1324	正中元	志々女(獅子目)紛争続く							
1325	正中2	高須板碑一号/高須板碑二号							
1326	嘉暦元	鹿屋院雑掌、兼信訴状(地頭との紛争事件)							
1328	嘉暦3	高須板碑三号、翌年作三基あり大始良竜翔寺この頃創建か							
1330	元徳2								
1331	元弘元								
1332	元弘2							1299 オスマントルコが興る	
1333	元弘3								
1334	建武元								
1335	建武2								
南北朝時代	延元5(南朝)		肝付兼重、高嶺に義兵を挙げ南朝に臣くす						
	1336	建武3(北朝)	島山直頼、日向・大隅方面に至り肝付氏討つ 加世田ヶ城を陥れる、百引地頭代官職となる	島山直頼、日向守護代 肝付秋兼、一ノ谷に出陣する。日向高城陥落、 碓山城攻撃、長谷山合戦	鎌倉幕府の滅亡 建武の新政がおこなわれる			1336 インドにヴィジャヤガル朝が成立	
	1338	延元3(北朝)							
	1339	延元4(北朝)							
	1339	建武2						1337 英仏間で百年戦争の開始	

室町文化
能 狂言
金閣
書院造

室町時代

時代	西暦	年号	郷土の主な事項	日本の主な事項	朝鮮	中国	世界の主な事項	
南北朝時代	1340	興元 暦応3	鹿屋兼永、高城に戦死	楯井頼仲、大慈寺を創建	高麗	中国	1341 イギリス議会が上下両院に分かれる	
	1342	興国3 康永元		南朝征西大將軍・義良親王、薩摩津に着き島津貞久を谷山で破る			元	1351 中国で紅巾の乱
	1348	正平3 貞和4		足利直義が島津貞久に、島山直頭と協力して宮方の南軍を討つ事を命じる				
	1350	正平5 観応元		足利尊氏が島津氏に足利直冬討伐を命じる				
	1352	正平7 文和元	大始良城回復。六、七年頃肝付兼重陣中に病死					
	1353	正平8 文和2	楯井頼仲、木谷城に拠る					
	1354	正平9 文和3	鹿屋一ノ谷城陥落。楯井頼仲、高岳城に拠る					
	1362	正平17 康安2	島津氏久、大始良城(大始良町)拠る この頃倭寇盛んに行われる(項目04.2)					
	1368	貞治元	北原城(串良町)落ちる					
	1368	正平23 貞治7		島津元久が福昌寺を建て、石屋真梁を開山とす				1368 元が滅び、明が建国
	1371	応安元		北郷直久、今川満範に郡城を包囲され戦う				1369 中央アジアにタイムール帝国が興る
	1377	建徳2 永和3		島津氏久が援軍をおくり今川軍を破る				1378 ローマ教会が分裂
	1382	天授3 弘和2						
	1392	永徳2 元中9						
	1394	明德3						
1395	応永元	瀬戸山神社(蔵川町)の神体銘						
1397	応永2		島津元久が福昌寺を建て、石屋真梁を開山とす					
1398	応永3							
1401	応永4	高限一ノ宮神社創建(高限町)						
1404	応永5		鶴田重成、浜谷四雲の攻勢を受け鶴田城陥落					
1411	応永6		幕府、島津元久を日向・大隅の守護に任命					
1413	応永7	平田重宗、串良地頭(串良、高限)						
1426	応永8	肝付兼元、鹿屋忠業を鹿屋に攻める						
1428	応永9	佐々木氏、西原より指宿・大山村に移る						
1429	応永10	鹿屋文重、細社田重神社へ鐘奉納						
1432	応永11	鹿野権理の棟札(鹿屋玄業)						
1432	応永12	薩摩、大隅の農民疲弊甚だしく一揆						
1467	応永18		島津忠国の時に、国一揆おこる					
1471	文明3							
1476	文明8		桜島噴火					
1478	文明10		桜島大噴火、向島(燃島)出現					
1498	明応7	南の虚空藏菩薩銘	桂庵禪師が鹿児島に招かれる					
1510	永正7							
1520	永正17	この頃、薩・隅・日三州大いに乱れる						
1521	大永元	肝付兼興、平山近久を串良鶴亀城を攻める						
1524	大永2	島津忠朝(休肥)、鹿屋城を攻撃、鹿屋原に大敗する						
1527	大永3	肝付兼興、串良鶴亀城を攻略する。島津忠吉戦死する						
1527	大永4	肝付兼経、阿南と結婚する						
1527	大永5		島津勝家、豊久に家督を譲る					

室町文化

銀閣
水墨画

御伽草子

時代	西暦	年号	細上の主な事項	鹿儿岛県内の主な事項	日本の主な事項	朝鮮	中国	世界の主な事項
戦国時代 室町時代	1534	天文3	肝付業経、西侯城を奪回する。打馬春日神社の禊祓 肝付業経、百引、平房、大崎、野却、安楽、蓬原、恒吉城を攻略する 大隅半島の諸藩清水城に会す 裨山幸久を生別府城(加治木町小浜)に攻め、業経、貴久に協力する 備前勢と鹿屋原に戦う 北細忠孝鹿屋島入を破る 業経西が豊后府となる 川越丹後守重突入道玄忠加世田ヶ城主となる	明の倭寇船種子島漂着しポルトガル人鉄砲を伝える 島津一族有力者が集まり、貴久を三州守護に推戴を決議 フランシスコ=ザビエル鹿兒島に来てキリスト教を伝える 東市来の鶴丸城内に礼拝堂建立	織田信長、今川義元を尾張の桶狭間に破る	朝鮮王朝	中国	1533 インカ帝国が減じる 1534 イエズス会ができる 1541 カルピンがスイスで宗教改革を行う 1543 コペルニクスが地動説を発表
	1542	天文11	業経、市成城・安楽城を攻略 伊東氏鉄肥に侵入、業経、大崎城を回復する 業経、蓬原、島津氏(鉄肥)と戦う 西侯、野里大崎城をとる 同じく大崎良、蓬原城回復する	宣教師アルメイダ、豊後より阿久根に来る 島津義弘、森川氏を攻め馬越陣を落す 島津義弘、本崎原の戦いで大いに伊東氏を破る	室町幕府が減ぶ			
	1543	天文12						
	1544	天文13						
	1545	天文14						
	1546	天文15						
	1548	天文18						
	1550	天文19						
	1551	天文20						
	1560	永祿3						
	1561	永祿4						
	1566	永祿9						
	1567	永祿10						
	1572	元龜3						
	1573	天正元	1月島津、西侯城を攻める 南雲宗神社創建(南町) 串良地頭島津忠長、始良(吾平)地頭伊地知重秀となる 串良地頭島津忠長、高須を領す	島津義弘、日向鉄肥の伊東義祐を攻める。伊東義祐、豊後の大友に走る 大友義統兵10万で日向の豊城を攻めるが義久によって敗北。島津勢さらに追撃し、耳川の戦いでこれを潰滅する 肥前有馬晴信、竜造寺隆信に攻められ、島津氏に援助を請う 島津家久、有馬氏とともに竜造寺隆信の兵6万を討つ 三州の餘地大口(伊佐市)より始まる 秀吉薩摩に入る。義久、川内森平寺で秀吉に降伏。兄義久は薩摩、弟義弘は大隅を安堵される	大友宗麟、大村純忠、有馬晴信らが 天正遣欧少年使節を派遣する 本能寺の変 豊臣秀吉、太閤検地を開始する 賤ヶ岳の戦い 豊臣秀吉、大阪城を築く 秀吉、四国平定 豊臣秀吉、蘭白になる 秀吉、九州平定 豊臣秀吉、バテレン追放令を出す 刀狩が行われる 小田原の役 豊臣軍と北条軍戦う 豊臣秀吉、全国を統一する 奥州平定 文祿の役(朝鮮出兵)			1579 イギリス人が始めてインドに到達 1581 オランダ人がスペインから独立
安土桃山時代	1582	天正10						
	1583	天正11						
	1584	天正12						
	1585	天正13						
	1587	天正15						
	1588	天正16						
	1590	天正18						
1592	文祿元	大始良地頭伊集院三河守殺される 近衛信輔 鹿屋に来る説あり 島津久信、鹿屋を領す、高隈、細川幽斎の所領となる 伊集院忠棟「市成、百引等」秀吉より8万石与えられる 安養寺創建(向江町)						
1594	文祿3							
1595	文祿4							
1597	慶長2							
1598	慶長3							

安土桃山文化
狩野永徳
茶の湯
安土城
大阪城

時代	西暦	年号	郷土の主な事項	鹿儿岛県内の主な事項	日本の主な事項	朝鮮	中国	世界の主な事項			
江戸時代	1599	慶長4	高隈中津神社 細川藤孝統、敷根頼幸高隈地頭になる	島津氏琉球に侵攻	関ヶ原の戦い 徳川家康が征夷大将軍となり、江戸幕府を開く。	朝鮮王朝	中国	1604 フランスが東インド会社を作る			
	1600	慶長5	島津筑前守藤原久頼市成を領す(土岐氏) 百引郷建設される	初めて宗門手札改の制を定める	大坂冬の陣						
	1603	慶長8	高牧繁昌のため近戸宮三所権現(瀬戸山神社 祓川町)棟札と折願文	島津氏、軍を獅子島に派遣し島原、天草一揆に備える	大坂夏の陣 →豊田氏滅亡 禁中並公家諸法度を制定 徳川家光が三代将軍となる。				1616	1636	中国の後金が国号を大清国と改める
	1609	慶長14	鹿屋直轄領となり福屋伊賀地頭となる	島津島、軍を獅子島に派遣し島原、天草一揆に備える	スベイン船の来航を禁止 武家諸法度が制定される				清	1644	清が中国を支配する
	1614	慶長19	単良用水路完成	前田利右衛門、甘藷を琉球から山川に移植する 9月に霧島山噴火、12月に再噴火 (項目042)	徳川吉宗が八代将軍となり、享保の改革が始まる				1688	1688	イギリスで名誉革命がおこる
	1615	慶長20	萩川楠原柝碑	聖堂及び武芝権古館創設命令 医学館建設着手	天明の大飢饉(～1788年)				1689	1689	イギリスで権利の章典が公布される
	1623	元和9	高須庚申塔、南山薬師堂境内庚申供養碑銘	木曾川治水工事手伝の革命を受ける	明和の大火				1765	1765	イギリスのワットが蒸気機関を改良する
	1624	寛永元	霧島山の2回の噴火で田畑埋没(霧北町)	木曾川治水工事総奉行平田朝貞正輔、自刃	田沼意次、老中になる				1775	1775	アメリカ独立戦争が始まる(～83)
	1635	寛永12	花岡島津始まる。木谷、白水、古里、野里、六百	聖堂及び武芝権古館創設命令 医学館建設着手	天明の大飢饉(～1788年)				1776	1776	アメリカ独立宣言が出される
	1637	寛永14	白木鹿角鉛鉱試掘	萩父孝保、榊山久信ら自刃を命ぜられる(近思 総捕丸、文化明賞事件、始まる)	寛政の改革が始まる				1789	1789	フランス革命おこる
	1639	寛永16	牧内鉱、百引地頭となる	島津齊宣が隠居し斉興親封	ロシア使節のラクスマンが根室に到着				1789	1789	ワシントンがアメリカ大統領に就任する
	1645	正保1年	霧島山の2回の噴火で田畑埋没(霧北町)	幕府から美濃、伊勢、尾張の治水工事負担金7万7864両を課せられる	間宮林蔵、榭太を探検する				1804	1804	ナポレオンが皇帝になる
	1664	寛文4	花岡島津始まる。木谷、白水、古里、野里、六百	大阪鎖主ら薩摩藩に一切の貢し出しを拒む	異国船打込令が出される						
	1665	寛文5	萩川楠原柝碑	イギリス人、宝島に上陸	天保の大飢饉(～1839年)						
	1692	元禄5	高須庚申塔、南山薬師堂境内庚申供養碑銘	藩積500万両に及び、重豪、調所広郷に藩の財政改革を命じる	大塩平八郎の乱						
	1705	宝永2	島津内蔵、百引地頭となる	幕府へ謝恩として金10万両を納める。調所広郷、大坂商人に対し藩積250年賦償還法を実施	老中水野忠邦天保の改革を始める(～1843)						
	1716	享保元	霧島山の2回の噴火で田畑埋没(霧北町)	アメリカ船モリソン号山川川沖にあらわれ、通	フランソワ・アルクメール号那覇にあらわれ、通信、貿易、布教を求め、宣教師フオカードを留め						
	1724	享保8	花岡島津始まる。木谷、白水、古里、野里、六百	香興隠居し、奇様が襲封する。製煉所わけ、反射炉模型を建てる	ペリー-浦瀬に来航 ロシア使節アチャーチン、長崎に来航						
	1733	享保18	白木鹿角鉛鉱試掘	琉球大砲船建造に着手							
	1737	元文2	牧内鉱、百引地頭となる								
1753	宝暦3	霧島山の2回の噴火で田畑埋没(霧北町)									
1755	宝暦5	花岡島津始まる。木谷、白水、古里、野里、六百									
1775	天明9	霧島山の2回の噴火で田畑埋没(霧北町)									
1779	安永元	霧島山の2回の噴火で田畑埋没(霧北町)									
1779	安永2	霧島山の2回の噴火で田畑埋没(霧北町)									
1782	天明2	霧島山の2回の噴火で田畑埋没(霧北町)									
1787	天明7	霧島山の2回の噴火で田畑埋没(霧北町)									
1792	寛政4	霧島山の2回の噴火で田畑埋没(霧北町)									
1808	文化5	霧島山の2回の噴火で田畑埋没(霧北町)									
1809	文化6	霧島山の2回の噴火で田畑埋没(霧北町)									
1816	文化13	霧島山の2回の噴火で田畑埋没(霧北町)									
1819	文政2	霧島山の2回の噴火で田畑埋没(霧北町)									
1824	文政7	霧島山の2回の噴火で田畑埋没(霧北町)									
1825	文政8	霧島山の2回の噴火で田畑埋没(霧北町)									
1827	文政10	霧島山の2回の噴火で田畑埋没(霧北町)									
1833	天保4	霧島山の2回の噴火で田畑埋没(霧北町)									
1836	天保7	霧島山の2回の噴火で田畑埋没(霧北町)									
1837	天保8	霧島山の2回の噴火で田畑埋没(霧北町)									
1841	天保12	霧島山の2回の噴火で田畑埋没(霧北町)									
1844	弘化元	霧島山の2回の噴火で田畑埋没(霧北町)									
1851	嘉永4	霧島山の2回の噴火で田畑埋没(霧北町)									
1853	嘉永6	霧島山の2回の噴火で田畑埋没(霧北町)									

時代	西暦	年号	郷土の主な事項	鹿兒島県内の主な事項	日本の主な事項	朝鮮	中国	世界の主な事項
江戸時代	1854	安政元		西洋型伊呂波丸竣工、琉球大砲船を改装し、昇平丸とする	幕府、日米和親条約締結・日英和親条約締結・日露和親条約締結 [12/23]安政東海地震(M8.4)発生 [12/24]安政南海地震(M8.5)発生 幕府、日蘭和親条約締結	朝鮮王朝	清	1857 インドでセポイの乱 1858 イギリスがムガル帝国を滅ぼし、インドを併合 1861 アメリカで南北戦争(~65)
	1855	安政2		豊平丸を幕府に献上 磯印内施設を集成成館、城内花園跡製煉所を閉鎖館と改称	幕府、日米修好通商条約締結 安政の大獄(~1859)			
	1857	安政4		斉彬、天保山に砲術操練を申し帰途発病、急逝 備月照と西郷隆盛、鍋江湾に人水する島津忠義藩主となる	幕府、日米修好通商条約締結 安政の大獄(~1859)			
	1858	安政5		西郷隆盛大島に流される	幕府、日米修好通商条約締結 安政の大獄(~1859)			
	1859	安政6		楳田門外の宴に有村治左衛門参加	楳田門外の宴 島津久光の兵隊十余人を幸いで上京し、公武合体運動を進め、勤旨を補佐し江戸に下り幕政改革を行う	楳田門外の宴		
	1860	万延元		寺田や事件が起こる	寺田や事件 久光の従士らがイギリス人を殺傷する(生麦事件)	生麦事件		
	1862	文久2		薩英戦争起こる	薩英戦争 長州にかりゆり薩摩藩が宮中警備につく(八、一八の政変) 薩摩藩と英国の和議成立	生麦事件		
	1863	文久3		長州にかりゆり薩摩藩が宮中警備につく(八、一八の政変) 薩摩藩と英国の和議成立	薩英戦争起こる 長州にかりゆり薩摩藩が宮中警備につく(八、一八の政変) 薩摩藩と英国の和議成立	(5月)下関事件 →長州藩がアメリカ/フランス/オランダの船を砲撃する (6月)高杉晋作、奇兵隊を創設する (7月)薩英戦争 (8月)八月十八日の政変 第一次長州戦争おこる 四国連合艦隊下関砲撃事件おこる 第二次長州戦争おこる		
	1864	元治元		禁門の宴 第一次長州戦争の行動を幕府より命じられる 第二次長州戦争の行動の幕命あり薩摩藩は再征不可を主張 薩長同盟約す ハリ万国博覧会へ施設出発	薩長に三藩士が王政復古を協賛する 薩長に倒幕の密約下る	徳川慶喜、朝廷に大政奉還を請う 王政復古の大号令が出される		1867 アメリカがロシアからアラスカを買収
	1866	慶応元		高牧の廃止、笠野原より萩塚移住終る、80戸・360人 若平山上陵御調査	薩長に倒幕の密約下る	徳川慶喜、朝廷に大政奉還を請う 王政復古の大号令が出される		
明治時代	1867	慶応3		高牧の廃止、笠野原より萩塚移住終る、80戸・360人 若平山上陵御調査	薩長に倒幕の密約下る			
	1868	明治元		戊辰戦争に従軍。薩摩半隊長 前田佐左衛門、大始良半隊長 川上清右衛門他各編からも従軍	薩長に倒幕の密約下る			
	1869	明治2		高崎豊盛、百引最後の地頭(禰北町)(項目096)	薩長に倒幕の密約下る			
	1871	明治4		薩摩、禰北、串良等を都城県に編入県区の改廃 各郷に正副戸長を置く	薩長に倒幕の密約下る			
	1873	明治6		都城県廃止される。	薩長に倒幕の密約下る			
	1874	明治7		薩摩・高隈・大始良郵便事務開始	薩長に倒幕の密約下る			
	1875	明治8			薩長に倒幕の密約下る			
	1876	明治9			薩長に倒幕の密約下る			
	1877	明治10		西南戦争に従軍(鹿屋194人・大始良60人・高隈16人、百引147人、市成87人等。)西南戦争処分で、2,700人処刑(項目047)	薩長に倒幕の密約下る			
	1880	明治13		薩生者前身説教所開設 上百引に本願寺説教所開設	薩長に倒幕の密約下る			
	1881	明治14		本町大火(45戸焼失)	薩長に倒幕の密約下る			
	1884	明治16		明歴裁判所落成(大手町)	薩長に倒幕の密約下る			
	1889	明治22		明治天皇御幸馬「薩戸号」 百引村 鶴田村尾上京拝受 御下賜馬「薩戸号」の碑建つ(禰北町百引)	薩長に倒幕の密約下る			
1894	明治27		西原隼雄帰郷始まる	薩長に倒幕の密約下る				
1895	明治28		薩摩婦人委始まる(項目004) 従軍者多数	薩長に倒幕の密約下る				
1901	明治34		薩北教育会(百引・市成・恒吉・野方・高隈・牛根の6ヶ村)発足	薩長に倒幕の密約下る				
1904	明治37		川重耕田整理完成	薩長に倒幕の密約下る				
1905	明治38			薩長に倒幕の密約下る				

近代国家の形成過程

時代	西暦	年号	郷土の主な事項	鹿児島県内の主な事項	日本の主な事項	朝鮮	中国	世界の主な事項
大正時代	1910	明治43			韓国併合	1910		1911 辛亥革命で清が滅びる 1912 中華民国成立
	1912	大正元	北田水道完成。岡泉・西俣・南等耕地整理完成	谷山〜武之橋間に電車が開通	第一次世界大戦始まる			1914 第一次世界大戦 (~18)
	1914	大正3	桜島大噴火で、市内各地で、火山灰の被害甚大(項目016)	桜島大噴火、桜島と大隅半島がつながる	米騒動おこる 三・一萬歳事件 ベルサイユ条約調印 普通選挙法・治安維持法			1917 ロシア革命
	1915	大正4	桜島大噴火後、市内各地で、火山灰の被害甚大(項目016)	山形屋百貨店が県下初、鉄筋コンクリート完成	五・四運動			1919 ハリウッド会議
	1916	大正5	大隅鉄道高須〜鹿屋間が開通する	大島郡住用村で米騒動				1920 国際連盟の成立
	1918	大正7	名馬「とどろき号」の記念碑建つ	鹿屋本線全通	世界恐慌			1921 ワシントン会議 (~22)
	1918	大正7	降灰街旧事業市内各地で継続	鹿屋本線全通	日中戦争始まる			1922 ソ連邦成立
	1919	大正8	安養寺託児所始まる(向江町)	鹿屋本線全通(都城〜集人、開通)	第二次世界大戦始まる(項目049, 項目050)			1924 アメリカ連邦議会が排日移民法成立
	1919	大正8	大円寺本堂新築工事(輝北町)	西郷隆盛像建つ	真珠湾攻撃、太平洋戦争始まる(項目049, 項目050)			1928 蒋介石が国民党政府樹立
	1925	大正14	大円寺本堂新築工事(輝北町)	大政翼賛会鹿児島支部発足	原爆投下される。ポツダム宣言受諾(敗戦)			1929 世界恐慌が始まる
	1927	昭和	笠之原水道使用始まる	知覧陸軍飛行場完成		1945	中 華 民 国	1930 アメリカが保護貿易政策に転換
	1928	昭和3	高須港開港工事	翌年にかけて県下各地で空襲をうける				1932 イギリスがブロック経済圏を形成
	1929	昭和4	龍馬場礼元に移転(項目067)	特攻出撃ふえる 鹿児島大空襲				1933 ドイツでナチス政権樹立
	1931	昭和6	百引上水道完成	枕崎台風				1936 西安事件
1932	昭和7	萩川に共同製茶工場始まる					1939 第二次世界大戦 (~45)	
1933	昭和8	陸軍重砲機納式(笠野原町)					1943 カイロ会談	
1937	昭和11	陸軍航空隊開隊、笠野原飛行場買上げ					1945 ヤルタ会談	
1939	昭和14	国鉄志布志線、串良まで開通					第二次世界大戦終結	
1941	昭和16	串良原耕地整理完成					1946 極東国際軍事裁判	
1942	昭和17	鹿屋市市制実施される					1949 北大西洋条約機構締結	
1944	昭和19	市立図書館開設					1950 朝鮮戦争開戦	
1945	昭和20	串良海軍航空隊発足					1951 サンフランシスコ平和条約	
1946	昭和21	鹿屋航空隊解散					1954 ミビキキ爆撃機にて第五福竜丸被爆	
1947	昭和22	連合軍鹿屋飛行場着、米海兵隊 連合空軍鹿屋飛行場着、米海兵隊					1955 第一回アジア・アフリカ会議 ワルシャワ条約機構締結	
1948	昭和23	三笠宮殿下 吾平山上陵へ終戦報告(項目054)					1960 アフリカの年	
1949	昭和24						1961 ベルリンの壁建設	
1950	昭和25						1962 核ミサイル基地発見(キューバ危機)	
1951	昭和26							
1952	昭和27							
1953	昭和28							
1954	昭和29							
1955	昭和30							
1956	昭和31							
1957	昭和32							
1958	昭和33							
1959	昭和34							
1960	昭和35							
1961	昭和36							
1962	昭和37							
1963	昭和38							
1964	昭和39							
1965	昭和40							
1966	昭和41							
1967	昭和42							
1968	昭和43							
1969	昭和44							
1970	昭和45							
1971	昭和46							
1972	昭和47							
1973	昭和48							
1974	昭和49							
1975	昭和50							

鹿屋市の成り立ち

古代から江戸時代まで

7世紀中期	日向国	律令制が成立し、この頃以後宮崎と鹿児島九州本土で日向国が設けられる。
702年 大宝2年	日向国	日向国から嵯摩国（後の薩摩国）分立。
713年 和銅6年	大隅国	日向国から肝杯郡、嚙吠郡、大隅郡、始羅郡の4郡を分け大隅国分立。現在の鹿屋市にあたるのは大隅郡、始羅郡であったと思われる。
930年代 承平年間	郡と郷	平安中期の和名類聚抄より。大隅国成立からこの頃まで大隅郡、始羅郡の領域の変更があったと思われる。 大隅郡7郷、人野、大隅、請列、始羅(吉平)、嚙吠、大阿(大始良)、岐刀、始羅郡4郷、鹿屋(鹿屋市街地)、串伎(串良・東串良)、野裏、岐刀。
平安末頃～	荘園制	荘園の発達により地域の呼び名が院や荘、郡、郷など様々に変わっていく。現在の鹿屋市にあたる地は鹿屋院、串良院、始良荘、始良西院、小河院(南側が輝北)、嚙吠院北區(北側が大始良(狭く西侯)などと呼ばれた)。
江戸時代	外城制	外城制 薩摩藩により藩内は110余りの外城(郷)に分かれ、各地には地頭区屋敷を中心に武家屋敷がある藩廳藩が広がっていた。外城は国領郷と私領に分かれる。
	牛根郷	牛根郷 垂水郷 新城市 鹿屋郷 花岡郷 大始良郷 高隈郷 始良郷 百引郷 市成郷 串良郷
	直轄領	垂水島津家新城市鹿屋家 直轄領 花岡島津家 直轄領 大始良郷 直轄領 高隈郷 直轄領 串良郷 直轄領 市成島津家 直轄領

江戸時代末から現在まで

江戸時代	郷	牛根郷	垂水郷	新城市	鹿屋郷	花岡郷	大始良郷	高隈郷	始良郷	百引郷	市成郷	串良郷
明治の初め	郷内の村 ※理鹿屋市隣接のみ記す			新城村	下名村 (のち田崎村) 中名村 上名村 高須村	木谷村 白水村	野里村 西南村 獅子目村 横山村 大始良村	上高隈村 下高隈村	上名村 麓村 下名村	百引村 平村 有里村	市成村 諏訪原村	上小原村 岡崎村 細山田村 有里村
1889年 明治22年	町村制実施 串良郷は西と東に分かれる	牛根村	垂水村	新城村	鹿屋村 鹿屋町	花岡村	大始良村	高隈村	始良村	百引村	市成村	西串良村 東串良村
1912年 大正元年	鹿屋、町制施行		垂水町									串良町
1924年 大正13年	垂水、町制施行											
1932年 昭和7年	串良、町制施行											
1932年 昭和7年	東串良、町制施行											
1941年 昭和16年	鹿屋・花岡・大始良 合併・市制施行											
1941年 昭和16年	太平洋戦争始まる ～昭和20年											
1947年 昭和22年	始良、改称・町制施行		垂水町						吾平町			
1955年 昭和30年	垂水・牛根・新城、合併											
1955年 昭和30年	高隈、鹿屋へ編入											
1956年 昭和31年	百引・市成、合併											
1958年 昭和33年	旧新城村の一部、 鹿屋へ編入											
1958年 昭和33年	垂水、市制施行											
2006年 平成18年	鹿屋・吾平・輝北・串良 合併											

※旧新城村の塚木原・桜町(現有武町)地区、鹿屋市へ編入

鹿屋市にある 指定文化財

県指定 4 件、市指定 98 件の合計 102 件の指定文化財のうち 44 件を掲載しています。
(平成 23 年 4 月 1 日現在)



県指定
●短甲・衝角付青
古墳時代(5世紀頃)の埴(「よらい」と戦いの時に頭にかけた「かぶと」。昭和25年、西蔵川井上之上の地下式横穴から発見された。

県指定
●山神社の春祭りに伴う芸能
春祭りは毎年2月第三日曜日に行われる山神社の神事で正旦(梅垣)・カキ引き・鹿夫がこけいな会話で行う田打ちが行われる。

●古 銭
昭和36年、田崎阿老神の工事中に18,122枚が発見された。約70種類の中国銭で、ほとんどは北宋銭で室町時代に埋められたものと思われる。

●板 碑
6基の板碑があり、南北朝時代、争乱による死者の供養や生き延びる間に自分の冥福を祈って立てられた。

●中津神社本殿
高隈郷の鎮守神社で、本殿は1653年(承応2年)に建てられた。二期社流れ造り、杉などの木を琢みそいで屋根をしいた柿葺き(こけらぶき)である。

●花岡町花岡山浄福寺の小笠阿弥如来尊像
高さ0.9m程の小さな阿弥如来尊像。花岡津家六代久該の妻持子が所蔵していたもので高さ3.8cm、幅2.1cmの厨子の中に納められている。



●一石五輪塔
この五輪塔はパーツごとではなく、一つの石を削ってできている。図師氏の逆修供養塔で鎌倉時代前期に建てられた。

●庚申地藏
1690年(元禄3年)庚申講衆中が造立したもので、像そのものは延命地藏菩薩である。

●下方の六地藏
全高2m。この六地藏は「イボ」の神として、またしほ、培身に大豆を供える風習があった。そのための窟が入るぐらゐの穴が数多く見える。

●下平原の田の神
右手にシャモジ、左手にスリコギを持ったユーモラスな表情の田の神で、田植え前には豊作を祈って集落の人々によってお化粧がなされる。

●宮園の田の神
頭にコシキをかぶり、左手にスリコギを肩にかけ、右手にシャモジを握り、お化粧がなされる。

●歌丸の田の神
1847年(弘化4年)造立。製作者は「佐古」とある。左手にスリコギをたてて持った丸顔の田の神である。

●八幡神社境内の田の神
獅の柄に両手をのびた御持ち田の神で、ほぼ完形で残っている。大きなシキを背後に長く垂らしてかぶっている。

●荒平の六地藏
1539年(天文8年)造立。戦国時代、田代一族の死者の冥福を祈って建てた逆修供養塔で、市内の六地藏の中でも古い時代のものである。



●長谷観音 長谷城跡 中世石塔群
観音像には梵字が刻まれ彩色がされ、長谷信仰の南限に近い観音と言われる。石塔群は長谷一族の逆修供養塔群で、長谷氏の相輪文様が見られる。

●春日神社境内の観音像 大東妙典読碑
観音像は如意輪観音で江戸時代中期の作である。法華経を讀んだ大東妙典読碑は1717年(享保2年)に造立された。

●烏ヶ山の月待供養塔・観音
月輪を背にした如意輪観音の月待供養塔は県下で数少ない。右足は立ておびを、左手で頬をささえ、左手に八スをもつ。1733年(享保18年)造立。

●大牟礼の田の神
右足を少し上げて歩く姿を表現した山伏僧の田の神像である。頭にコシキをかぶり、右手にはスリコギ、左手にはシャモジを持っている。

●生葉須の六地藏塔
塔身に延宝5年(1677年)と刻まれている。六地藏といえは六面体の塔が一般的に知られており、大変めずらしい。

●柚木原墓地の平面六地藏塔
一椀石の平面に六地藏が並んで彫られている。六地藏といえは六面体の塔が一般的に知られており、大変めずらしい。

●中郷の田の神像
袖長の長衣にコシキをかぶり、右手にスリコギ、左手にシャモジを持ち、右膝を少し立てている。スリコギとした田の神像は南向きに立っている。

●下名真角の田の神など
右手にスリコギ、左手にシャモジを持ち、頭にコシキをかぶった旅僧型の田の神像で、吾平地区内で最も古い。



●六地藏塔
高隈の柚木原墓地にある。鹿屋市内にある六地藏塔のうちで最も古い1535年(天文4年)に造られたものである。

●小島神社の庚申塔
江戸時代前期の1674年(延宝2年)に造立された塔で、黄金剛を本尊とする庚申塔では市内で最も古いとされる。

●下名真角の古石塔
馬頭観音と左手に弓、右手に矢を1本持ち、背中に矢を2本背負った男壮活発な姿の庚申塔が立てられている。

●釣引き祭り
中津神社に伝わる神事。農林業の発展を祈念し、上高隈・下高隈が雄獅・鹿鈴の神手を引き合い勝負をする。勝てば1年間豊作になるといわれる。

●朝倉太鼓踊り
江戸末期、加世田の職人から伝えられたものといわれ、「川踊り」とも呼ばれた。鉦打ちと太鼓打ちに合わせて隊形を整えながら踊る。

●鶴亀城本丸跡
応永末期から戦国期にかけて築城改築された城で串良城ともいう。城跡は串良公民館の隣にわずかに現存している。

●地頭館仮屋跡
天正年代、島津氏の外城として地頭仮屋がわかれていた。現在、東側に石塀の一部と仮屋門が残されている。

●正安の五輪塔
全高1.9mで大隅半島でも大きな五輪塔である。もとは西川路にあってたと伝わる蘭入寺阿弥堂の脇にあった。



●上名赤野の石塔群
五輪塔1基、宝塔1基、板碑2基、奉寄進の文字が刻まれた石塔1基、五輪塔残欠。この石塔群は同一族のものであるという。

●花岡島津氏歴代墓地
墓地は、花岡島津初代久備から9代久基に至るまでの歴代のもの。男女により形が違うなどの特徴がある。

●加瀬田ヶ城跡
肝付氏の武将が築城したといわれる。北側はスラシの絶壁、東南側は急斜面で、両側は堀が造られぬににく、守り堅い城であった。

●朝倉の隠れ念仏洞
薩摩藩の一向宗禁制による弾圧を免れるために造られた念仏洞で、暗夜や嵐の日などに、こっそり集まり、本尊を拝み、読経した跡である。

●金剛経一万巻読誦所碑
戦国時代に金剛経を一万余巻読誦した記念に建てられた石碑で大隅半島でも非常に珍しいものである。

●立小野の古石塔群
鎌倉末期から室町前期にわたる肝付氏系統の宝塔21、五輪塔20基が復元されている。

●玉築寺跡の住職の供養墓など
1395年(応永2年)に源義和尚によって建てられた由緒ある寺であったが、慶長6年に焼失。寺跡には源義和尚などの供養塔が並び、

●下名鳥瀬観音
天然の岩屋の中に安置されている観音でやさしい表情の観音像である。



●上小原4号古墳
大隅半島内陸部にある前方後円墳では、兩肩がおりぬけて考古学的価値が高い。写真は、椀型はそう。

●岡崎15号古墳
鹿屋県下で最古の長方形板蓋石室。頭甲・肩甲が出土した古墳。その他勾玉、菅玉が出土した。

●いぬまき
高さ約15m、幹まわり約6.3mのいぬまきの木で、中央公園近くの熊野神社境内にあり、風格と威厳を備える。

●山宮神社境内のナギ
周囲が2.5m高さ20mを越す巨木で樹齡約300年を越すものであり、地域のシンボルとして親しまれている。

●十五社神社境内の観音
周囲が5.9m高さ20.5mを越す巨木で樹齡約200年を越す。秋にはたくさんギンナンが実り、地域住民に親しまれている。

●横尾岳のひぜんまゆみ
ひぜんまゆみはニシキ科の植物で、横尾公園には十数本が生自生しており、保護林となっている。



こちらから閲覧できます

【参考文献一覧】

- ・鹿屋市史 上巻 下巻
- ・輝北町郷土誌
- ・吾平町誌 上巻 下巻
- ・串良町郷土誌
- ・西串良郷土誌
- ・鹿屋市の文化財
- ・輝北町文化財巡り
- ・吾平町歴史小冊子
- ・串良町文化財要覧
- ・平房川流域の民俗誌
- ・中津神社改築記念誌
- ・かのや歴史探訪
- ・鹿屋地方の民話（鹿屋市教育委員会）
- ・大始良の歴史と文化
- ・鹿屋市戦跡ガイドマップ
- ・鹿屋女子高研究紀要
- ・広報かのや
- ・鹿屋市防災マップ
- ・統計かのや
- ・鹿屋市教育委員会発行「マイブンカノヤ Vol.6」
- ・三国名勝図絵下巻(南日本出版文化協会)
- ・鹿児島島の昔ばなし(南日本新聞社)
- ・鹿児島県の歴史(山川出版)
- ・鹿児島県風土記
- ・江戸時代人づくり風土記④ 鹿児島
- ・鹿児島大百科事典
- ・鹿児島県「シラスと暮らし」「鹿児島県の砂防事業」
- ・島津藩の本城としての鹿児島城
- ・鹿児島県の歴史散歩
- ・わかる古事記(西日本出版社)
- ・大隅国探訪
- ・四国新聞HP
- ・「鹿児島湾の謎を追って」(著)大木公彦
- ・石碑は語る高隈の今昔1・続編
- ・鹿児島地方気象台HP
- ・植物研究雑誌 68
- ・鹿児島県神社庁HP
- ・かのやふるさとデータブックHP
- ・鹿児島県HP
- ・災害教訓の継承に関する専門調査会報告書 1914 桜島噴火
- ・建設コンサルタンツ協会誌
- ・鹿児島県レッドデータブック
- ・平成 22 年度高隈山森林遺伝資源保存林モニタリング調査業務報告書
- ・九州森林管理局HP
- ・甲南生物 第 15 号
- ・ふるさと探訪記
- ・先史・古代の鹿児島 資料編 平成 17 年 3 月 31 日 鹿児島県教育委員会
- ・先史・古代の鹿児島 通史編 平成 18 年 3 月 31 日 鹿児島県教育委員会
- ・郷土の味 平成 20 年 3 月 鹿児島県食生活改善推進委員連絡協議会
- ・大隅の自然(鹿児島県立博物館)
- ・薬草の詩(鹿児島県薬剤師会)
- ・南九州里の植物
- ・日本の野草(南方新社)
- ・鹿児島県縄文の森考古ガイダンス第 22 回
- ・鹿児島県垂水市 「柵原貝塚」
- ・鹿児島県上野原縄文の森考古学ガイダンス
- ・公益財団法人鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センター
発掘調査報告書 35 細山田段遺跡 2021
- ・公益財団法人鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センター
発掘調査報告書 26 小牧遺跡 2019
- ・鈴木達郎・山元温彦・大木公彦・小林哲夫・根建心具 1985『鹿児島県火砕流
分布図 1 : 200,000』鹿児島大学特定研究「南九州における火砕流堆積物の
時空分布に関する研究」鹿児島地図センターを鹿児島市が改編したもの

順不同

「かのや風土記～鹿屋学入門～」編纂組織

編纂委員

徳留 浩二（行政福祉コンサルタント）
西 みやび（鹿屋体育大学広報特任専門員）
中村 成美（市校長協会代表）
川筋 順也（フォトスタジオカワスジ代表取締役）
伊藤 ふさ（おおすみFMネットワーク事務局長）

企画部会員

教育次長（部会長） 稲村 憲幸
政策推進課長 鋤持 朋彦（令和3年度） 隈元 成人（令和4年度）
産業振興課長 黒木 裕
教育総務課長 川越 太
学校教育課長 安藤 晋哉（令和3年度） 新屋 公彦（令和4年度）
生涯学習課長 鬼塚 仁（令和3年度） 山口 良二（令和4年度）
文化財センター所長 松元 敏幸
輝北総合支所住民サービス課長
中津川 守（令和3年度） 岩元 研作（令和4年度）
串良総合支所住民サービス課長
末吉 俊一
吾平総合支所住民サービス課長
前原 浩幸（令和3年度） 藏ヶ崎 直（令和4年度）

作業部会アドバイザー

徳留 浩二（行政福祉コンサルタント）
伊藤 ふさ（おおすみFMネットワーク事務局長）
堂込 秀人（鹿児島県考古学会会長）
海老原 寛業（鹿屋市文化財保護審議会委員）

作業部会員（教職員及び担当市役所職員）

田中 梢（鹿屋小学校）	寺田 敏哉（菟川小学校）
下水流 達司（東原小学校）	宮路 大輝（笠野原小学校）
落合 潤（寿小学校）	山下 純弥（輝北小学校）
東上床 綾（串良小学校）	田平 俊彦（細山田小学校）
豊島 紀一（吾平小学校）	塩満 康一郎（下名小学校）
山川 正樹（鹿屋中学校）	片野田 裕亮（鹿屋東中学校）
中之内 友里（第一鹿屋中学校）	久保田 博之（第一鹿屋中学校）
末弘 慈子（田崎中学校）	中浦 有紀（大始良中学校）
籠原 領介（高隈中学校）	川嶋 富士夫（輝北中学校）

岩戸 真紀 (細山田中学校) 長谷川 幸一 (上小原中学校)

柳原 真美 (吾平中学校) 横峯 達也 (鹿屋女子高校)

※令和3年度の在籍校

政策推進課 池之上 拓也 産業振興課 瀬貫 拓也、鮫島 崇寛

教育総務課 曾原 学 学校教育課 山内 誠

生涯学習課 稲村 博文、前山 徳仁 文化財センター 福岡 貴之、郷原 麻鈴

輝北総合支所住民サービス課 田中 祥平

串良総合支所住民サービス課 東倉 晃

吾平総合支所住民サービス課 前迫 篤弘

※令和4年度は、項目内容に応じて各課担当者等が従事

編纂へ指導助言及び写真等の提供をいただいた方々

安藤 一夫 (笠野原開発資料館 館主)

内山 昇 (㈱エバーオンワード 代表取締役社長)

江口 智昭 (アウトドアショップキャメル 代表)

大木 公彦 (鹿児島大学 名誉教授)

上別府 実 (㈱上別府種畜場 代表取締役)

高木 千波 (㈱坂元種畜場 代表取締役)

福里 修誠

船越 公威 (鹿児島国際大学 教授)

三森 淳 (㈱三森製茶 代表取締役)

米重 修一 (拓殖大学 准教授)

※記載は五十音順・敬称略

事務局 (鹿屋市教育委員会生涯学習課)

〈令和2年度〉

課長 鬼塚 仁

課長補佐

兼文化振興係長

松元 和成

主査 田中 しおり

〈令和3年度〉

課長 鬼塚 仁

課長補佐

兼文化振興係長

稲村 博文

係長 岩元 秀光

主査 前山 徳仁

主任主事 末次 孝

主任主事 矢野 聡子

主事 源川 尚治

主事 中村 優花

主事 倉田 奈々子

〈令和4年度〉

課長 山口 良二

課長補佐

兼文化振興係長

稲村 博文

係長 岩元 秀光

主査 前山 徳仁

主任主事 末次 孝

主任主事 矢野 聡子

主任主事 大迫 真紀

主事 源川 尚治

主事 中村 優花

かのや風土記

～ 鹿屋学入門～

2023（令和5）年3月31日

発行者 鹿屋市教育委員会
〒893-8501
鹿児島県鹿屋市共栄町 20 番 1 号

印刷所 東洋印刷有限会社
〒893-0064
鹿児島県鹿屋市西原 2 丁目 38 番 3 号

